鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（73）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-X

（鹿児島西ＩＣ～伊集院ＩＣ）

宮尾遺跡（みやおいせき）

（日置郡松元町）

２００４年２月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(73)

宮尾遺跡

二〇〇四年二月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（中央の台地）



1号土坑埋土状況



古代主要遺物

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島西ＩＣ～伊集院ＩＣ）建設に伴い，平成５年度と８年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した宮尾遺跡の発掘調査の記録です。

この調査によって，旧石器時代から近世・近代にかけての遺構・遺物が数多く発見されました。

なかでも，掘立柱建物跡の検出と多数の赤色の土師器の出土は，当地方の古代における歴史の一端を明らかにする上で貴重な資料を提供することになりました。

本報告書が，地域の歴史研究や文化財の啓発・普及の一助として多くの方々に活用していただければ幸いです。

終わりに，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所や地元の皆様に，多大な御協力と文化財に対する深い御理解をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成16年２月

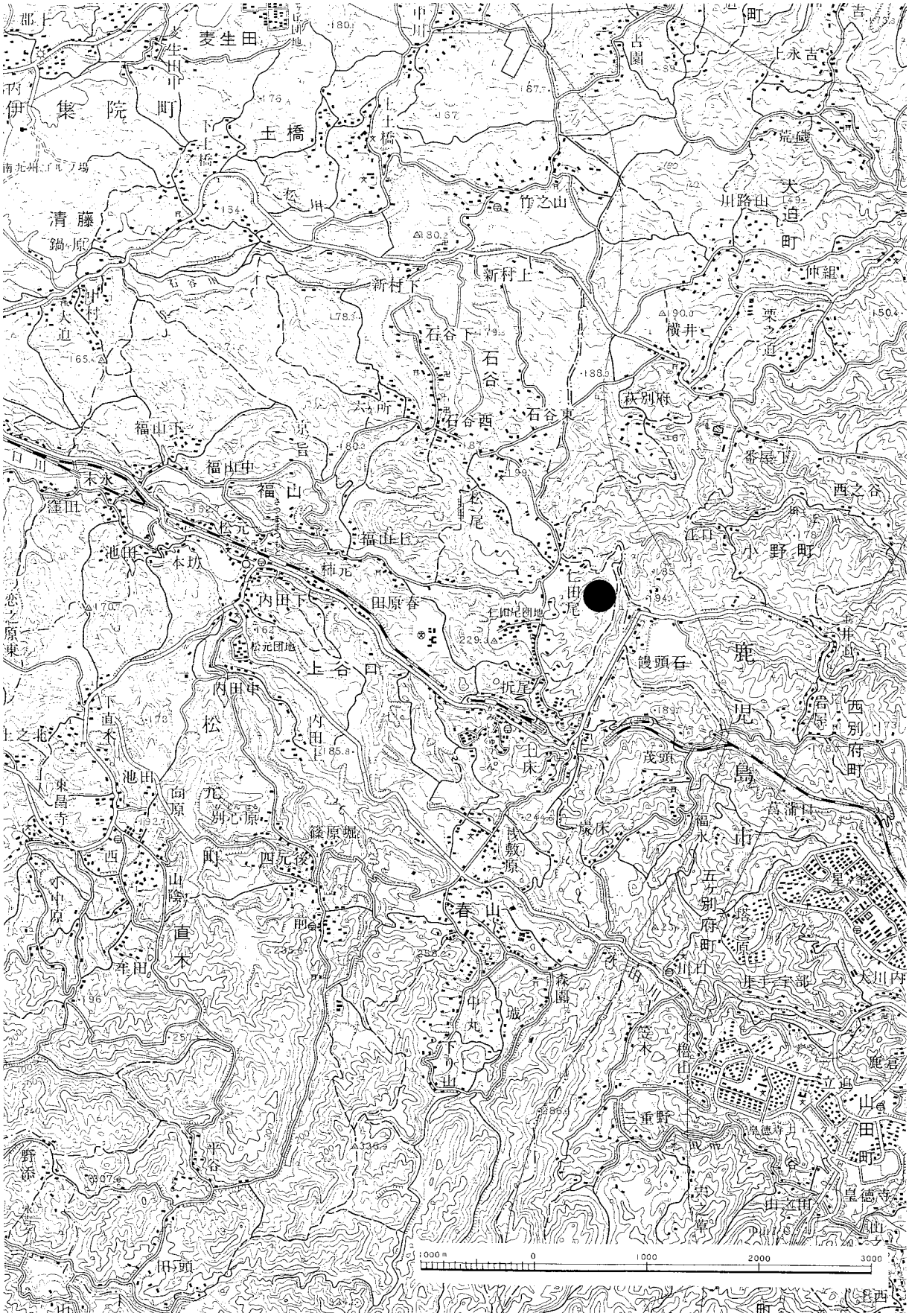
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　木　原　俊　孝

報　告　書　抄　録

ふりがな	みやおいせき
書名	宮尾遺跡
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	X
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	73
編集者名	繁昌　正幸・國師　洋之
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4461　鹿児島県国分市上之段1175番地1　TEL0995－48－5811
発行年月日	平成16年２月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
みやおいせき 宮尾遺跡	かごしまけん 鹿児島県 ひおきぐんまつもとちょう 日置郡松元町 いしたにあざみやお 石谷字宮尾	463647	31－12	31° 35' 50"	130° 28' 10"	確認調査 199401 ～ 199401 本調査 199401 ～ 19940329 19960422 ～ 19960926	8,400㎡	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮尾遺跡	散布地	旧石器　ナイフ形石器文化 縄文　早期 後期頃？ 奈良・平安 古代以降 中世以降	ブロック　１か所 集石　４基 土坑　101基 (推定落とし穴44基以上) 掘立柱建物跡　１棟 焼土域　７か所 道　跡　20か所 畑畝跡　約40条	剥片・チップ 円筒形貝殻条痕文・前平・平栫・塞ノ神式 石鏃・石匙・石皿・磨石・敲石 須恵器・土師器 土師器・青磁 染付・陶器・磁器	


麦生田
清藤
鍋原
土橋
作之山
新村下
新村上
石谷下
石谷
石谷西
石谷東
荻別府
横井
栗之迫
福山下
福山中
福山
福山上
末永
池田
本坊
柿元
内田下
田原春
仁田尾
仁田尾団地
松元団地
上谷口
内田中
内田
松元
下直木
直木
池田
向原
別元原
篠原堀
四元後
山陰
中原
春山
牟田
平谷
野添
頭
饅頭石
折尾
土床
茂頭
鳥越
高浦口
福水
五ヶ別府町
荻床
筏敷原
森園
城
中丸
下り山
笠木
僧山
二重野
立迫
鹿児島
西別府町
小野町
西之谷
番屋下
井迫
大川内
皇徳寺
1000m
0
1000
2000
3000

第１図　宮尾遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島西ＩＣ～伊集院ＩＣ）建設事業に伴う宮尾遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県日置郡松元町大字石谷1731－２ほかに所在する。
3　発掘調査は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査の任にあたった。
4　発掘調査事業は平成５年12月１日から平成６年３月29日にかけてと平成８年４月22日から同年９月26日にかけて実施し，整理作業及び報告書作成事業は平成14年度と15年度に実施した。
5　遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・図版の番号は一致する。
6　挿図の縮尺は，各図面に示した。
7　本書で用いたレベル数値は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）が提示した工事計画図面に基づく。
8　発掘調査及び現場における図面の作成及び写真の撮影は調査担当者が行い，土坑群は一部の撮影を鶴田静彦が行った。
9　遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。出土遺物の写真撮影は，鶴田と西園勝彦が担当した。
10　本書の執筆は繁昌正幸・國師洋之・元田順子が行ない，編集は繁昌が担当した。
11　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，本遺跡の遺物注記の略号は「ミヤオ」である。

凡　　例

1　実測図中，縄文から古墳時代の土器については左側から外面・内面・断面の順に掲載し，古代においては内面・断面・外面の順に掲載してある。
2　実測図の古代の土器の表現で，等間隔のドットのスクリーントーンは赤色（丹）を表し，細いドットのスクリーントーンはススの付着を表す。

目　　次

巻頭図版
序　　文
報告書抄録
例言・凡例
目　　次

ページ

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査に至るまでの経過…… 1
　第２節　遺跡の概要…… 1
第２章　調査の経過…… 6
　第１節　調査に至るまでの経緯と経過…… 6
　第２節　調査の組織…… 6
　第３節　調査の概要と経過…… 8
第３章　位置および環境……11
　第１節　地理的環境……11
　第２節　歴史的環境……12
第４章　調査の概要……15
　第１節　調査の方法……15
　第２節　層位……18
　第３節　Ⅵ層の調査　旧石器時代……27
　　１　遺　構……27
　　２　遺　物……27
　第４節　Ⅳ層の調査　縄文時代早期……28
　　１　遺　構……28
　　２　土　器……33
　第５節　Ⅲ層の調査　（１）　縄文時代後・晩期……41
　　１　遺　構……41
　　２　土　器……67
　第６節　Ⅳ～Ⅲ層の石器……73
　第７節　Ⅲ層の調査　（２）　古墳時代……85
　　○　遺　物……85
　第８節　Ⅱ層の調査　（１）　古代……88
　　１　遺　構……88
　　２　遺　物……88
　第９節　Ⅱ層の調査　（２）　中世以降…… 103
　　○　遺　構…… 103
第５章　まとめ（成果と課題）…… 107
　第１節　調査の成果…… 107
　第２節　課　　題…… 109
図版…… 113
あとがき

挿　図　目　次

ページ

第１図　宮尾遺跡位置図…… (3)
第２図　松元町および宮尾遺跡位置図…… (8)
第３図　調査遺跡位置図…… 4
第４図　周辺遺跡……13
第５図　調査範囲図……16
第６図　グリッドおよびトレンチ位置図……17
第７図　基本土層柱状図……18
第８図　土層図（１）……19
第９図　土層図（２）……20
第10図　土層図（３）……21
第11図　土層図（４）……22
第12図　土層図（５）……23
第13図　調査区域コンター図……24
第14図　遺物出土状況全体図……25
第15図　遺構全体図（１）……26
第16図　旧石器（ナイフ期）ブロック……27
第17図　三稜尖頭器……27
第18図　集石（１）……29
第19図　石器製作跡……29
第20図　集石（２）ほか……30
第21図　縄文早期土器分布図……32
第22図　縄文早期土器（１）……35
第23図　縄文早期土器（２）……36
第24図　縄文早期土器（３）……37
第25図　縄文早期土器（４）……38
第26図　縄文早期土器（５）……39
第27図　縄文早期土器（６）……40
第28図　コンター付き土坑位置図……42
第29図　土坑位置図……43
第30図　土坑分類概念図……44
第31図　土坑（１）……46
第32図　土坑（２）……47
第33図　土坑（３）……49
第34図　土坑（４）……50
第35図　土坑（５）……52
第36図　土坑（６）……53

ページ

第37図　土坑（７）……55
第38図　土坑（８）……56
第39図　土坑（９）……57
第40図　土坑（10）……59
第41図　土坑（11）……60
第42図　土坑（12）……61
第43図　土坑（13）……62
第44図　土坑軸方向図……66
第45図　縄文後・晩期土器……68
第46図　縄文時代石器等分布図……72
第47図　石器（１）……74
第48図　石器（２）……75
第49図　石器（３）……76
第50図　石器（４）……77
第51図　石器（５）……78
第52図　石器（６）……79
第53図　石器（７）……80
第54図　石器（８）……81
第55図　遺構全体図（２）……83
第56図　古墳時代土器分布図……84
第57図　古墳時代の土器……86
第58図　掘立柱建物跡……89
第59図　土器集中遺構……90
第60図　古代土器分布図……91
第61図　土師器（１）……93
第62図　土師器（２）……94
第63図　土師器（３）……95
第64図　土師器（４）……96
第65図　土師器（５）……97
第66図　土師器（６）・須恵器……98
第67図　焼土塊……99
第68図　畑畝跡…… 104
第69図　道跡（１）…… 105
第70図　道跡（２）…… 106
第71図　時代別遺物分布図…… 111
第72図　遺跡残存範囲図…… 112

表　目　次

ページ

第１表　調査遺跡一覧表…… 5
第２表　周辺遺跡……14
第３表　集石計測表……31
第４表　４号集石構成礫観察表……31
第５表　土坑計測表（１）……63
第６表　土坑計測表（２）……64
第７表　土坑軸方向……67
第８表　縄文土器観察表（１）……69
第９表　縄文土器観察表（２）……70

ページ

第10表　縄文土器観察表（３）……71
第11表　石器観察表……82
第12表　古墳時代土器観察表……87
第13表　掘立柱建物跡計測表……90
第14表　古代土器等観察表（１）…… 100
第15表　古代土器等観察表（２）…… 101
第16表　古代土器等観察表（３）…… 102
第17表　道跡計測表…… 102
第18表　溝跡計測表…… 102

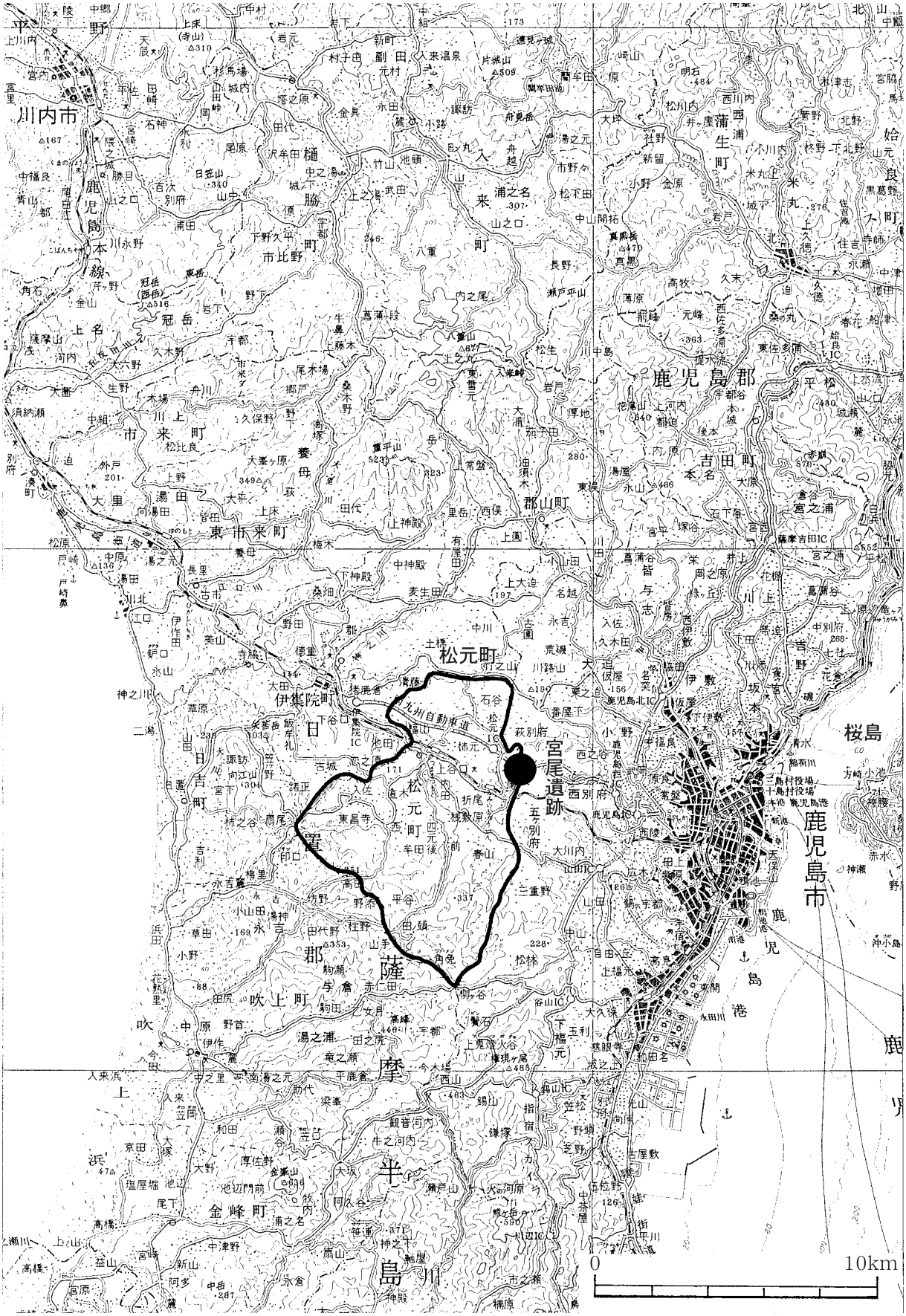
図　版　目　次

ページ

図版１　遺跡遠景・発掘調査風景…… 113
図版２　土層断面・標準土層…… 114
図版３　集石・石皿検出状況…… 115
図版４　石鏃・石皿・台石出土状況…… 116
図版５　土坑検出状況…… 117
図版６　楕円形土坑－１（落とし穴）…… 118
図版７　楕円形土坑－２（落とし穴）…… 119
図版８　楕円形土坑－３（落とし穴）…… 120
図版９　楕円形土坑－４（落とし穴）…… 121
図版10　楕円形土坑－５（落とし穴）…… 122
図版11　楕円形・不整形土坑(落とし穴)… 123
図版12　楕円形土坑－１…… 124
図版13　楕円形土坑－２…… 125
図版14　円形土坑－１…… 126
図版15　円形土坑－２…… 127

ページ

図版16　円形土坑・不整形土坑…… 128
図版17　掘立柱建物跡・道跡・畑畝跡…… 129
図版18　土器出土状況・土器集中遺構…… 130
図版19　縄文土器－１…… 131
図版20　縄文土器－２…… 132
図版21　縄文土器－３…… 133
図版22　石器－１…… 134
図版23　石器－２…… 135
図版24　石器－３…… 136
図版25　縄文土器－４・石器－４…… 137
図版26　古墳時代の土器・土師器－１…… 138
図版27　土師器－２…… 139
図版28　土師器－３…… 140
図版29　土師器－４…… 141
図版30　土師器－５・須恵器・焼土塊…… 142



第２図　松元町および宮尾遺跡位置図

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内での埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，県文化課が平成２年８月に鹿児島西ＩＣ～伊集院ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を行ったところ，23か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と県文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて，平成３年度から平成14年度にかけて，毎年度，計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお，事業区間内（鹿児島西ＩＣ～伊集院ＩＣ）の遺跡の概要については，以下の通りである。

第２節　遺跡の概要

１　山ノ中……鹿児島市西別府町山ノ中に所在し，標高100～133ｍの急峻な地形に立地する。山頂には中世城館の一つである小田城跡が良好な状態で残っている。調査面積は9,200㎡で，縄文時代後期前半の竪穴住居跡17基が検出された。出土土器は，指宿式土器に先行する土器が主体となり南福寺式や磨消縄文，それに指宿式土器が少量出土した。また，高知県でみられる松ノ木式土器もみつかった。石器も石斧・石皿・磨石が多量に出土した。その他，弥生時代の磨製石鏃や古墳時代の成川式土器，平安時代の土師器・須恵器・墨書土器が出土した。中世では古道跡が検出され，陶磁器や古銭も出土した。

２　**宮　尾**……松元町石谷字宮尾に所在し，仁田尾の割合に狭小な台地から東に張り出した標高約200ｍの小台地端部に立地する。調査面積は8,400㎡である。旧石器時代ではナイフ形石器文化期のブロック１か所，縄文時代では早期の集石４基と平栫式・塞ノ神式・条痕文土器，石鏃・石匙・石皿などが出土したほか，後期と推定される落とし穴を主とする土坑101基が検出された。その他，奈良～平安時代の土師器・須恵器と古代の掘立柱建物跡１棟が焼土域７か所や土師器とともに検出された。**（本報告書）**

３　仁田尾……松元町石谷字仁田尾・高塚に所在し，標高約190ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は11,000㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化），縄文時代（草創期～晩期），平安時代の遺構・遺物が発見された。ナイフ形石器文化はシラス直上から43か所のブロック，56基の礫群と２万点を越える遺物が出土している。遺物はナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・掻器・削器・彫器・石錐・敲石等が出土している。細石刃文化は薩摩火山灰層の下位から68か所のブロック，6基の礫群，16基の落とし穴と９万点を上回る遺物が出土した。縄文時代では，遺構が集石10基（早

期4，前～後期６），土坑11基（早期7，晩期４），落とし穴２基（晩期）が検出され，また，アカホヤ火山灰層の上面で晩期の掘立柱建物跡が検出された。土器は（草創期）無文土器，（早期）前平式・吉田式・手向山式・押型文土器，（前期）轟式・曽畑式・深浦式土器，（中期）船元式土器，（後期）指宿式･市来式土器，（晩期）黒川式土器の浅鉢・深鉢や布目圧痕土器・丹塗土器が出土した。石器は石鏃・石匙・削器・石斧・磨石・石皿等が出土した。平安時代では掘立柱建物跡・溝・土坑等の遺構が土師器・須恵器・陶磁器と一緒に検出された。

4　西ノ原Ｂ…松元町石谷字西ノ原に所在し，仁田尾遺跡の隣接地で，小さな谷を挟んだ北側に突出した標高約190ｍの痩せ尾根上の台地に立地する。調査面積は1,300㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化から細石刃文化と古墳時代の遺物が出土した。旧石器時代では礫群１基と14か所のブロックが検出され，ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃・細石刃核・スクレイパーが出土した。古墳時代の遺物は成川式土器であった。

5　前　山……松元町石谷字前山に所在し，標高約200ｍの台地北側に立地する。調査面積は9,600㎡である。遺跡は，Ａ・Ｂ地区に分かれ，旧石器時代が主体である。ナイフ形石器文化期の二時期と細石刃文化期の遺構・遺物が発見された。シラスの腐植土層の下位から台形石器・ナイフ形石器・スクレイパーが出土し，上位からはナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形石器や敲石などが出土し，2基の礫群が検出された。細石刃文化期からは細石刃・細石刃核・スクレイパー等が４基の礫群とともに出土した。縄文時代では，早期の吉田式土器と集石，前期の轟式土器が出土し，古墳時代では成川式土器が出土した。

6　柊　堀……松元町石谷字柊堀に所在し，標高約195ｍのシラス台地縁辺部に立地する。谷を隔てた台地には前山遺跡がある。調査面積は2,700㎡である。旧石器時代では細石刃文化期のブロックが19か所検出され，遺物は三稜尖頭器・台形石器・スクレイパー・細石刃・細石刃核が出土した。縄文時代では早期の集石，晩期の土坑と溝状遺構が検出され，遺物は岩本式・前平式・平栫式・轟式・阿高式・黒川式土器等が出土し，石器は石鏃・石匙・磨石・砥石等が出土した。また，古墳時代の成川式土器や古代～中世の須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁が出土した。

7　前　原……松元町福山字前原･鬼ヶ迫上に所在し，標高は約180ｍの舌状を呈するシラス台地先端部に立地する。調査面積は19,400㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化），縄文時代（草創期・早期・前期・晩期）の遺構・遺物が発見されたが，主体は縄文時代早期前半である。この時期の遺構はＡ･Ｂ･Ｃの三地区に分けられる。（Ａ）12基の竪穴住居跡が２支群に分かれ，連穴土坑を含む土坑約130基と集石14基が，前平式･石坂式土器と検出された。（Ｂ）竪穴住居跡13基，連穴土坑35，土坑45，集石4，祭祀遺構１と幅1.5～２ｍの道路跡２条が前平式・吉田式・石坂式土器と検出された。（Ｃ）竪穴住居跡３基，土坑131，落とし穴１基が吉田式・石坂式土器と検出された。石器は，石斧・石皿・磨石・削器・石鏃・軽石製品・石剣・砥石等が出土した。縄文早期後半では，塞ノ神式土器が落とし穴２基，溝１条と出土し，押型文土器・手向山

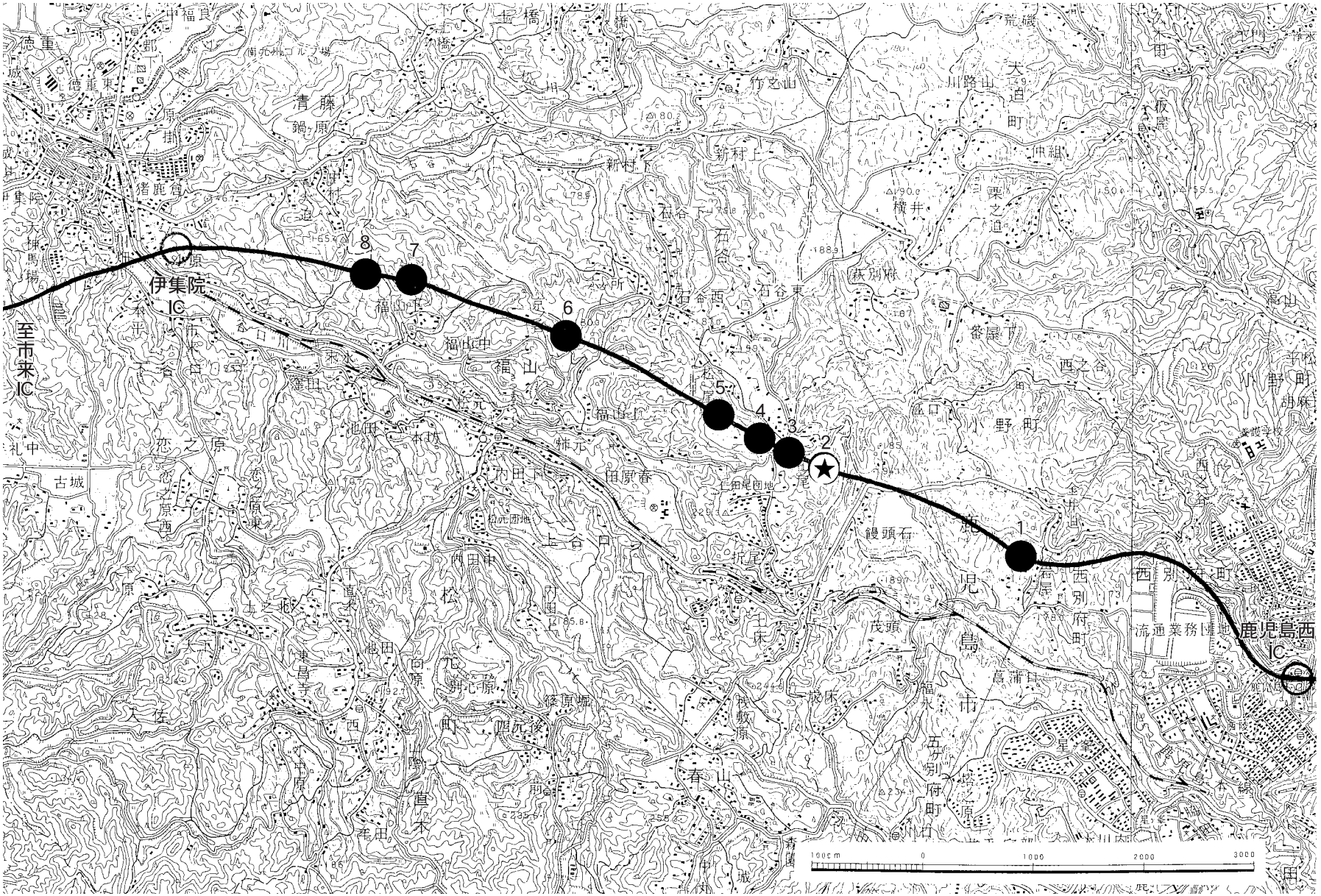
式土器も出土した。また，縄文時代晩期の黒色研磨土器・組織痕土器を主体に，少量の曽畑式土器も出土した。

8　フミカキ…松元町福山字フミカキに所在し，標高約170mのシラス台地上に立地する。調査面積は5,400㎡で縄文時代を主とする遺跡である。早期の連穴土坑２基･集石10基が検出され，早期の吉田式・石坂式・政所式・押型文・中原式土器や前期の曽畑式・轟式，晩期の黒川式土器が出土した。晩期では平織りの組織痕土器が出土した。また，弥生時代後期の土器や平安時代の須恵器も少量出土した。

9　山下堀頭…松元町福山字山下堀頭に所在し，シラス台地に囲まれた開析谷の標高約133mの台地裾部に立地する。調査面積は4,800㎡で，縄文時代前期の曽畑式土器と後期の土器が少量出土した。弥生時代後期では竪穴住居跡が３基検出され，遺物は中津野式土器や鉄剣等が出土した。住居内からは軽石製品が出土し，周辺からは磨製石鏃も10数点出土している。平安時代末頃の方形周溝状遺構が１基検出され，主体部からはなにも出土しなかったが，周溝から小型の軽石製石塔の笠石片が出土した。

※　既刊の報告書

「杤堀遺跡・西ノ原Ｂ遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（30）2002．3



第３図　調査遺跡位置図　　2の星印が宮尾遺跡

第１表　調査遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積㎡	調 査 員	時　代	概　　要
1	山 ノ 中	鹿児島市西別府町	H6，5～6 H7，5～H8，3	12,000	東・菅牟田・ 西園	縄文 古墳 平安	住居跡，指宿・中原・松ノ木式・石皿 成川式 土坑，須恵器・土師器
2	**宮　　尾**	**松元町石谷**	**H5，12～H6，3 H8，4～9**	**8,400**	**牛ノ濵・東 繁昌・三垣**	**旧石器 縄文 奈良・平安**	**剥片・チップ 集石，落とし穴，土坑，条痕文・平栫・塞ノ神 掘立柱建物跡，須恵器・土師器**
3	仁 田 尾	松元町石谷	H5，4～H6，3 H6，4～H7，3 H7，7～H8，3	34,500	池畑・宮田・ 今村・寺原・ 園田・前村・ 牛ノ濵・常田・ 繁昌・三垣	旧石器 縄文 古墳～平安	礫群，落とし穴，ブロック，ナイフ・尖頭器・台形石器・ＭＣ・ＭＢ 掘立柱建物跡，溝，集石，落とし穴，土坑，前平・吉田・轟・曽畑・市来・黒川 掘立柱建物跡，溝，須恵器・土師器
4	西ノ原Ｂ	松元町石谷	H6，10～11	1,300	牛ノ濵・園田	旧石器 古墳	礫群，ナイフ・三稜尖頭器・ＭＣ・ＭＢ 成川式
5	前　　山	松元町石谷	H7，5～H8，3 H8，4～9	9,600	鶴田・桑波田・ 橋口・元田	旧石器 縄文 古墳	台形様石器・ナイフ・剥片尖頭器・ＭＣ 前平・轟式 成川式
6	柊　　堀	松元町石谷	H4，12～H5，3 H5，4～6	11,000	牛ノ濵・新町・ 元田	旧石器 縄文 平安	ＭＣ・ＭＢ 溝，前平・平栫・轟・黒川・石槍・砥石 青磁・須恵器・土師器・石鍋
7	前　　原	松元町福山	H3，10～H5，11 H6，1～H8，10	53,500	牛ノ濵・新町・ 前迫・前村・東 元田・菅牟田	旧石器 縄文	礫群，台形石器・三稜尖頭器・ＭＣ 住居跡，道跡，連穴土坑，土坑，集石 前平・吉田・石坂・押型文・岩崎・黒川 石槍・石皿・磨石・石鏃・石斧
8	フミカキ	松元町福山	H6，10～H7，3 H7，5～6	7,200	東・菅牟田・ 西園	縄文 平安	集石，石坂・押型文・黒川式 須恵器
9	山下堀頭	松元町福山	H6，6～10	5,500	東・菅牟田	縄文 弥生 平安	曽畑式 住居跡，鉄剣・石鏃・軽石製品 周溝墓，須恵器

第２章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

宮尾遺跡は，平成５年12月から確認調査を行なった。

STA.370を基準に10m間隔の区割りを設定し，地形を勘案しながら，おおよそ，その区割りに沿って８か所のトレンチを設定して確認調査を実施した。

その結果，古代から中世・近世の遺物がⅡ層から，古墳時代および縄文時代後・晩期の遺物がⅢ層から，さらに，縄文時代早期および旧石器時代の遺物がⅣ層からそれぞれ出土した。

そのため，平成６年１月からはほぼ中央部を占める未買収地を除いた台地縁辺部を中心に緊急発掘調査（本調査）に切り替えて本格的な調査を開始した。

また，平成８年４月から９月には，平成５年度に調査できなかった残りの箇所について本調査を実施した。

第２節　調査の組織

平成５年度

事業主体者	建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所		
発掘調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
発掘調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	大久保忠昭
発掘調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	水口　俊雄
	〃　〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	牛ノ濵　修
	〃　〃	文化財研究員	東　和幸
発掘調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	成尾　雅明
	〃　〃	主事	中村　和代

平成８年度

事業主体者	建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所		
発掘調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
発掘調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
発掘調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	尾崎　進
	〃　〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃　〃	課長補佐	新東　晃一
	〃　〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	繁昌　正幸
	〃　〃	文化財研究員	三垣　恵一
発掘調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	成尾　雅明
	〃　〃	主事	前屋敷裕徳
	〃　〃	主事	追立ひとみ

平成14年度

事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
整理作業主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
整理作業責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文

整理作業企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃　〃	総務係長	前田　昭信
	〃　〃	調査課長	新東　晃一
	〃　〃	課長補佐	立神　次郎
	〃　〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
整理作業担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	繁昌　正幸
	〃　〃	文化財研究員	元田　順子
整理作業事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	脇田　清幸

平成15年度

事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
整理作業主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
整理作業責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原　俊孝
整理作業企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃　〃	総務係長	平野　浩二
	〃　〃	調査課長	新東　晃一
	〃　〃	課長補佐	立神　次郎
	〃　〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
整理作業担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	繁昌　正幸
	〃　〃	文化財主事	國師　洋之
整理作業事務担当者	〃　〃	主査	脇田　清幸
報告書作成検討委員	平成15年11月11日	所長ほか10名	
報告書作成指導委員	平成15年11月４日	調査課長ほか４名	
企画担当者		中村　和美・寺原　徹	

発掘作業員

平成５年度

轟原秀志・鶴田牧男・篠原ハツ子・西村恵子・西村雪枝・木之下テル子・柚木よう子・篠原育子
田中美恵子・岩下篤子・早田妙子・吉村悦子・新山久子・岩下マサ子・有村なるみ・内　鈴子・
井ノ上フミ子・和田陽子・石神エミ・飯牟礼孝子・宇田成美・南シズ子・中島容子・早田ミツ子
坂口ミチ子・福岡優子・村中康子・石田万里子・高礒和代

平成８年度

伊知地和子・内　鈴子・大石律子・大山カツ子・奥　幸子・金里美恵子・上四元イチ・川口貞子
上四元千留子・上四元フサ子・上四元まゆみ・川口ヨシ・川畑富美子・木佐貫栄治・駒走優子・
坂之上トシ子・中園良子・下柿元照美・杉原アイ子・新穂和子・新穂春深・西カズ子・西カツエ
松永順子・村中康子・森園カツ子・吉富睦子・吉松廣美・吉満ヒロ子・吉村レイ子・若松スズ子

整理作業員

平成14年度

石田眞美・岩爪美津子・久米村美穂子・西中薗加代子

平成15年度

岩爪美津子・川東美登里・前原絹子・川崎弘子

第３節　調査の概要と経過

確認調査を平成５年12月１日～24日に行ない，その結果を受けて翌平成６年１月７日～３月29日と，平成８年４月22日～９月26日に本調査を行なった。経過を日誌抄によって月毎に略述することにする。

平成５年度

12月

宮尾遺跡の確認調査を開始する。用地のほぼ中央に未買収地があるため，その場所をさけて２本のトレンチを設定し，掘り下げを開始する。Ⅱ～Ⅳ層から遺物出土。平板実測，遺物取り上げ。トレンチ配置図作成。掘り下げ後，北側断面実測。

１月

先月の確認調査でカバーできなかった地域を対象として，さらに７つのトレンチを設定して掘り下げを行なった結果，調査予定地のほぼ全体に遺跡の広がることが判明したため，全面（本）調査に切り替えて本年度の残りのすべての期間，調査を行なうこととする。各トレンチのⅢ・Ⅳ層からの出土遺物の平板実測，取り上げ。３Ｔの土坑および７Ｔの凹み等実測。各トレンチ位置図，平板実測および北側断面実測。グリッドの設定を行ない，全面調査に備える。表土剥ぎ取りを開始。

２月

Ｃ－12～14区より集石検出，掘り下げを行なう。清掃，写真撮影。実測を開始するとともに，実測用ピン位置の平板実測を行なう。全区，Ⅱ～Ⅲ層の遺物検出，平板実測，取り上げ。ベルトの北壁の断面実測。Ⅳ層以下の掘り下げ。Ⅲ層上面でコンター計測，平板実測。

３月

Ｃ－11・12区北側断面およびＣ・Ｄ－12区東側断面実測。Ⅲ・Ⅳ層を中心に掘り下げ，遺物検出。平板実測，遺物取り上げ。Ｄ－５～７区南側断面，Ｄ－５・６区東側断面実測およびⅢ層上面コンター計測，平板実測。Ｃ・Ｄ－８区に道跡検出。Ｅ－８区Ⅳ層Obのchip集中域を検出するも，時間不足のため，埋め戻しを行なう。本年度は，Ａ～Ｃ－７～15区とＤ・Ｅ－４～９区，それにＤ・Ｅ－12･13区を中心とする区域の調査で終了し，今後は未買収地の解決を待って全面調査を行ない，全域の発掘調査を終了させたい。

平成８年度

４月

発掘調査開始。東地区北側より表土剥ぎ。東側に，2間×３間と思われる柱穴検出。また，道跡と推定される硬化面２条検出。西側には，溝状遺構検出。南側の表土剥ぎ開始。グリッド設定。25日，池畑係長，26日，松元監督官来訪。

５月

東地区東側，Ⅱ層出土遺物平板実測，取り上げ。道跡，平板実測。道跡･焼土域検出。清掃，ハーフカット，写真撮影，実測。掘立柱建物跡実測，写真撮影。西側，Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ，遺物検出，平板実測，遺物取り上げ。溝等平板実測後，掘り下げ。石器製作跡，平板実測。Ⅳ層上面清掃，コンター図作成。南側，Ⅱ層掘り下げ，遺物検出。Ⅲ層上面検出中に，畑の畝跡検出，掘り下げ。北側，Ⅲ･Ⅳ層掘り下げ，遺物検出。北東区に，木炭を含む土坑および焼土域検出，掘り下げ。西区，トレンチ設定，Ⅳ層以下掘り下げ。13日，吉元所長，県立博物館成尾先生来訪。

６月

東地区北西区，トレンチ掘り下げ，遺物の平板実測，取り上げ。土手側半分を掘り下げ，下層の確認を行なう。Ⅸ層まで掘り下げるも，遺物なし。断面清掃，写真撮影。土坑断面実測。南西区，溝・道跡の平板実測，レベル計測し，Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ，遺物検出。北東区，Ⅲ～Ⅵ層掘り下げ，

遺物検出，平板実測，遺物取り上げ。土器出土状況写真撮影。南東区，掘立柱建物跡，ピット断ち割り，写真撮影，断面実測。さらに，Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ，遺物検出，平板実測，遺物取り上げ。北西区，北および東側断面実測開始。20日，ＫＫＢ取材。

７月

東地区南西区，Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，遺物検出。後，Ⅵ層軽石層までをメドに掘り下げる。石器製作跡のベルト掘り下げ。東側断面実測。南東区，Ⅵ層軽石層まで掘り下げる。遺構面を一部清掃，写真撮影。遺構検出，平板実測。土坑平面実測，掘り下げ。東地区全体，遺構検出，清掃，写真撮影，実測開始。遺構分布状況平板実測。土坑仮番号付与。土坑実測用ピン位置，平板実測。土坑計測。南区，Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，遺物検出，平板実測，遺物取り上げ。Ⅵ層軽石層まで掘り下げて揃える。19日，戸崎課長・池畑係長，台風被害視察。23日，伊集院小下園先生，見学。24日，松元監督官と調査計画等につき協議。

８月

東地区南側，Ⅲ～Ⅵ層上面まで掘り下げ，遺物検出。遺構検出状況平板実測。土坑（推定落とし穴）掘り下げ開始。北区，Ⅵ層上面コンター実測。土坑・落とし穴群，写真撮影。石器製作跡，掘り下げ。迫の掘り下げ。東地区全体，土坑内清掃，写真撮影。西地区，表土剥ぎ後，Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。西地区北区，Ⅲ層掘り下げ，遺物検出，平板実測，遺物取り上げ。東地区にトレンチ設定，掘り下げ開始。Ⅶａ・ｂ層掘り下げ，断面実測，写真撮影。10日，3遺跡合同の遺跡見学会実施。見学者等140名が訪れる。１日，名古屋大学渡辺　誠先生来訪。12日，台風対策。松元町文化財保護審議会委員，小西さんの案内で来訪。27日，錦江台小菅牟田先生来訪。

９月

西地区北側，Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。Ⅵ層軽石層で遺構検出を試みる。遺物検出，平板実測，取り上げ。集石実測，掘り下げ。土坑・迫位置，平板実測および断面実測。迫のレベル計測，コンター図作成。トレンチ掘り下げ。東地区北側，トレンチ内遺物，平板実測，取り上げ。ベルト断面実測。90号土坑掘り下げ，写真撮影，実測。土層断面実測。東地区拡張区，平板実測，遺物取り上げ。東西ベルト，Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ，遺物検出，平板実測，取り上げ。ほぼ完形となる甕形土器出土，清掃，写真。トレンチ周辺，チョコ層まで掘り下げるも遺物なし。西地区，Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ。トレンチ，Ⅶ層掘り下げ，遺物なし。調査区域，平板実測。Ⅶ層の一部に黒曜石片が出土したため，拡張して調査を行ない，旧石器時代ナイフ期のブロックを確認。平板実測，遺物取り上げ。さらに下層の確認を行なったが，遺物がなく，調査を終了する。４日，松元監督官，土砂の状況確認。11日，立園県文化財課長，青崎文化財主事の案内で来訪。13日，プレハブ撤去，以後はテントで調査を行った。

整理作業

平成14年度

４月

土器の接合および石膏での補強。集石の礫を計測し，表にまとめる。図面の点検を行ない，修正する。遺物の出土状況のドット図を作成する。

５月

土器の石膏での補強を中心に，土坑実測図およびコンター実測図のトレス作業。

６月

土器の拓本作業を中心に行なう。地形図および遺構のトレス，コンター実測図のトレスを行なう。

７月

土器の拓本作業。地形図，土層断面図のトレス，ドット図のトレス。

８月

土器を中心として遺物の実測を開始する。土層断面図トレスとトレンチ位置図のトレス。ドット図への遺物番号の記入を行なう。

９月

遺物実測を主として行なう。遺物の観察表も併行して作成する。ドット図への遺物番号記入も継続する。

10月

土器の拓本および遺物の観察表作成。遺構を中心にトレスを行なう。時代毎のドット落とし。

11月

土器の拓本，遺物実測および観察表の作成。ドット落とし作業。

12月

遺物の接合と石膏による復元作業を中心として行なう。ドット落とし作業。遺構等のトレスを実施する。

１月

遺物の石膏復元および実測を主に行なう。遺構等のトレス。

２月

石器の実測を開始する。遺構のトレス。現場での実測図から土坑の位置図を作成する。

３月

石器の実測を継続するとともに，石皿および台石の面の拓本に取り掛かる。土層断面図のトレス図を区域毎にまとめる作業を行なう。年度末により，一応の整理と収蔵庫への収納を行なう。

平成15年度

４月

遺物の実測図の点検および修正作業。土層断面図と遺物の実測図のトレス。補充遺物の実測。

５月

土器・石器の実測図およびコンター・遺構のトレス。補充遺物の実測。

６月

遺物・遺構のトレスおよびスクリーントーン貼り。遺物の仮レイアウト作業を行なう。

７月

遺物および遺構の仮レイアウト。遺構の計測表を作成する。遺物写真撮影用復元，彩色。

８月

遺物および遺構のレイアウト。遺構の計測表を作成する。遺物写真撮影用復元，彩色。

９月

遺構レイアウトとともにレイアウト済みのカバーへの記入を行なう。遺物写真撮影。文章作成。

10月

文章作成を中心に行なう。一般遺物を収納する。

11月

文章作成。

12月

文章作成および修正を行う。印刷のための起案。入札。初校。

１月

第二校および第三校。図版の校正および本紙校正。

２月

印刷。報告書納入。

第３章　位置および環境

第１節　地理的環境

宮尾遺跡のある松元町は，鹿児島市の西部，日置郡の中にある。日置郡の中でも，中央やや北寄りにあり，東は鹿児島市と境界を接しており，北および北西は同郡の伊集院町と，南西は日吉町，南は吹上町と境をなしている。鹿児島市側とは薩摩半島のほぼ中央部を300～400m程の山地が南北に脊梁をなして貫いており，宮尾遺跡を始めとする周辺部は，市町の境界が分水嶺となっており，それほど大きくはない河川が，東へは鹿児島市を通って鹿児島湾（錦江湾）に注ぎ，西側へは伊集院町，日吉町，吹上町の各町を通って東シナ海に注いでいる。

薩摩半島を始めとして，本県の島嶼部を除いた地域は，隣接する宮崎・熊本両県の南部を中心にシラスと呼ばれる火山噴出物・火砕流堆積物が厚く堆積しており，極めて脆く，流水作用により流出しやすく，長い年月の経過により侵食を受け，至るところ侵食崖が深く入り込んだ地形を形成している。ただ，宮尾遺跡に近い同町の前山遺跡や仁田尾遺跡付近などでは，脊梁にあたる場所がらから，長い年月の果てにシラスがほとんど流失し，基盤の岩が露見する。

松元町は，三角形に近い不整形をしている。北西部の低平な，谷水田的に狭隘な小盆地状の土地に町役場があり，その周辺以外は侵食を受けた高低差のあるシラス台地に取り囲まれている。その中でも，鹿児島市との境をなす東側は全体的に小高くなっており，東シナ海へと向かう西側へは緩傾斜で下っている。

北西部の低平地では主として稲作が行なわれ，台地上では，内陸部であることを活かし，適度な降雨量もあることなどから茶の栽培が盛んであり，地元の特産品となっている。そのほかには，甘藷や花卉の栽培も行なわれている。ただ，鹿児島市の隣接地であることから，近年はとみにベッドタウンとして宅地化が進行し，駅の周辺ばかりでなく，市街地から離れた春山周辺にも大型の団地が出来てきている。そのため，鹿児島市街地への交通も頻繁となり，朝夕は渋滞もひどくなってきている。それに加えて，近年の大水害時に交通網が遮断された反省から，鹿児島市内から大規模な規格の道路も造られつつある。また，それに伴って，遺跡の調査も継続的に行なわれている。

南九州自動車道の開通により，鹿児島市内とのアクセスも良くなり，松元インターから鹿児島インターまでの所要時間は10分程度と短くなっている。また，串木野市・川内市へも市来インターで降りた後，国道３号線を使用することで，従来より短時間でつながるようになって来ているものの，さらに利便を図るために，川内市隈之城までの工事も急ピッチで行なわれている。

一方，鉄道は，通勤・通学の足となる普通列車が鹿児島・川内間で割合に頻繁に運行されているほか，鹿児島・博多間を約４時間程度で結ぶ特急が昼間はほぼ１時間おきに運行されるなど利便は極めて良いと言える。高速化という点では，平成16年春には九州新幹線が鹿児島・新八代間で運行されることが決定しており，鹿児島・博多間は従来のほぼ半分の時間となる予定であり，鹿児島県も超高速時代の波に乗ることになりそうである。ただ，その一方で，新八代・川内間はＪＲから切り離されて，第三セクター化することも決定しており，同時に課題も派生してきていると言えよう。新幹線開通の暁には，当地域には停車駅は設置されないことから，高速交通網からは若干取り残される地域となることが予想され，その意味では明暗が分かれることになりそうである。

第２節　歴史的環境

宮尾遺跡の所在する松元町は，シラスの堆積以前から生活の痕跡が見られ，本県の中でも古い時代から人類が活動していた地域と言える。東の鹿児島湾側と西の東シナ海側の分水嶺に当たる地域であり，割合に広く安定した尾根状の台地が南北に長く続くことから，東および西のいずれの方へも少し降りることで湧水地が見られ，そのことが早くから人が住み着いた要因と考えられる。また，東西いずれの海へも，楽に日帰りができることから，魚の捕獲や海産物の採集も行なわれていたと考えることも可能かも知れない。

シラスの堆積がほとんど見られない前山遺跡からは，シラス降下以前の旧石器時代ナイフ期の台形石器などが出土し，出水市の上場遺跡などでしか確認されていなかったシラス降下以前の文化の解明に大きな足掛かりが出来たといえよう。また，旧石器の細石刃文化の時期としては，当時，西日本最大規模とされた仁田尾遺跡があり，近接する柊堀遺跡や前述した前山遺跡などでも，同じ時期の遺物が出土していることから，この時期の本地域は，相当な期間，当時としては多くの人々が生活していたと推定されている。

縄文時代になると，草創期の遺物こそ確認されていないものの，早期には「ハ」の字状に展開する７軒の住居跡が検出され，出土した土器が前平式土器であることから，国分市の上野原遺跡と同時期の遺跡として名を馳せた前原遺跡がある。仁田尾遺跡からは，草創期を除いてほとんどの時期の遺物が出土していることから，縄文時代全般を通して，人々が訪れては去りして，繰り返し生活が行なわれるほどの格好の地であったと言えよう。動植物などが周囲に豊かにあふれていたことが考えられよう。

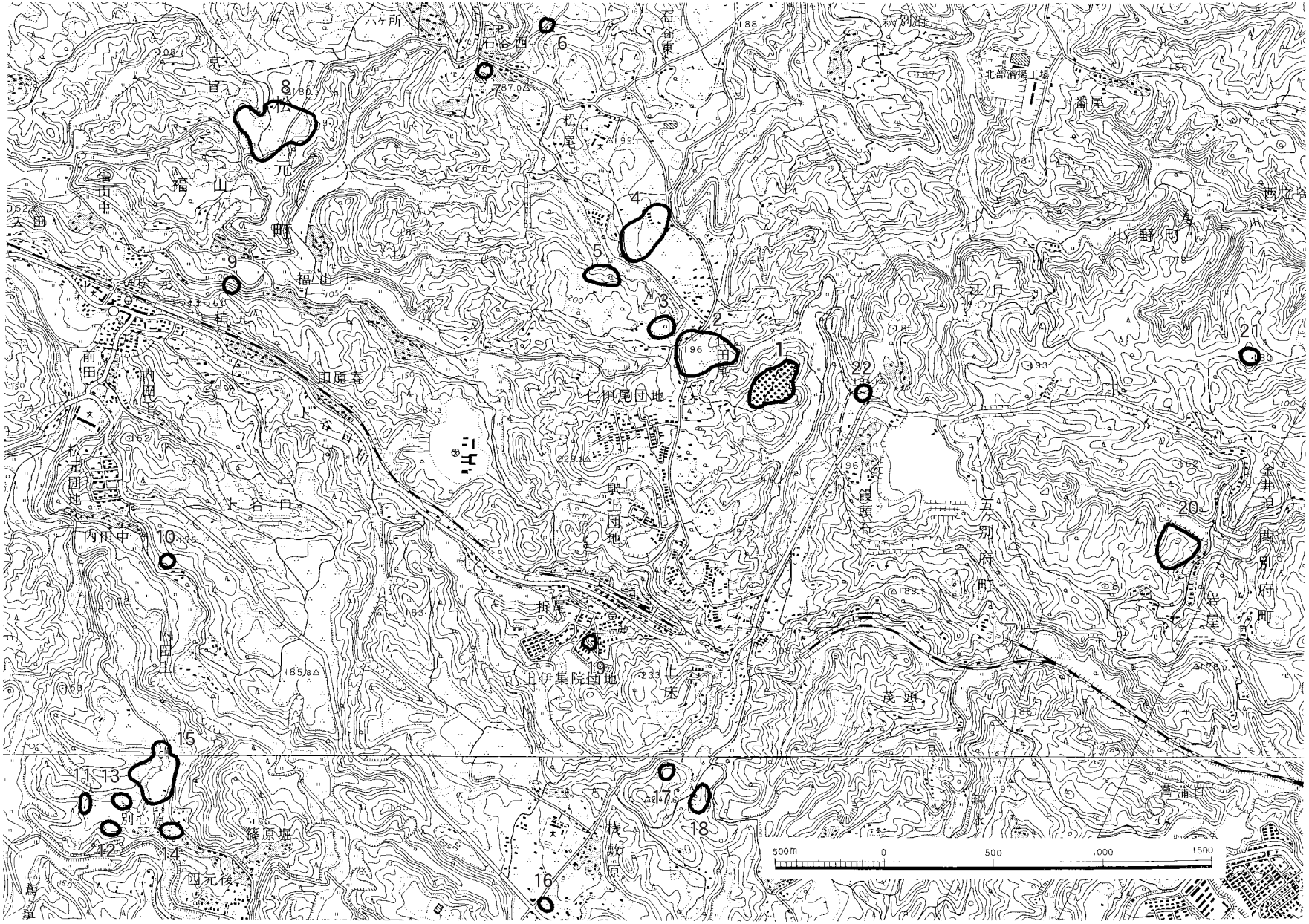
宮尾遺跡でも旧石器時代ナイフ期のブロックが確認されており，仁田尾遺跡から谷一つ隔ててはいるものの，尾根伝いにはつながっていることから，何らかの交流，あるいは一時的な移動のあったことなどが考えられるかも知れない。縄文時代には，早期と後期・晩期に遺構・遺物が見られる。

弥生時代の遺跡は，宮尾遺跡周辺ではほとんど確認されておらず，本町の南西部で若干の遺跡が散見されるものの，広域にわたったり，数多く所在するというほどではなく，明らかに縄文時代よりは質量共に見劣りすると言わざるをえない状態である。古墳時代にもそのことは引き継がれ，目立った遺跡・遺物は確認することができない。宮尾遺跡でも，若干の成川式土器が見られる程度である。

古代，この地は日置郡に所属していた。郡衙の所在地を始め，不明なことが多い。日置郡には富多・納薩・合良の３郷があったことが「和名抄」に記載されているが，本町が何れの郷に属していたかについても定説を見ていない。この時期の遺跡はほとんど知られていないが，宮尾遺跡では掘立柱建物跡１棟を伴って多くの土師器の甕や坏が出土しており，中でも赤色に塗彩された埦などが割合に大量に出土しており，建物の性格を考える上で参考になると考えられる。

中世になると，室町期を中心に石谷城や谷口城，取添城などが築かれ，本地域でも戦乱の時代を迎えたことがわかる。古石塔も古代末から造られ，上坊石塔群として残されている。

近世には，石谷奉行だった有馬新七が若者の育成のために造らせたと言われる石坂が残されており，今でも大事に守られている。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
500m
0
500
1000
1500

第4図　周　辺　遺　跡

第２表　周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	**宮尾**	**松元町石谷**	**台地**	**旧石器 縄文 奈良平安**	**剥片 集石，落とし穴，土坑，塞ノ神式・平栫式 掘立柱建物跡，須恵器・土師器**	**本報告書**
2	仁田尾	松元町石谷	台地	旧石器 縄文	礫群，落とし穴，ブロック 掘立柱建物跡，前平･吉田･轟式	
3	西ノ原Ｂ	松元町石谷	台地	旧石器 古墳	礫群，ナイフ・三稜尖頭器 成川式	埋文セ報30
4	杤堀	松元町石谷	台地	旧石器 縄文	ＭＣ・ＭＢ 前平・平栫・轟式・石槍	埋文セ報30
5	前山	松元町石谷	台地	旧石器 縄文	台形様石器・ナイフ・ＭＣ 前平・轟式	
6	石谷城跡	松元町石谷西頭	台地	室町後期	堀割り跡	長門守忠栄築城 弘治元年(1555) 竣工
7	石坂	松元町石谷西	坂道	万延元年	大小118個の石を置く	有馬新七石谷奉行
8	前原	松元町福山	台地	旧石器 縄文	礫群，台形石器・三稜尖頭器 住居跡，道跡，連穴土坑，前平式	
9	谷口城跡	松元町福山下園 〃　上谷口橋元	山林	室町後期 天文6年?	水無壕跡	肥後盛治築城か？
10	上坊石塔群	松元町上谷口内田中	山林	平安末～ 鎌倉中期	税所一族および紀氏一族 供養塔	(町) 昭53, 11, 3
11	無埼平Ａ	松元町上谷口無埼平	台地	弥生 ～古墳	土器片	平元, 分布調査
12	無埼平Ｂ	松元町上谷口無埼平	台地	弥生 ～古墳	土器片	平元, 分布調査
13	別心原	松元町上谷口別心原	台地	弥生後期	土器片・磨製石斧	
14	別心	松元町上谷口別心	台地	弥生 ～古墳	土器片	平元, 分布調査
15	内迫平	松元町直木	台地	古墳	土器片	平3, 分布調査
16	桟敷原	松元町春山桟敷原	台地	弥生後期	磨製石斧・土器片	考古学雑誌8. 11
17	小原迫	松元町上床小原迫	台地	縄文 (早･前)	押型文・条痕文・石斧	
18	屋村	松元町上谷口屋村	段丘	縄文	大型石斧	
19	山ノ中	鹿児島市西別府町	山地	縄文 古墳	住居跡，松ノ木式 成川式	
20	取添城跡	鹿児島市西別府町	山地	中世	詳細不明	
21	木ケ暮	鹿児島市田上町 木ケ暮	台地	縄文 (中･後)	阿高・指宿・市来・石皿・石斧	鹿児島県考古学会紀要３号

第４章　調 査 の 概 要

第１節　調査の方法

平成５年12月から確認調査を行なった。STA.370を基準に10m間隔の区画を設定し，おおよそ，その区割りに沿って，地形を勘案しながら２m×10～20m程度の規模のトレンチを８か所に設定し，層位的に掘り下げを行なった。

区画は，縦を北側から南側方向へA・B・C…としてHまでを付け，横は西側から東側方向へ１・２・３…として15区までを付け，A－３区，B－５区のように呼称することとして調査を行なって行くことにした。

その結果，Ⅱ層からは古代から中世・近世の遺物が，Ⅲ層から古墳時代および縄文時代後・晩期の遺物が，また，Ⅳ層からは縄文時代早期，Ⅵ層からは旧石器時代の遺物が，それぞれ出土した。

それを受けて，平成６年１月からは緊急発掘調査（本調査）を開始した。その際，調査対象地のほぼ中央部には未買収地があったため，それを避けた周辺部を対象とした。

平成８年４月からは，平成５年度に調査できなかった残りの箇所について本調査を実施した。手順としては，全域の表土を除去した後，本遺跡のほぼ中央部の旧未買収地の調査から開始した。その際は，広域な東側の部分を東地区，狭隘な西側の部分を西地区と呼称して調査に入った。東地区の北東側から南西にかけて順次調査を行なっていった。Ⅱ層の古代～中世の遺物包含層を掘り下げた結果，道跡や土坑，掘立柱建物跡のほか遺物の集中箇所が確認され，近辺からは焼土域も検出された。Ⅲ層上面からは，多数の土坑も確認され，その多くは形態や深さなどから落とし穴と推定された。詳細な調査および図化・写真撮影の後，Ⅲ層の遺物包含層の掘り下げを行なった。

その後，下層を確認するため，幅２mで東側のほぼ中央を通る東西および南北のトレンチを設定してⅣ層以下の調査を行なったが，遺物は出土しなかった。ただ，西側の端に平成５年度に確認され，掘り下げの途中でトップシートを掛けて保存されていた石器製作跡の調査を引き続いて行なったものの，数点のハリ質安山岩片（主にチップ類）が出土したのみで，中心的な調査は過年度に終了していたことが判明した。

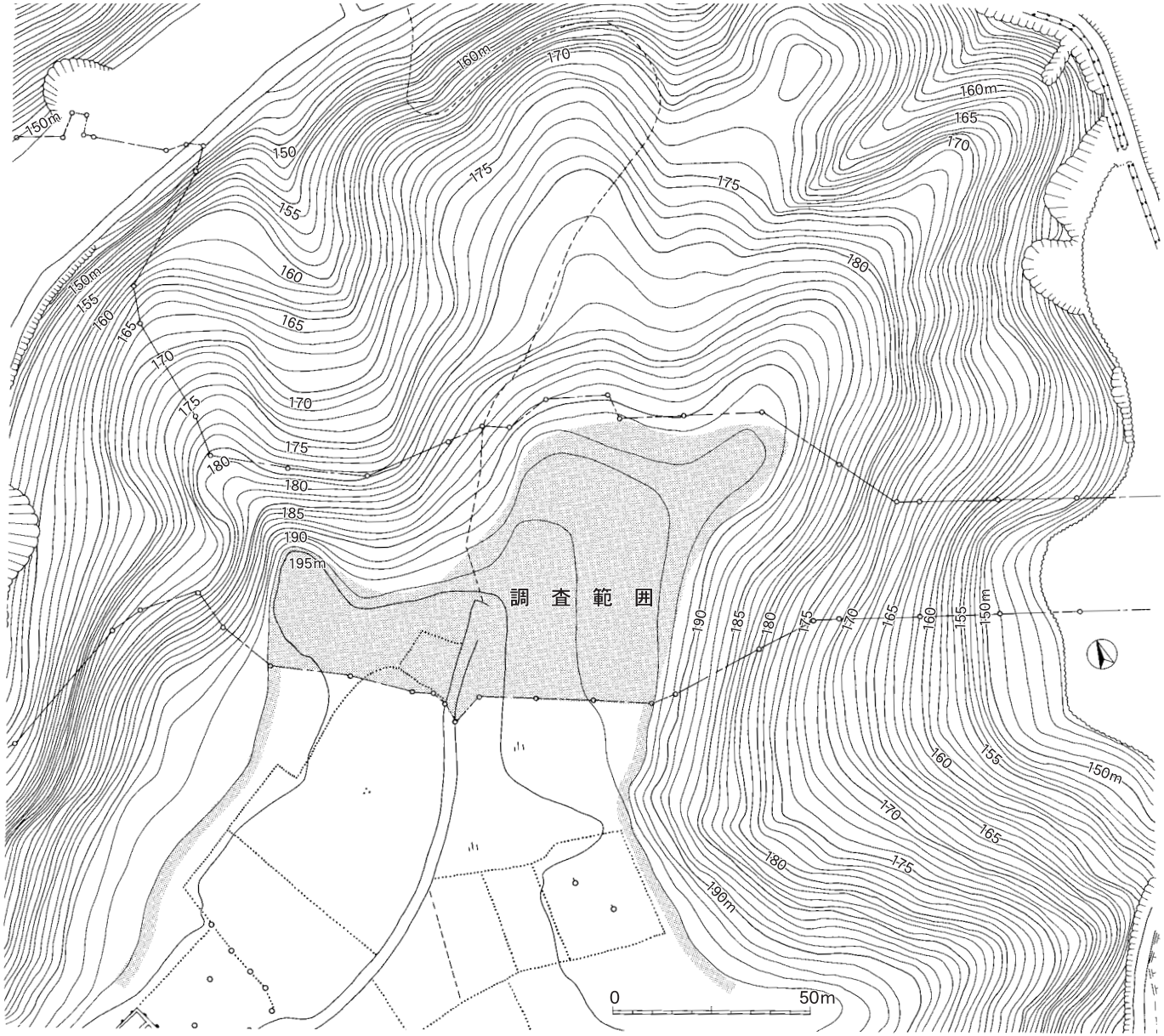
また，南側からは，畑の畝跡や溝状遺構も検出されたが，比較的新しい近世から近代以降のものと判断された。

引き続いて西地区の調査に入り，東地区と同様な手順で掘り下げ，調査を行なった。遺構としてはⅢ層上面から土坑が検出されたものの，東地区ほど多くはなく，遺物の量も少なかった。

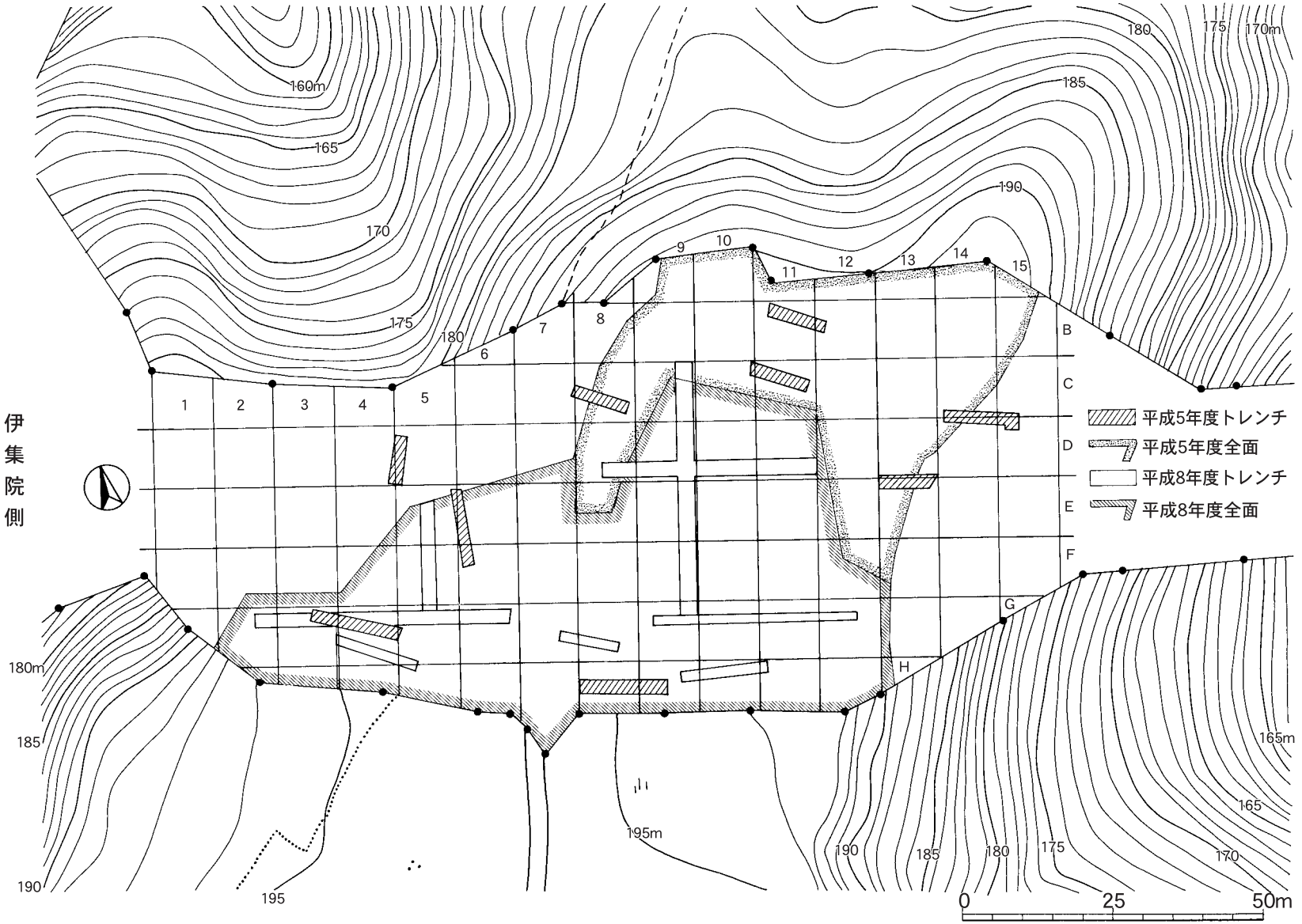
Ⅳ層以下の確認調査で１か所，黒曜石のブロックを検出したため，エリアを広げて詳細な調査を行なったが，それほど広域には広がらず，別なブロックも検出されなかったために調査終了となった。

なお，本発掘調査によって，宮尾遺跡の全体が消滅したわけではなく，今回の調査区域の南側は仁田尾台地の方向へと残存部が延びていることになる。

また，発掘調査終了後，整理作業を平成14年度と平成15年度の２年次にまたがって行なった。



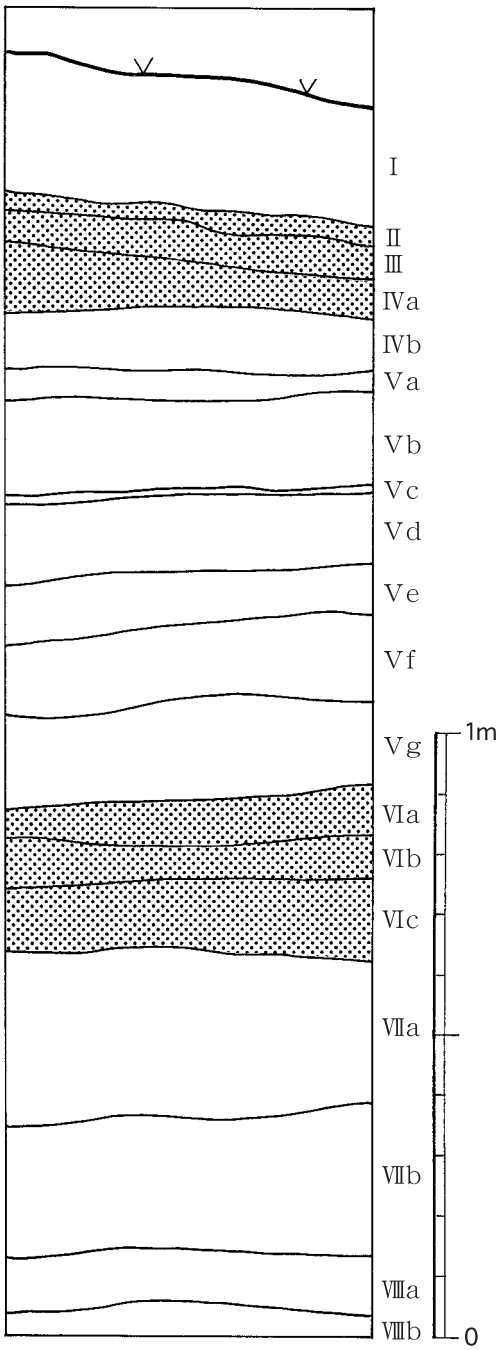
第5図　調　査　範　囲　図



第６図　グリッドおよびトレンチ位置図

第２節　層　位

調査対象地は台地の縁辺部に当たるため，地層の欠失した箇所も見られるが，層位はおおよそ以下のとおりである。ただ，場所によっては，耕作等で削平を受けており，層が欠落しているところもある。特に台地部分ではⅡ層の欠落が激しく，ほとんどはⅢ層からの残存である。台地の縁辺部も概ね同様である。以下，基本的な層序について，概略を述べる。



第７図　基本土層柱状図

Ⅰ　　層　　表土，耕作土。

Ⅱ　　層　　黒色土。古代・中世から近世にかけての遺物包含層。層としては欠失しているところが多い。

Ⅲ　　層　　黄色火山灰。鬼界カルデラ噴出起源のアカホヤ層。一部に一次堆積のブロックが見られるものの，ほとんどは二次堆積およびその風化土。縄文時代後・晩期から古墳時代の遺物包含層であるが，一部には古代の遺物も包含する。

Ⅳａ　層　　黄橙色やや粘質土。縄文時代早期の遺物包含層。

Ⅳｂ　層　　黄色土，やや粘質土。

Ｖａ　層　　黒色火山灰。

Ｖｂ　層　　黄色軽石。粒子は大きい。

Ｖｃ　層　　紫色火山灰。固結している。

Ｖｄ　層　　黄色パミス。粒子は大きく，火山砂を含む。

Ｖｅ　層　　黄色火山灰。凝固している。

Ｖｆ　層　　黄色パミス。粒子は小さく，灰色の火山砂を含む。

Ｖｇ　層　　黄色パミス。粒子は中程度の大きさ。

Ｖａ～Ｖｇ層は桜島噴出起源の火山噴出物で，薩摩火山灰層。

ⅥＡ　層　　暗褐色強粘質土。いわゆるチョコ層。旧石器時代（細石刃文化期）の遺物包含層であるが，本遺跡からは，遺物は出土していない。

ⅥＢ　層　　明褐色粘質土。

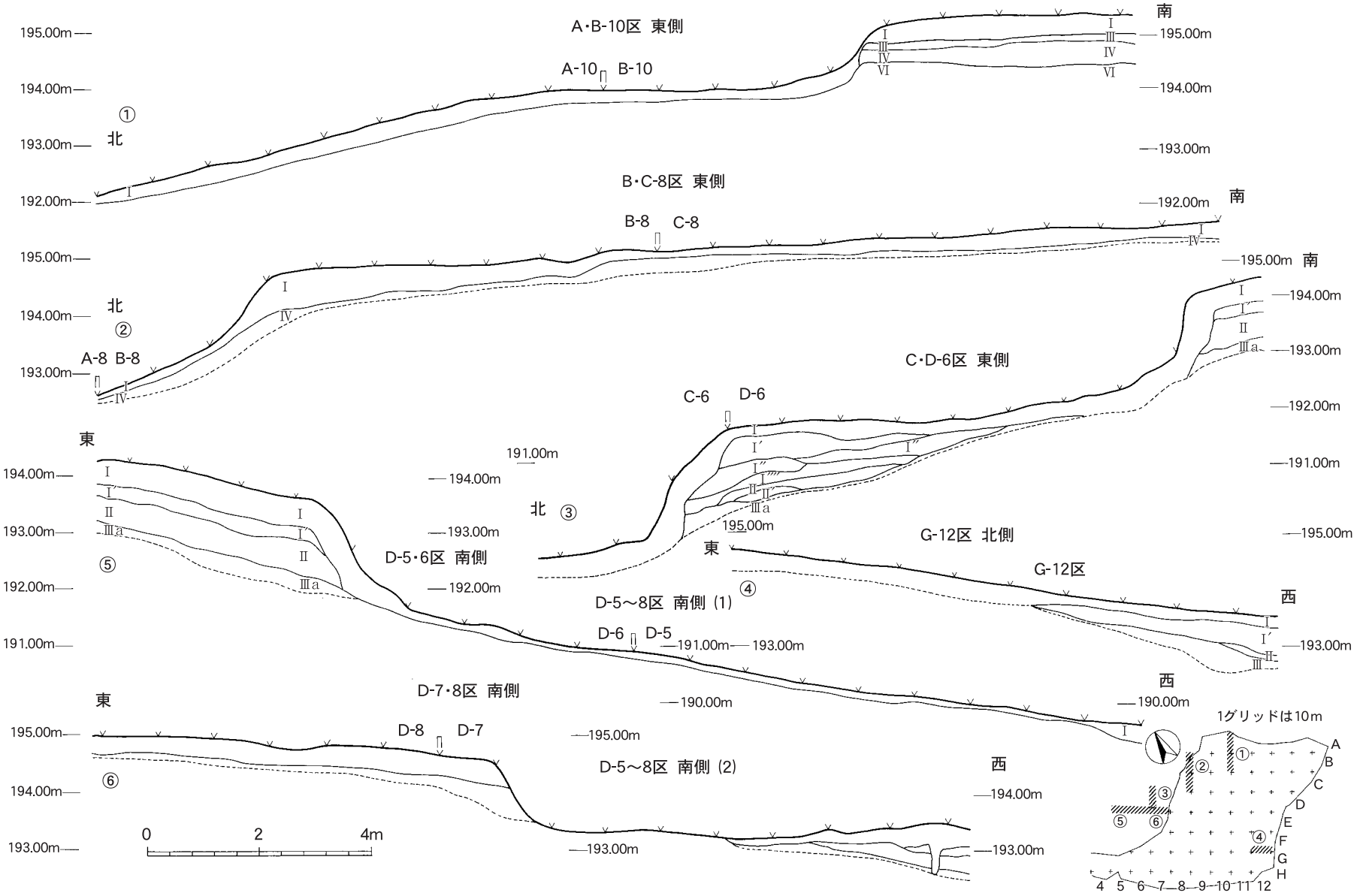
ⅥＣ　層　　やや暗褐色粘質土。旧石器時代（ナイフ形石器文化期）の遺物包含層。

ⅦＡ　層　　明褐色土。

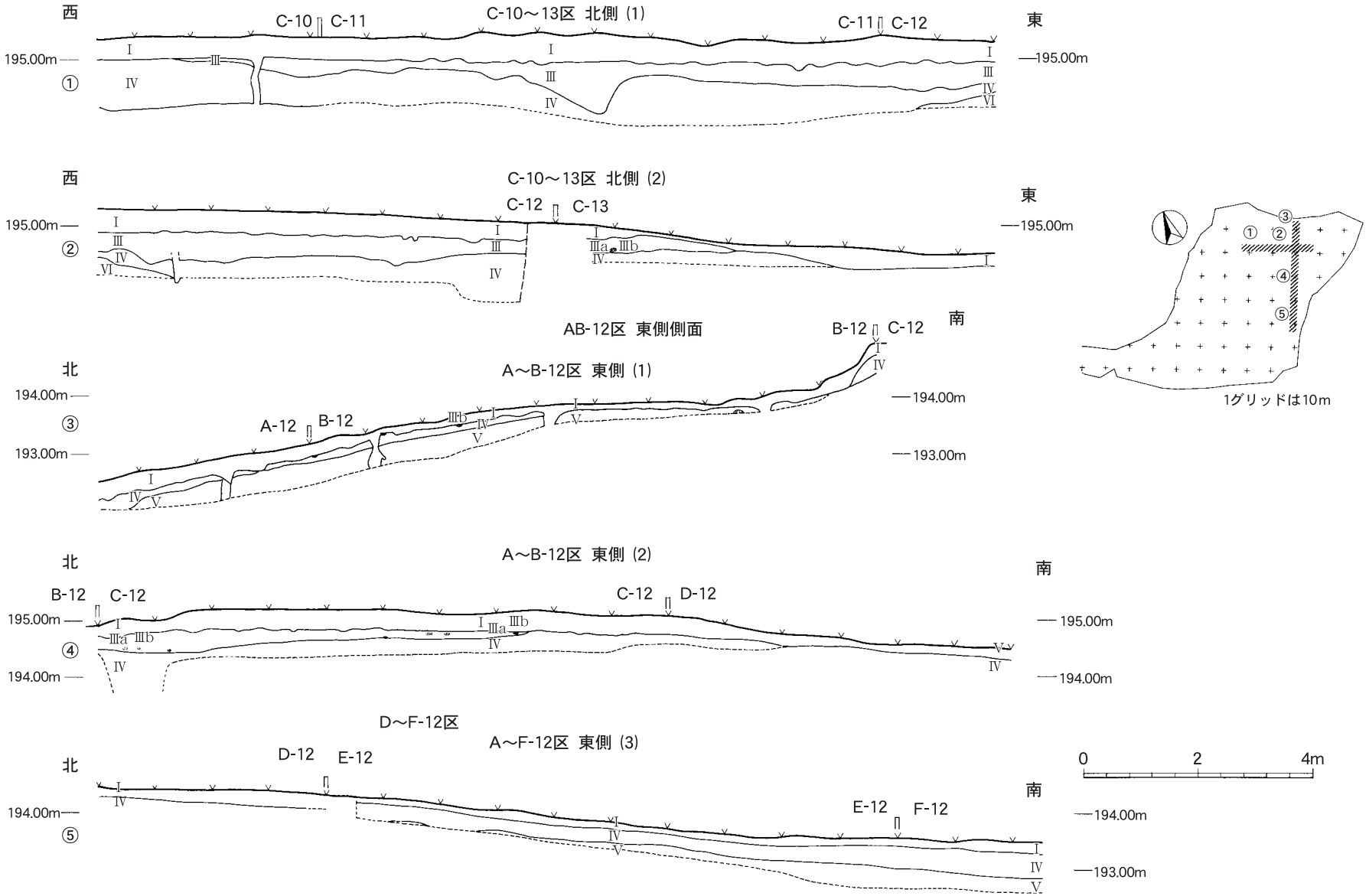
ⅦＢ　層　　暗褐色土。

ⅧＡ　層　　黄色軽石混じり土。粒子は小さい。

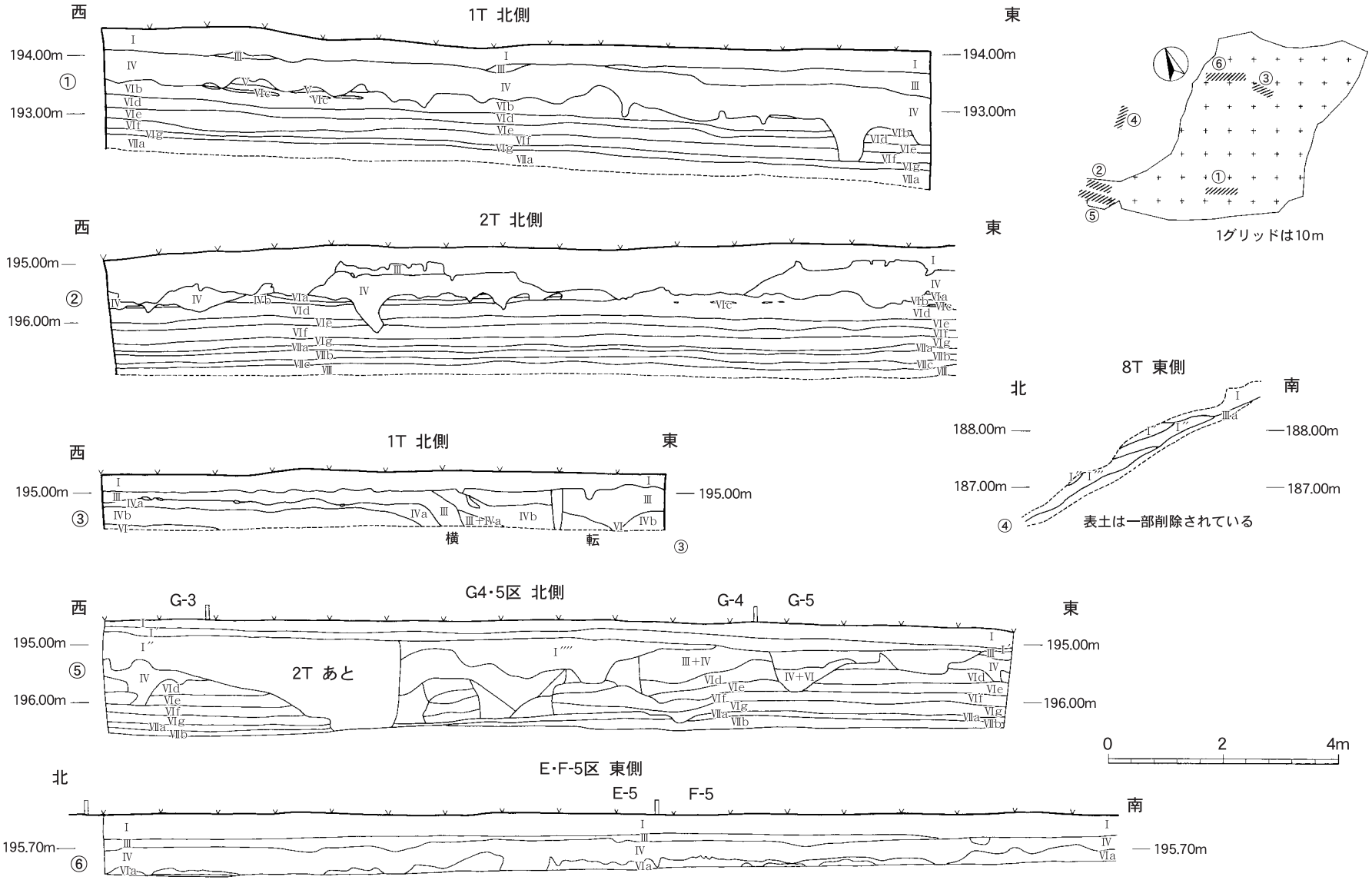
ⅧＢ　層　　黄色パミス混じり土。粒子は大きい。


A・B-10区 東側
南
北
①
A-10
B-10
195.00m
194.00m
193.00m
192.00m
B・C-8区 東側
南
北
②
B-8
C-8
A-8
195.00m
194.00m
193.00m
C・D-6区 東側
南
北
③
C-6
D-6
195.00m
194.00m
193.00m
192.00m
191.00m
D-5・6区 南側
東
⑤
194.00m
193.00m
192.00m
D-5～8区 南側 (1)
D-6
D-5
191.00m
193.00m
G-12区 北側
東
西
④
G-12区
D-7・8区 南側
東
西
D-8
D-7
195.00m
194.00m
193.00m
190.00m
D-5～8区 南側 (2)
⑥
0
2
4m
1グリッドは10m
A
B
C
D
E
F
G
H
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

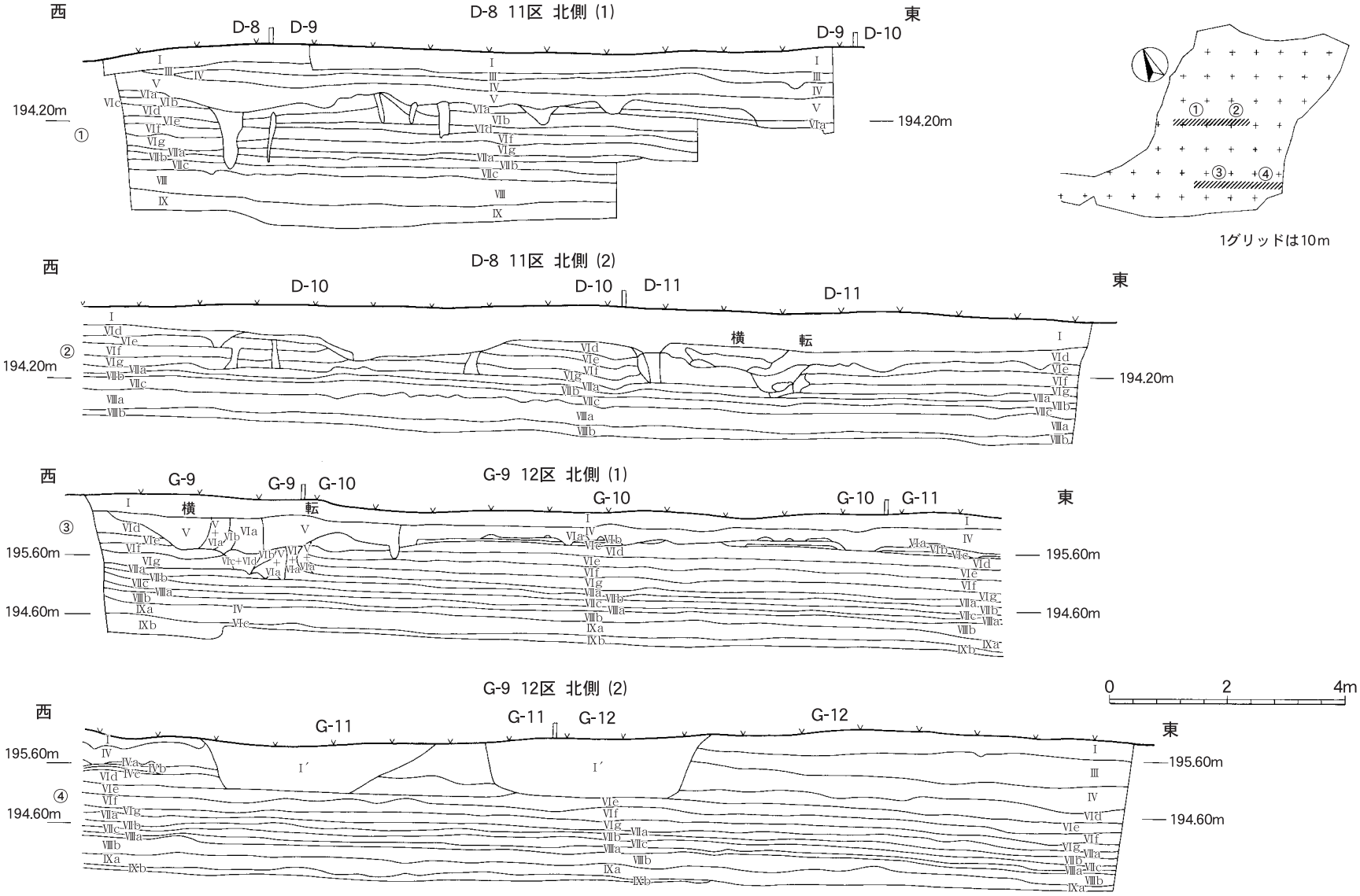
第8図　土　層　図　(1)


西
C-10
C-11
C-10～13区 北側 (1)
C-11
C-12
東
195.00m
①
C-10～13区 北側 (2)
C-12
C-13
②
AB-12区 東側側面
B-12
C-12
南
北
A～B-12区 東側 (1)
194.00m
③
A-12
B-12
193.00m
A～B-12区 東側 (2)
④
C-12
D-12
D～F-12区
A～F-12区 東側 (3)
D-12
E-12
E-12
F-12
⑤
1グリッドは10m
0
2
4m

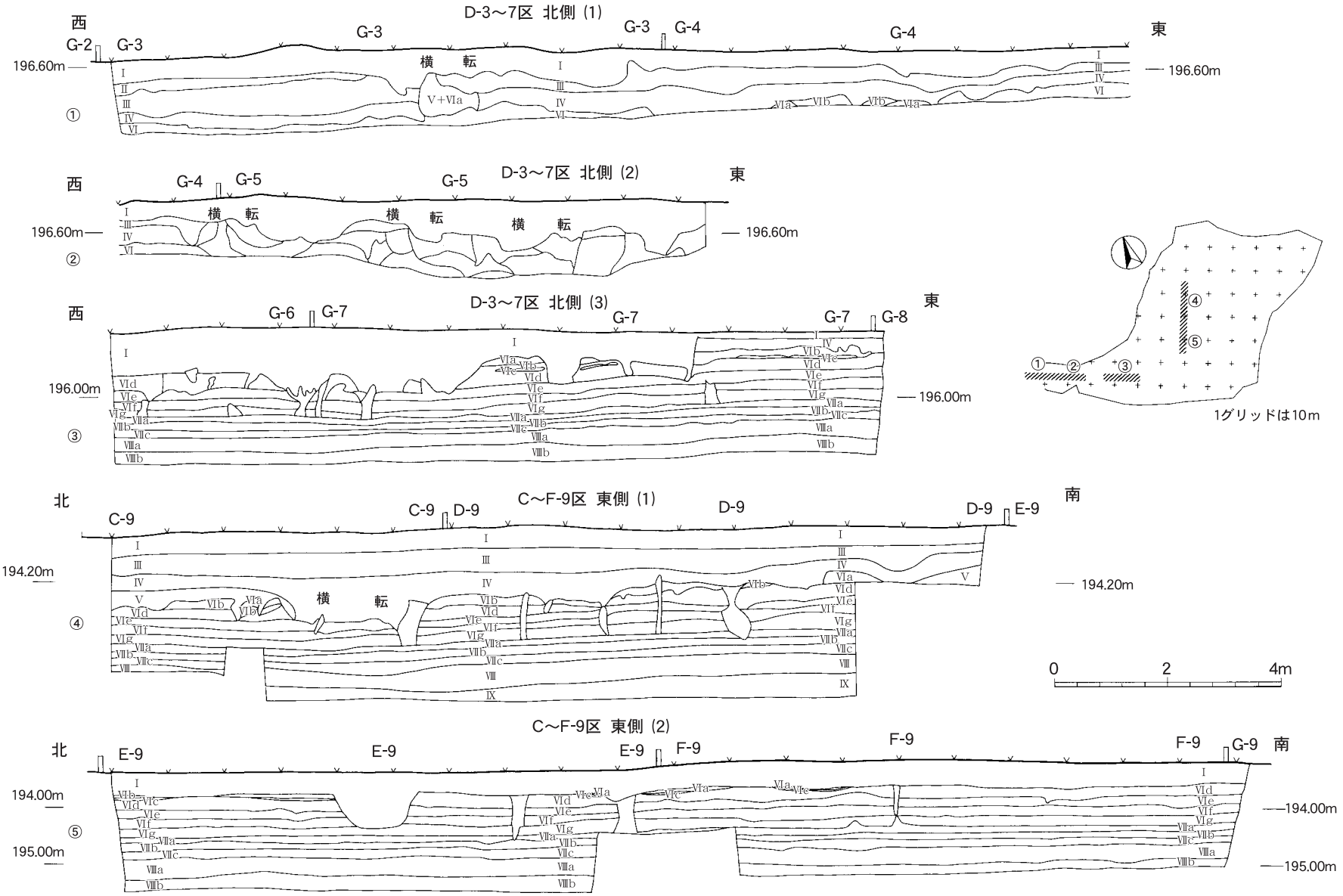
第９図　土　層　図　(2)


西
1T 北側
東
194.00m
193.00m
①
2T 北側
195.00m
196.00m
②
1T 北側
195.00m
③
横
転
8T 東側
北
南
188.00m
187.00m
④
表土は一部削除されている
1グリッドは10m
G-3
G4・5区 北側
G-4
G-5
2T あと
G-5
195.00m
196.00m
⑤
0
2
4m
E・F-5区 東側
E-5
F-5
195.70m
⑥

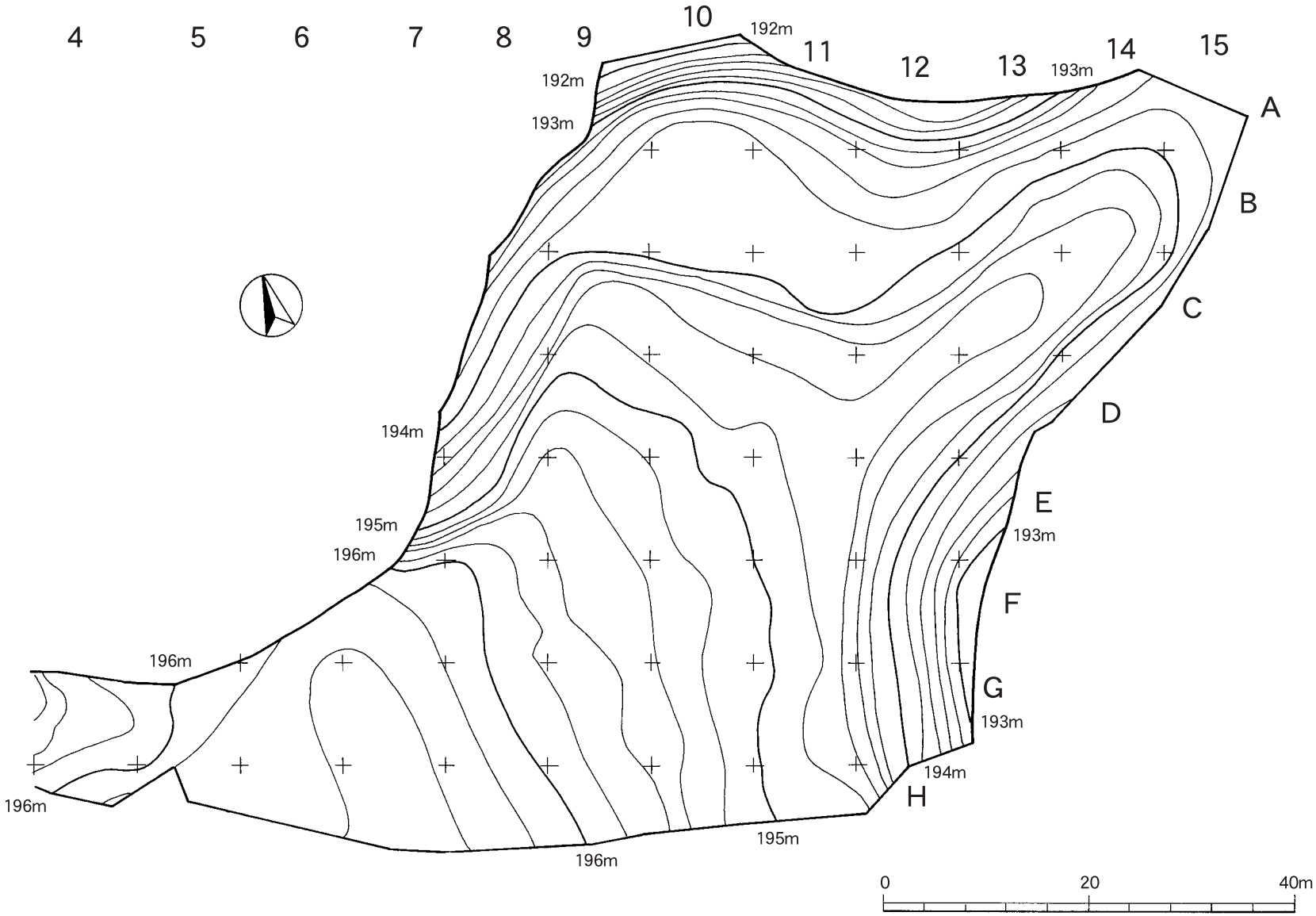
第10図　土　層　図　(3)


西
D-8 11区 北側 (1)
東
D-8
D-9
D-9
D-10
194.20m
①
194.20m
1グリッドは10m
西
D-8 11区 北側 (2)
東
D-10
D-10
D-11
D-11
横
転
②
194.20m
194.20m
西
G-9 12区 北側 (1)
東
G-9
G-9
G-10
G-10
G-11
横
転
③
195.60m
194.60m
195.60m
194.60m
G-9 12区 北側 (2)
0
2
4m
西
東
G-11
G-11
G-12
G-12
195.60m
④
194.60m
195.60m
194.60m

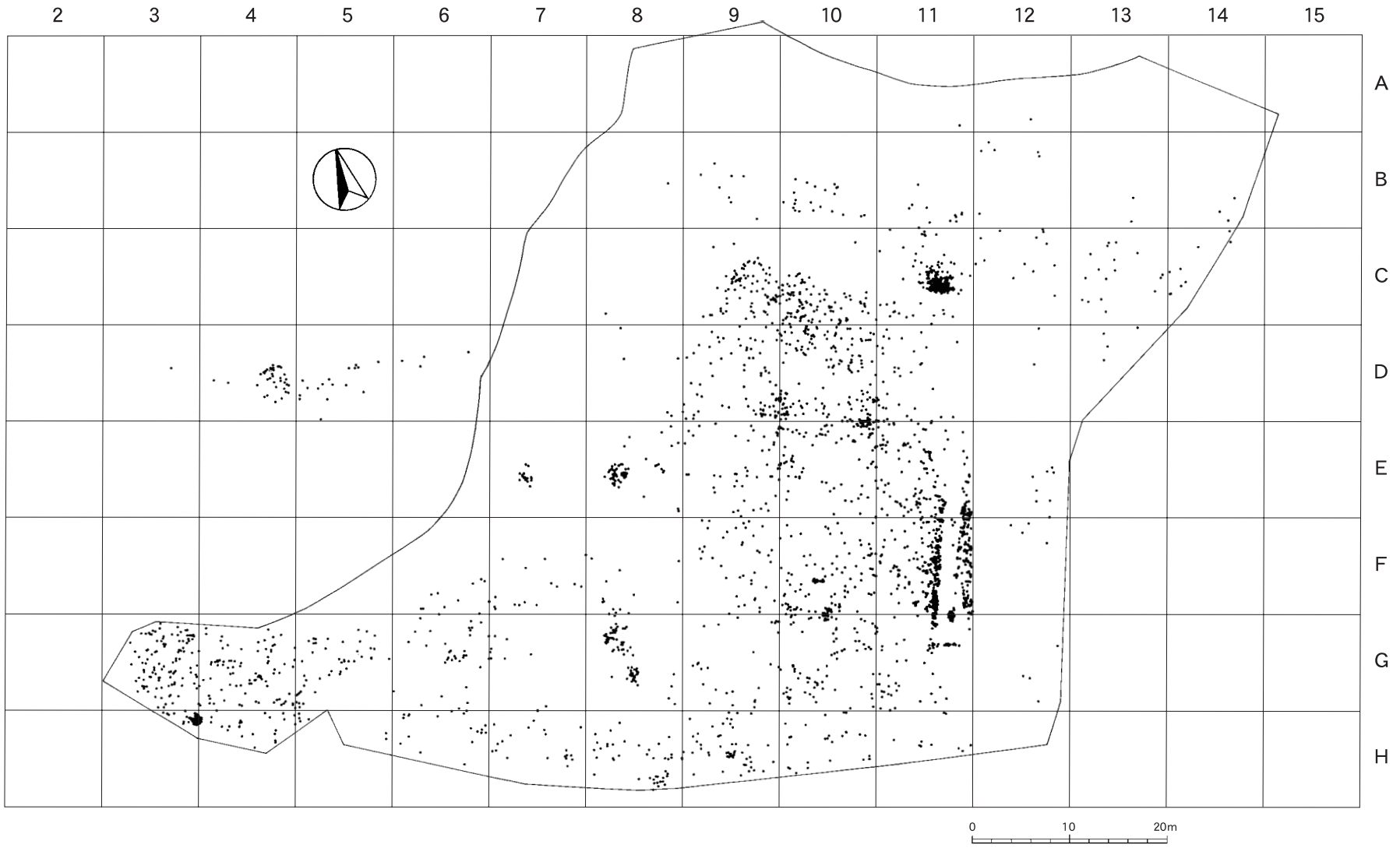
第11図　土　層　図　(4)


D-3～7区 北側 (1)
西
東
G-2
G-3
G-3
G-3
G-4
G-4
196.60m
196.60m
横 転
V+VIa
①
D-3～7区 北側 (2)
西
東
G-4
G-5
G-5
196.60m
196.60m
横 転
横 転
横 転
②
D-3～7区 北側 (3)
西
東
G-6
G-7
G-7
G-7
G-8
196.00m
196.00m
③
1グリッドは10m
C～F-9区 東側 (1)
北
南
C-9
C-9
D-9
D-9
D-9
E-9
194.20m
194.20m
横 転
④
0
2
4m
C～F-9区 東側 (2)
北
南
E-9
E-9
E-9
F-9
F-9
F-9
G-9
194.00m
194.00m
195.00m
195.00m
⑤

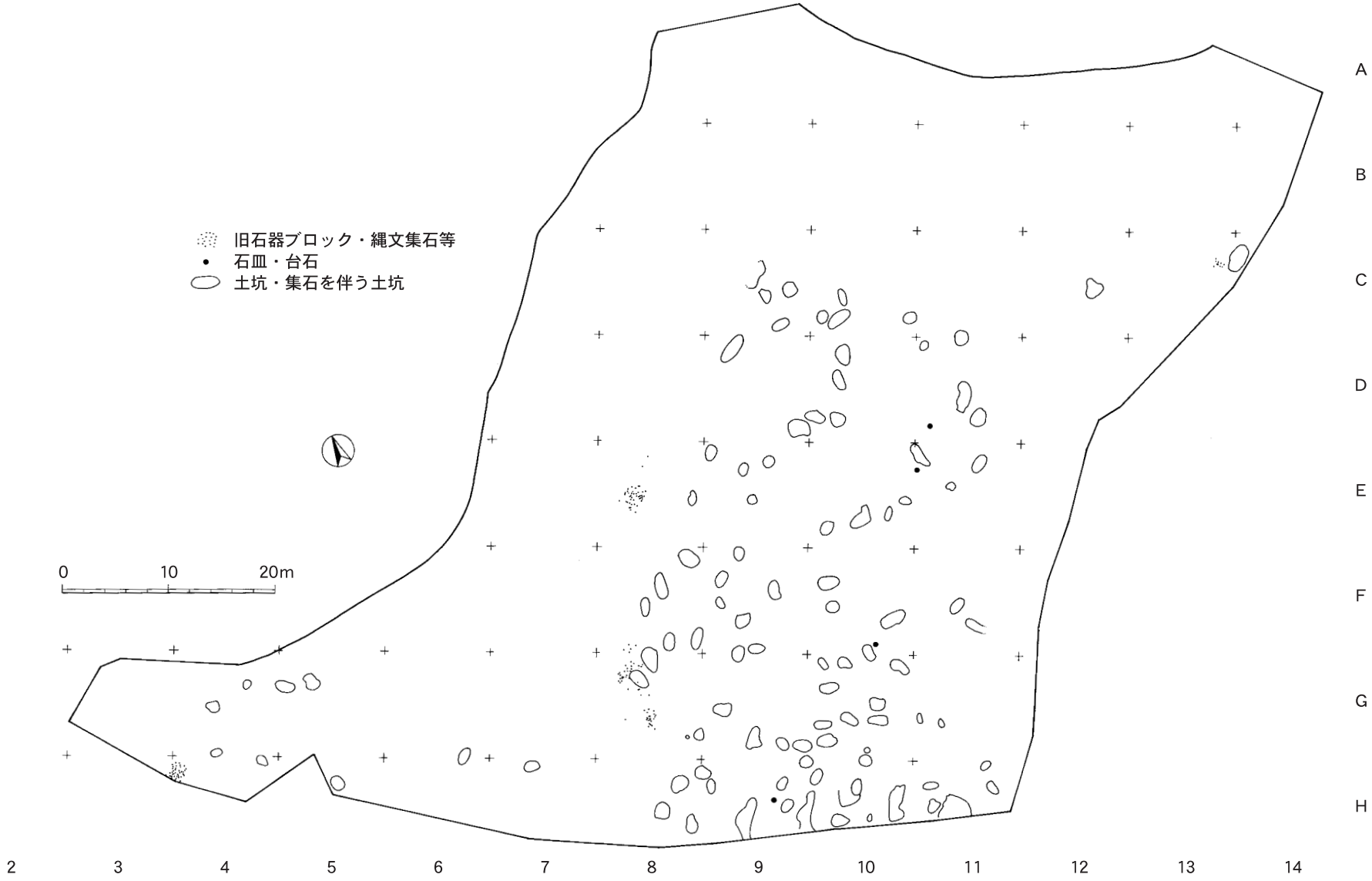
第12図　土　層　図　(5)



第13図　調査区域コンター図（Ⅳ層上面）



第14図　遺物出土状況全体図

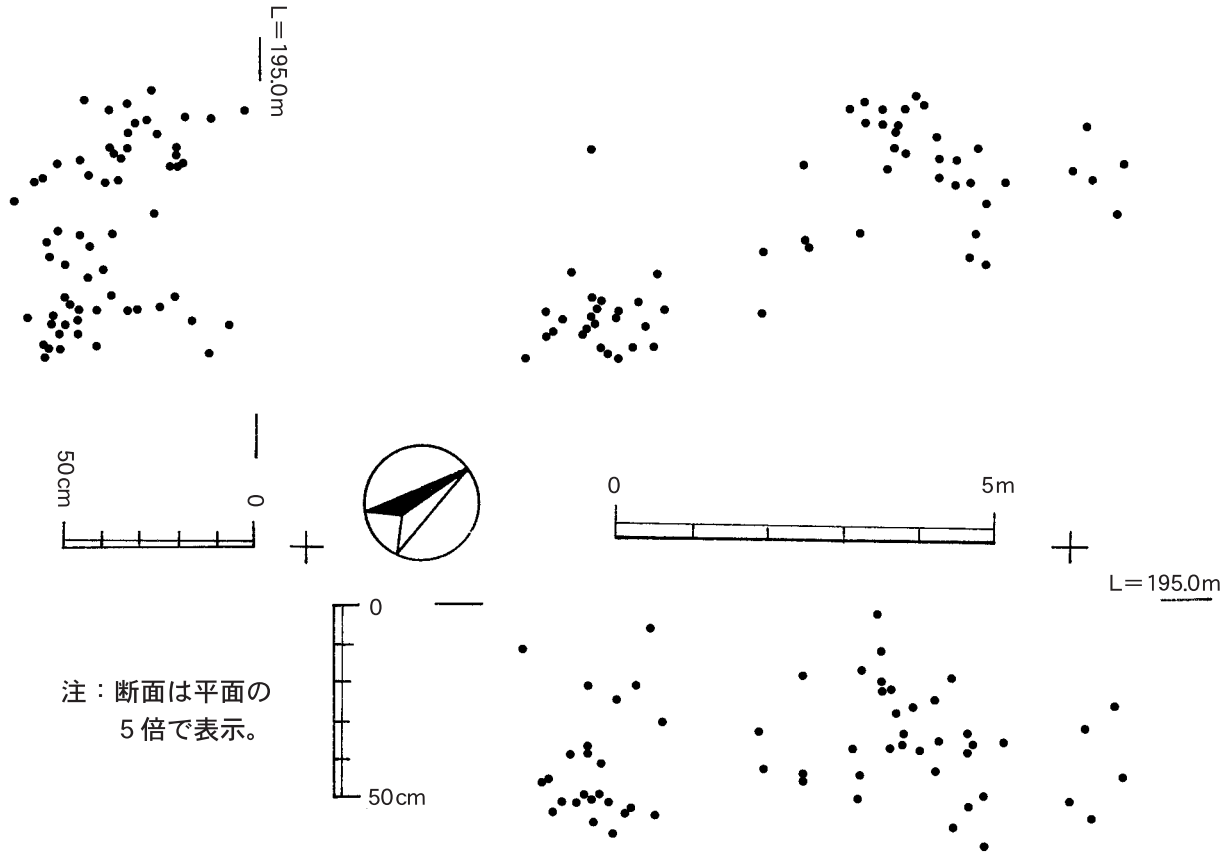

旧石器ブロック・縄文集石等
石皿・台石
土坑・集石を伴う土坑
0
10
20m
A
B
C
D
E
F
G
H
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14

第15図　遺構全体図（1）

第３節　Ⅵ層の調査　旧石器時代

１　遺　構

Ｆ・Ｇ－８区から，ナイフ期のブロックが１か所確認された。黒曜石の剥片・チップからなっており，製品は見られない。９ｍ×４ｍの範囲に散布が見られ，高低差は約70㎝程度である。

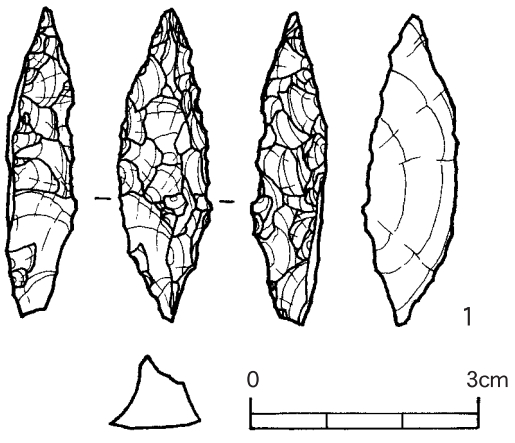


第16図　旧石器（ナイフ期）ブロック

２　遺　物

Ｄ－10区のⅦａ層から出土した，黒曜石製の三稜尖頭器である。全長は4.1㎝，幅は1.3㎝で，最も厚い部分は1.2㎝，重さは4.0ｇである。

裏面は剥ぎ取った面がそのまま残り，短軸方向からの剥ぎ取りを行なったことがわかる。表面および両側面には細かな調整が施されており，先端は割合に鋭い三角形を呈しているのに対して，基部にはそれほど丁寧な調整は見られず，不整四角形を呈する。断面も，三角形というより，上面が斜めになった台形に近いと言える。



第17図　三稜尖頭器

第４節　Ⅳ層の調査　縄文時代早期

１　遺　構

縄文時代の遺物包含層は，大きく２層からなっている。Ⅳ層およびⅢ層である。このうちⅣ層は，早期の包含層である。遺構は，このⅣ層を掘り下げた段階で検出されたため，やはり縄文時代早期の遺構と考えている。この時期の遺構としては，集石と石器製作跡が確認された。

集石は，平成５年度に３基，同８年度に１基の合計４基検出された。検出順に１号から４号とした。１号は，Ｃ－14区で検出された。141cm×101cmの範囲に，高低差53cmで確認され，16個からなる規模の小さいものである。236cm×147cm，深さ42cmの楕円形を呈する掘り込みを伴っている。

２号は，Ｃ－13区で検出された。168cm×147cmの範囲に，高低差14cmで確認され，33個からなる小規模の集石である。掘り込みは持たない。

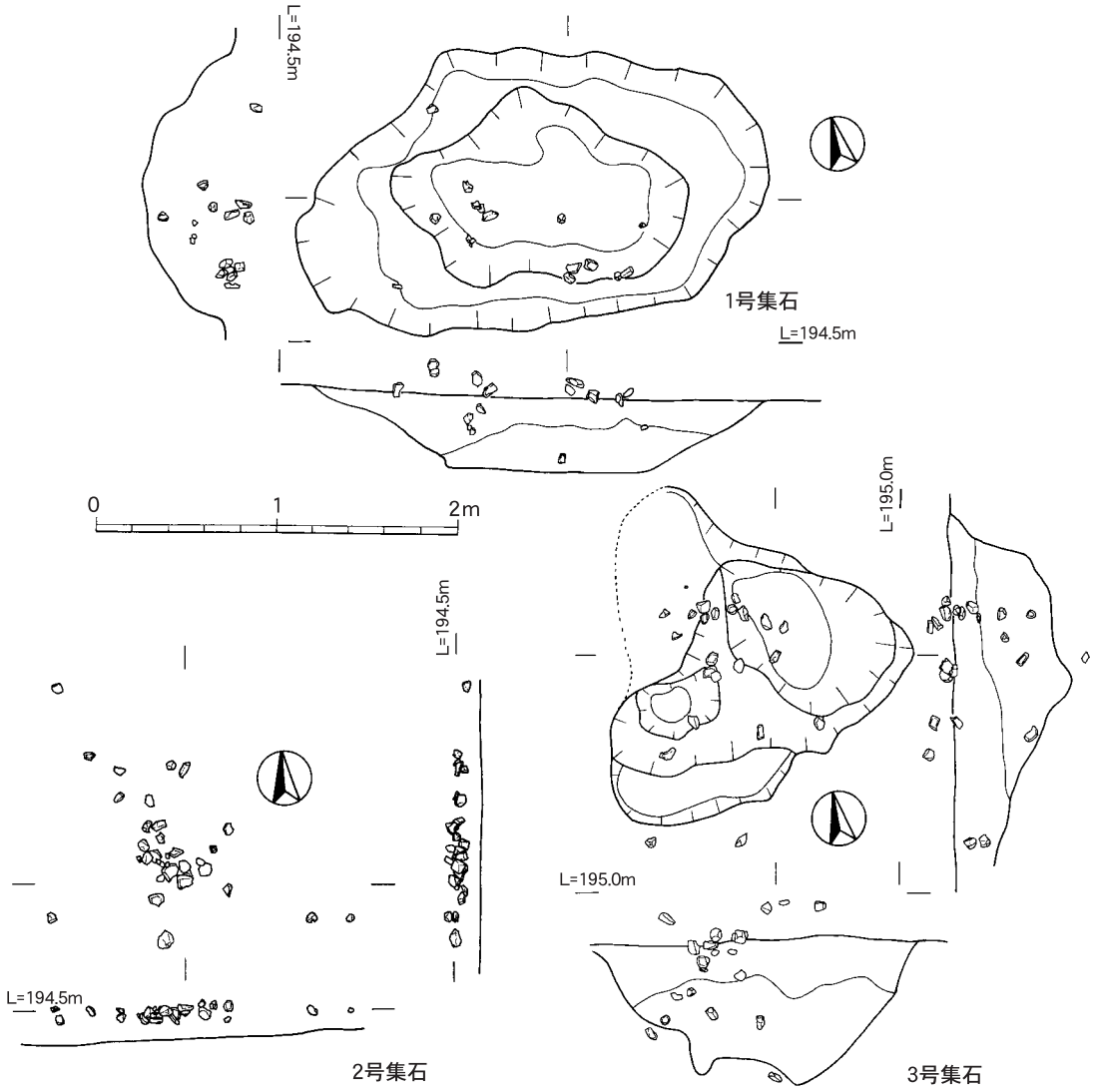
３号は，Ｃ－12区で検出された。145cm×99cmの範囲に，高低差64cmで確認され，23個からなり，規模は小さい。154cm×125cm，深さ60cmの楕円形を基本形とするような不整形の掘り込みを伴う。

４号は，Ｈ－3，4区で検出された。211cm×124cmの範囲に，高低差31cmで確認され，64個からなる，本遺跡としては最大規模の集石ではあるが，ほかの同時期の遺跡のものと比べて，極端に大規模とは考えられず，一般的には中規模のものと言えよう。64個すべてが赤化やヒビ，ワレ，タールの付着など火熱を受けており，礫どうし接合するものが複数あることから，回数的に何回かにわたって使用されたことがわかる。石材はすべて安山岩を用いており，礫の大きさや重さもいろいろなものを使っている。

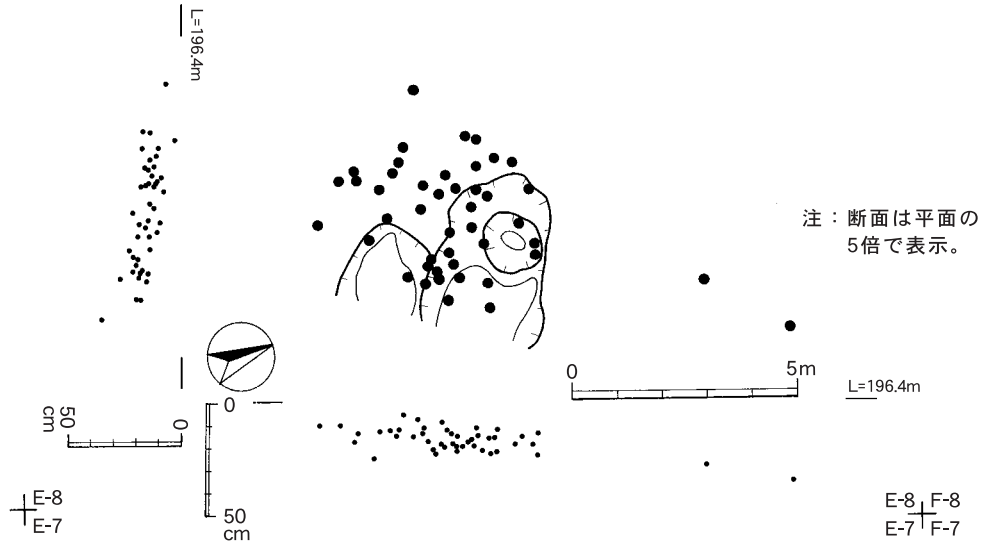
集石とは言えないが，少数の礫が散在する状況も見られた。何れもＦ－10区で検出されたが，層としてはⅣ層の中であることから，上記の集石よりは若干新しいかも知れないが，それでもⅣ層自体が縄文早期の遺物包含層であることから，これもその時期のものと考えて大過ないと考えられる。11個がきちんとまとまることなく，緩やかに散在しているもののほか，中程度の礫２個が集まったものが見られる。そのほか，大型の礫が単独で出土している状況も確認される。これは，石皿や台石が使用のために置かれた状態，または遺棄された状況と考えられる。

次に，石器製作跡である。Ｅ－８区で検出された。およそ，2.5m四方の範囲に集中しており，若干は北東部に散らばる。集中部分の下位には，円形または楕円形と考えられる掘り込みが幾分東側にずれて確認されている。2.6m×1.8m以上となる掘り込みが２，３基複合しているようにも見える。深さは，それほど深くはなく，20～30cm程度である。玻璃質安山岩のチップがほとんどであるが，この掘り込みからは若干浮いた状態と考えられることから，石器製作に伴うものとしての可能性は考えられるものの，幾分，位置的にずれていることからは，確実性という点では問題が残ると言わざるを得ないように思われる。

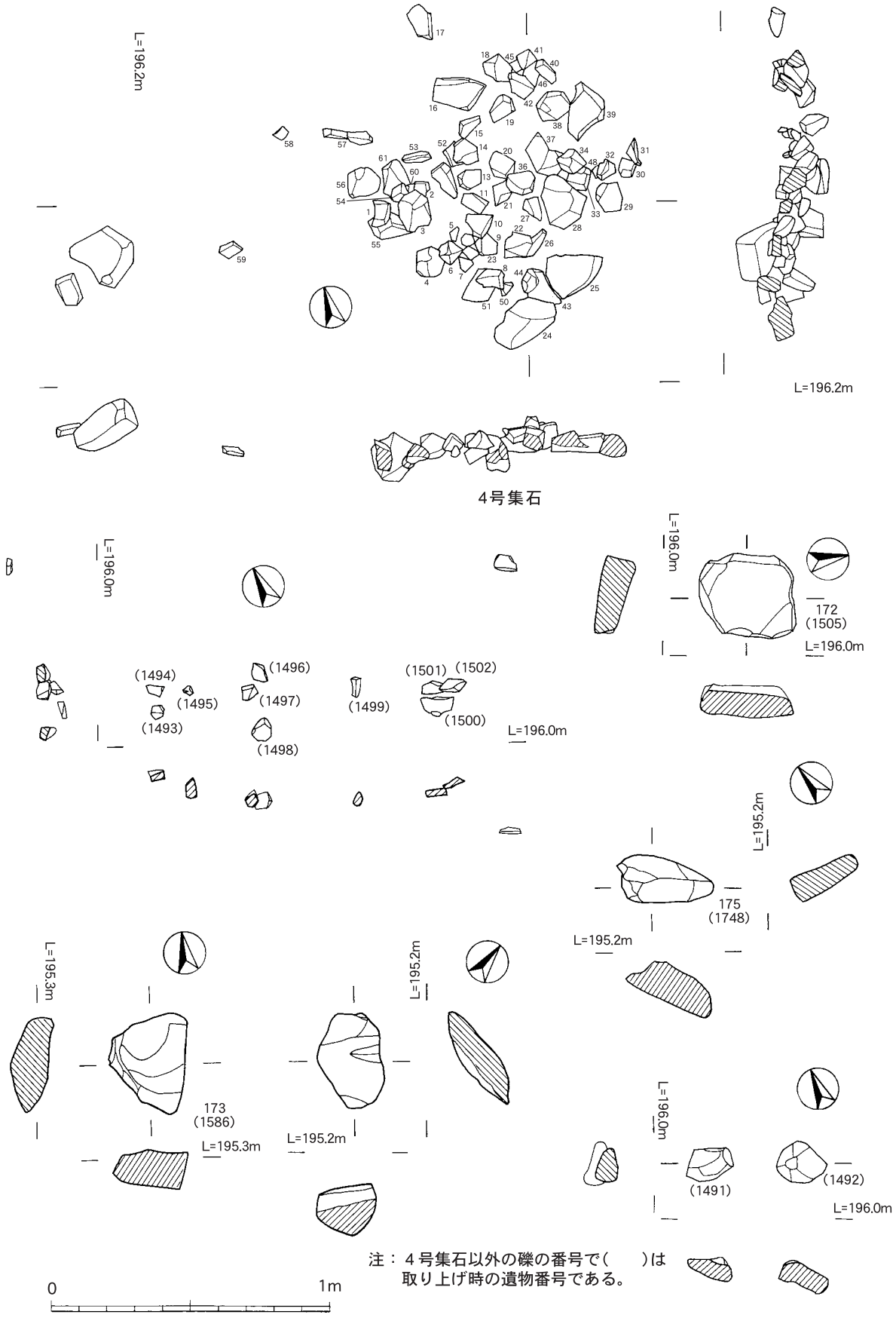
遺物の上下方向の分布状況を見てみると，西および南側が高く，東と北に向かって下がっている。つまり，南西から北東方向に下がっている状況が見て取れるのである。しかし，それは石器の製作の過程で，チップ類が南西から北東方向に流されたということではなく，そのような北東に向かって低くなっている地形の場所で石器の製作を行なった結果，チップ類がそのような散らばり方をしたと考えられるのである。それは，散布の状況が高低差をほぼ同じくしていることから判断される。



第18図　集　　石 (1)



第19図　石器製作跡



注：４号集石以外の礫の番号で(　　)は
取り上げ時の遺物番号である。

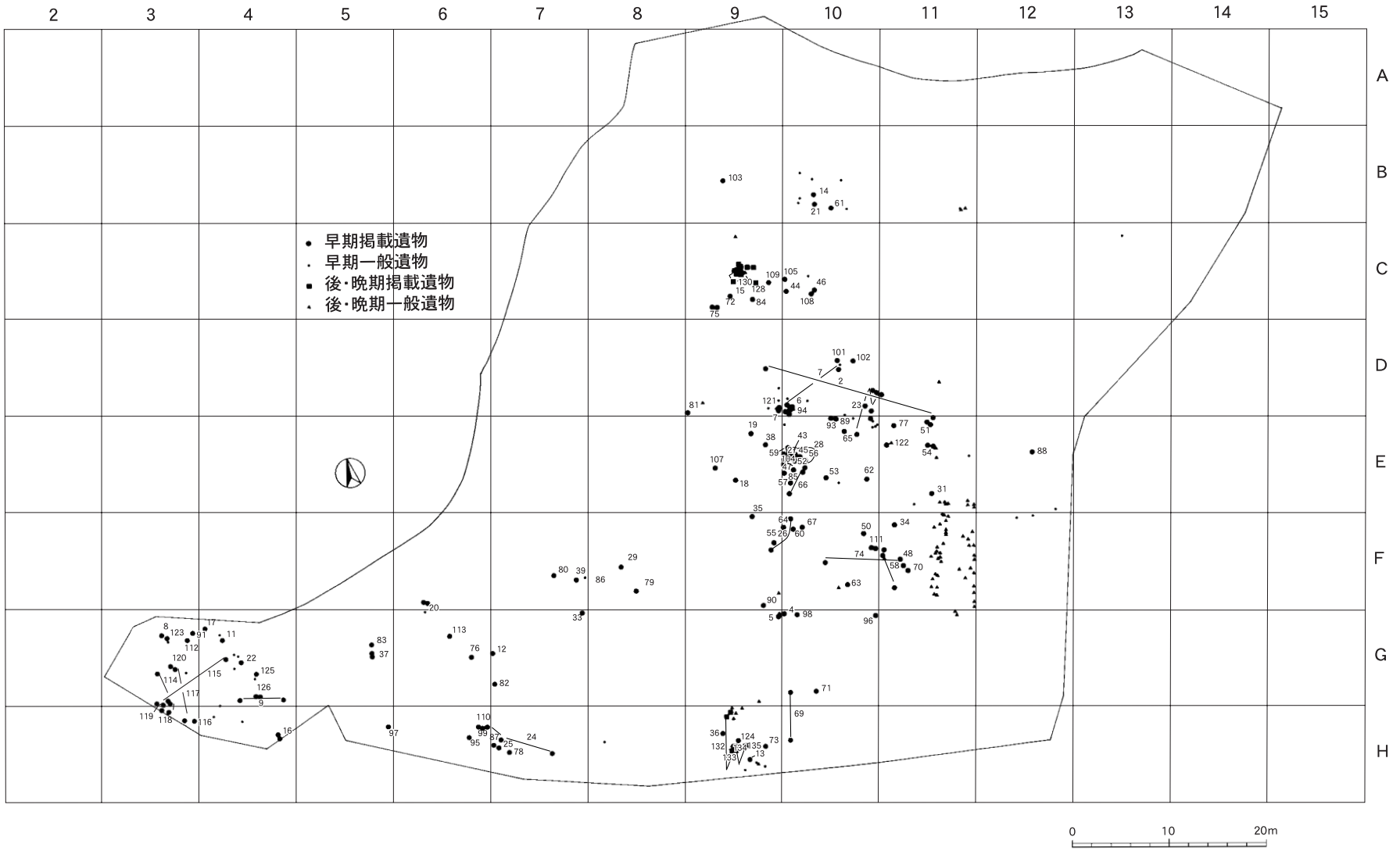
第20図　集　石 (2)ほか

第３表　集石計測表

挿図	番号	検出区	層位	形状	長径cm	短径cm	深さcm	掘り込み長径	掘り込み短径	掘り込み深さ	備　　考
第18図	1	C14	Ⅳ	土坑	141	101	53	236	147	42	個数16個
	2	C13	Ⅳ	散在	168	147	14	—	—	—	個数33個
	3	C12	Ⅳ	土坑	145	99	64	154	125	60	個数23個
第20図	4	H3・4	Ⅳ	散在	211	124	31	—	—	—	個数64個（うち被火熱64個）
	－	F10	Ⅳ	散在	51	15	12	—	—	—	個数２個
	－	F10	Ⅳ	散在	134	66	23	—	—	—	個数11個

第４表　４号集石構成礫観察表

挿図	番号	石　材	最大長mm	重量g	被 火 熱	付　　着	備　　考（接合関係など）
第20図	1	安山岩	122	900	赤化	タール	
	2	安山岩	110	550	赤化	タール	
	3	安山岩	148	1270	赤化	—	
	4	安山岩	118	1000	赤化，ヒビ	タール	
	5	安山岩	50	60	赤化，ワレ	—	
	6	安山岩	69	280	赤化		7と接合
	7	安山岩	68	320	赤化，ワレ	—	6と接合，59と接合
	8	安山岩	133	690	赤化，ヒビ	—	
	9	安山岩	139	640	赤化	タール，木炭	
	10	安山岩	106	620	赤化	—	
	11	安山岩	106	360	赤化，ヒビ	—	
	12	安山岩	153	1000	赤化	—	
	13	安山岩	112	850	赤化	タール	
	14	安山岩	107	550	赤化，ワレ	—	
	15	安山岩	107	450	赤化	タール	
	16	安山岩	193	1540	赤化	—	
	17	安山岩	123	420	赤化，ヒビ	タール	
	18	安山岩	98	740	ワレ	—	
	19	安山岩	107	560	赤化	—	
	20	安山岩	105	680	赤化	タール，木炭	
	21	安山岩	132	430	赤化	—	
	22	安山岩	117	530	赤化，ヒビ	—	
	23	安山岩	58	120	ワレ		
	24	安山岩	248	3180	赤化，ワレ	—	
	25	安山岩	213	1910	赤化，ヒビ	—	
	26	安山岩	135	800	赤化	タール	
	27	安山岩	50	30	ワレ	—	
	28	安山岩	170	1200	赤化，ヒビ	—	35と接合
	29	安山岩	129	1090	赤化	—	
	30	安山岩	80	430	赤化	タール	
	31	安山岩	91	210	赤化，ワレ	—	
	32	安山岩	105	210	赤化，ワレ	—	
	33	安山岩	91	570	ヒビ	タール	
	34	安山岩	95	480	赤化	—	
	35	安山岩	110	200	赤化，ヒビ	—	28と接合
	36	安山岩	55	85	赤化，ヒビ	—	
	37	安山岩	180	940	赤化	—	
	38	安山岩	129	850	赤化	タール	
	39	安山岩	227	2300	赤化	—	
	40	安山岩	108	320	赤化	—	
	41	安山岩	84	430	赤化，ワレ	—	
	42	安山岩	140	310	赤化	—	
	43	安山岩	122	510	赤化，ワレ	—	50と接合
	44	安山岩	55	90	赤化	タール	
	45	安山岩	84	170	赤化，ワレ	—	57と接合，47と接合
	46	安山岩	108	410	赤化	—	
	47	安山岩	55	110	赤化		
	48	安山岩	39	50	赤化，ワレ	—	
	49	安山岩	42	30	赤化，ワレ	—	
	50	安山岩	45	40	赤化	タール	43と接合
	51	安山岩	134	680	ワレ	タール	
	52	安山岩	101	600	赤化	—	
	53	安山岩	200	830	赤化，ヒビ	—	
	54	安山岩	70	280	赤化	—	
	55	安山岩	175	2600	赤化	タール	
	56	安山岩	140	1170	赤化	—	58と接合
	57	安山岩	101	380	赤化，ワレ	—	45と接合
	58	安山岩	61	100	赤化，ワレ	—	56と接合
	59	安山岩	45	50	赤化，ワレ	—	7と接合
	60	安山岩	125	290	赤化	—	
	61	安山岩	140	780	赤化，ワレ	—	
	62	安山岩	82	260	ワレ	タール	45と接合
	63	安山岩	96	340	赤化，ヒビ	—	
	64	安山岩	102	540	赤化	—	



第21図　縄文早期土器分布図

2　土　器（第24図～第29図　2～130）

Ⅳ層を主として出土している。早期該当の土器として，Ⅰ～Ⅴ類の５型式に分類した。

Ⅰ類（2～8，13～19）は，器面に貝殻腹縁による条痕が施されており，口縁端部に細かく浅い刻みを有し，胴部はそれほど張らない円筒形で，底部は安定した平底となる。内面は横あるいは斜め方向のナデ調整が行なわれ，胎土には長石・石英・砂粒などを含み，色調は褐色ないしは赤褐色を呈し，焼成は良好である。２～5，8，14～16はいずれも口縁部で，端部は若干外に開く。13は外面に２条程度の斜状の明確な条痕によって不整形の格子状となっている。17～19は底部であるが，胴部にかけての立ち上がりの形状がそれぞれに異なっている。

Ⅱ類（9～12）は，円筒形を基本形とするものの，器壁は凹凸が激しく，貝殻の腹縁部による押圧が口縁部の下位に施されている。内面は縦方向の丁寧なナデ調整が行なわれている。10～12も同類の破片と考えられる。石英・砂粒を胎土に含んで灰～淡褐色を呈し，焼成は良好である。９は復元口縁径が18.5㎝，残存高さが18.5㎝となり，胴部下部から底部にかけては外面が若干膨らむ。

Ⅲ類（20～120，125･126）は，縄文時代早期の出土遺物の中で量的にも最も多く，本遺跡の主体をなすものである。器形は，口縁部が“く”の字状に外反し，口縁端部外面に貼り付けを行ない，斜め方向の短い沈線の何本かを単位として交互に施している。口縁部下位にも沈線もしくは撚糸の押圧により施文されている。頸部はやや締まり，胴部は幾分張るか，それほど張らずに緩やかに底部へとすぼまる。胴部は沈線や列点，撚糸文や細い沈線でジグザグに区画するものなどによって施文され，中には縦および斜め方向に突帯を貼り付けた上に列点が刻まれる。施文は底部の直前まで行なわれ，底部は平底と考えられるが，端部から中央に向かって極めて浅い上げ底となっている状況が見られる。胎土には長石・砂粒を含み，色調も褐色を中心に赤～灰褐色までバラエティーに富み，焼成は良好である。

20は復元口縁径が18.7㎝，残存高さが8.1㎝あり，口唇部より下位には撚糸文が付されている。21も同様な施文である。23は口縁部の断面を三角形に肥厚させるが，内側にも突起をめぐらし，その部分にも列点を付す。口縁部下位は連点気味の沈線が縦および斜めに付される。24は口縁部下位から頸部，胴部にかけて細い沈線が縦方向を基調として数多く付され，さらにそれよりもやや太いギザギザの沈線が同様に縦方向に付されている。25も同様な施文であろう。26～28は口縁の肥厚部に楕円形を斜めに半裁した形の三重の沈線が施されたものである。

36は頸部から胴部にかけての部分であるが，頸部のやや斜めとなった連点を境として，上部（口縁部方向）と下部（胴部方向）にそれぞれ斜め方向の沈線が何本かを単位として方向を変えながら施されている。上部は斜め方向だけの施文であるが，下部は縦方向の施文も加わっており，文様の変化に動きが感じられる。そのほかの遺物は極めて小片が多く，文様を中心に接合を試みたものの，これ以上は接合せず，一個体として全体的な文様のありかたが不明のままとなってしまったことは残念である。

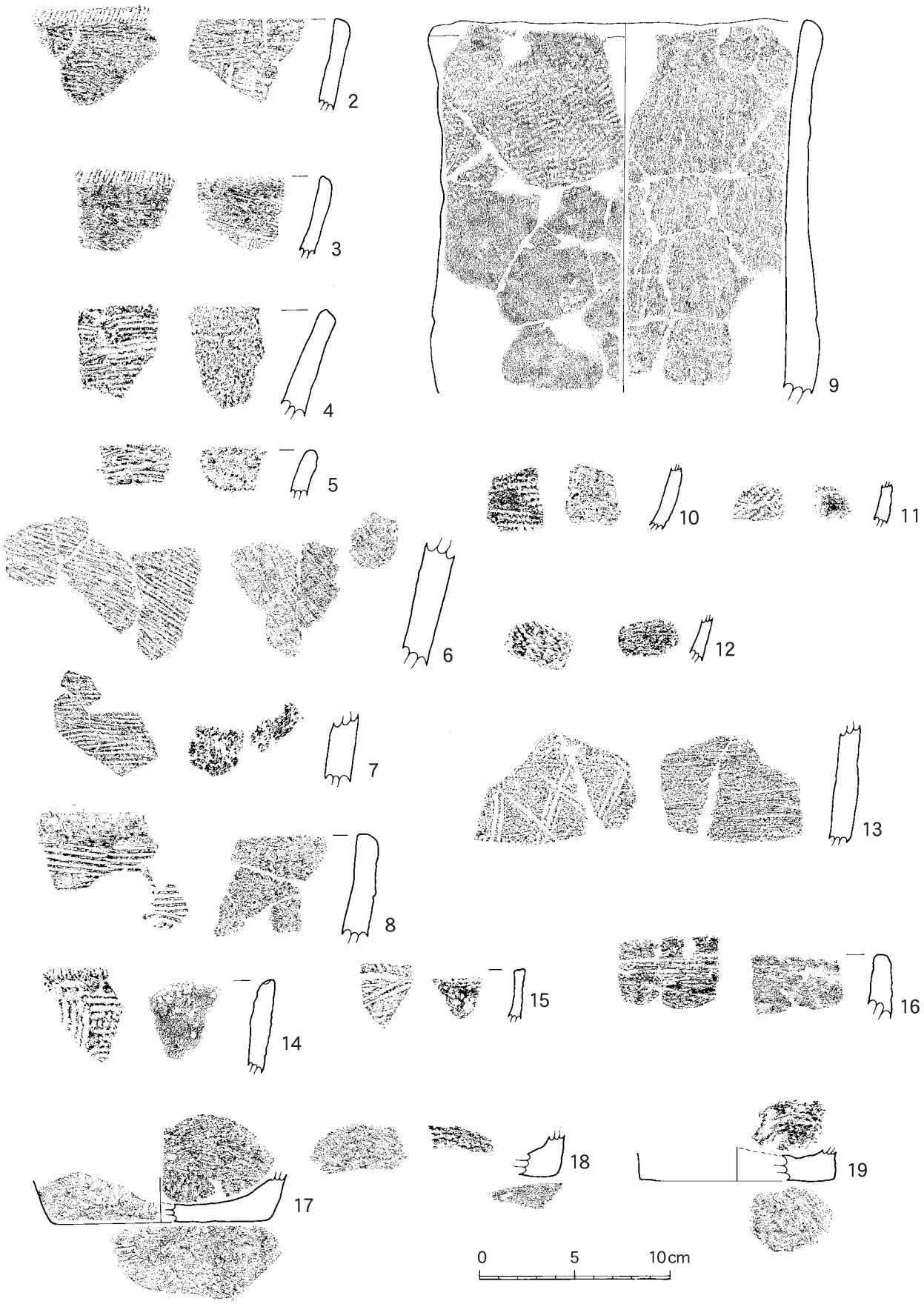
114～117は三角形気味に肥厚し，外反する口縁部に斜めの刻みをめぐらし，そこから頸部以下胴部にかけて斜め方向主体の沈線を描く。胴部には，横方向の沈線と短い連点も付されている。この一群は，23～60などのようなタイプと感じが異なっていたため後期かと思われたが，施文の単位や方法，胎土，焼成などが同一であると判断されたため，Ⅲ類の中に含めたものである。

Ⅳ類（118～124）は，口縁部は確認されていないものの，胴部外面に二本の平行な直線を斜めにジグザグになるように施し，その内側を極めて細く，短い沈線を数多く付すことで満たし，外側は丁寧なナデで調整が施されている。胎土に砂粒を多く含む点はⅢ類に似ているものの，色調がほぼ赤褐色のみ呈することは異なる。焼成も良好である。

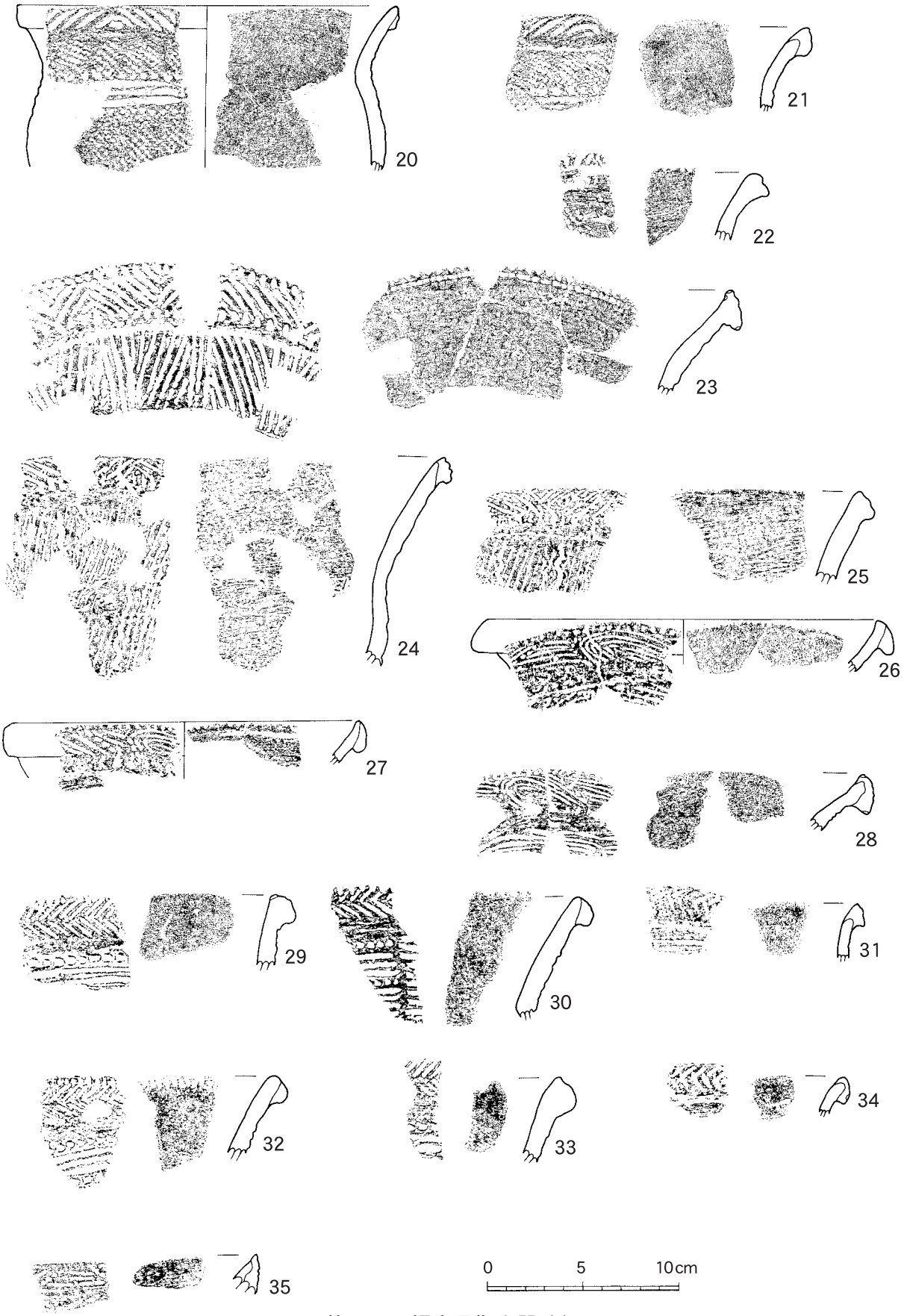
Ⅴ類（127～130）は，型式不明なものの底部を集めた。早期ばかりとは限らないが，後期の底部のように外への張り出しは見られないタイプの平底となるようである。127は外面が部分的に小さく剥落している。調整は内外面共にナデで仕上げている。128は底径が11.8㎝に復元される。安定した平底から鈍い稜を持ち，曲線的に立ち上がる。129も同様なものと思われるが，外側に向けて厚くなる。130は胴部から曲線的に底部に移行する。128と同様な平底となると考えられる。

ここで，これら縄文早期の土器の型式名について考えてみることにする。

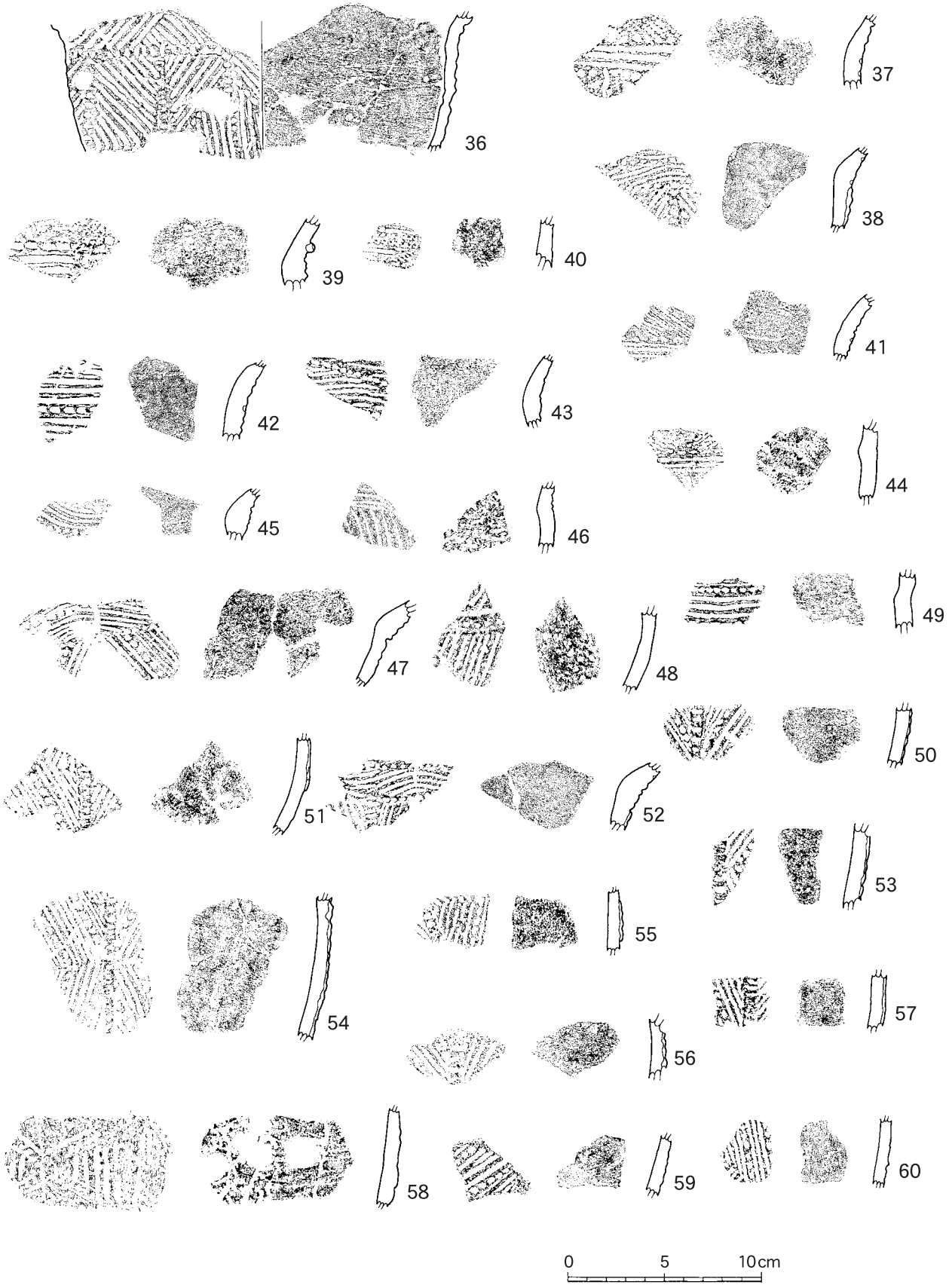
Ⅰ類は貝殻条痕文系の円筒土器であろう。**Ⅱ類**は政所式あるいは五十市式土器であると考えられるが，施文に貝殻の腹縁の押圧を施していることから，政所式土器に近いといえるかも知れない。**Ⅲ類**は平栫式土器であろう。早期の後半に位置付けられている。**Ⅳ類**は塞ノ神式土器と考えられる。細かな分類としては，貝殻条痕を用いていないことから，塞ノ神Ａｂ式と言えよう。**Ⅴ類**は底部だけであるため，一概に型式名を決められない。



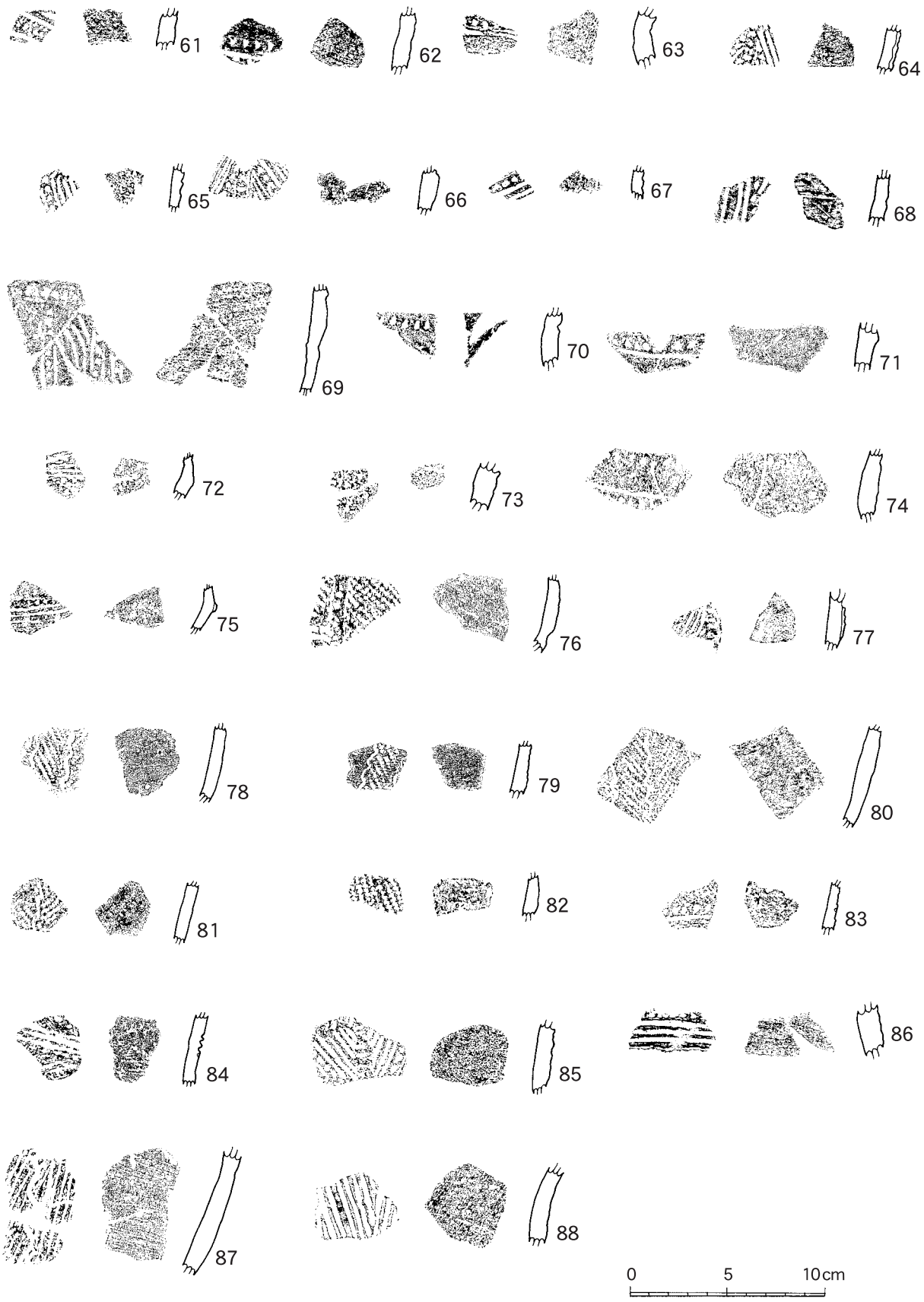
第22図　縄文早期土器（1）



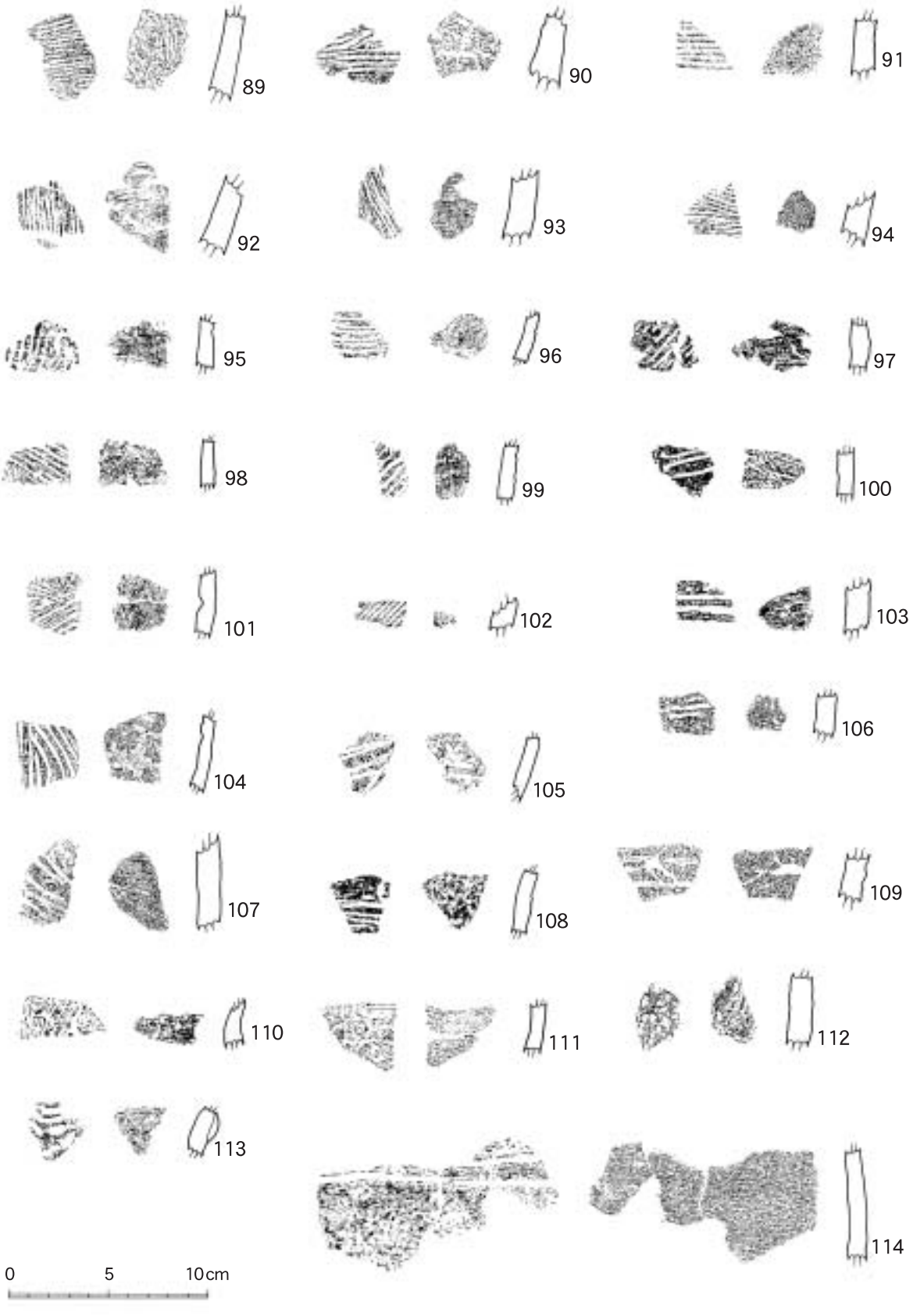
第23図　縄文早期土器（2）



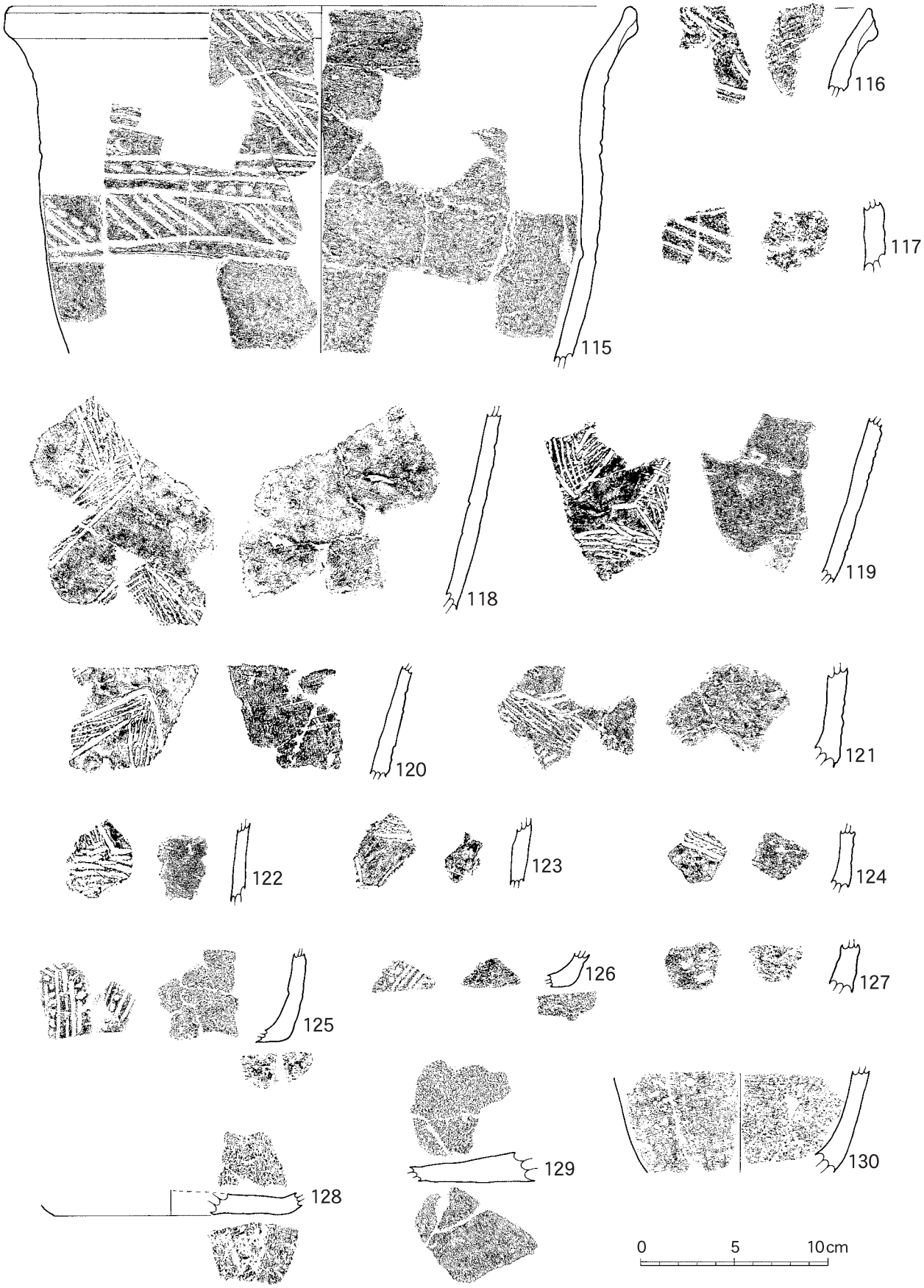
第24図　縄文早期土器（3）



第25図　縄文早期土器（4）



第26図　縄文早期土器 (5)



第27図　縄文早期土器（6）

第５節　Ⅲ層の調査　（１）　縄文時代後・晩期

１　遺　構

表土を除去し，一部Ⅱ層の残存している箇所を掘り下げてⅢ層のアカホヤ層を検出した後に包含層を掘り下げたところで，東地区のほぼ全面に掘り込みが見られたため調査を行なった。つまり，Ⅳ層の黄橙色土の面にⅢ層の黄色土が見られたため，掘り下げを行なった結果，土坑を確認したものである。調査は東地区の北側から行なっていったため，検出順に１号，2号，3号…として結果的に101号までを付けた。

埋土は基本的にⅢ層のアカホヤ層であるが，アカホヤの一次堆積の土が小ブロックとなって入っているものや，アカホヤが腐植化して若干濁った黄色を呈するもの，下位の層が崩落して埋土に混じったものなど，いろいろなパターンが見られた。当初は，遺構の中に遺物など時期を決定するものが見られずに困惑したが，最終的にⅣ層中にⅢ層を埋土としていることから，縄文時代の後期あるいは晩期に絞られた。最終的には一つの時期に確定することはできなかったものの，その形状が楕円形等の形状を呈するもので深いものが44基あり，遺構内面の途中の層が崩落している状況から，使用によって途中のしまりの弱い火山性の噴出物（火山軽石・パミス・火山砂など）が崩れたものと考え，その用途を落とし穴と推定した。しかし，同様に楕円形等の形状を呈するものの，その形状や深さ，構造などに違いが見られることから，同じ落とし穴でも時代・時期に差があるのではないかと考えるに至った。そうすると，縄文時代の後期から晩期にかけてという時期幅は，あながち的外れであるとも言えなくなると考えられることから，両時期にわたる遺構である可能性が高いと判断した。

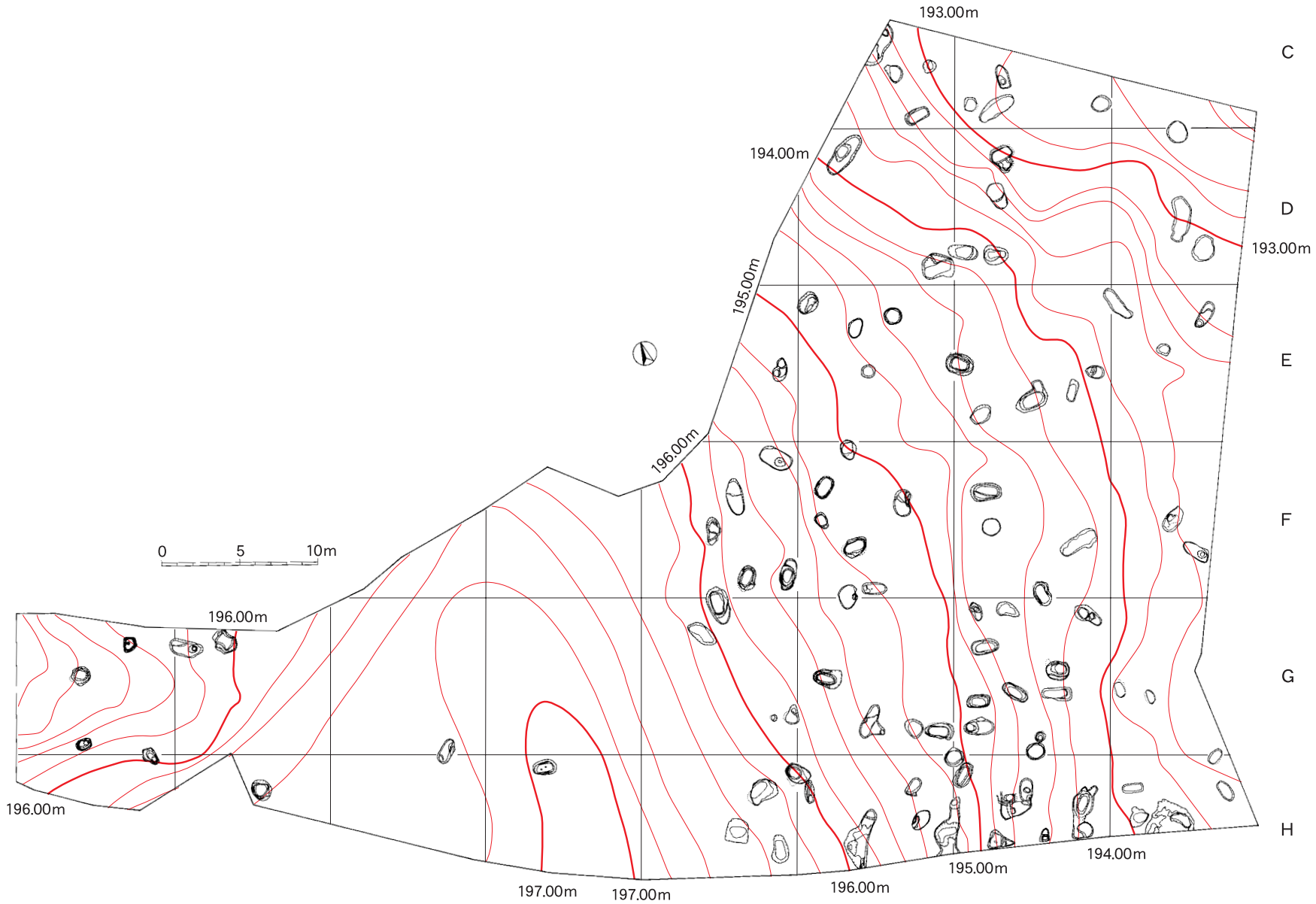
落とし穴と考えるのに無理のある土坑についても，その形状や深さ，埋土の状態などに差異が見られることから，当然，時間差のあることが考えられるが，これも落とし穴と同様に，縄文時代の後期から晩期にわたると考えれば，矛盾はないと判断される。

各土坑についてのそれぞれの詳細は，第５表から第６表の計測表の通りである。計測表の類については，次のように分類した。

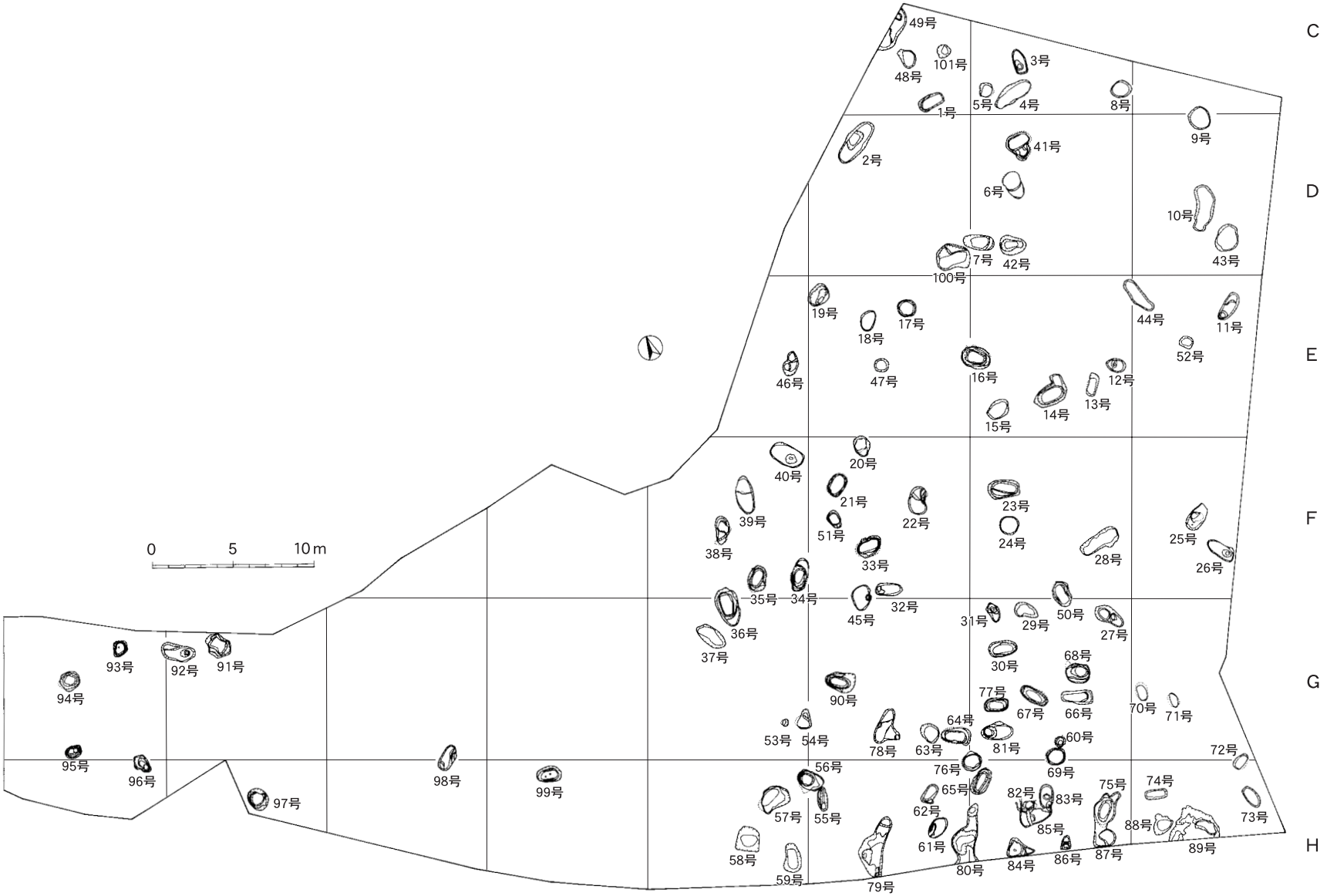
１類…落とし穴と推定されるもの
２類…落とし穴以外と推定されるもの

Ａ類…楕円形を呈するもの
Ｂ類…円　形を呈するもの
Ｃ類…不整形を呈するもの

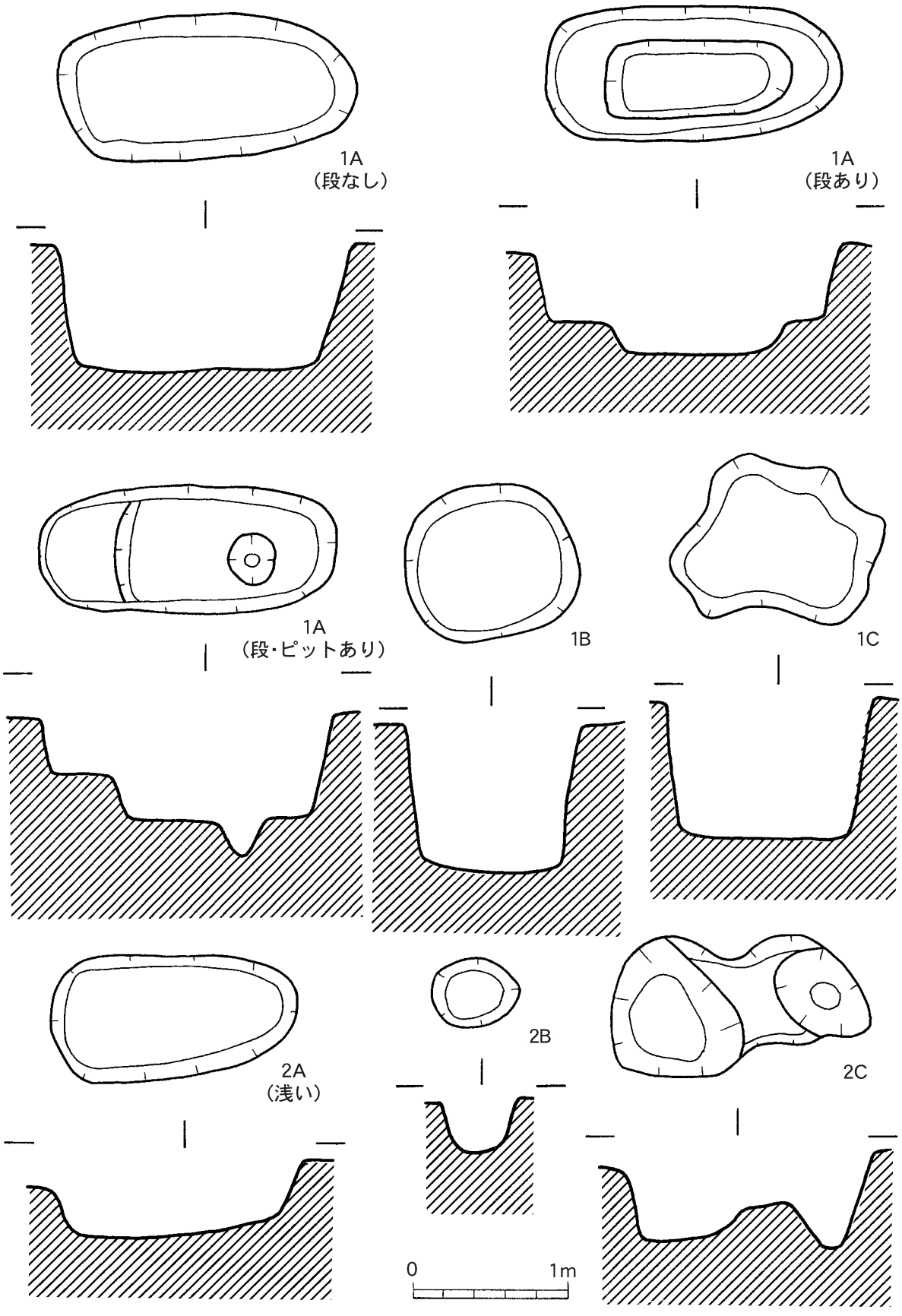
つまり，1Ａ類は落とし穴と推定されるものの中で，楕円形をしているもの，1Ｂ類は円形を，また，1Ｃ類は不整形を呈するものである。それに対して，２類は深さが浅かったり，途中に段状の施設があるなど落とし穴とは考えにくいものの中で，それぞれの形状をしているもの，の意である。



第28図　コンター付き土坑位置図


C
D
E
F
G
H
4
5
6
7
8
9
10
11
0
5
10m
49号
48号
101号
3号
5号
4号
8号
1号
9号
2号
41号
6号
10号
43号
7号
42号
100号
19号
18号
17号
44号
11号
52号
46号
47号
16号
12号
13号
14号
15号
20号
40号
21号
22号
23号
39号
51号
24号
25号
26号
38号
33号
28号
35号
34号
32号
45号
31号
29号
50号
27号
36号
37号
30号
68号
93号
92号
91号
94号
90号
77号
67号
66号
70号
71号
53号
54号
64号
78号
63号
81号
60号
72号
95号
96号
56号
76号
69号
98号
99号
97号
65号
82号
83号
75号
74号
57号
55号
62号
85号
88号
73号
58号
61号
86号
87号
89号
59号
79号
80号
84号

第29図　土坑位置図



第30図　土坑分類概念図

それぞれのタイプごとの土坑の数は次のようになる。

１Ａ類……４１基	２Ａ類……３８基
１Ｂ類……　１基	２Ｂ類……１２基
１Ｃ類……　２基	２Ｃ類……　７基
１類計……４４基	２類計……５７基

以下，それぞれのタイプごとに，概略的な説明を行なう。

第31図から第36図は落とし穴として分類した１類の土坑である。

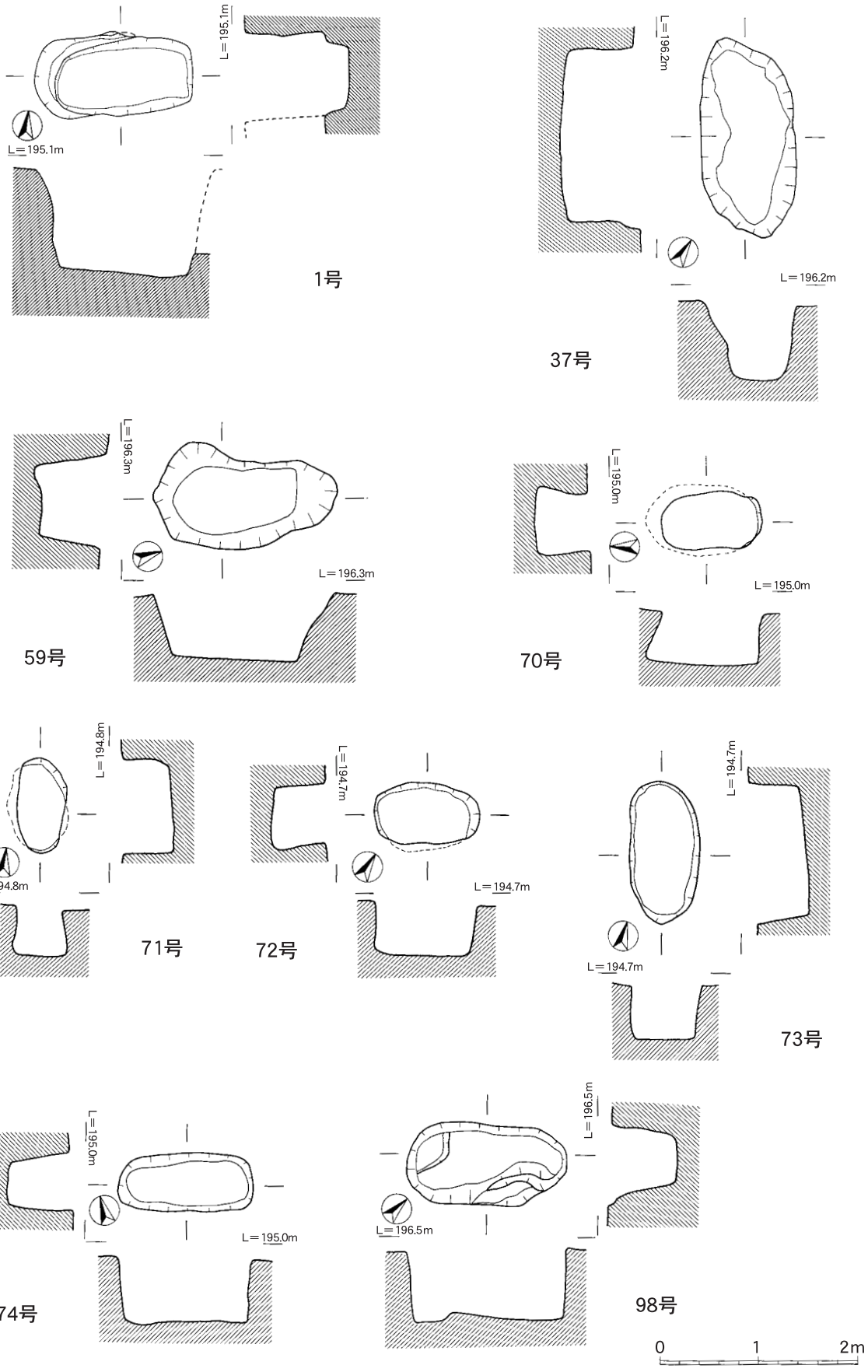
そのうち，第31図の１号から第36図の92号までは，平面形が楕円形を呈するもので１Ａ類に分類したものであり，落とし穴と推定したものの大部分を占めるタイプである。

１号は，調査の最初に検出されたもので，確認トレンチによって東南の一部が削られている。しかし，それによって断面の堆積状況がよくわかり，遺構として確認できたのである。長径が158㎝，短径が76㎝，深さも110㎝あり，本遺跡における極めて典型的な落とし穴のタイプと言える。中程にえぐれた部分があるが，この辺りが薩摩火山灰層の比較的ルーズな軽石の堆積が見られることから，落とし穴として使用されていた当時，気温差や降水などの外的要因によって崩れてしまったものと考えられる。類似したタイプには74号もあるが，1号と比べると規模が小さいと言える。これら２基は，隅が若干方形気味になっているともいえる。

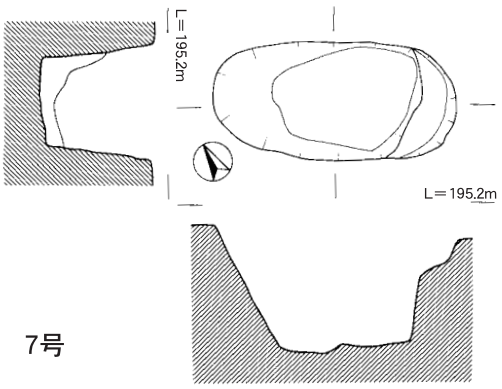
73号は長径145㎝，短径70㎝で，深さが62㎝あり，割合に整った楕円形と言えよう。70，71，72号の３基は，短径に対して長径が短く，小ぢんまりした楕円形を呈する。また，これら３基は，いずれも上面よりも底部の方が大きく，袋状となっている。98号は東側が途中に段を有し，西側は一段低くなっている。全体的に，北東部が狭く，南西部が広いという特徴的な形態となっている。

第32図の７号から第35図の99号までは，平面形は楕円形を呈するものの，途中に段があるものである。典型的なものとしては14号が挙げられる。長径212㎝，短径121㎝，深さは76㎝であり，さらに長径が163㎝，深さが26㎝の２段の掘り方が見られ，最終的な深さは92㎝にもなる。北東の隅に張り出し状の段を持つが，これは深さがそれほど深くないことから落とし穴と考えたときの獲物の引き上げの作業面との推定が可能かも知れない。また，北側は若干袋状となっている。14号と類似するタイプとしては30号が挙げられる。上面から３分の２程度下りたところに安定した段を持ち，その下部は長径・短径共に小さくなっており，段からの深さは29㎝である。

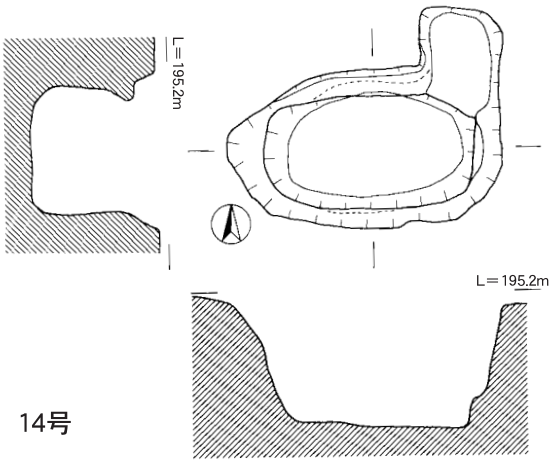
21号は四方向すべてが上面よりも奥に掘り込まれており，全体的に袋状となっている。部分的に浅い段があり，その後さらに深く掘り込まれている。最終的な深さは91㎝である。16号は上面から約35㎝程度で一周する段を作り，その後さらに掘り込んで最終的に105㎝の深さとなっている。全体的な形状としては上面から内傾してすぼまり，底面から約３分の１程度上部でえぐれているが，これは１号と同様，内部壁面に露出していた薩摩火山灰層のルーズな軽石が温度差または降水などの作用によって部分的に崩壊したものと考えている。それは，埋土中に軽石が混じることから，本遺構が実際に使用されている段階で崩壊したと想定できる。そうすると，この崩壊を引き起こしたも


L=195.1m
L=195.1m
1号
L=196.2m
L=196.2m
37号
L=196.3m
L=196.3m
59号
L=195.0m
L=195.0m
70号
L=194.8m
L=194.8m
71号
L=194.7m
L=194.7m
72号
L=194.7m
L=194.7m
73号
L=195.0m
L=195.0m
74号
L=196.5m
L=196.5m
98号
0
1
2m

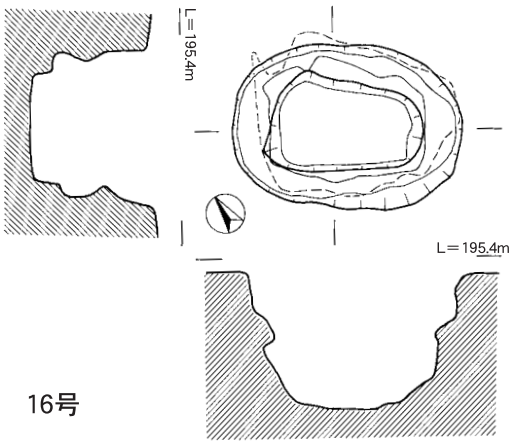
第31図　土　　坑　(1)



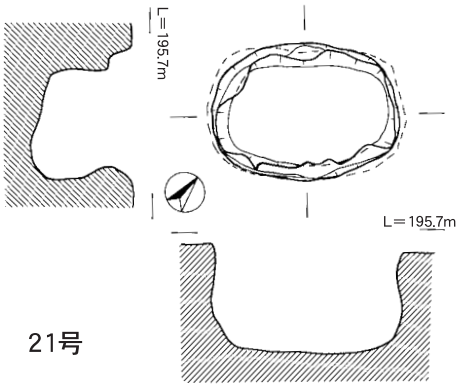
7号



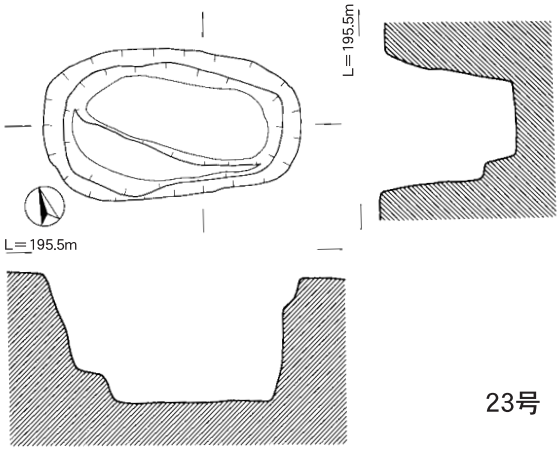
14号



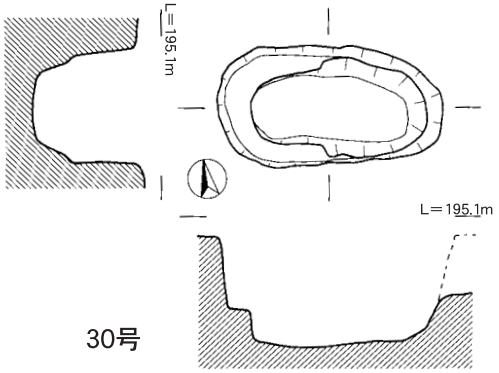
16号



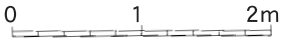
21号



23号



30号



第32図　土　　坑 (2)

のは，落とし穴と推定されることから，この穴に落ち込んだ動物が逃れようとあがいた結果である可能性も考えられるかもしれない。

７号は，東側が浅い段を設けたのち，ほぼ垂直に落ちるのに対して，西側は強い勾配で斜めに落ちるという特異な形状を呈している。埋土は下部に上部とは異なった粒子の粗い，明るい土が見られた。23号は，南西部の下部に割合に長い段を持ち，最終的な深さは102㎝である。

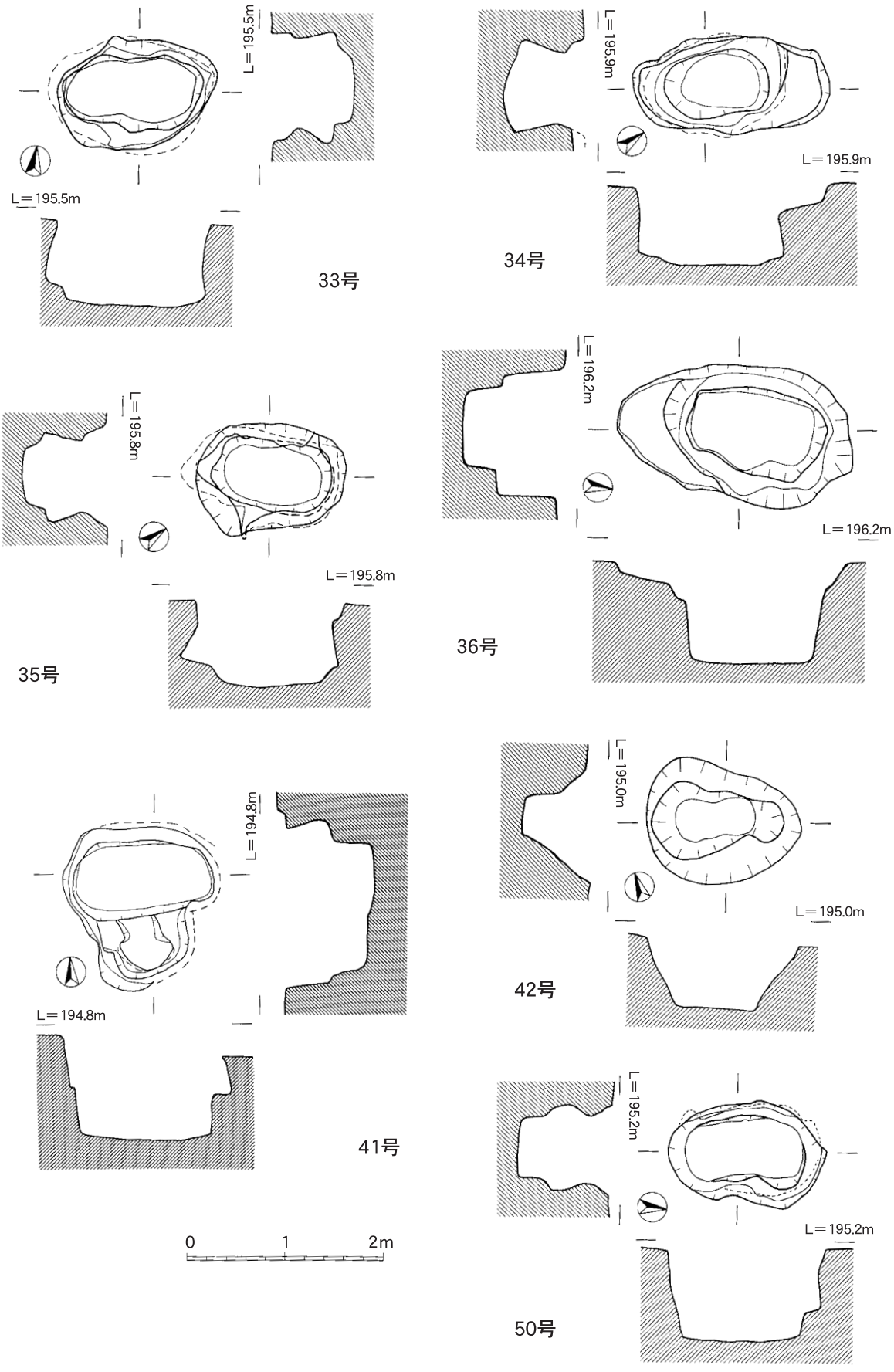
33号から35号は類似した形態をしている。いずれも底面の上部３分の１程度のところがえぐれている状況が観察される。これは，薩摩火山灰層中のルーズな軽石層の崩壊によるものである。また，途中に段を持ち，上面よりも底面が狭くなっている。同様な形態として，41号が挙げられる。南側に複雑な段を有するが，底面の段差がほとんどないことから複数の土坑の切り合いとは考えられず，落とし穴としての機能を考慮すれば，落ち込んだ動物の引き上げを目的とした掘り下げが考えられるかも知れない。これらのタイプに類似しているものとして，50号も挙げられる。最終的な深さは87㎝であり，数値的にも類似性が指摘されよう。

36号は南側に極めて浅い段を設け，さらにそこからそれほど下がらないところに段を巡らし，その後，最終的に104㎝の深さに達している。42号は，途中の中程に不明瞭な安定しない段（というより，むしろ稜と呼ぶのがふさわしいかも知れないが）を有しているため，短軸方向の断面で見ると，薬研状となっている。

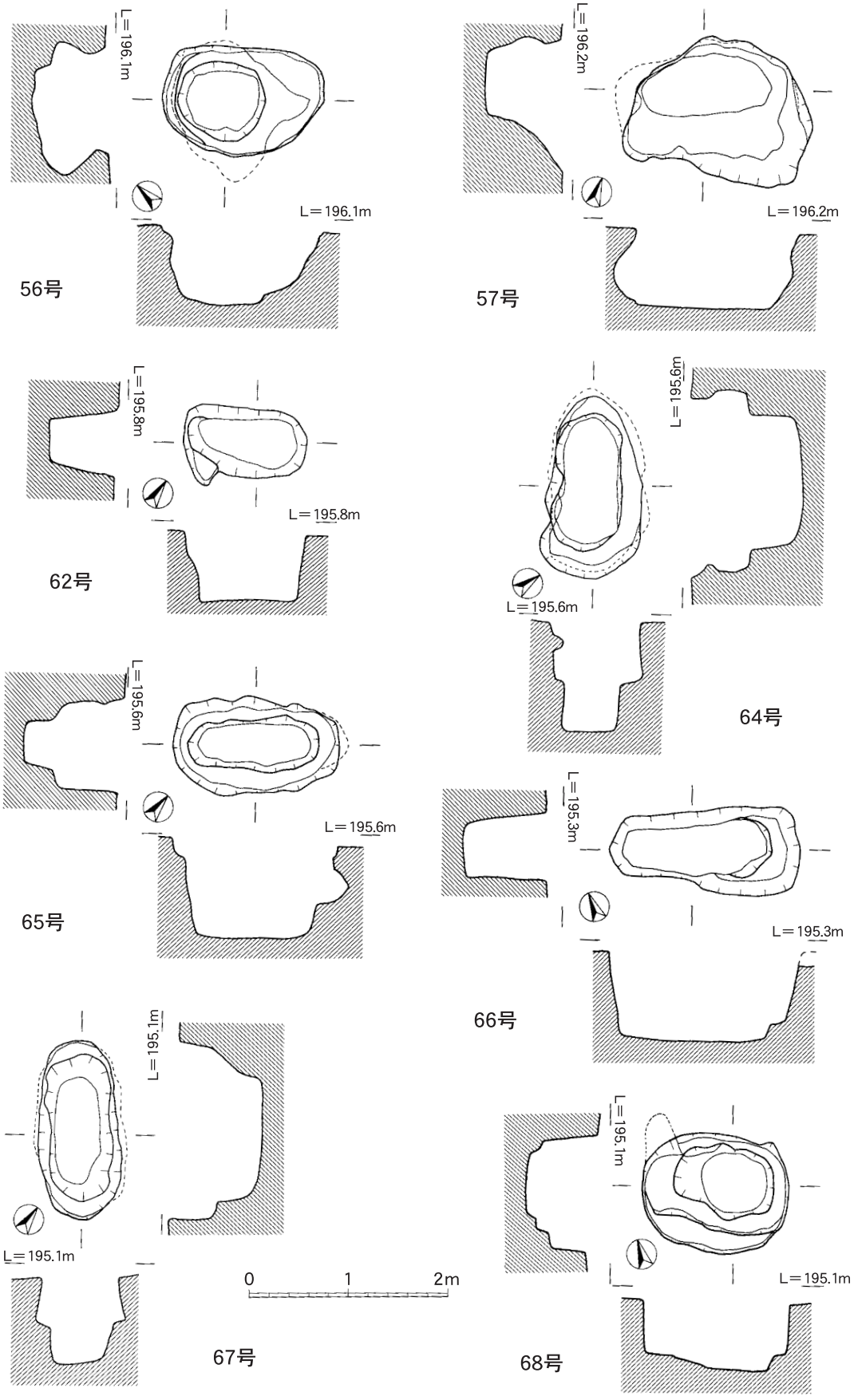
56号の上面の平面形は楕円形であるものの，途中が崩壊し，底面も最終的には円形となっている。断面の形状も東側でシャープな線がなくなっている。57号も途中の壁面が崩壊しており，南東部で湾曲したカーブを示す。平面プランも南東部にかけて広くなっている。64号も断面の途中が崩壊を起こしており，段を有しているような形状となっている。深さは111㎝あり，このタイプとしても深い部類に入る。67号も途中に崩壊の部分が見られる。65号も同様な形状を呈するが，明確な２段掘りとなっている点で大きく異なっている。下段の幅は上段のほぼ半分となっている。

62号は南西部に極めて小さな段を持っており，そのために全体的に西側が狭くなっている。平面形に比べて断面はほぼストレートな形状となっている。66号は東側の下部に狭い段がついており，上面は西側に比べて若干広くなっている。最終的な深さは92㎝あるとともに，下面の幅は長さに比して相当に狭く感じられる。68号は南側が２段，北側が１段となっている。上面の平面形は短径と長径が比較的差の小さい楕円形であるが，1段目の底面は北東部のえぐれた楕円形，最終的な底面の形はほぼ円形といってよい。西側よりも東側が深くなっており，長軸方向の断面は東に緩やかに傾斜する形と言える。

77号はそれほど明確ではないものの途中に幾分不安定な段を有するものである。平面図では平たく安定した段に見えるが，断面図では傾斜した幅の狭い稜のような形状を呈している。90号は東側が広く開いた楕円形をしており，北と南をそれぞれ少し斜めに掘り下げ，その後ほぼ整った形の楕円形に掘り下げている。途中の壁には部分的に崩壊が見られる。99号も途中が崩壊している。底面に直径10㎝程度の小ピットを持つが，深さが極めて浅いことから逆茂木痕とは考えにくい。位置的に見ると，落とし穴の中にはこのような場所に逆茂木を設ける場合もあるが，本遺構は浅いことから逆茂木を設けた可能性は低いと言わざるをえない。


L＝195.5m
L＝195.5m
33号
L＝195.9m
L＝195.9m
34号
L＝195.8m
L＝195.8m
35号
L＝196.2m
L＝196.2m
36号
L＝194.8m
L＝194.8m
41号
L＝195.0m
L＝195.0m
42号
L＝195.2m
L＝195.2m
50号
0
1
2m

第33図　土　　坑　(3)


L＝196.1m
L＝196.1m
56号
L＝196.2m
L＝196.2m
57号
L＝195.8m
L＝195.8m
62号
L＝195.6m
L＝195.6m
64号
L＝195.6m
L＝195.6m
65号
L＝195.3m
L＝195.3m
66号
L＝195.1m
L＝195.1m
67号
L＝195.1m
L＝195.1m
68号
0
1
2m

第34図　土　　坑　(4)

第35図の11号から第36図の96号までの８基は，平面形がこれまで述べてきたものと同様に楕円形を呈するものの，底面に規模の大小はあるが明確な段あるいはピットを有するものである。段もこれまでの分類に比べて階段状であったり，幅の広い段を持つなど崩壊などによって段を持つように見えたり，不明確で稜としてしか認識しにくかったりするものとは異なっている。

11号は長軸方向に階段状となっている。東側が浅く，西側の端部はピット状を呈して82㎝の最深部となる。中央部の短軸方向の断面は，ほぼ垂直に底面に下りている。31号は南側に北方向への傾斜を有する段を持ち，さらにピット状に深くなっている。最深部で70㎝である。27号も南側に幾分北方向に傾斜する段を持ち，さらに北側には底面の深さはほとんど同じであるものの，径の異なる大小２つのピットが掘られている。上面の平面形は，北側が広くなっている。

75号は北東および南西部に溝状の遺構との重なりが見られるものの，基本的には短軸と長軸の差がそれほど大きくない楕円形をしている。断面の途中には一部に崩壊の痕跡が見られるものの，全体としては下面近くに幅の広い安定した段が巡っている。その段から軸方向を異にする，上面のほぼ半分の幅を持つ楕円形の浅い（深さ18㎝）掘り方を持っている。軸方向のズレはこの遺構が２基の土坑の重複を表していると考えられなくもないが，段がほぼ同じ幅で巡っていることや２段となった同様なタイプの遺構が他にもあることからひとつの遺構として捉えるのがふさわしいと判断している。

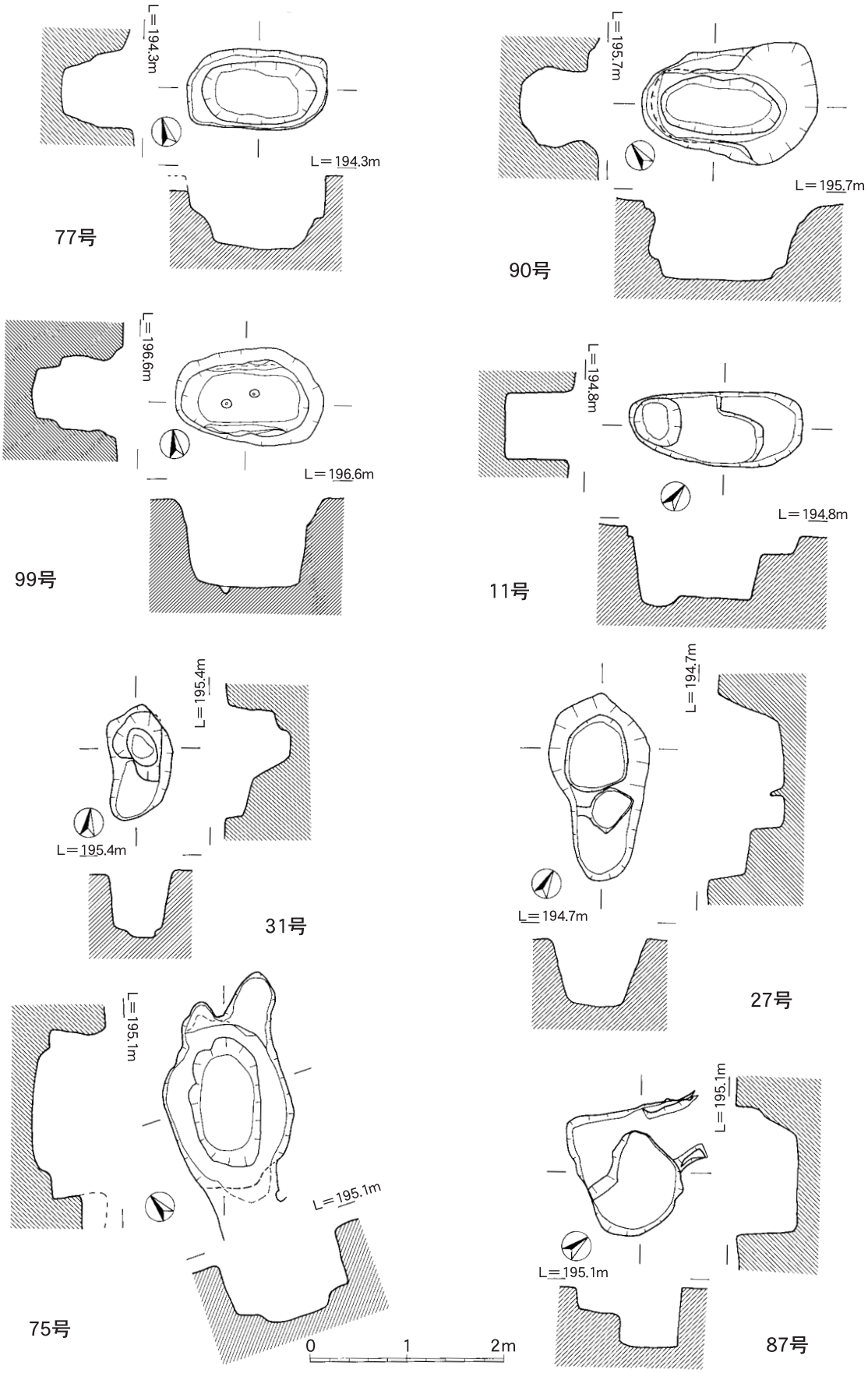
87号も北側に別な遺構との重なりが見られるものの，基本的に平面形が楕円形を呈し，階段状となるものである。西側が狭くて浅く，東側は広くて深くなっている。

92号は北西部に安定した段を有し，南東にかけて傾斜している。長軸方向の東側４分の１ほどのところに直径が31㎝，深さが42㎝のピットを持っている。ピットを含む最終的な深さは78㎝である。

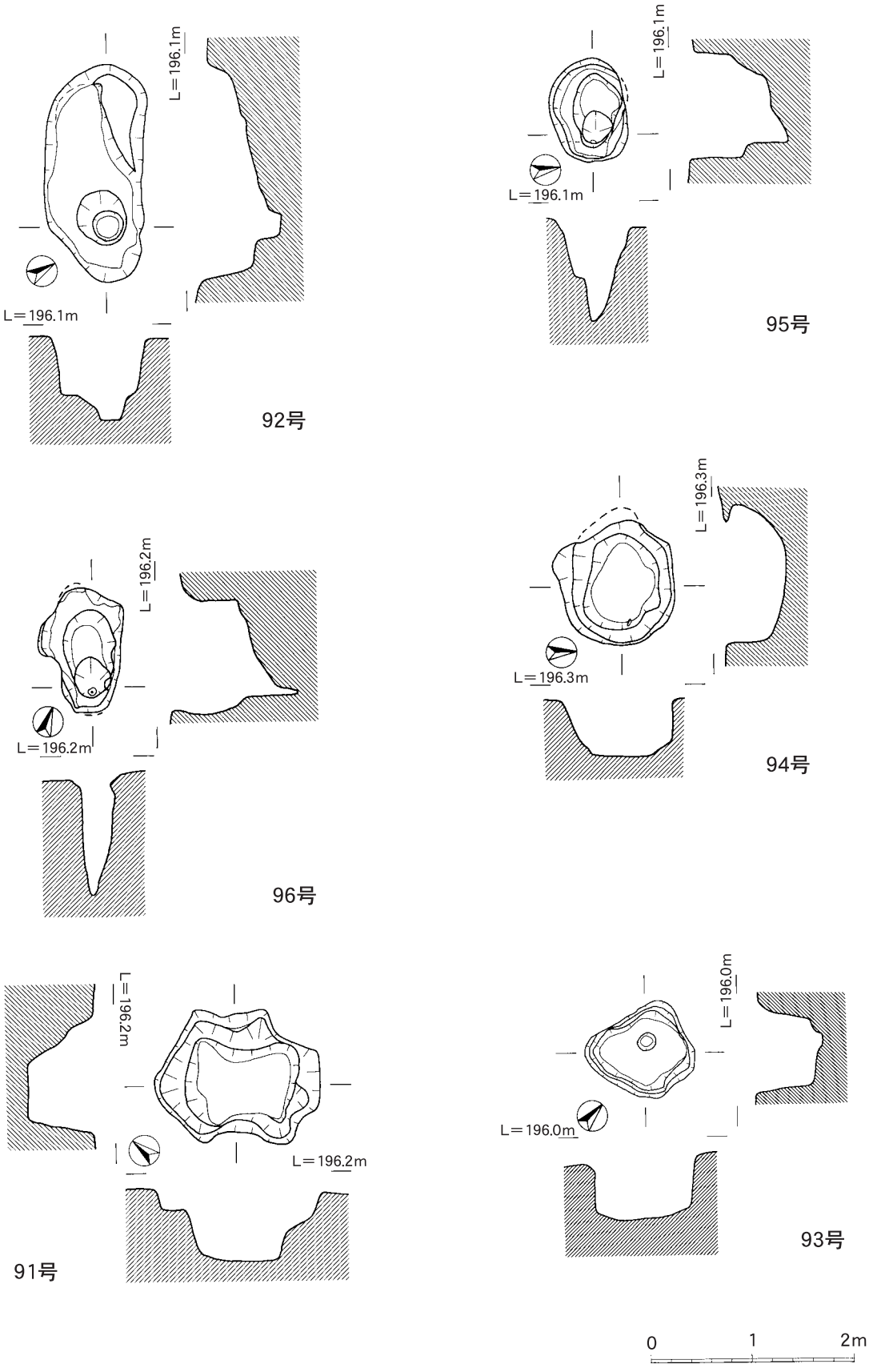
95号と96号は類似した形態を持つ。いずれも短径と長径の差がそれほど大きくない楕円形の平面形で，途中までほぼ垂直に掘り下げたのち，長軸の一方の端にほぼ真下に向かう小さくて深いピットを持っている。95号は，長径102㎝，短径66㎝で途中には稜あるいは斜めの段があり，西の端部に直径31㎝，深さは42㎝ の，徐々に狭くなるピットが見られる。また，96号は長径120㎝，短径81㎝で，途中に段と稜を持ち，南の端に上面の直径は86㎝あるものの，中程では急激に狭くなり，直径も10㎝程度しかない極めて小さなピットが見られる。この２基については，国分市の上野原遺跡で検出された土坑が同様な形状を呈しているとされた。上野原遺跡の発掘調査報告書では，担当者はこの土坑を山芋を掘り出すためにほられた穴としている。確かに他の楕円形を呈する土坑とは趣を異にしているようにも感じられることから，そのように考えることも可能かも知れないが，現場での発掘調査時の印象から，一応，落とし穴として挙げておきたいと思う。

第36図の94号は，落とし穴でも平面形が円形となるもので１Ｂ類である。直径が122㎝と111㎝であるので正円とは言えないものの，大まかな形状が円形を呈しているため，円形の落とし穴としている。上面のすぐ下部がえぐれているが，薩摩火山灰の軽石層の崩壊によるものと考えられる。全体的な深さも60㎝であり，浅いものである。

同じ第36図の91号と93号は，不整形の落とし穴で１Ｃ類である。91号は方形を意図して５方向に鋭く突き出した多角形といえそうな形状である。掘り方の中程に段や稜を持ち，深さは71㎝である。また，93号は台形の角を取って全体的に丸みを持たせたような形で，中程に小さなピットを持つ。


L=194.3m
L=194.3m
77号
L=195.7m
L=195.7m
90号
L=196.6m
L=196.6m
99号
L=194.8m
L=194.8m
11号
L=195.4m
L=195.4m
31号
L=194.7m
L=194.7m
27号
L=195.1m
L=195.1m
75号
L=195.1m
L=195.1m
87号
0
1
2m

第35図　土　　坑 (5)


L=196.1m
L=196.1m
92号
L=196.1m
L=196.1m
95号
L=196.2m
L=196.2m
96号
L=196.3m
L=196.3m
94号
L=196.2m
L=196.2m
91号
L=196.0m
L=196.0m
93号
0
1
2m

第36図　土　　坑 (6)

第37図から第43図までは落とし穴以外の性格を持つと考えられる２類の土坑である。そのうち，第37図の６号から第41図の61号までは楕円形のもので２Ａ類，第41図の５号から第42図の60号までは円形のもので２Ｂ類，そして第43図の49号から89号までは不整形のもので２Ｃ類である。

２Ａ類の楕円形の土坑について，形態ごとに概略を説明していきたい。

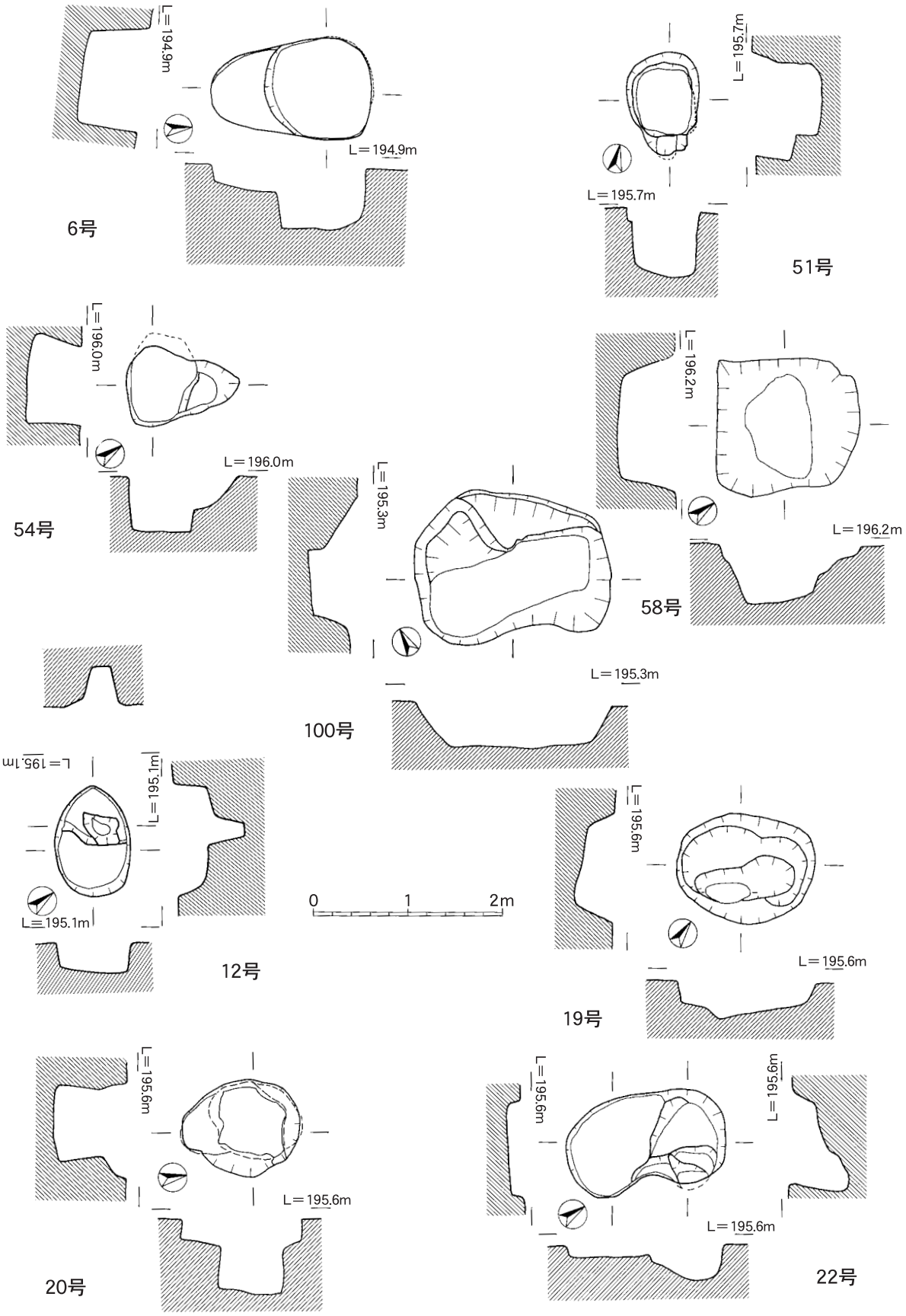
第37図の６号から100号までの５基は内部に小ピットを持たずに途中に段のある深いタイプである。６号は南側に浅い掘り込みを持ち，その北側に深い土坑がある複合タイプである。最終的な深さは74㎝であり，北側が一部えぐれている。51号も南側に段を有し，さらにその北側を深く掘り込む。74㎝の最終的な深さである。54号は北東部に傾斜のある段を持ち，南西部を深く掘り下げる。北東部の底の一部がえぐれる。58号は平面形は上面が四角形に近いものの，底が楕円形を呈しているためこのタイプに入れた。北東部に凹凸のある不安定な段を持ち，中央部で底の傾斜した掘り込みを持っている。100号も底面形が楕円形を呈するため，このタイプに分類した。北東部に傾斜を持つ２つの段を持ち，南側を広く掘り下げている。最終的な深さは64㎝である。

第37図の12号から第38図の83号までの13基は途中に段を持ち，内部に小ピットを持つ深いタイプである。12号は南東に安定した段を持ち，その北側が若干深くなっている。下の段の南寄りに直径31㎝，深さ40㎝の小ピットを有している。19号は北東部に傾斜した２つの段を持ち，さらにその南側が小さくピット状になっている。20号は北および南にほぼ平坦な段を持ち，中央部を深く掘り窪めている。途中はえぐれている。22号は南側に浅く平たい安定した段を持ち，その北側に右回りに階段状に深く掘り下げている。あまり見られないタイプの土坑と言える。

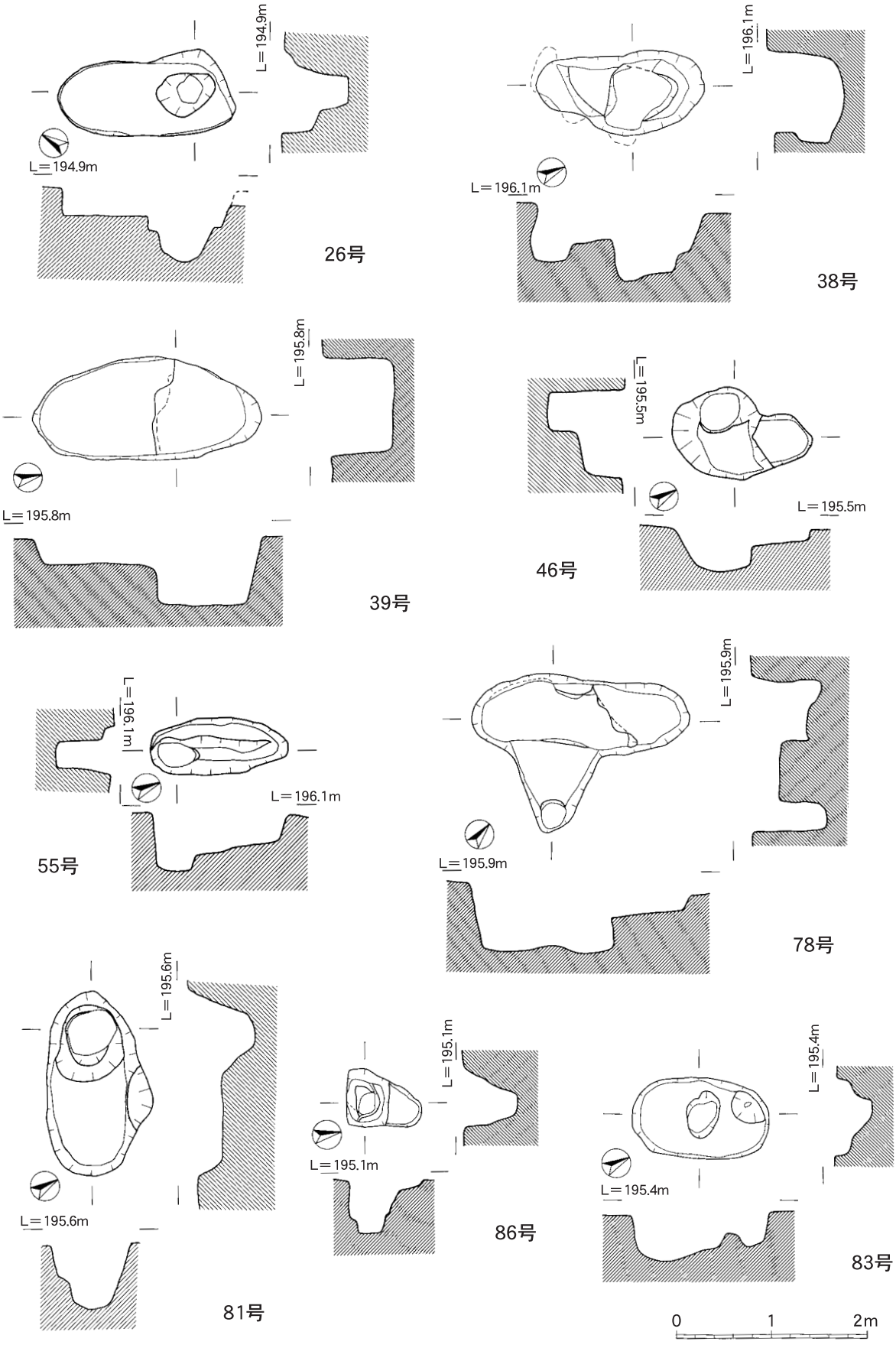
26号は全体的に一段掘り窪め，南東の隅近くに直径40㎝，深さ30㎝のピットを持つ。38号は南西部を一段掘り下げた後，さらにその両側をえぐるように掘り下げている。39号は南側を低く平らに掘り下げ，その後北側をさらに掘り下げている。46号は北東部を浅く平らに掘り下げたのち，右回りに階段状に掘り下げを行なっている。

55号は長軸方向に西側から東側に深くなるように段を設け，さらに南の端に直径41㎝，深さ17㎝のピットを持ち，最終的な深さは72㎝となる。78号は複合した形にも見えるが，ほぼ東西方向を軸とする楕円形を中心にとらえてこの分類に入れた。北東部を浅く掘り下げたのち，南西部を急激に深く掘り下げる。さらに，南東側に三角形気味の掘り込みを行ない，端部に深いピットを設けている。81号は東側に浅く安定した段を持ち，その西側に直径80㎝，深さ36㎝の割合に大きな掘り込みを設けている。最終的な深さは70㎝となる。86号は北側に浅い段を作り，南側に壁面の凹凸の激しいピットを持つ。規模は極めて小さい。83号は中央やや東側にそれほど明確ではない段を持ち，2基の底径の異なるピットがあり，全体の底面は南側に傾斜している。

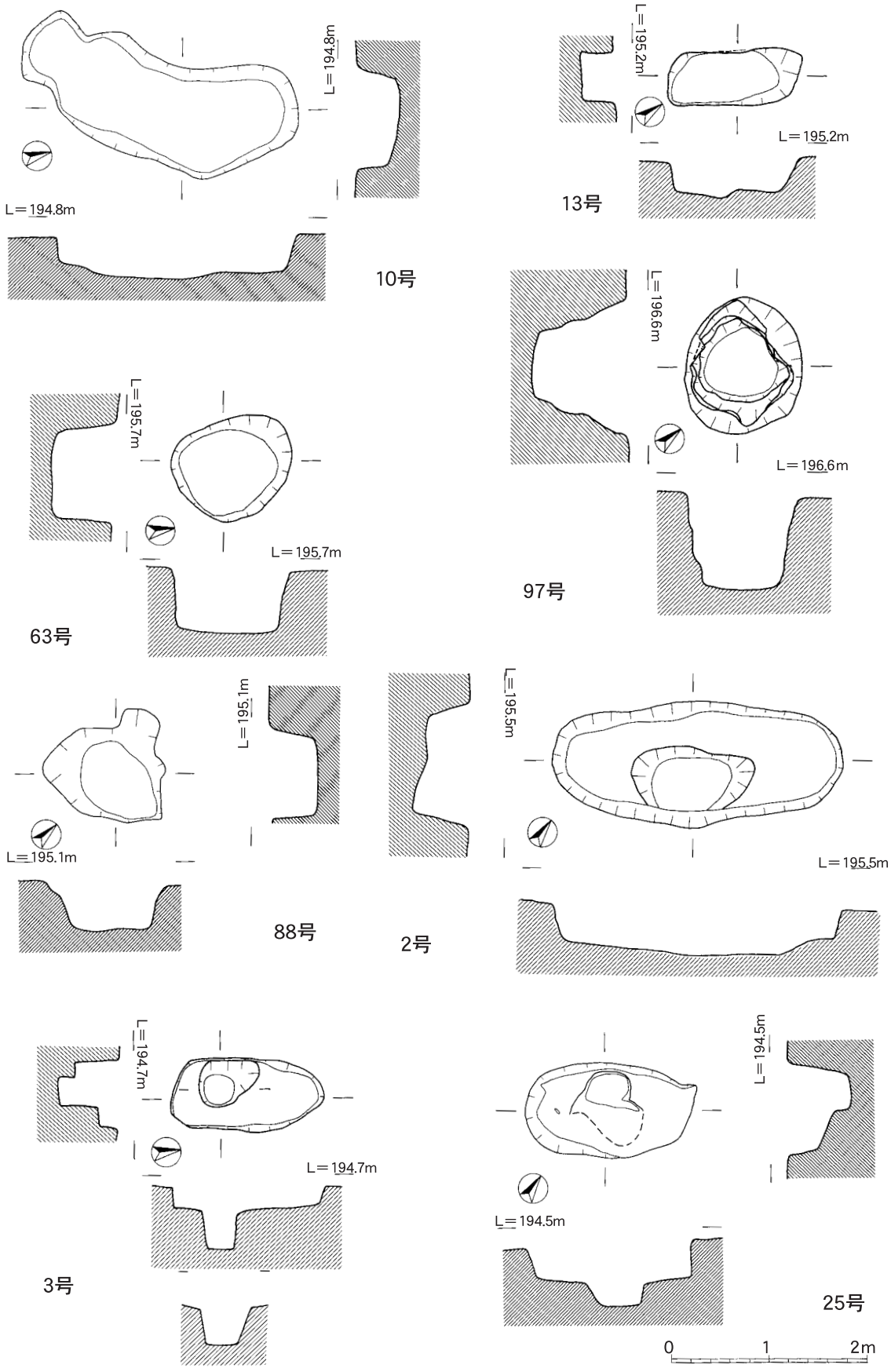
第39図の10号から97号までの５基は途中に段を持たず，内部に小ピットのないタイプである。10号は長径が285㎝，短径は104㎝あり，軸方向はほぼ南北ではあるものの，南西に尾部が傾いている。深さは43㎝である。13号は平行四辺形気味の楕円形を呈しており，中央付近に低い突起部が見られる。63号は円形に近い楕円形である。97号も同様な形態をしている。ただ，途中の壁面が崩壊している。これは，薩摩火山灰層中の軽石層が崩れたものである。深さは98㎝ある。88号は３か所に突起を持ったような形態をしているが，底面の形態からこのタイプに入れた。


L=194.9m
L=194.9m
6号
L=195.7m
L=195.7m
51号
L=196.0m
L=196.0m
54号
L=196.2m
L=196.2m
58号
L=195.3m
L=195.3m
100号
L=195.1m
L=195.1m
L=195.1m
12号
0
1
2m
L=195.6m
L=195.6m
19号
L=195.6m
L=195.6m
20号
L=195.6m
L=195.6m
L=195.6m
22号

第37図　土　　坑 (7)


L=194.9m
L=194.9m
26号
L=196.1m
L=196.1m
38号
L=195.8m
L=195.8m
39号
L=195.5m
L=195.5m
46号
L=196.1m
L=196.1m
55号
L=195.9m
L=195.9m
78号
L=195.6m
L=195.6m
81号
L=195.1m
L=195.1m
86号
L=195.4m
L=195.4m
83号
0
1
2m

第38図　土　　坑 (8)


L=194.8m
L=194.8m
10号
L=195.2m
L=195.2m
13号
L=196.6m
L=196.6m
97号
L=195.7m
L=195.7m
63号
L=195.1m
L=195.1m
88号
2号
L=195.5m
L=195.5m
L=194.7m
L=194.7m
3号
L=194.5m
L=194.5m
25号
0
1
2m

第39図　土　　坑　(9)

第39図の25号から25号までの３基は，途中に段がなく内部にピットを持つ深いタイプである。２号は長軸方向のほぼ中央の南側に，長径が120㎝のピットを17㎝の深さで南に傾斜するように設けている。長径298㎝，短径は129㎝ある規模の大きなものである。３号は長径156㎝，短径73㎝の平面規模で，底に直径52㎝，深さが39㎝のピットを中央西側の端に寄せて掘ってある。25号は長径170㎝，短径が96㎝，深さが48㎝あって３号と類似するものの，底の中央部の片方（北側）という位置関係は似ているが不整形で崩れたようなピットであるところは異なっている。底面も南側から北に向けて傾斜している。

第40図の４号から48号までの８基は非常に浅く，内部にはピットを持たないタイプのものである。44号は長径が255㎝，短径は97㎝あり，規模の大きい部類にはいる。深さは34㎝と浅く，底面も西および南に傾斜している。15号は長径と短径の差がそれほど大きくないものである。深さは30㎝である。18号も15号に類似している。平面形は割合に整っている。深さは35㎝である。28号は４号に似るが，上面が幾分波打っている。深さは32㎝である。

29号は短軸方向の断面はU字状を呈するものの，長軸方向は全体的に緩やかな弧状をしている。43号は円形に近い楕円形であり，底面は幾分起伏がある。深さは44㎝である。44号は深さは36㎝で，長軸方向の南側端部が若干東に曲がる。48号は北西部に矩形の張り出しが見られるものの，全体的には長径と短径の差の小さなタイプである。

第41図の32号から61号までの４基は非常に浅いもので，内部にピットを持つタイプである。32号は全体的に浅く（深さ16㎝）掘り下げたのち，北西の端に直径43㎝，深さ11㎝のピットを持つ。埋土の上部に礫が見られた。40号は幅の広い土坑の中央やや東側に，直径70㎝のピットが深さ８㎝で掘られている。45号は21㎝に浅く掘り下げた土坑の東側の端に直径37㎝，深さ27㎝のピットがある。61号は西側に若干傾斜した土坑の西側に曲がった溝状の掘り込みが見られる。

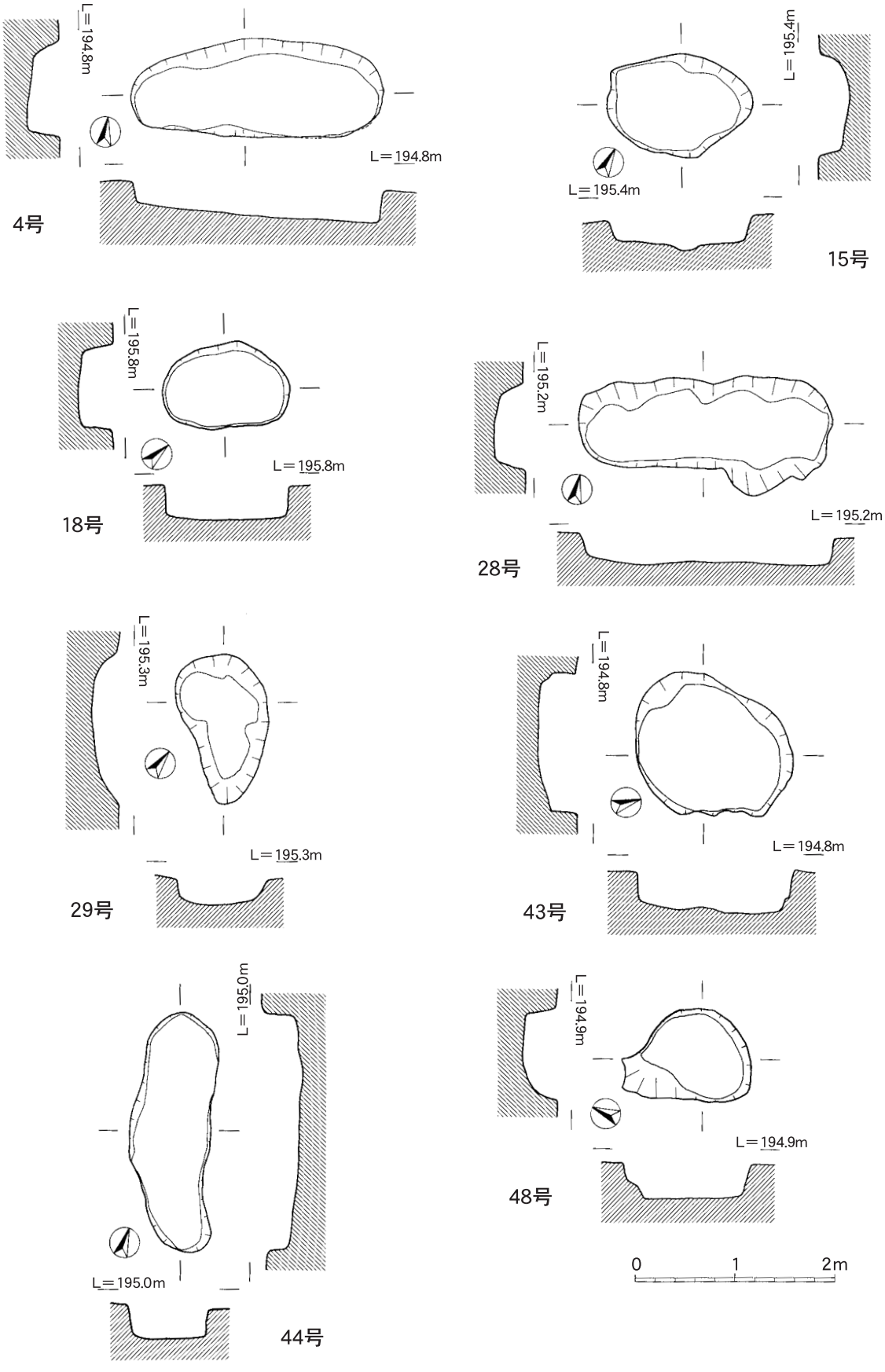
第41図の５号から第42図の60号までは円形のもので**２Ｂ**類である。以下，概略説明を行なう。

第41図の５号から第42図の101号までの９基は，途中に段がなく，内部にピットの見られない深いタイプのものである。５号は底面が若干えぐれている。径は81～90㎝程度である。８号は102～124㎝程度で，細かく分類すると楕円形と言えるが，現場での分類にしたがってこのタイプに入れてある。９号も127～140㎝と正円とは言い難いもののこのタイプに入れてある。24号は112～121㎝であり，正円に近いものと言える。

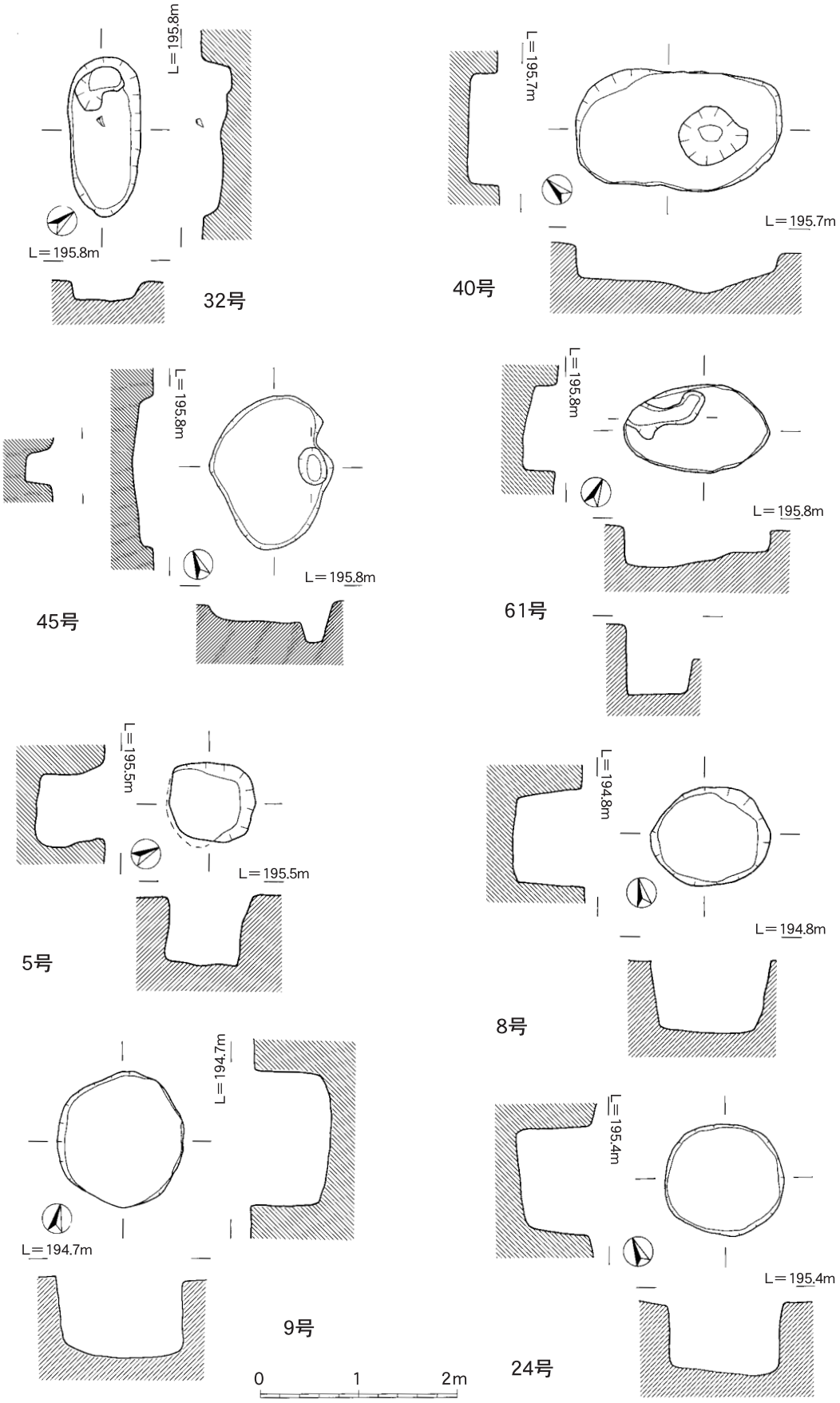
47号と52号の２基は径が80㎝前後，53号と101号の２基は40～50前後の全体としては規模の小さなものである。深さはいずれも60～70㎝前後である。76号は24号と規模や形態が似る。底面近くの壁面は若干崩れている。

第42図の69号は途中に段がなく，内部にピットを持つもので，1基のみである。底部近くの壁面が一部崩壊している。

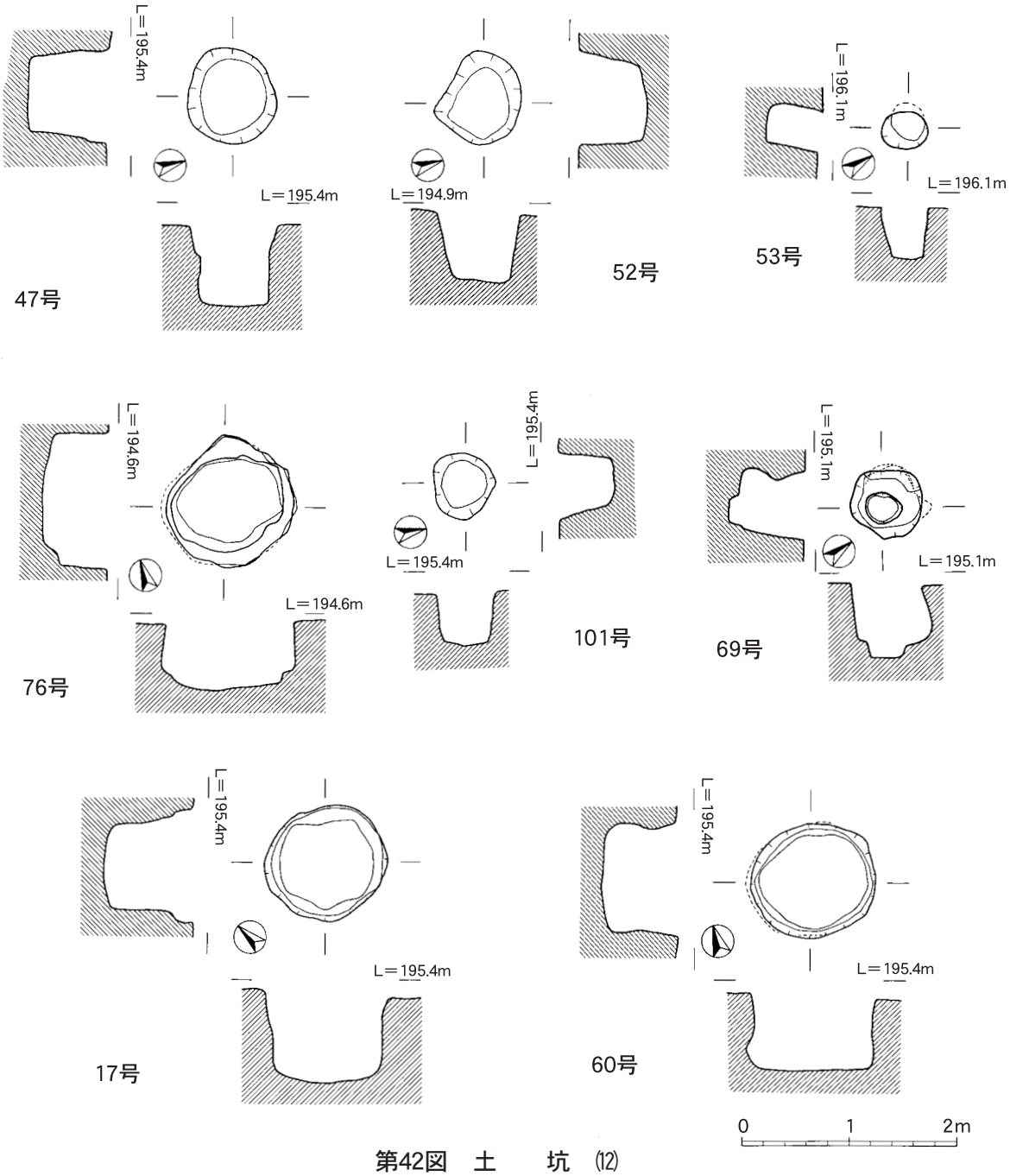
第42図の17号と60号は途中に段を持って内部にピットを持たない深いものである。両方とも平面形は似るが，17号が若干小さいものの深さは81㎝と深いのに対して，60号は深さが74㎝とやや浅くなっている。


L=194.8m
L=194.8m
4号
L=195.4m
L=195.4m
15号
L=195.8m
L=195.8m
18号
L=195.2m
L=195.2m
28号
L=195.3m
L=195.3m
29号
L=194.8m
L=194.8m
43号
L=195.0m
L=195.0m
44号
L=194.9m
L=194.9m
48号
0
1
2m

第40図　土　　坑 ⑽


L=195.8m
L=195.8m
32号
L=195.7m
L=195.7m
40号
L=195.8m
L=195.8m
45号
L=195.8m
L=195.8m
61号
L=195.5m
L=195.5m
5号
L=194.8m
L=194.8m
8号
L=194.7m
L=194.7m
9号
L=195.4m
L=195.4m
24号
0
1
2m

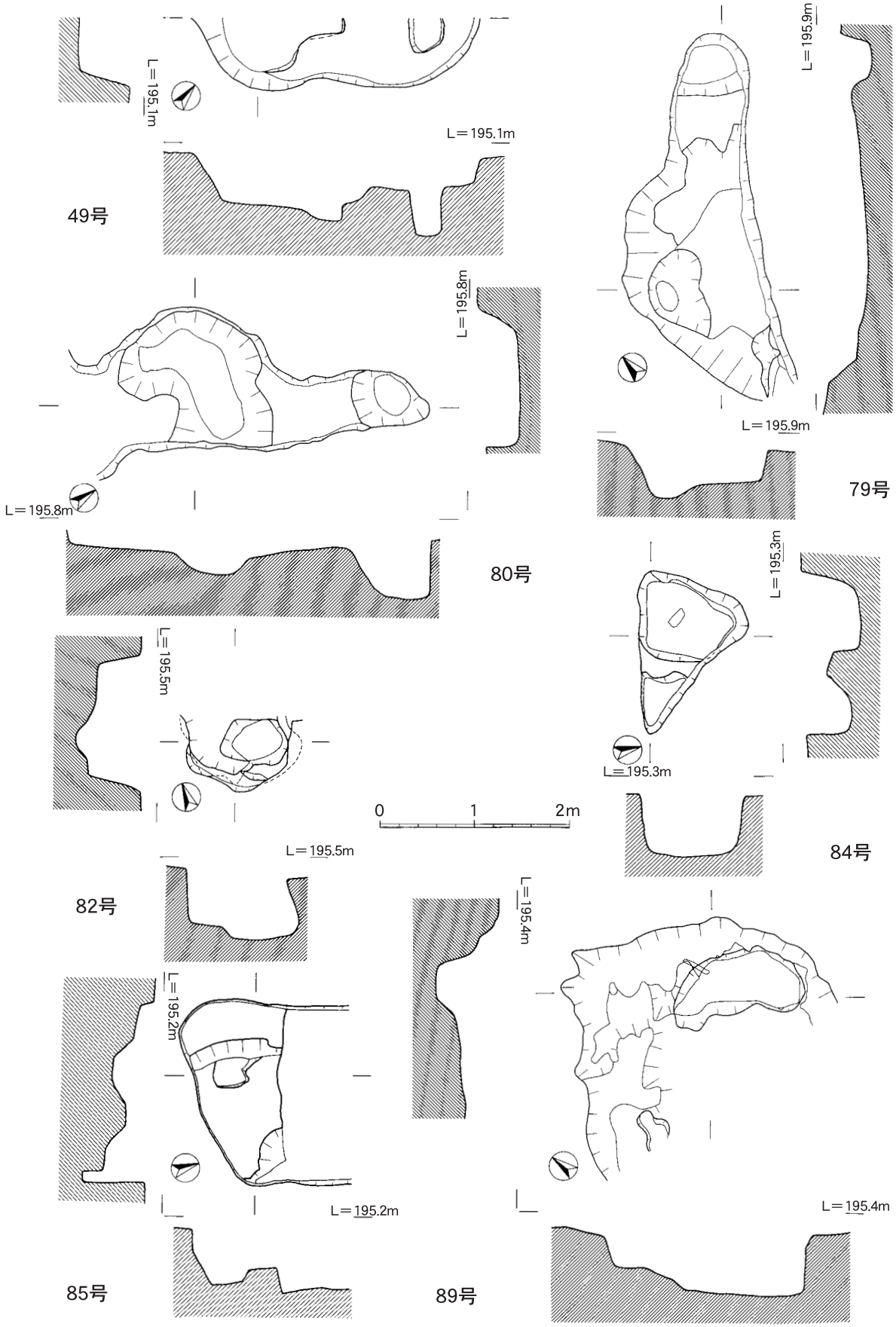
第41図　土　　坑 (11)



第42図　土　　坑 (12)

第43図は不整形の土坑で２Ｃ類である。これらの中には複合したものもある可能性があるものの，形態的な分類によってこのタイプに一括した。

49号は調査範囲の北端に当たったため，北側の形状等は不明である。79号と80号は形態的には似ているものの，段やピットの在り方が異なっている。82号・85号・89号の３基も調査範囲の関係で完全な形で掘り切っていないものである。82号は南側にえぐりのか所が見られる。85号は隅が丸くなる広い帯状のものである。南側の西から順に深くなり，ある程度の落差をもって北側に落ちている。89号は凹凸の激しい形状にかかわらず，底面は割合に平坦である。84号は三角形をしているが，南側は調査範囲外であるため，幾分広がりが考えられ，形状ももっと複雑になると思われる。


L＝195.1m
L＝195.1m
49号
L＝195.8m
L＝195.8m
80号
L＝195.9m
L＝195.9m
79号
L＝195.5m
L＝195.5m
82号
L＝195.3m
L＝195.3m
84号
0
1
2m
L＝195.2m
L＝195.2m
85号
L＝195.4m
L＝195.4m
89号

第43図　土　　坑　(13)

第５表　土坑計測表（1）

（注：円形のものでも軸方向を算出してある）

挿図	番号	検出区	形状	類	長径cm	短径cm	深さcm	内部ピット(径)	内部ピット(深さ)	軸方向	備　考
第31図	1	C９	楕円	1A	158	76	110			N85E	落とし穴
	37	G８	楕円	1A	185	95	82			N29W	落とし穴
	59	H８	楕円	1A	186	97	67			N18E	落とし穴
	70	G11	楕円	1A	103	56	56			ＮＳ	落とし穴
	71	G11	楕円	1A	96	47	52			Ｎ５Ｗ	落とし穴
	72	H11	楕円	1A	106	60	56			N56E	落とし穴
	98	G６	楕円	1A	159	81	70			N50E	落とし穴
	73	H11	楕円	1A	145	70	62			N18W	落とし穴
	74	H11	楕円	1A	138	59	71			N73W	落とし穴
第32図	7	D10	楕円	1A	188	89	30	114	70	N30W	落とし穴
	14	E10	楕円	1A	212	121	76	163	26	N89E	落とし穴
	16	E10	楕円	1A	179	124	105			N61W	落とし穴
	21	F９	楕円	1A	146	105	91			N46E	落とし穴
	23	F10	楕円	1A	197	110	75	142	27	N65W	落とし穴
	30	G10	楕円	1A	172	87	56	135	29	N82W	落とし穴
第33図	33	F９	楕円	1A	164	119	86			N81E	落とし穴
	34	F８	楕円	1A	198	91	30	123	54	N32E	落とし穴
	35	F８	楕円	1A	151	105	88			N34E	落とし穴
	36	G８	楕円	1A	235	135	23	168	81	Ｎ５Ｗ	落とし穴
	41	D10	楕円	1A	163	150	37	146	47	N88E	落とし穴
	42	D10	楕円	1A	157	115	73			N74W	落とし穴
	50	F10	楕円	1A	162	93	65	120	32	Ｎ７Ｗ	落とし穴
第34図	56	H８	楕円	1A	163	107	65	89	17	N44W	落とし穴
	57	H８	楕円	1A	165	135	80			N66E	落とし穴
	62	H９	楕円	1A	124	67	35	108	38	N55E	落とし穴
	64	G９	楕円	1A	185	92	60	138	51	N62W	落とし穴
	65	H10	楕円	1A	169	96	67	133	36	N52E	落とし穴
	66	G10	楕円	1A	193	69	75	151	17	N67W	落とし穴
	67	G10	楕円	1A	178	79	48	148	46	N38W	落とし穴
	68	G10	楕円	1A	149	118	57	101	16	N78W	落とし穴
第35図	77	G10	楕円	1A	144	81	44	120	34	N73W	落とし穴
	90	G９	楕円	1A	183	101	62	135	16	N55W	落とし穴
	99	H７	楕円	1A	152	99	90			N81W	落とし穴
	11	E11	楕円	1A	177	73	72	49	11	N53E	落とし穴
	31	G10	楕円	1A	115	64	30	73	40	N12W	落とし穴
	27	G10	楕円	1A	192	102	41	118	35	N35W	落とし穴
	75	H10	楕円	1A	177	134	58	133	18	N38E	落とし穴
	87	H10	楕円	1A	135	106	29	106	37	N51W	落とし穴
第36図	92	G５	楕円	1A	215	99	57	54	21	N56W	落とし穴
	95	G４	楕円	1A	102	66	55	31	42	N85W	落とし穴
	96	H４	楕円	1A	120	81	72	86	50	N19W	落とし穴
	94	G４	円	1B	122	111	60			N88E	落とし穴
	91	G５	不整	1C	164	115	21	112	50	N37W	落とし穴
	93	G４	不整	1C	108	89	62			N41E	落とし穴
第37図	6	D10	楕円	2A	172	110	26	107	48	Ｎ５Ｅ	
	51	F９	楕円	2A	110	75	46	77	28	N11W	
	54	G８	楕円	2A	118	97	36	71	22	N36E	
	58	H８	楕円	2A	151	137	34	70	30	N36E	
	100	D９	楕円	2A	210	144	51			N69W	
	12	E10	楕円	2A	118	80	36	31	40	N54W	

第６表　土坑計測表 (2)

挿図	番号	検出区	形状	類	長径cm	短径cm	深さcm	内部ピット(径)	内部ピット(深さ)	軸方向	備　考
第37図	19	E 9	楕円	2A	142	116	27	38	8	N50E	
	20	F 9	楕円	2A	125	101	25	65	54	N 2 W	
	22	F 9	楕円	2A	168	100	12	72	26	N30E	
第38図	26	F11	楕円	2A	182	75	40	40	30	N36W	
	38	F 8	楕円	2A	175	82	40	82	30	N21E	
	39	F 8	楕円	2A	240	104	31	110	40	N 7 E	
	46	E 8	楕円	2A	145	92	18	55	28	N22E	
	55	H 9	楕円	2A	145	51	45	41	17	N17E	
	78	G 9	楕円	2A	230	165	30	135	44	N50E	
	81	G10	楕円	2A	195	82	34	80	36	N67W	
	83	H10	楕円	2A	(75)	83	18	49	19	N22E	
	86	H10	楕円	2A	(78)	59	10	39	34	N34E	
第39図	10	D11	楕円	2A	285	104	43			N32E	
	13	E10	楕円	2A	131	55	42			N41E	
	63	G 9	楕円	2A	124	103	67			N 8 E	
	97	H 5	楕円	2A	139	118	98			N48W	
	88	H11	楕円	2A	123	91	52			N49E	
	2	D 9	楕円	2A	298	129	25	120	17	N43E	
	3	C10	楕円	2A	156	73	25	52	39	N 3 E	
	25	F11	楕円	2A	170	96	48	49	23	N50E	
第40図	4	C10	楕円	2A	255	97	34			N78E	
	15	E10	楕円	2A	147	104	30			N68E	
	18	E 9	楕円	2A	126	83	35			N40E	
	28	F10	楕円	2A	255	87	32			N69E	
	29	G10	楕円	2A	150	90	22			N46W	
	43	D11	楕円	2A	157	139	44			N17E	
	44	E11	楕円	2A	237	79	36			N20W	
	48	C 9	楕円	2A	127	92	22	99	14	N20W	
第41図	32	F 9	楕円	2A	161	71	16	43	11	N64W	
	40	F 8	楕円	2A	210	115	40	70	8	N41W	
	45	F 9	楕円	2A	153	125	21	37	27	N21E	
	61	H 9	楕円	2A	148	88	38	68	36	N62E	
	5	C10	円	2B	81	90	70			N21E	
	8	C 8	円	2B	124	102	73			N84W	
	9	D11	円	2B	140	127	81			N10W	
	24	F10	円	2B	121	112	73			N23E	
第42図	47	E 9	円	2B	82	89	76			N81E	
	52	E11	円	2B	88	77	63			N74W	
	53	G 8	円	2B	42	36	49			N10W	
	76	H10	円	2B	123	121	63			N71E	
	101	C 9	円	2B	61	57	59			N81W	
	69	G10	円	2B	67	63	55	35	15	N58W	
	17	E 9	円	2B	115	108	81			N89E	
	60	G10	円	2B	113	107	74			N69W	
第43図	49	C 9	不整	2C	305	(73)	52	36	48	N47E	
	79	H 9	不整	2C	366	152	37	65	16	N47E	
	80	H 9	不整	2C	382	145	14	78	55	N37E	
	82	H10	不整	2C	(78)	120	57	46	12	N68W	
	84	H10	不整	2C	174	111	23	89	31	N57W	
	85	H10	不整	2C	(158)	188	28	55	20	N12E	
	89	H11	不整	2C	(277)	(278)	48	137	27	N49W	

以上述べてきた落とし穴および土坑について，若干の考察を加えてみたい。

まず，不整形の土坑についての解釈である。79号および80号などは細長い楕円形のようにも見えるが，これは複数の楕円形あるいは円形の土坑の間を掘ってつないだような印象を受ける。断面図を見ると，全体的になめらかに傾斜していることから，個別に掘られた複数の土坑どうしを，何らかの目的のために掘ってつないでいるようである。つまり，それぞれの土坑は別々の時期に掘られたのではなく，ほぼ同時に掘った土坑どうしを何らかの目的のためにつないだと考えられるのである。49号の半楕円形となるものや，85号の台形に近い形となるものも，区域外に広がるため全体の明確な形状は不明とせざるを得ないが，いずれも79号などと同様，複数の土坑どうしをほぼ同じ時期に掘ってつないだ結果，このような不整形をなしていることが伺われるのである。

また，95号や96号のように，平面形は長径と短径の差の小さな楕円形をしており，途中に段差を有し，長径の一方に深い小ピットの見られるものについては，落とし穴ではなく，根菜類を採取するために掘られた穴との考えもあるが，あまりにも形状的に規格化されたものであり，ピット内に棒を差して落ちた動物の動きを止めるという，説得力のある考えが可能と判断されるので，ここでは落とし穴としてとらえることにする。なお，これらについては先に述べたように国分市の上野原遺跡で同時期と推定されている“掘り込み”と形態が類似しているとの指摘もあるが，本遺跡のものと比べると極めて浅いものがほとんどであり，また，形態も種々あることから異なった機能を有するものと判断している。

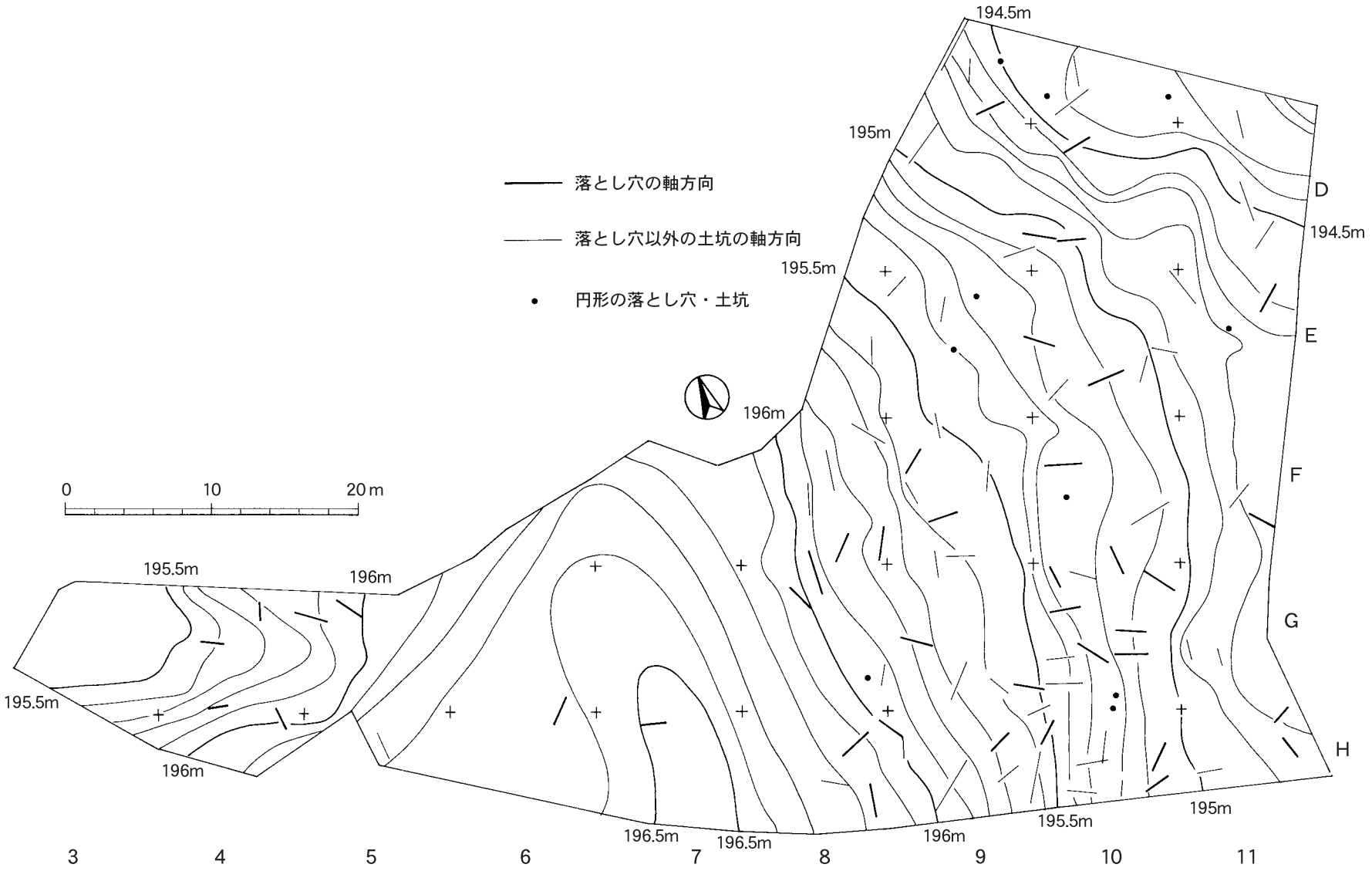
さらに，101号のように直径が50㎝程度のものも土坑と呼ぶのか，という疑問の起こることも考えられるが，これについても周辺にこれに対応するような複数の同様な穴が見当らず，建物を建てるために掘られた柱穴としては認定し得ないことから，土坑としてとらえておくことにする。この遺構の性格については不明とせざるをえない。

楕円形を呈しているものであっても，非常に浅いものについても，その性格は不明とせざるを得ない。ただ，これについては，廃棄のための穴や，墓壙，粘土採掘孔など，いろいろな可能性が考えられることを指摘しておくに留めておきたい。

次に，軸方向については，墓壙のように頭位などある一定の規範を持つ方位が判然としないことから，北方位を中心に東（または西）にどれだけ振れているかの表示とした。１号土坑はN85Eであるので，真北から東に85度振れた方向，つまり，ほぼ東西方向に主軸がある，ということを表している。ただ，この軸の向きについては，平坦な地域であればそれ単独で意味をなす可能性があるものの，本遺跡で検出した地域については，現在は地形的にほぼ平坦ではあっても，当時の地形は起伏に富んでおり，小規模な尾根や谷・迫状の地形も確認されている。そうなると，そのような地形によって軸方向が決められたと考えられることから，表だけから解釈を行なうことは不可能と言えよう。

67ページの表は，土坑の軸方向を10度幅で分けて記載したものである。

遺構の性格が明確ではなく，また，おそらく複数以上の性格が複合していることが考えられることから，主軸の方向を10度毎に表示することにどれくらいの意味があるかは不明とせざるをえない。しかし，一つの性格が考えられるもの，つまり，落とし穴と推定されるものについてその主軸の方向を調べることは，どのような並びを意識して落とし穴を設置して行ったか，について考えるよす


落とし穴の軸方向
落とし穴以外の土坑の軸方向
円形の落とし穴・土坑
0
10
20 m
194.5m
195m
195.5m
196m
D
E
F
G
H
3
4
5
6
7
8
9
10
11
196.5m
196.5m
196m
195.5m
195m

第44図　土坑軸方向図

第７表　土坑軸方向

真北から　東に傾く		真北から　西に傾く		計
N　0　～　10°E	6基	N　0　～　10°W	5基	11基
11　20	4基	11　20	6基	10基
21　30	7基	21　30	2基	9基
31　40	9基	31　40	4基	13基
41　50	11基	41　50	5基	16基
51　60	4基	51　60	6基	10基
61　70	4基	61　70	9基	13基
71　80	2基	71　80	5基	7基
81　89	7基	81　89	5基	12基
	54基		47基	101基

がとなると思われるのである。あとは，コンター図（等高線図）と併用することによって，地形との関係も考慮しつつ，検討を加えて行くことで，当時の落とし穴の設置について，何らかの意識のまとまりが浮かび上がってくるものと考えられる。

第44図のコンターを加えた土坑の軸方向図によって検討すると，細い軸（落とし穴以外の可能性が大きい土坑）は基本的に等高線に沿う方向に主軸を有するものが多く，太い軸（落とし穴と推定される土坑）はその等高線に直交あるいは斜交するものが割合に多いように感じられ，性格の差としてとらえられるように思う。

なお，図では円形のものについては主軸方向を表していないが，表では傾向性を把握するために敢えて主軸方向を出している。その際は，円形のものについては幾分でも尖っているか，軸がいくらかでも長い方向を主軸の方向と判断して計測を行い，算出した。

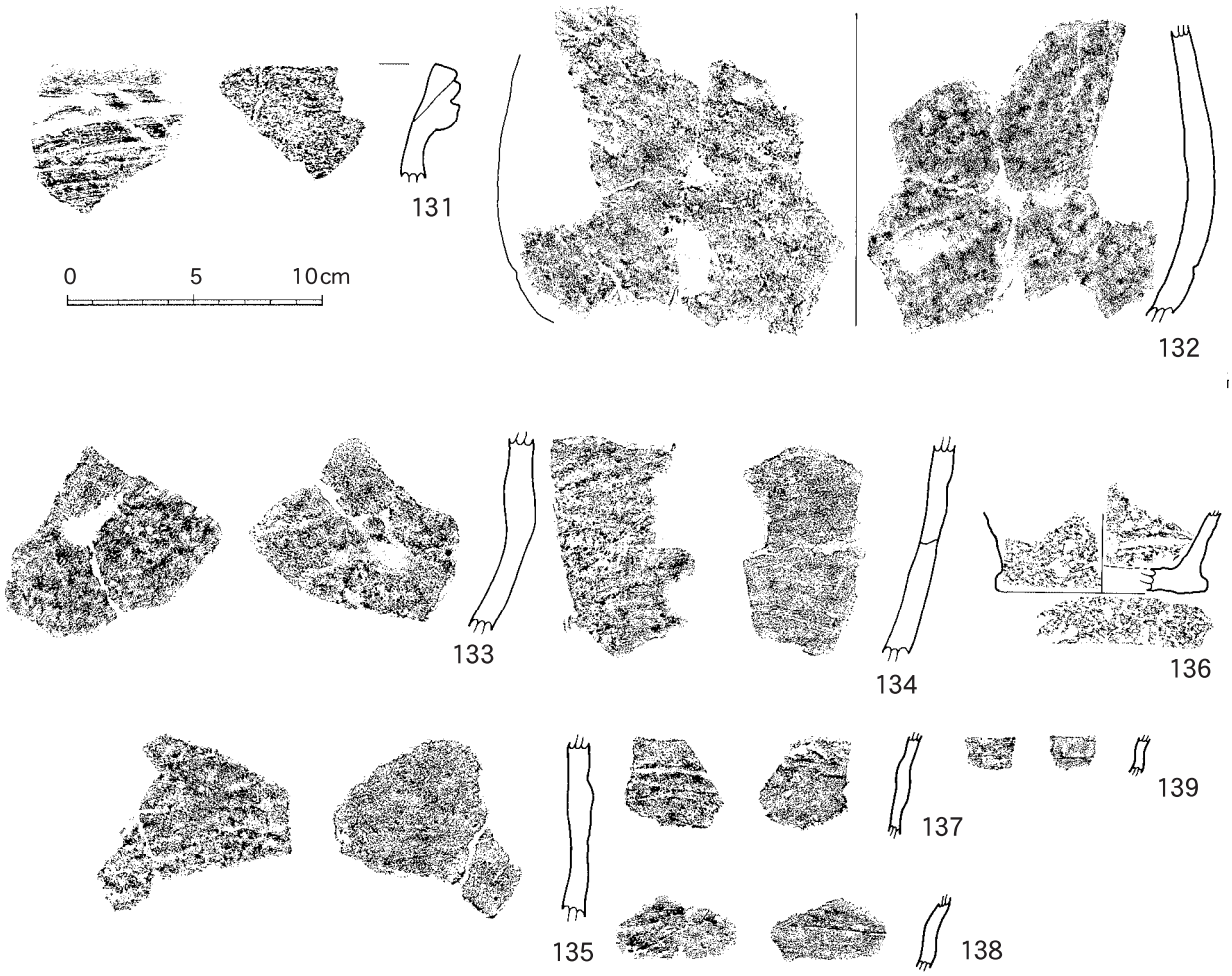
２　土　器

縄文時代後期および晩期の土器は，Ⅲ層から出土している。（第47図131～139）

Ⅵ類の131は四角形に肥厚する口縁部に貝殻の腹縁を突刺している。器面の調整や施文の方法，胎土や焼成のようすなどから，後期に属するものと考えられる。**Ⅶ類**に分類した132～135は深鉢形土器の胴部と考えられる。136は底部であるが，器面の調整などが132～135に類似しているため**Ⅶ類**に分類した。137～139は浅鉢形土器であり，内外面はヘラミガキで丁寧に仕上げる。**Ⅷ類**に分類してある。

Ⅵ類から**Ⅷ類**の時期については，137～139は晩期に位置付けられることはほぼ明確であるものの，132～135は胴部片だけであるため後期であるか晩期であるかについては，正確には決し得ない。ただ，器面に大きな凹凸が多く見られ，また，調整もそれほど丁寧ではないことから，後期の可能性が高いのではないかと考えられる。器形に深鉢を考えるとすれば，器面に粗い調整が見られないことからも後期であると考えたほうが無理がないように思われる。

ここで，これらの土器の型式名について考えてみたい。**Ⅵ類**は，形態から後期初頭の頃に比定されるように思われ，そうであれば出水式かと考えられるものの，小片のため確定的ではない。**Ⅶ類**は，型式名を確定するには至らない。**Ⅷ類**は，器壁が極めて薄く，ヘラミガキによる調整も顕著であることから，晩期の初め頃から中頃に位置付けられるように思われるものの，口縁部が欠損しているため，型式名の確定には躊躇を覚える。



第45図　縄文後・晩期土器

第８表　縄文土器観察表（1）

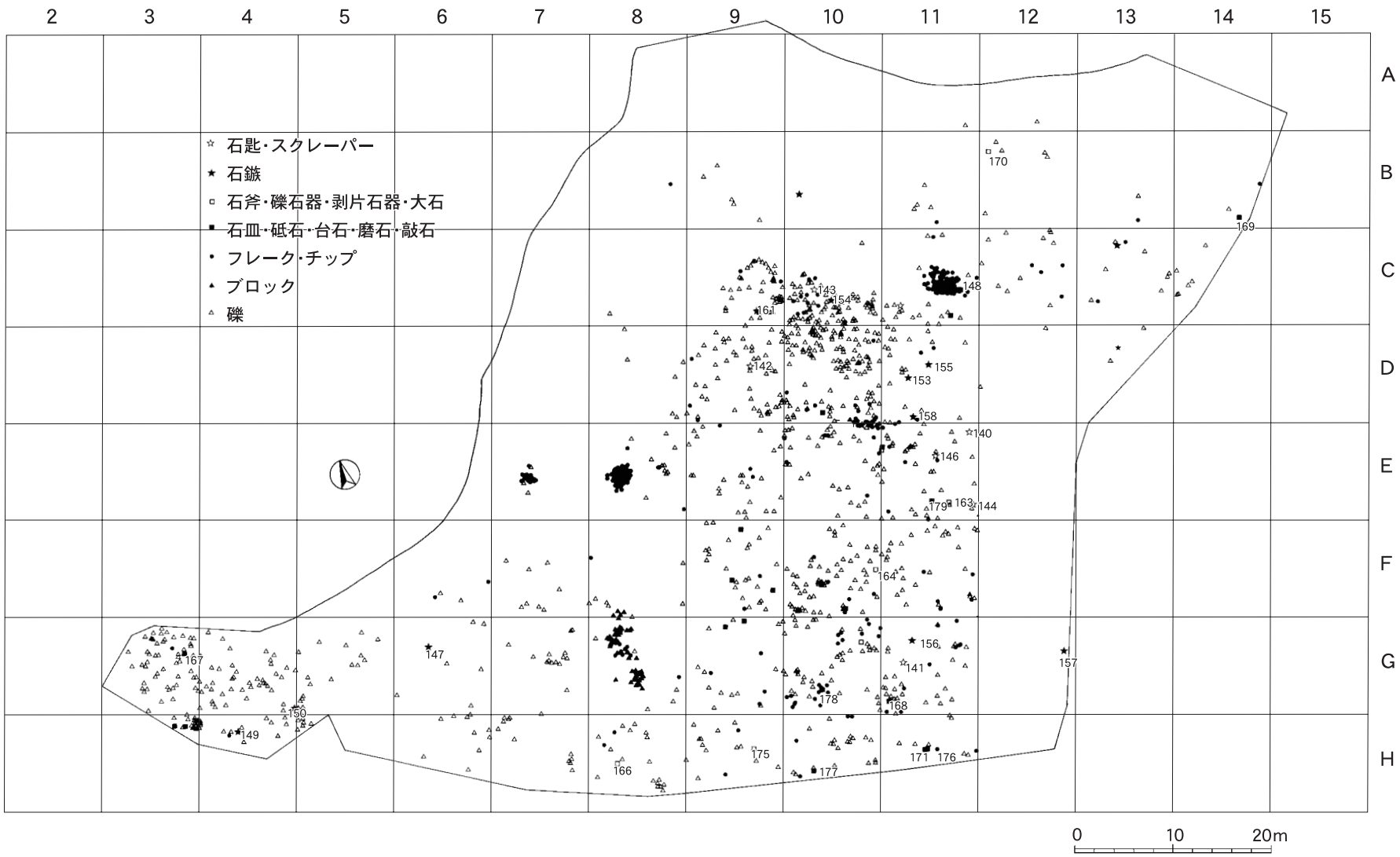
挿図	遺物番号	出土区	層位	標高(m)	類	部位	焼成	外面色調	内面色調	文様	外面調整	内面調整	長石	石英	輝石	角閃石	その他	口径cm	器高cm	底径cm	注記番号	備考
第22図	2	E10	Ⅳ	195.15	Ⅰ	口縁部	良好	茶褐色	褐色	刻み目	条痕	条痕		○		○	砂粒	—	(4.5)	—	1609	
	3	F11	Ⅲ	194.88	Ⅰ	口縁部	良好	褐色	褐色	刻み目	条痕	条痕		○			砂粒 雲母	—	(3.9)	—	2576	
	4	G10	Ⅳ	195.97	Ⅰ	口縁部	粗	灰褐色	灰褐色	刻み目	条痕	条痕		○		○	砂粒	—	(5.3)	—	1687	
	5	G9	Ⅳ	195.82	Ⅰ	口縁部	良好	黒褐色	灰褐色	刻み目	条痕	条痕	○	○			砂粒	—	(2.2)	—	1688	
	6	D10	Ⅳ	195.50	Ⅰ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色		条痕	条痕		○			砂粒	—	(5.9)	—	941	
	7	D10	Ⅳ	195.43	Ⅰ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色		条痕	条痕	○	○			砂粒	—	(3.4)	—	1125	
	8	G3	Ⅳ	285.00	Ⅰ	口縁部	粗	黒褐色	黒褐色	刻み目	条痕	条痕	○				砂粒 雲母	—	(5.0)	—	2042	
	9	G4	Ⅳ	196.36	Ⅱ	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	貝殻押圧	ナデ	ナデ		○		○	砂粒	18.5	(18.7)	—	2030	
	10				Ⅱ	胴部	良好	淡褐色	灰褐色	貝殻押圧	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(3.0)	—	2T7	
	11				Ⅱ	胴部	良好	褐色	褐色	貝殻押圧	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(1.8)	—	2T6	
	12	G7	Ⅳ	196.82	Ⅱ	胴部	良好	褐色	灰褐色	貝殻押圧	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(2.0)	—	2609	
	13	H9	Ⅲ	196.12	Ⅰ	胴部	良好	赤褐色	黒褐色	条痕文	条痕	条痕		○			砂粒 雲母	—	(5.8)	—	1743	
	14			194.93	Ⅰ	口縁部	良好	褐色	褐色	刻み目	条痕	条痕	○		○		砂粒	—	(4.5)	—	274	
	15	D9	Ⅲa	195.52	Ⅰ	口縁部	粗	黄褐色	褐色	刻み目	条痕	条痕		○			砂粒 雲母	—	(2.3)	—	821	
	16	H4	Ⅳ	196.34	Ⅰ	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	刻み目	条痕	条痕	○				砂粒	—	(3.0)	—	2217	
	17	G4	Ⅲ	195.95	Ⅰ	底部	良好	灰褐色	灰褐色		ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(2.3)	10.8	2178	
	18	E9	Ⅲa	195.88	Ⅰ	底部	良好	褐色	灰褐色		ナデ	ナデ	○	○		○	砂粒	—	(2.1)	—	731	
	19	E9	Ⅳ	195.61	Ⅰ	底部	良好	褐色	黒褐色		ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(1.5)	8.5	1037	
第23図	20	F6	Ⅳ	196.63	Ⅲ	口縁部	良好	淡褐色	淡褐色	撚糸文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	18.7	(8.1)	—	2629	
	21			194.94	Ⅲ	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	沈線文 列点文 撚糸文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(4.0)	—	273	
	22	G4	Ⅲ	196.29	Ⅲ	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(3.1)	—	1963	
	23	D11	Ⅳ	195.23	Ⅲ	口縁部	良好	茶褐色	茶褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(4.7)	—	1183	
	24	H7	Ⅳ	196.88	Ⅲ	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ					砂粒	—	(10.3)	—	2646	
	25	H7	Ⅳ	196.86	Ⅲ	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ					砂粒	—	(4.3)	—	2645	
	26	F10	Ⅲ	195.95	Ⅲ	口縁部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	20.3	(2.4)	—	1490	
	27	E10	Ⅳ	195.56	Ⅲ	口縁部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	17.3	(2.1)	—	1623	
	28	E10	Ⅲ	195.69	Ⅲ	口縁部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(2.7)	—	1404	
	29	F8	Ⅱ	196.29	Ⅲ	口縁部	良好	黄褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(3.4)	—	773	
	30		表		Ⅲ	口縁部	良好	淡褐色	淡褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(5.7)	—		
	31	F11	Ⅲ	195.37	Ⅲ	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	突帯 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(2.6)	—	1348	
	32		表		Ⅲ	口縁部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(3.8)	—		
	33	F8	Ⅳ	196.65	Ⅲ	口縁部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(4.1)	—	1040	
	34	F11	Ⅳ	195.05	Ⅲ	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(1.7)	—	1579	
	35	F9	Ⅲa	195.78	Ⅲ	口縁部	良好	黄褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(1.8)	—	742	
第24図	36	H9	Ⅳ	195.99	Ⅲ	頸部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(10.9)	—	1817	補修孔
	37	G5	Ⅳ	196.58	Ⅲ	頸部	良好	暗褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(3.4)	—	2720	
	38	E9	Ⅳ	195.65	Ⅲ	頸部	良好	褐色	褐色	突帯 沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(4.0)	—	722	
	39	F7	Ⅳ	196.52	Ⅲ	頸部	良好	灰褐色	赤褐色	突帯 沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(3.1)	—	1551	
	40			194.96	Ⅲ	頸部	良好	灰褐色	灰褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(2.3)	—	275	
	41				Ⅲ	頸部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(3.1)	—		
	42	南	表		Ⅲ	頸部	良好	灰褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ			○		砂粒 雲母	—	(3.5)	—		
	43	E10	Ⅳ	195.33	Ⅲ	頸部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(3.4)	—	1590	
	44	C10	Ⅳ	195.03	Ⅲ	頸部	良好	淡褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(4.6)	—	1195	
	45	E10	Ⅲ	195.50	Ⅲ	頸部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(2.4)	—	1446	
	46	C10	Ⅳ	195.18	Ⅲ	頸部	良好	褐色	褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(3.0)	—	1149	
	47	E10	Ⅳ	195.64	Ⅲ	頸部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(4.2)	—	1624	
	48	F10	Ⅲ	195.65	Ⅲ	胴部	粗	黄褐色	黄褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ			○		砂粒 雲母	—	(4.3)	—	1277	
	49	F7	Ⅰ	196.62	Ⅲ	頸部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(2.4)	—	2265	
	50	F10	Ⅲ	195.68	Ⅲ	胴部	良好	茶褐色	茶褐色	沈線文 列点文 突帯	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(2.7)	—	1432	

第９表　縄文土器観察表（2）

挿図	遺物番号	出土区	層位	標高(m)	類	部位	焼成	外面色調	内面色調	文様	外面調整	内面調整	長石	石英	輝石	角閃石	その他	口径cm	器高cm	底径cm	注記番号	備考
第24図	51	F11	Ⅱ	195.36	Ⅲ	胴部	良好	灰褐色	灰褐色	刻み目 突帯 列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(4.7)	—	1330	
	52	E10	Ⅳ	195.45	Ⅲ	頸部	良好	灰褐色	褐色	突帯 列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(3.2)	—	1477	
	53	E10	Ⅲ	195.57	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	突帯 列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(4.0)	—	1408	
	54	E11	Ⅳ	195.19	Ⅲ	胴部	良好	灰褐色	灰褐色	突帯 列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(6.8)	—	1463	
	55	F9	Ⅲa	195.83	Ⅲ	胴部	良好	茶褐色	茶褐色	刻み目 突帯 列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(3.0)	—	755	
	56	E10	Ⅲ	195.21	Ⅲ	胴部	良好	灰褐色	灰褐色	突帯 列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(3.0)	—	1446	
	57	E10	Ⅲ	195.72	Ⅲ	胴部	良好	暗褐色	褐色	突帯 列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(2.5)	—	1614	
	58	F11	Ⅳ	195.38	Ⅲ	胴部	粗	黄褐色	黄褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(4.7)	—	1489	
	59	E10	Ⅲ	195.70	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	列点文 沈線文	ハケ目	ハケ目	○				砂粒	—	(2.8)	—	1612	
	60	F10	Ⅲ	195.52	Ⅲ	胴部	粗	灰褐色	褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(3.2)	—	1388	
第25図	61			194.57	Ⅲ	胴部	粗	黄褐色	灰褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(1.7)	—	318	
	62		Ⅲ	195.67	Ⅲ	胴部	粗	黄褐色	黄褐色	列点文	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(2.7)	—	1356	
	63	G11	Ⅲ	195.75	Ⅲ	胴部	粗	黄褐色	黄褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(2.6)	—	1301	
	64	F10	Ⅳ	195.65	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	列点文 沈線文 突帯	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(2.0)	—	1692	
	65	E10	Ⅲ	195.55	Ⅲ	胴部	良好	褐色	灰褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(2.1)	—	1435	
	66	E10	Ⅳ	195.61	Ⅲ	胴部	良好	褐色	灰褐色	列点文 沈線文 突帯	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(2.0)	—	1480	
	67	F10	Ⅲ	195.80	Ⅲ	胴部	良好	灰褐色	灰褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(1.4)	—	1412	
	68	F6	Ⅳ	196.49	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○		○		砂粒	—	(2.6)	—	2271	
	69	G10	Ⅲ	195.89	Ⅲ	胴部	粗	黄褐色	黄褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(5.0)	—	1720	
	70	F11	Ⅲ	195.26	Ⅲ	胴部	粗	黄褐色	黄褐色	点線文	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(2.6)	—	1516	
	71	G10	Ⅲ	195.73	Ⅲ	胴部	粗	灰褐色	灰褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ			○		砂粒 雲母	—	(2.0)	—	1717	
	72	D9	Ⅲa	195.67	Ⅲ	胴部	粗	褐色	褐色	沈線文	ナデ	ナデ				○	砂粒 雲母	—	(2.0)	—	820	
	73	H9	Ⅳ	195.69	Ⅲ	胴部	良好	褐色	黒褐色	縄文	ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(2.1)	—	1804	
	74	F11	Ⅲ	195.49	Ⅲ	胴部	粗	黄褐色	黄褐色	列点文 沈線文	ハケ目	ハケ目		○			砂粒 雲母	—	(3.1)	—	1358	
	75	D9	Ⅲa	195.53	Ⅲ	胴部	良好	黄褐色	黄褐色	突帯 刻み目 沈線文	ナデ	ナデ					砂粒	—	(3.0)	—	819	
	76	G6	Ⅳ	196.79	Ⅲ	胴部	良好	茶褐色	褐色	突帯 縄文	ナデ	ナデ		○		○		—	(3.7)	—	2618	
	77	E10	Ⅲ	195.41	Ⅲ	胴部	良好	黄褐色	灰褐色	突帯 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(2.7)	—	1442	
	78	H7	Ⅳ	196.83	Ⅲ	胴部	良好	褐色	灰褐色	縄文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(3.6)	—	2648	
	79	F8	Ⅲa	196.18	Ⅲ	胴部	良好	灰褐色	灰褐色	縄文	ナデ	ナデ					砂粒	—	(2.4)	—	769	
	80	F7	Ⅳ	196.43	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	縄文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(5.0)	—	2259	
	81	D9	Ⅵ	196.08	Ⅲ	胴部	粗	褐色	褐色	縄文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(2.8)	—	998	
	82	G7	Ⅳ	196.88	Ⅲ	胴部	良好	淡褐色	褐色	縄文	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(2.0)	—	2607	
	83	G5	Ⅳ	196.73	Ⅲ	胴部	良好	黄褐色	褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ					砂粒	—	(2.2)	—	2718	
	84	C9	Ⅴ	195.06	Ⅲ	胴部	粗	赤褐色	褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(3.2)	—	986	
	85	E10	Ⅲ	195.82	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(3.3)	—	1407	
	86	F7	Ⅳ	196.49	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ		○		○	砂粒	—	(2.4)	—	1550	
	87	H7	Ⅳ	196.87	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ					砂粒	—	(5.9)	—	2644	
	88	E11	Ⅳ	195.22	Ⅲ	頸部	良好	褐色	褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(3.5)	—	1462	
第26図	89	E10	Ⅳ	195.02	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(4.1)	—	1685	
	90	F9	Ⅲa	195.58	Ⅲ	胴部	良好	灰褐色	灰褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(4.4)	—	765	
	91	G3	Ⅲ	196.16	Ⅲ	胴部	良好	淡褐色	灰褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(2.6)	—	1983	
	92	D10	Ⅳ	195.43	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(3.8)	—	1222	
	93	E10	Ⅳ	195.05	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○	○		○		—	(3.4)	—	1645	
	94	D10	Ⅳ	195.18	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(2.6)	—	1218	
	95	H6	Ⅳ	196.83	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ			○		砂粒	—	(2.5)	—	2643	
	96	C10	Ⅳ	195.80	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	淡褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(2.4)	—	1688	
	97	H5	Ⅳ	196.58	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	沈線文	ナデ	ナデ			○		砂粒 雲母	—	(2.5)	—	2693	
	98	G10	Ⅲ	195.74	Ⅲ	胴部	良好	淡褐色	灰褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(2.3)	—	1384	
	99	H6	Ⅰ	196.52	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(2.7)	—	2710	
	100	F7	Ⅳ	196.64	Ⅲ	胴部	良好	褐色	灰褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(2.5)	—	2270	

第10表　縄文土器観察表（3）

挿図	遺物番号	出土区	層位	標高(m)	類	部位	焼成	外面色調	内面色調	文様	外面調整	内面調整	長石	石英	輝石	角閃石	その他	口径cm	器高cm	底径cm	注記番号	備考
第26図	101	C10	Ⅲb	195.60	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	灰褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(3.2)	—	1117	
	102	D10	Ⅲb	195.28	Ⅲ	胴部	良好	褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(1.5)	—	884	
	103			194.85	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(2.5)	—	315	
	104	E10	Ⅳ	195.38	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(3.7)	—	1622	
	105	L10	Ⅳ	195.16	Ⅲ	胴部	良好	褐色	赤褐色		ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(3.1)	—	1683	
	106				Ⅲ	胴部	粗	褐色	褐色	沈線文	ナデ	ナデ					砂粒	—	(2.1)	—	53?	
	107	E9	Ⅲa	195.71	Ⅲ	胴部	良好	茶褐色	灰褐色		ナデ	ナデ					砂粒	—	(4.5)	—	790	
	108	C10	Ⅲb	195.33	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(3.0)	—	922	
	109	C9	Ⅳ	194.97	Ⅲ	胴部	粗	赤褐色	褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(2.1)	—	1005	
	110	H6	Ⅳ	196.86	Ⅲ	頸部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○		○		砂粒	—	(2.3)	—	2641	
	111	F10	Ⅲ	195.68	Ⅲ	胴部	粗	黄褐色	黄褐色	列点文	ナデ	ナデ			○		砂粒 雲母	—	(2.6)	—	1359	
	112			196.07	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色		ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(3.3)	—	1985	
	113	G6	Ⅳ	196.87	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	突帯 沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(2.3)	—	2627	
	114	C9	Ⅲa	195.41	Ⅲ	胴部	良好	赤褐色	褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(5.3)	—	829	
第27図	115	C9	Ⅲa	195.38	Ⅲ	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	31.2	(18.0)	—	832	
	116	C9	Ⅳ	195.25	Ⅲ	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	列点文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(4.1)	—	979	
	117	E10	Ⅳ	195.18	Ⅲ	胴部	粗	赤茶褐色	赤褐色	沈線文	ナデ	ナデ		○		○	砂粒	—	(3.3)	—	1684	
	118	H3	Ⅲ	196.18	Ⅳ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文 撚糸文	ナデ	ケズリ	○	○			砂粒	—	(9.8)	—	1951	
	119	G3	Ⅲ	196.25	Ⅳ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文 撚糸文	ナデ	ケズリ	○			○	砂粒	—	(8.1)	—	1961	
	120	H3	Ⅲ	196.12	Ⅳ	胴部	良好	褐色	赤褐色	沈線文 撚糸文	ナデ	ケズリ	○				砂粒	—	(5.5)	—	1999	
	121	H3	Ⅲ	196.25	Ⅳ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	沈線文 撚糸文	ナデ	ケズリ	○				砂粒 雲母	—	(4.9)	—	1952	
	122	H3	Ⅲ	196.19	Ⅳ	胴部	良好	褐色	褐色	沈線文	ナデ	ケズリ	○				砂粒 雲母	—	(4.4)	—	1934	
	123	G3	Ⅲ	196.29	Ⅳ	胴部	良好	褐色	褐色	沈線文	ナデ	ケズリ	○		○		砂粒	—	(3.3)	—	1935	
	124	G3	Ⅳ	195.86	Ⅳ	胴部	良好	赤褐色	褐色	沈線文 撚糸文	ナデ	ケズリ		○			砂粒 雲母	—	(2.7)	—	2132	
	125	D9	Ⅳ	195.34	Ⅲ	底部	良好	褐色	灰褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(4.3)	—	1649	
	126	E11	Ⅲ	195.48	Ⅲ	底部	良好	褐色	褐色	沈線文 列点文	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(1.5)	—	1424	
	127	G3	Ⅳ	195.39	Ⅴ	胴部	良好	褐色	褐色		ナデ	ナデ		○	○		砂粒 雲母	—	(2.3)	—	2190	
	128	H9	Ⅳ	196.00	Ⅴ	底部	良好	赤褐色	褐色		ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(1.0)	11.8	1763	
	129	G4	Ⅳ	196.07	Ⅴ	底部	良好	褐色	褐色		ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(1.5)	—	2149	
	130	G4	Ⅳ	196.30	Ⅴ	底部	良好	褐色	褐色		ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(5.0)	—	2147	
第45図	131				Ⅵ	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	沈線文	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(4.1)	—	CD8	
	132	H9	Ⅳ	196.08	Ⅶ	胴部	良好	灰褐色	灰褐色		ナデ	ナデ	○	○	○		砂粒 雲母	—	(6.5)	—	1765	
	133	H9	Ⅳ	196.09	Ⅶ	胴部	良好	灰褐色	灰褐色		ナデ	ナデ	○		○	○	砂粒	—	(5.3)	—	1768	
	134	H9	Ⅳ	196.02	Ⅶ	胴部	良好	褐色	灰褐色		ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(10.0)	—	1808	
	135	H9	Ⅳ	195.94	Ⅶ	胴部	良好	褐色	灰褐色		ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(6.5)	—	1860	
	136				Ⅶ	底部	粗	赤褐色	赤褐色		ナデ	ナデ	○		○		砂粒	—	(3.0)	7.7		
	137			194.60	Ⅷ	胴部	良好	褐色	褐色		ミガキ	ミガキ	○				砂粒	—	(3.5)	—	302	
	138			194.58	Ⅷ	胴部	良好	灰褐色	褐色		ミガキ	ミガキ	○				砂粒	—	(2.5)	—	306	
	139			195.03	Ⅷ	胴部	良好	褐色	褐色		ミガキ	ミガキ	○				砂粒	—	(1.3)	—	311	



第46図　縄文時代石器等分布図

第６節　Ⅳ～Ⅲ層の石器

縄文時代の石器は，Ⅲ層およびⅣ層から出土している。ただ，2つの層はいずれも黄色を主体とした火山灰起源の土であり，掘り下げの段階で層の確定が難しかったこともあって，最終的に時期区分が一部不明確となっているため，一括して説明を行なうこととする。遺物は，基本的には早期および後期，晩期と考えられる。なお，磨製の石鏃も出土しているが，弥生時代の遺物はまったく出土していないため，縄文時代早期に該当するものと判断される。

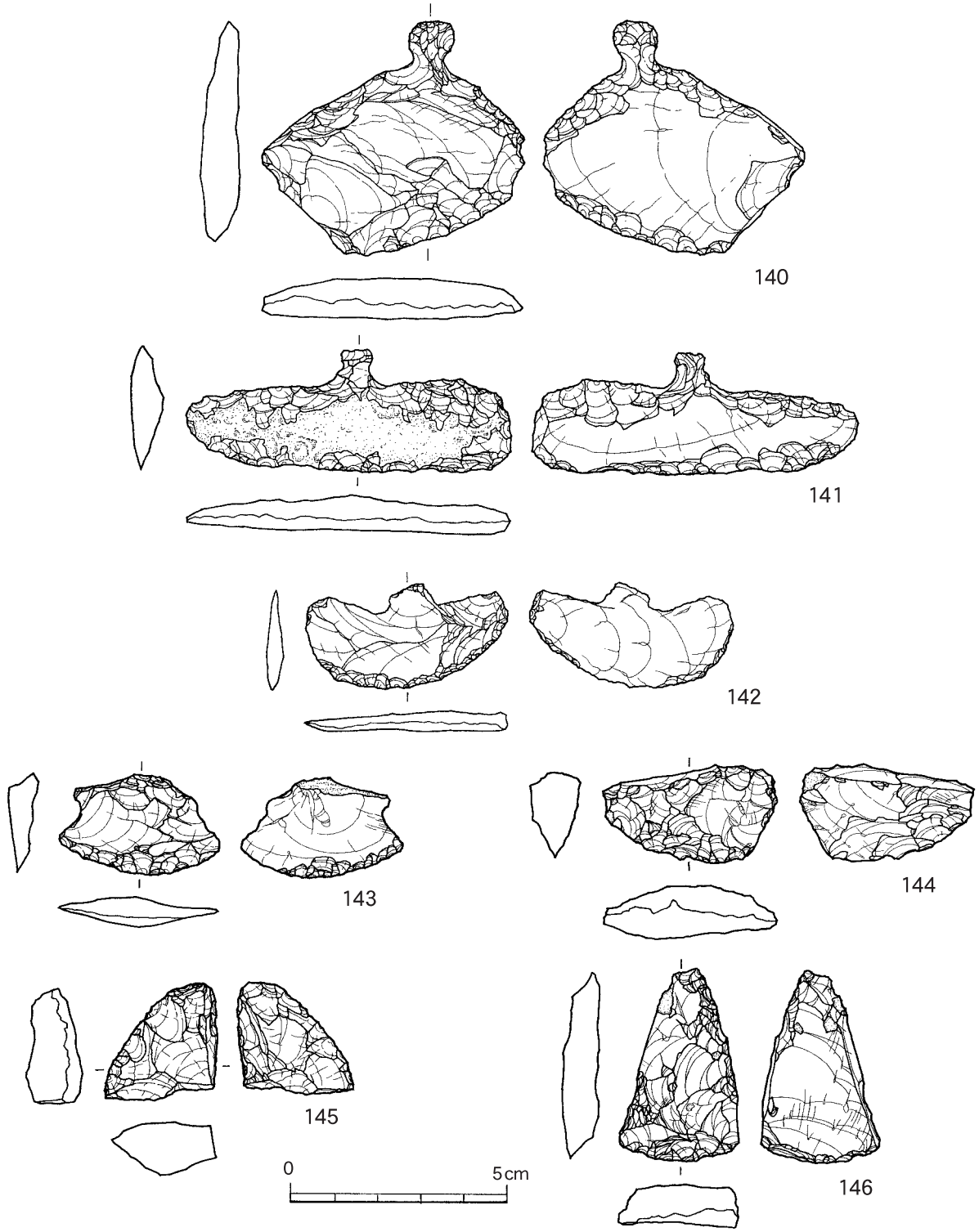
140～142は石匙である。140は全長が5.4㎝，最大幅が6.1㎝，最も厚い部分で0.9㎝あるもので，つまみの部分もしっかりと作り出している。141･142はいずれも横型のものである。141が直線的な形状でつまみを作り出しているのに対して，142は若干弧状を描き，つまみ部も不明瞭である。

143～146はスクレイパーである。143・144は基部を厚く取り，基部と逆の方向を鋭く作り出して刃部としている。145･146は全体的にやや厚手であり，一側面を弧状に作って刃部を形成している。

147～161は石鏃である。147は基部の抉りが幅の割に深く，半円形となる。148も形状は147と似ているが，前者の方が大型で，直線的と言える。149～151は基部の抉りが深く，長脚気味の鏃である。149と150は脚が弧状となるのに対して，151は直線的である。152～156は基部が凹基となるものである。147～151に比べて抉りの度合いが小さい。全体的な形状も，小さく，正三角形に近いもの（154）から，非常に長い二等辺三角形となるもの（156）までバリエーションが豊富であることにより，時期差のあることが考えられる。157は基部が欠損するため類別はできない。ただ，凸基となるものは本遺跡では他に出土していないことから，凸基式とは考えられず，脚部の折損した凹基式である可能性が高い。158は平基式の三角鏃であろう。159は五角形鏃である。表採資料であるが，全長が3.4㎝，最大幅は1.9㎝，厚さが0.5㎝あるものである。160は表面がツルツルしているものである。161は磨製の石鏃である。弥生時代のものは全長が相当に長いが，この遺物は1.7㎝と短いことも含めて，早期に位置付けられると思われる。

163は磨製石斧の刃部の欠損したものである。刃部角が70度程であることから，蛤刃の石斧に分類されよう。162は礫石器である。基部と考えられ，刃部が欠損しているものと思われる。164～166は剥片石器に分類されると考えられるもので，1～２方向に簡単な加工が施され，刃部となっている。167は一面が平らで擦痕が顕著であり，石材が割合に柔らかめの砂岩であることから砥石と考えられる。171も167よりは厚手ではあるものの，擦痕や石材が砂岩であることから，砥石であろうと考えている。168および169は磨石としても使用された敲石であり，磨石兼用の敲石と言える。168は完形品であるが，169は一部欠損している。いずれも，平たい面の側辺を部分的に敲打されている。170は平たい面が二面ともよく磨られていることから，石皿の破損したものと考えられる。

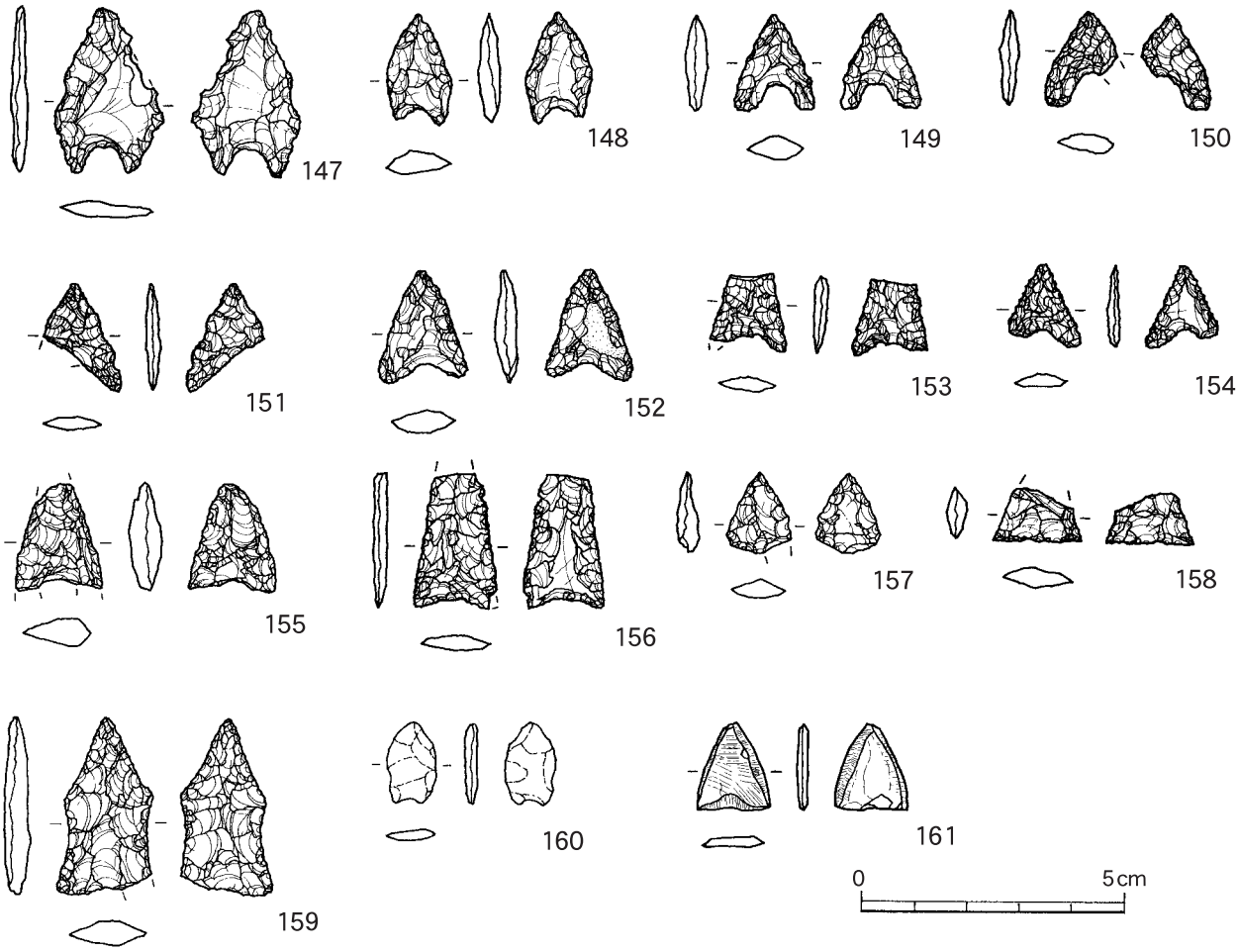
172～175はいずれも大型の石器である。擦痕の著しいものは石皿と考えられるが，それの見られないものは台石として使用されたものと考えられる。172と175は石皿，173と174は台石であり，石材はいずれも安山岩である。重量も10～17kg 程あり，重い。172は長軸・短軸共に30㎝ を越すもので，厚さも９㎝ある。台石としても使用されており，一面に敲打によると考えられる数多くの割合に大きな剥落が見られる。175は両面に敲打による極めて小さな穴が多数見られることから，石皿としての使用に増して，台石としての利用頻度の高かったことが想像される。173は台石に分類したが，一部に擦痕も見られる。裏面は安定させるために打ち欠いた跡が残る。175は４点の中では最も小型



第47図　石　　器 (1)

であるが，破損していることも考えられ，本来はもっと大きかったものとも考えられる。擦痕や小規模な剥落も見られることから，石皿・台石両用の使い方が考えられる。

176～179は石皿の破損したものである。176は底面が安定した平底となるもので，使用面は広く大きく窪んでいる。面取りされており，本来は長方形となる規格的に整えられたタイプである。県内

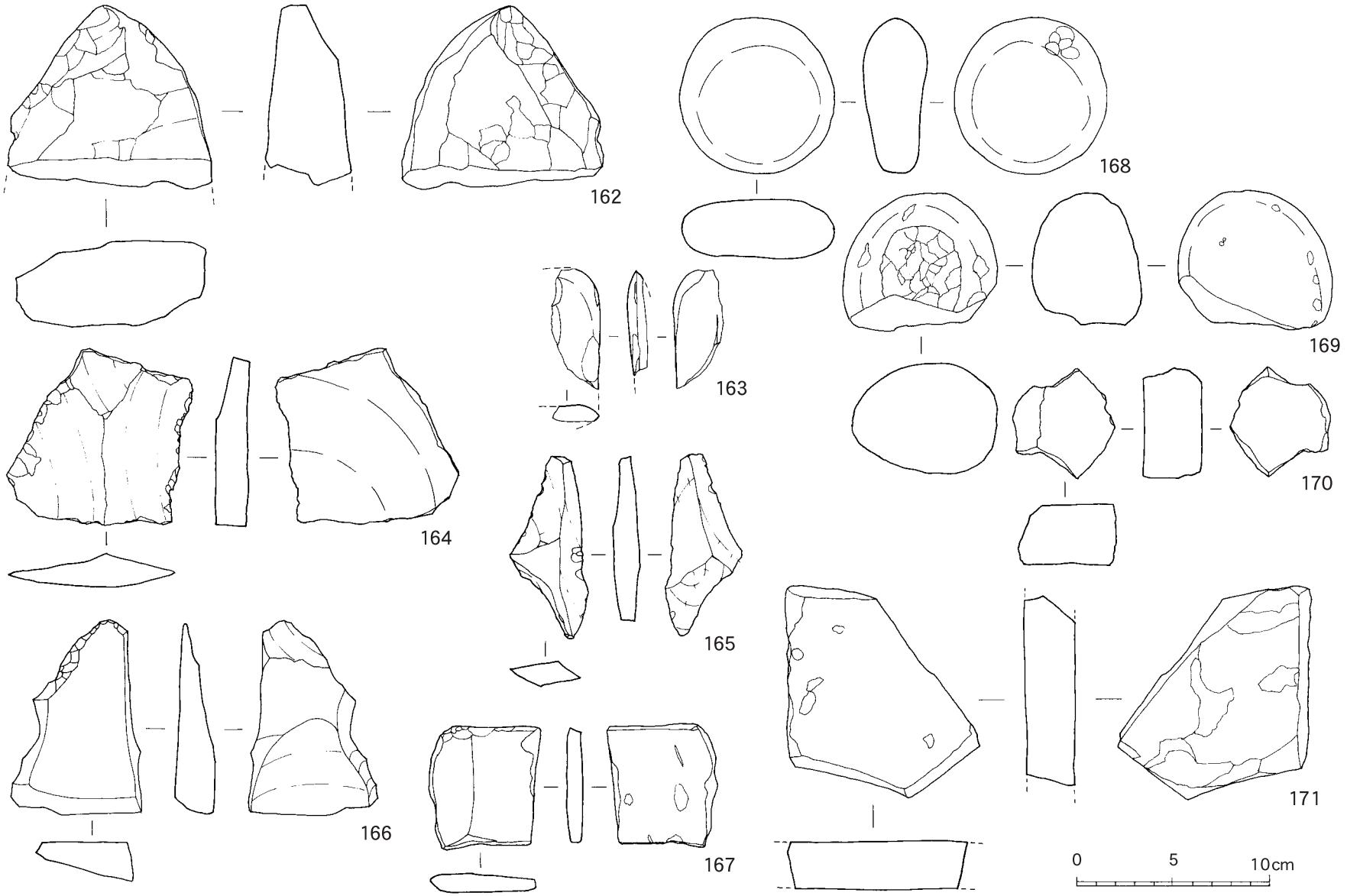


第48図　石　　器 (2)

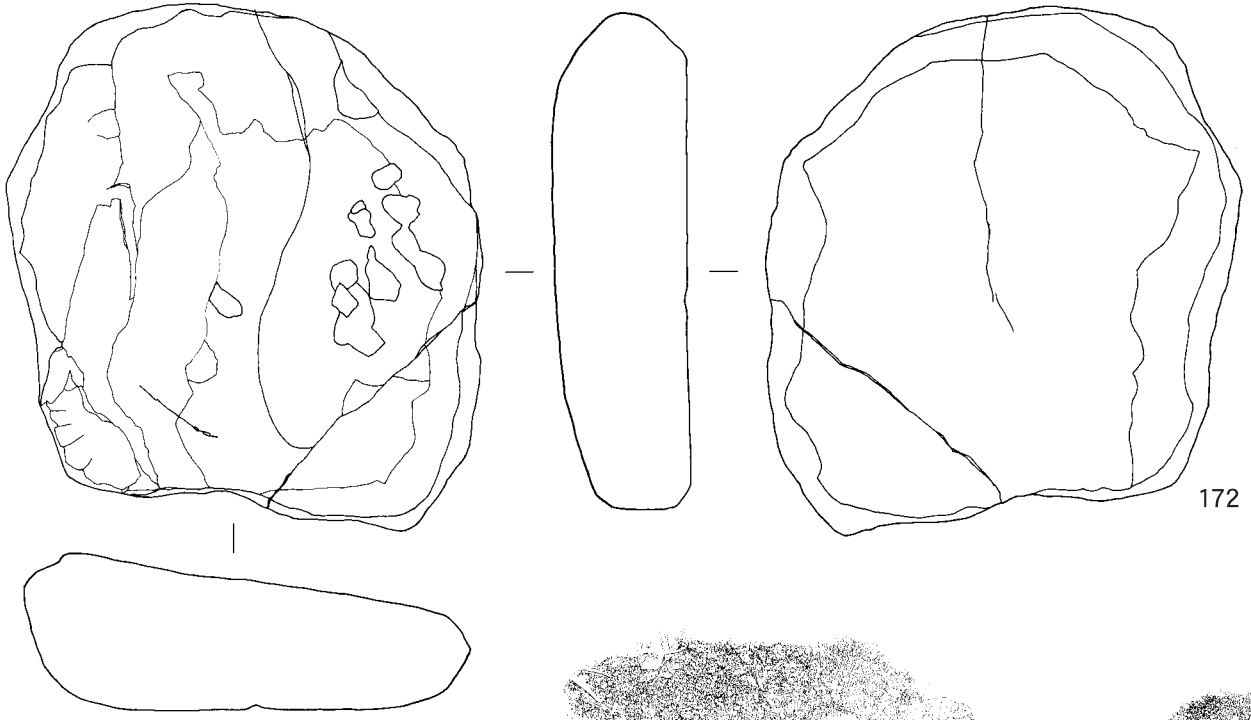
の他の遺跡からの出土例から考えると，縄文時代早期のものとして大過ないであろう。177～179は石皿としての使用のほか，敲打による剥落も見られることから，台石としても使用されている。

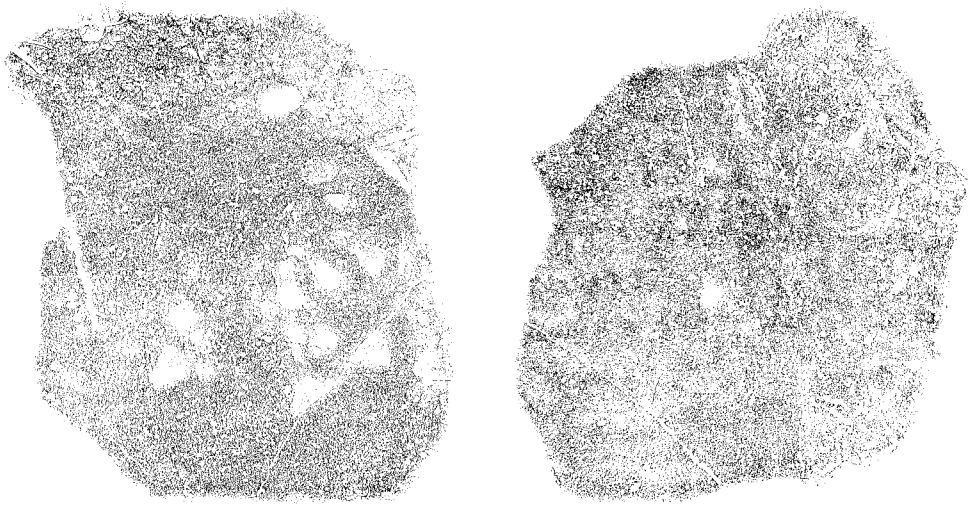
本遺跡で使用されている石器の石材は，石匙やスクレイパー，石鏃などに黒曜石が使われているほか，石斧には頁岩，砥石には砂岩，石皿や台石には安山岩がそれぞれ中心的に使用されている。このことから，適材を適所に用いているだろうことが容易に想像されるのである。しかし，黒曜石一つとってみても，本遺跡が所在する松元町には原産地は確認されていないことから，近隣地域などから持ち込まれたことになる。本遺跡出土の黒曜石の中で，最も近い黒曜石の原産地は日置郡市来町の平木場であるが，そこに隣接する薩摩郡樋脇町の上牛鼻からも，成分などの極めて類似した黒曜石が産出するため何れからの産出か決めかねるものの，同様な黒曜石は一般的に上牛鼻産としてとらえられることが多いため，ここでも一応そう考えておきたい。そのほかの産地としては，長崎県の針尾原産のもの，それに佐賀県の腰岳原産のものと推定されている。

そのほかの頁岩・砂岩・安山岩については明確ではないものの，おそらく遺跡周辺で調達されたものが多いと考えられ，一部に遠方から招来されたものもあるかも知れない。今後，検討していく必要がある。

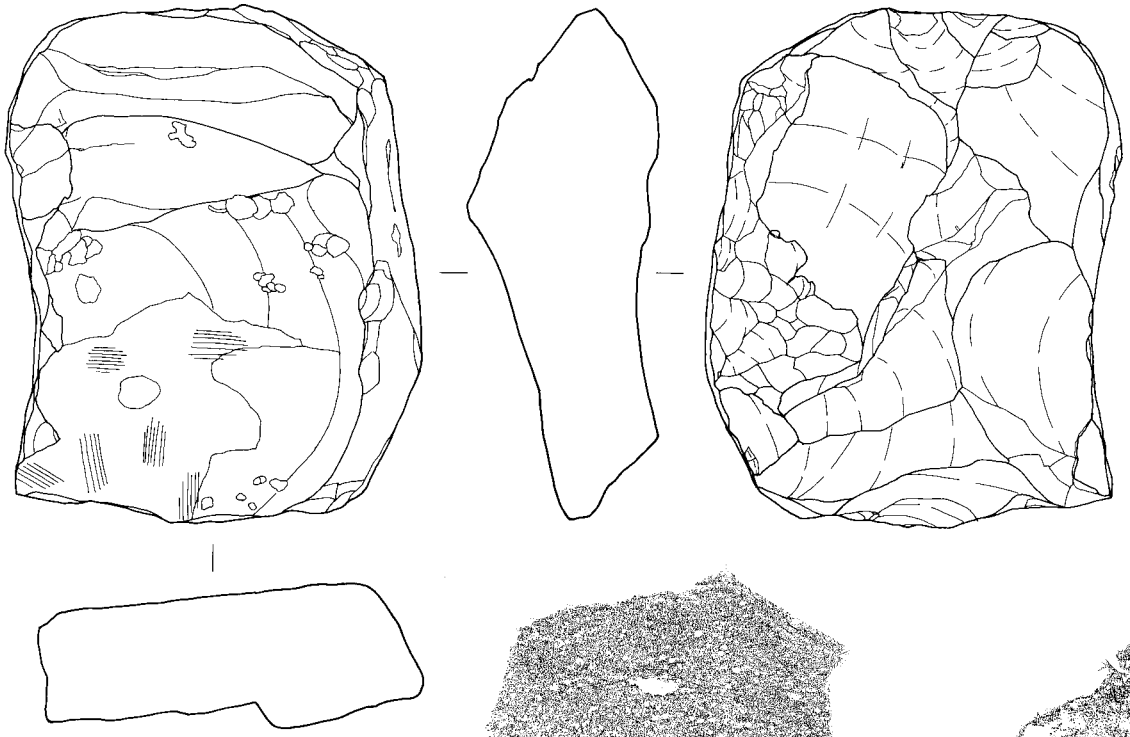


第49図　石　　器　(3)





第50図　石　　器 (4)



173

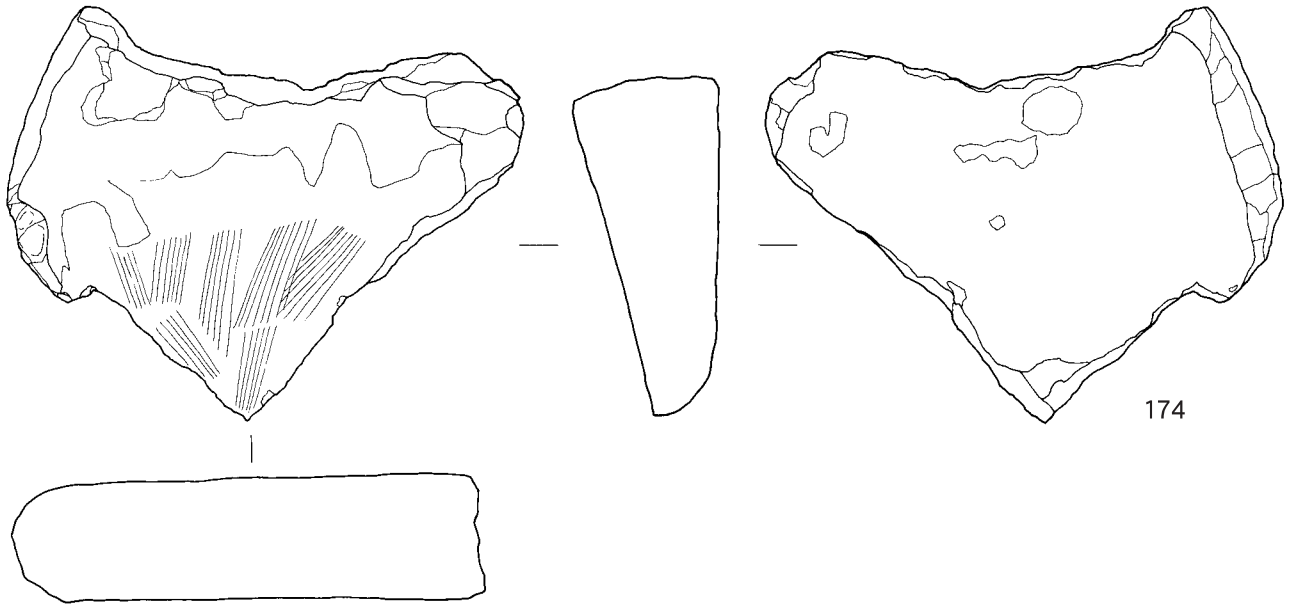


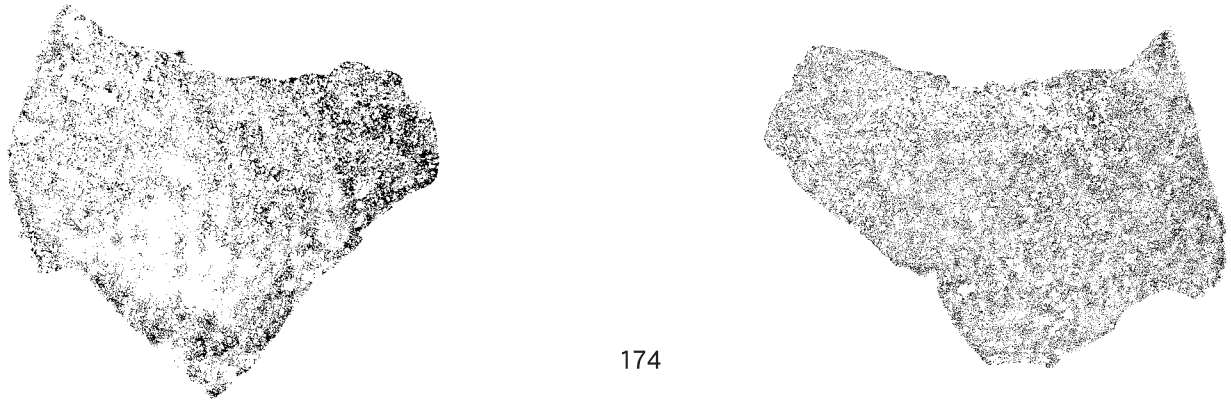


173

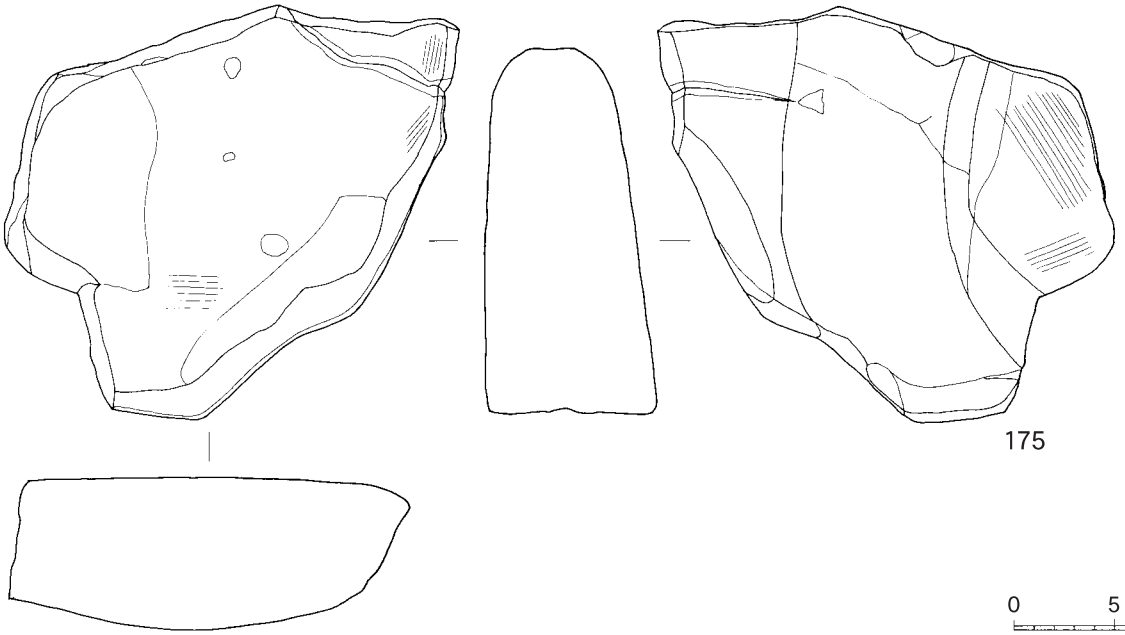
0 5 10cm

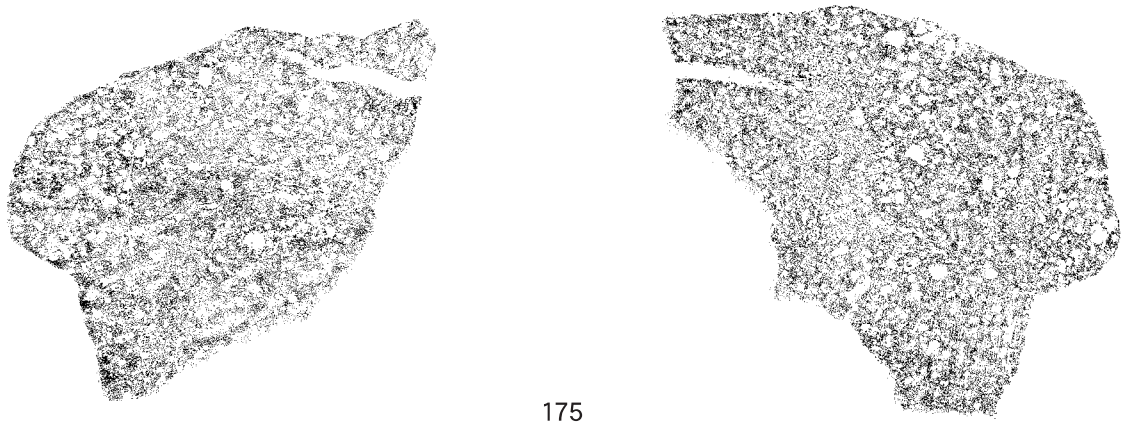
第51図　石　　器 (5)



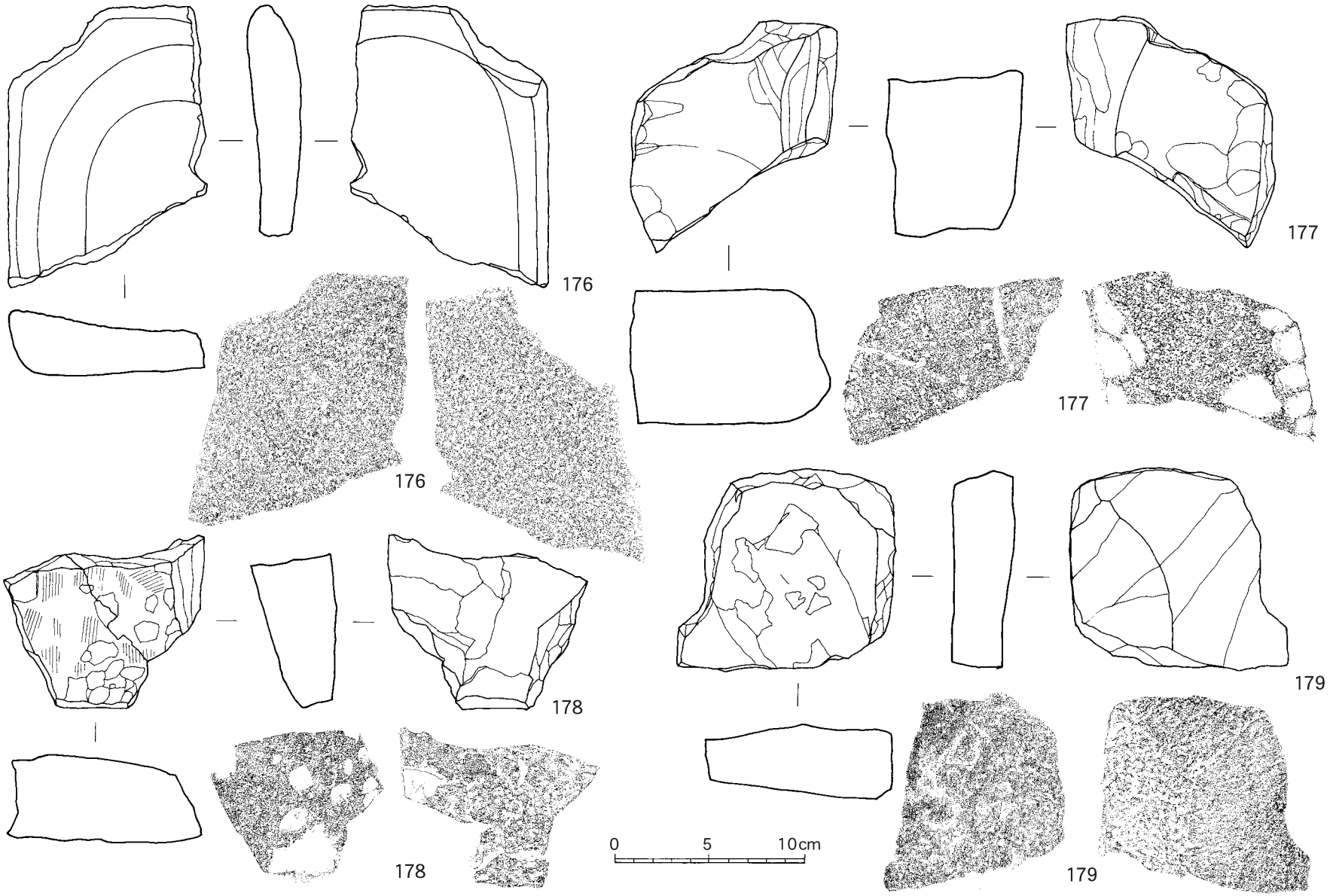


第52図　石　　器 (6)





第53図　石　　器 (7)



第54図　石　　器 (8)

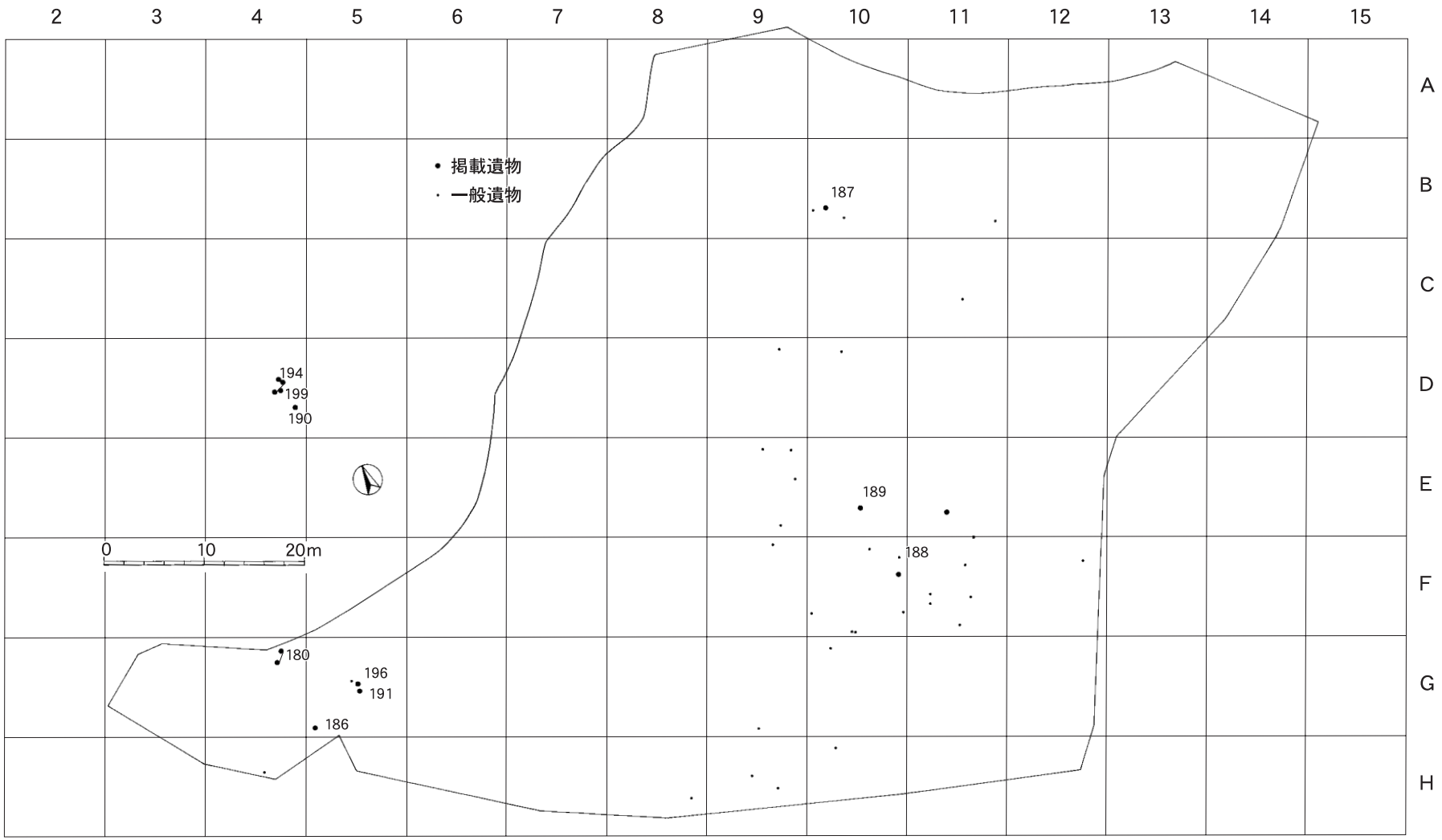
第11表　石器観察表

挿 図	遺物番号	出土区	層位	標高(m)	器　種	石　材	全長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	注記番号	備　考
第17図	1	D10	Ⅶa		三稜尖頭器	黒曜石	4.1	1.3	1.2	4.00	2100	上牛鼻
第47図	140	E11	Ⅰ	195.19	石匙	頁岩	5.4	6.1	0.9	26.46	2400	
	141	G11	Ⅲ	195.46	石匙	ハリ質安山岩	2.8	7.6	0.8	15.13	1739	
	142	D9	Ⅳ	195.37	石匙	ハリ質安山岩	2.4	4.7	0.4	4.73	1000	
	143	C10	Ⅲa	195.51	スクレイパー	黒曜石	2.3	3.7	0.7	4.69	904	灰色
	144	E11	Ⅱ	195.67	スクレイパー	黒曜石	2.3	4.0	1.1	10.87	2573	上牛鼻
	145	C11	Ⅳ	194.88	スクレイパー	ハリ質安山岩	2.6	2.7	1.3	8.68	1172	
	146	E11	Ⅲ	195.57	スクレイパー	黒曜石	4.5	2.8	0.9	11.13	676	上牛鼻
第48図	147	G6	Ⅳ	196.36	石鏃	黒曜石	3.2	2.1	0.3	1.54	2278	凹基 針尾
	148	C11	Ⅳ	193.83	石鏃	ハリ質安山岩	2.1	1.2	0.4	0.97	100	凹基
	149	H4	Ⅳ	196.26	石鏃	ハリ質安山岩	1.8	1.6	0.4	0.74	2146	凹基
	150	G4	Ⅳ	196.48	石鏃	黒曜石	(1.9)	(1.3)	(0.3)	(0.63)	2029	凹基 上牛鼻
	151	B10	表	194.94	石鏃	黒曜石	(2.0)	(1.5)	(0.3)	(0.46)	280	凹基 針尾
	152	B9	表		石鏃	黒曜石	2.1	1.7	0.4	1.08		凹基 上牛鼻
	153	D11	Ⅳ	195.09	石鏃	黒曜石	(1.5)	(1.5)	(0.2)	(0.50)	1178	凹基 腰岳
	154	C10	Ⅰ	195.42	石鏃	黒曜石	(1.6)	(1.4)	(0.2)	(0.37)	900	凹基 針尾
	155	C11	Ⅳ	194.53	石鏃	黒曜石	(2.1)	(1.7)	(0.6)	(1.68)	1253	凹基 腰岳
	156	G11	Ⅲa	195.74	石鏃	黒曜石	(2.6)	(1.6)	(0.3)	(1.23)	551	凹基 腰岳
	157	G12	Ⅳ	192.77	石鏃	黒曜石	(1.6)	(1.2)	(0.4)	(0.56)	69	凹基? 上牛鼻
	158	D11	Ⅳ	194.99	石鏃	黒曜石	(1.0)	(1.7)	(0.4)	(0.53)	1627	平基 灰色
	159	E8	表		石鏃	チャート	(3.4)	(1.9)	(0.5)	(2.69)		五角形鏃
	160	2T9			石鏃	めのう	1.5	1.0	0.2	0.41		
	161	C9	Ⅲa	195.48	磨製石鏃	頁岩	1.7	1.4	0.2	0.52	800	(粘板岩)?
第49図	162	G11	Ⅴ	196.18	礫器	安山岩	(9.5)	(10.7)	(4.6)	(500)	1758	
	163	F6	Ⅲ	195.45	磨製石斧	頁岩	(6.4)	(2.4)	(1.0)	(20)	2282	刃部先端
	164	F10	Ⅳ	195.47	剥片石器	安山岩	8.8	9.6	1.7	170	1525	
	165				剥片石器	安山岩	10.3	6.8	2.1	115		
	166	H8	Ⅳ	196.96	剥片石器	安山岩	9.3	4.0	1.4	32	2657	
	167	G3	Ⅲ	196.36	砥石	砂岩	7.5	5.8	0.8	60	1947	
	168	G11	Ⅴ	195.28	磨石・敲石	安山岩	8.2	8.0	3.3	290	1785	
	169			194.24	磨石・敲石	安山岩	(7.2)	(7.9)	(5.8)	(400)	338	
	170			193.33	石皿?	安山岩	(5.8)	(5.2)	(3.1)	(130)	298	
	171	H11	Ⅳ	194.86	砥石	砂岩	(11.2)	(10.2)	(2.7)	(420)	1869	

挿 図	遺物番号	出土区	層位	標高(m)	器　種	石　材	全長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	注記番号	備　考
第50図	172	F10	Ⅳ	195.64	石皿	安山岩	35.3	31.8	9.1	17.70	1505	
第51図	173			195.31	台石	安山岩	34.8	27.8	12.5	17.30	1586	
第52図	174	H9	Ⅳ	195.96	石皿	安山岩	27.6	30.5	10.2	12.40	1748	
第53図	175				台石	安山岩	27.7	34.6	10.0	10.40	2300	
第54図	176	D10	埋土	194.76	石皿	安山岩	20.1	14.1	3.7	1.42	2173	
	177	D10	埋土	194.89	石皿	安山岩	16.5	14.7	9.7	3.00	2172	
	178	G10	Ⅳ	195.98	石皿	安山岩	12.3	13.8	6.2	1.12	1833	
	179	E11	Ⅲ	195.47	石皿	安山岩	14.3	15.5	4.5	1.70	1332	


掘立柱建物跡
道　跡
溝　跡
焼土域
畝　跡
土器集中遺構
0
10
20m
A
B
C
D
E
F
G
H
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14

第55図　遺構全体図 (2)



第56図　古墳時代土器分布図

第７節　Ⅲ層の調査　（２）　古墳時代

古墳時代の調査では，Ⅲ層の包含層から遺物は出土したものの，遺構は検出されなかった。

○　遺　物

古墳時代の遺物としては，46点ほどが出土したが，図化できるものは極めて少数であった。甕形土器のみ図化が可能であり，合計21点を掲載している。

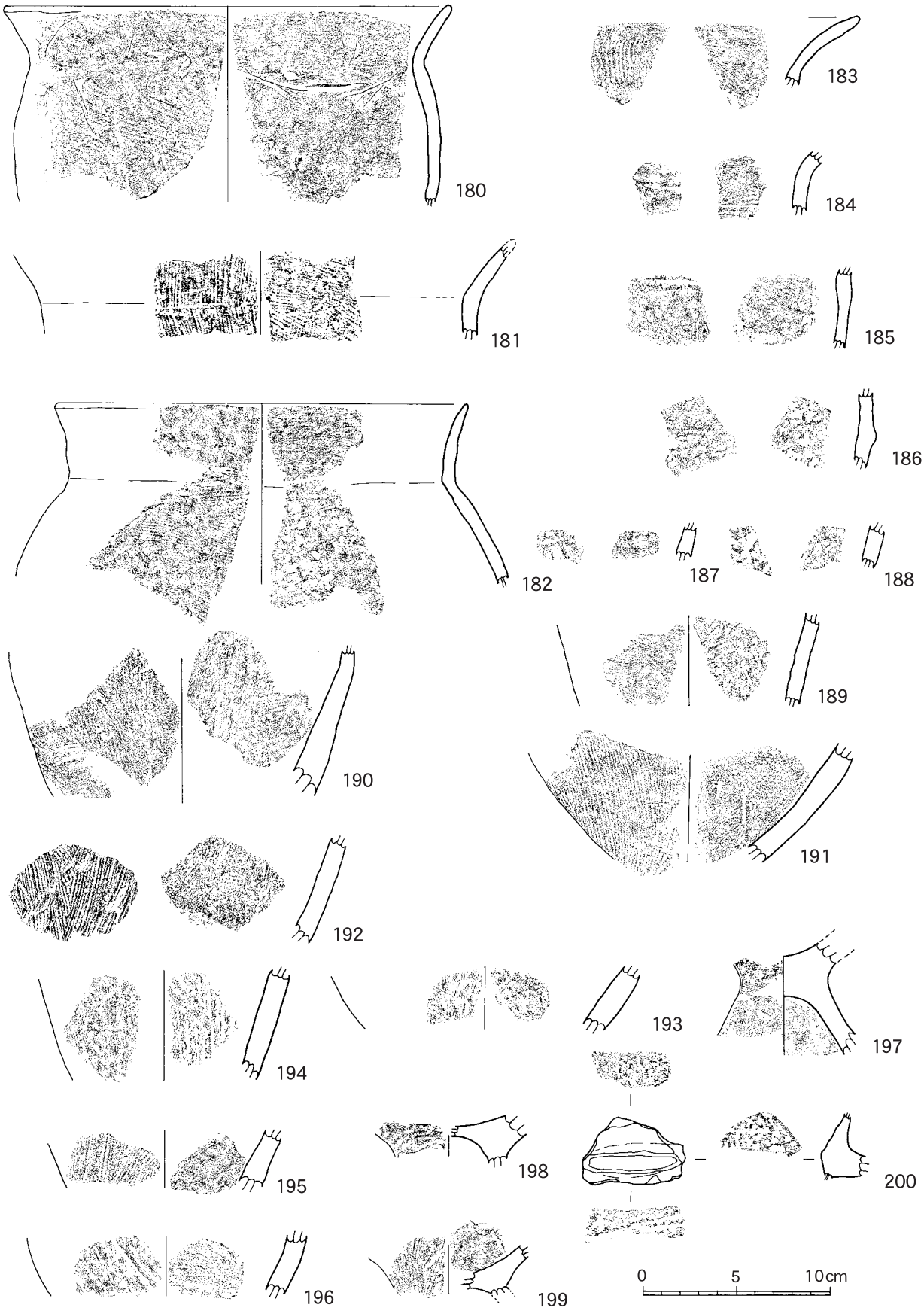
180～183は口縁部である。４点とも焼成は良好で，内外面ともハケナデが施されている。 色調は褐色をベースに明～暗褐色までと幅が広い。胎土には長石，石英，砂粒を含む。180と182は，頸部に突帯のないタイプである。また180は，口径が22.1㎝で内面には指頭圧痕が残っている。頸部は強く外反し，口唇部は先端までほとんど厚みが変わらず丸く収まっている。181は，口唇部が欠損している。頸部は強く外反し，内面には稜線が見られる。外面には頸部にハケの基点の痕跡が見られる。頸部から口縁部に向かってハケでかき上げて調整している手法がうかがえる。182は口径が20.5㎝で，口径より胴部最大径が大きい形態である。頸部は強く外反し，内面には鈍い稜線が見られる。外面は横方向のハケナデで調整している。またススも付着している。183は，口縁部が大きく開きながら外反している。内面は右下から左上へ，外面は上から下にかけてはハケナデが施されている。

184～186は頸部である。色調は黒褐色～明褐色を呈している。胎土には長石，石英，角閃石，砂粒を含む。３点とも表土からの出土であり，184と185は焼成が良好である。184は，強く外反し，外面は屈折したところから下部にかけて斜方向にハケによる調整がほどこされている。185は，上部に向かって厚みが厚くなっている。外面はハケ調整のあとにナデにより調整されている。またススの付着も見られる。186は，外面に幅が約１㎝の突帯が貼りつけてある。刻みは見られない。焼成は粗で，内外面ともナデ調整されている。

187～196は胴部である。色調は褐色を中心に赤褐色，黄褐色，黒褐色を呈している。胎土には長石，石英，角閃石，砂粒，雲母を含む。187と190以外は焼成が良好である。187，188は小破片で，共に内外面がナデ調整されている。189は，胴部が直線的に底部につながっている。外面は横方向にハケナデが施されている。またススも付着している。このことから胴部の上半部分ではないかと考えられる。190は，焼成が粗く，内外面ともハケによる調整が施されている。191は，外面を縦方向にハケによる丁寧なナデで仕上げられている。また，内面下部にはススが付着している。192～196は，胴部の下半部分で，196以外は外面が縦方向にハケナデによる調整が行われている。194は，胴部が直線的に底部にのびている。196は，外面に粗いケズリを施している。

197～199は底部から脚台にかけての部分である。色調は褐色，暗褐色を呈している。胎土には長石，石英，角閃石，砂粒，雲母を含む。198と199は底部と脚部の接合部で破損している。197と198は焼成が粗でもろいため調整痕が摩耗している。脚部内面の天井部の形態に着目すると，197と198は天井部が丸いものと推定される。

200は把手である。色調は内外面とも黄褐色を呈し，胎土には輝石，角閃石，砂粒，雲母を含む。把手から上部の器壁が薄いことから口縁部近くに取り付けられていたと考えられる。全体の形状は不明であるが，本遺跡出土品の中では他に類例が見られず，流入品かとも考えられる。



第57図　古墳時代の土器

第12表　古墳時代土器観察表

挿図	遺物番号	出土区	層位	標高(m)	部 位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	長石	石英	輝石	角閃石	その他	口径cm	器高cm	底径cm	注記番号	備考
第57図	180	T1			口縁部	良好	茶褐色	茶褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ		○			砂粒	22.1	(10.0)	—		
	181	西地区南	Ⅰ		口縁部	良好	暗褐色	茶褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ	○				砂粒	—	(4.3)	—		
	182	西地区南	Ⅰ		口縁部	良好	黒褐色	明褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ		○			砂粒	20.5	(9.1)	—		外スス
	183	西地区	表		口縁部	良好	暗褐色	茶褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ	○	○			砂粒	—	(3.4)	—		
	184	西地区南	Ⅰ		頸部	良好	黒褐色	明褐色	ハケ目 ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(3.0)	—		
	185	西地区南	Ⅰ		頸部	良好	黒褐色	褐色	ハケ目 ナデ	ナデ					砂粒	—	(3.8)	—		外スス
	186	G5	Ⅰ	196.80	頸部	粗	褐色	褐色	ナデ 突帯	ナデ	○	○			砂粒	—	(3.8)	—	1967	
	187			195.00	胴部	粗	褐色	暗褐色	ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(1.5)	—	279	
	188	F10	Ⅲ	195.45	胴部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ					砂粒 雲母	—	(1.5)	—	1430	
	189	E10	Ⅳ	195.25	胴部	良好	黒褐色	暗褐色	ハケ目 ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(4.6)	—	1589	外スス
	190			188.32	胴部	粗	赤褐色	暗褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ	○				砂粒 雲母	—	(7.2)	—	351	
	191	G5	Ⅳ	196.37	胴部	良好	褐色	暗褐色	ハケ目 ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(6.1)	—	2157	
	192	南	表		胴部	良好	赤褐色	暗褐色	ハケ目 ナデ	ナデ					砂粒	—	(5.2)	—		
	193	西地区南	Ⅰ		胴部	良好	褐色	黒褐色	ハケ目 ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(2.8)	—		
	194	E11	Ⅳ	194.83	胴部	良好	褐色	暗褐色	ハケ目 ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(5.5)	—	1582	内スス
	195	G5	Ⅲ	196.50	胴部	良好	褐色	黒褐色	ハケ目 ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(2.6)	—	2075	
	196	南	表		胴部	良好	褐色	暗褐色	ケズリ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(2.7)	—		
	197			187.39	底部	粗	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○			○	砂粒 雲母	—	(6.0)	—	365	
	198				底部	粗	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				—	(2.5)	—		
	199	西地区	表		底部	良好	褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(2.3)	—		
	200				把手	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ			○	○	砂粒 雲母	—	(3.3)	—		

第８節　Ⅱ層の調査　（１）　古代

古代の調査では，遺構として掘立柱建物跡と土器集中遺構が検出された。また，遺物として甕や坏・埦などの多くの土師器を始め，須恵器も出土した。

１　遺　構

掘立柱建物跡は，Ｆ－10区で検出された。Ⅲ層面でピットが並んで確認され，ほかにピットが見つからず，埋土が黒色土ないしは暗褐色土であったことから古代または中世の建物跡と推定された。最終的な時期判断は，ほかには中世の遺構が全くないことと，遺物も見られなかったこと，さらに，近接した土器集中遺構の埋土がピットのそれと同一であり，そこから出土した遺物が古代の土師器であったことから，古代の遺構と考えるのが相応と判断した。

建物跡は，梁間２間，桁行３間で，北側の中央の柱を欠いている。梁間も桁行も柱間が一定しておらず，柱筋も整っていない。柱穴の直径は16～37㎝と幅があるものの，大まかには30㎝程度にまとまっている。深さは11～44㎝とバラツキが大きい。これは，削平を受けた可能性を示しているといえよう。柱穴の形状も段掘りされているもの，斜めに掘られているものなどがあるが，基本的には真っすぐな一段掘りと言える。

検出した柱穴から考えられる上屋は，柱筋の通りの悪さと位置のズレなどから，高床の建物は考えにくいように思われる。そうすると，平地式で板壁の巡る建物ということになりそうである。そう考えれば，柱筋の悪さと位置のズレ，柱穴の深さが削平を受けていないことが事実であっても，説明がつくことになると思われる。

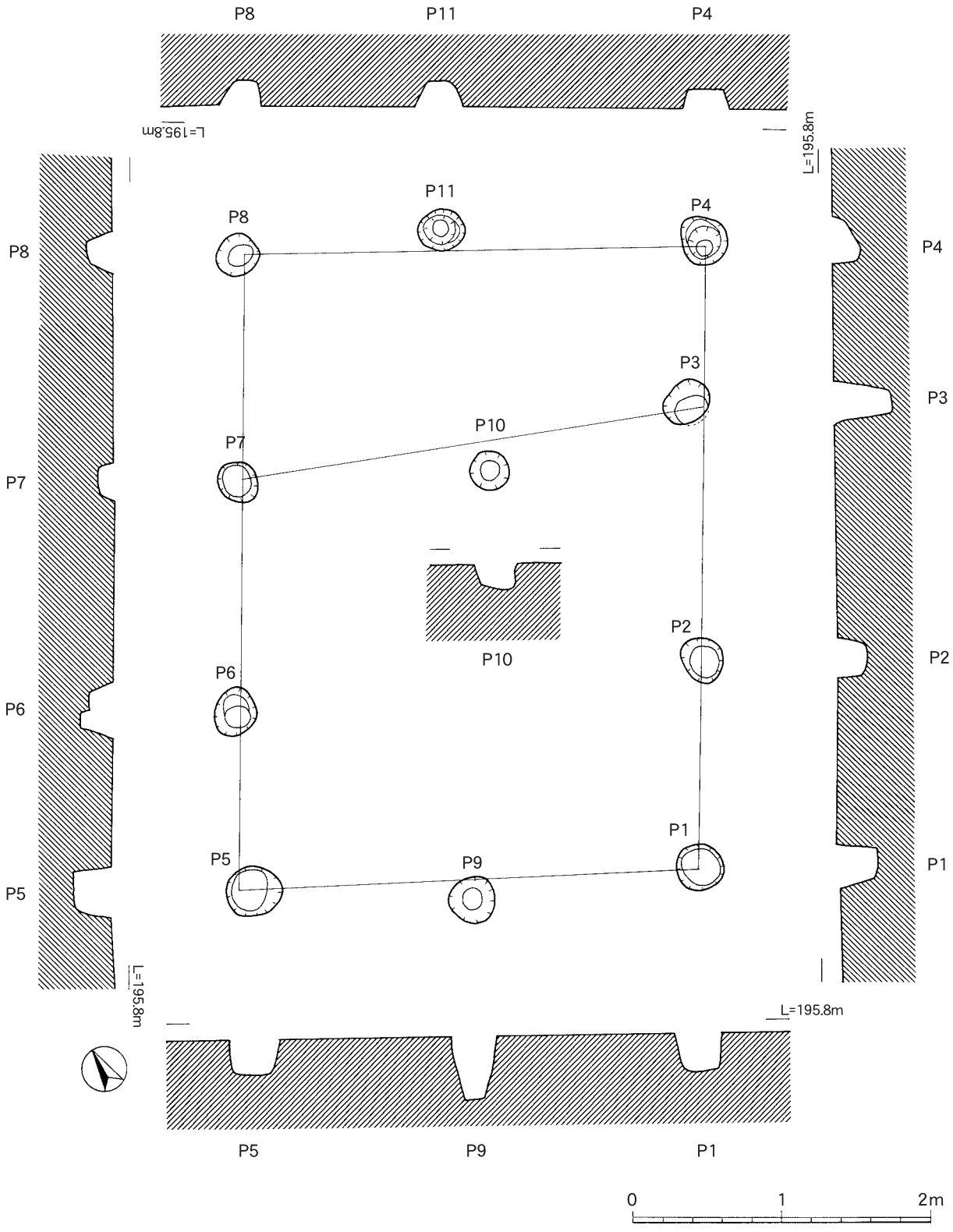
土器集中遺構は，Ｇ－11区で検出された。長径149㎝，短径80㎝以上，深さ34㎝の楕円形と推定される土坑中から，完形品に復元できる土師器の甕２点がまとまって出土した。埋土は黒色土ないしは暗褐色土であり，出土した土師器も古代のものであったことから，本遺構も古代のものと判断した。土坑の中には石も出土しており，それぞれの土器の破片がある程度のまとまりを持ち，近隣どうしで接合したことから，使用の後に意図的に破壊して遺棄された遺構と考えられる。

本遺構から出土した遺物は，土師器の甕が２点である。201は口縁径26.3㎝，残存高さ25.5㎝の中型の甕である。内外面とも赤褐色を呈し，胎土に石英，輝石，角閃石と砂粒を含み，焼成は良好である。調整は，外面はヘラケズリとナデ，内面はナデである。使用により，ススの付着も見られる。202は小型の甕である。口縁径が14.2㎝，残存高さは12.2㎝である。胎土に石英，輝石，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，外面が褐色，内面は淡褐色を呈する。調整は，外面・内面共にヘラケズリとナデである。

２　遺　物

遺物は，本遺跡の東側，Ｅ・Ｆ・Ｇ－11区，Ｆ－10区に集中して出土する傾向が見られるほかは，ほぼ中央部のＦ・Ｇ－６・７区に若干散布が見られる程度である。本遺跡の東側には土器集中遺構もあったほか，台地の尾根部で桜島が眺望できる景観の良い場所であり，掘立柱建物跡との関係からも注目に値すると言えよう。

203～256は土師器の甕または鉢である。203は口縁径が26.3㎝，残存高さが10.8㎝ある鉢と考えられる。胎土に石英，輝石，砂粒を含み，焼成は良好である。204は頸部から胴部にかけての甕である


P8
P11
P4
L=195.8m
P8
P11
P4
P3
P10
P7
P2
P10
P6
P1
P5
P9
P8
P4
P3
P7
P2
P6
P1
P5
L=195.8m
L=195.8m
P5
P9
P1
0
1
2m

第58図　掘立柱建物跡

第13表　掘立柱建物跡計測表

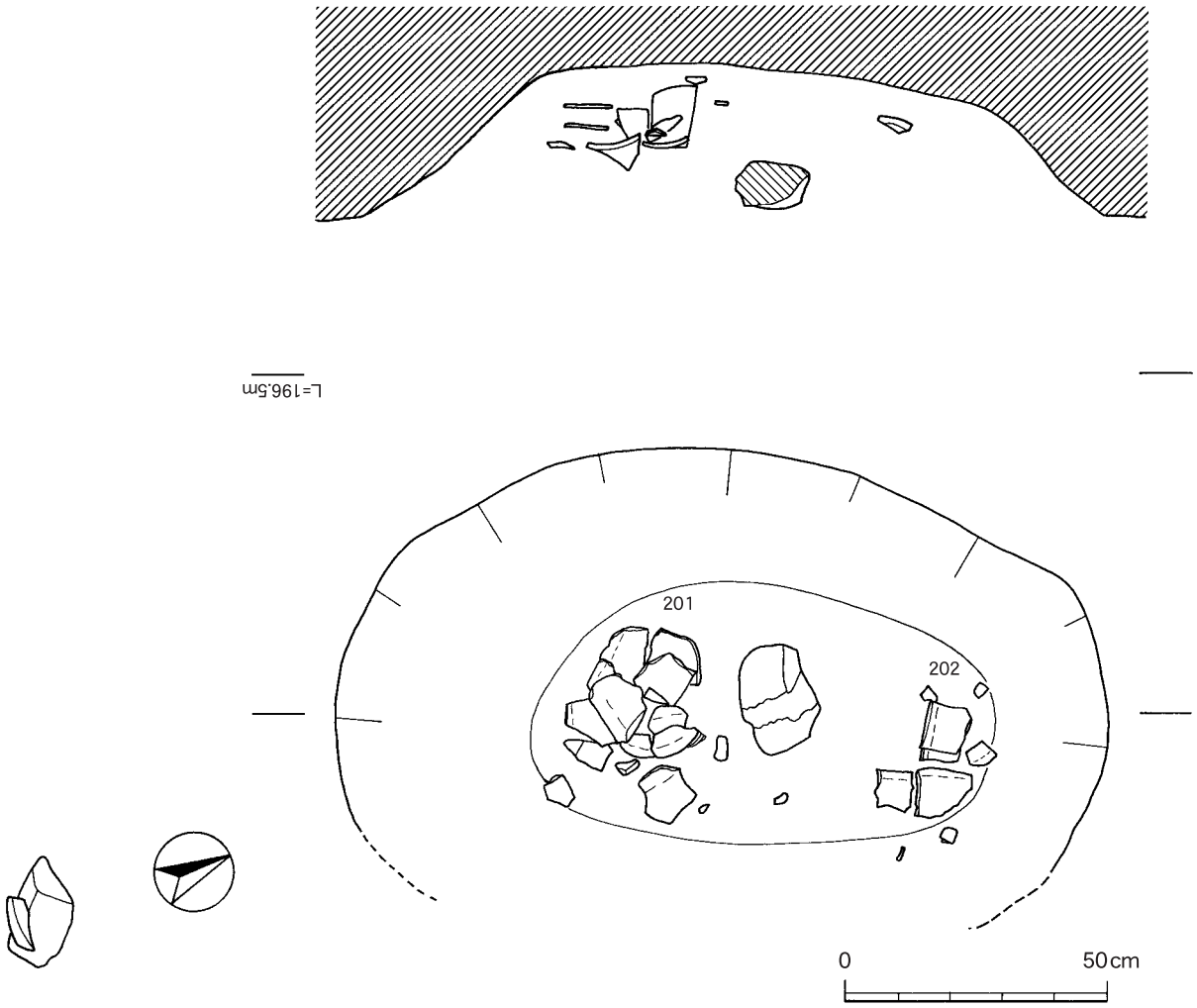
柱穴番号	長径cm	短径cm	深さcm
1	33	29	23
2	28	27	20
3	32	30	40
4	33	30	15
5	37	34	26
6	33	26	21
7	26	25	11
8	19	18	16
9	33	32	44
10	17	16	19
11	32	29	20

梁　　間

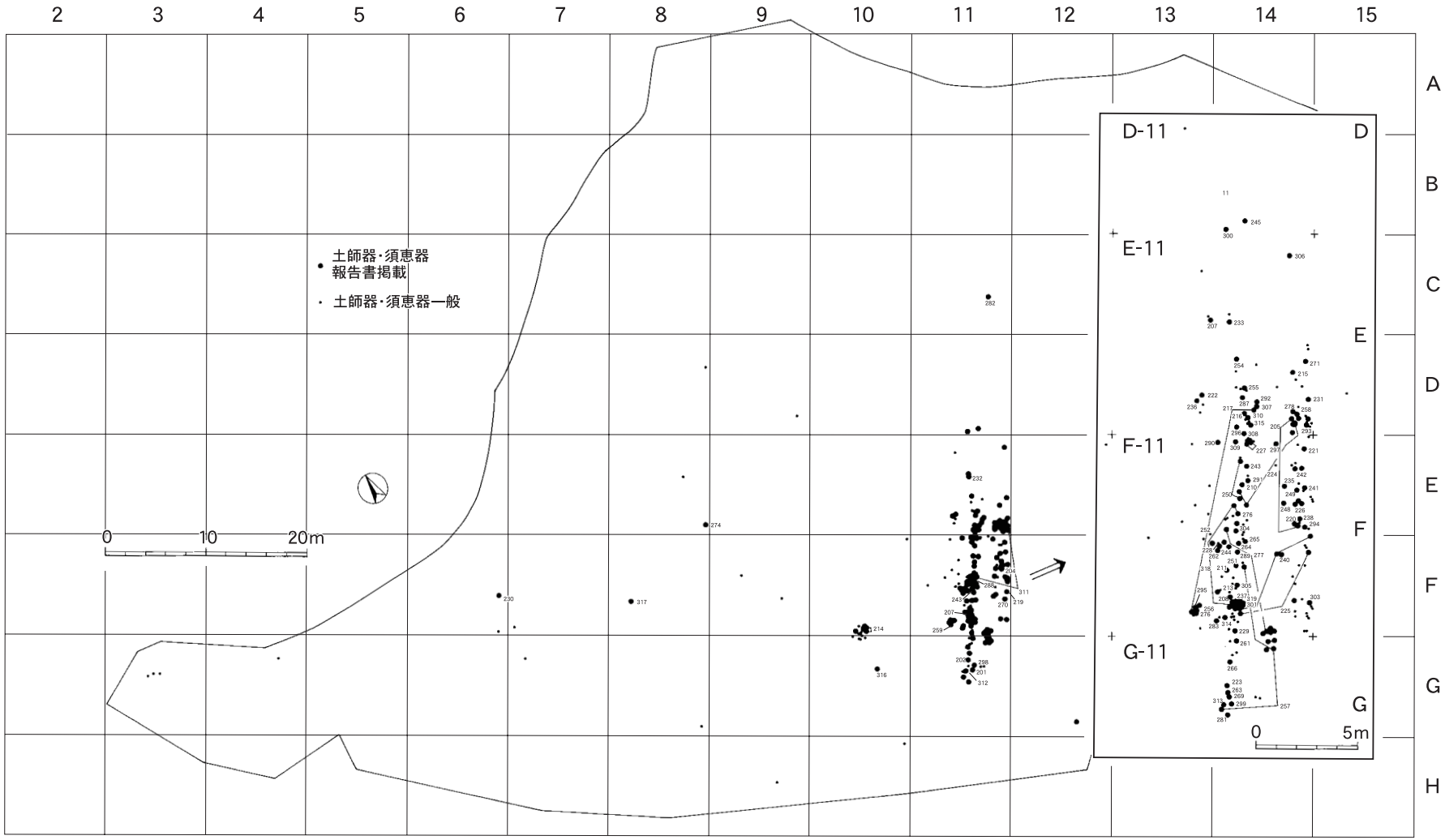
柱穴間	距離cm	距離尺	距離cm	距離尺	備考
1－9	155	5尺			
9－5	150	5尺			
1－5			304	10尺	
2－6			317	10尺半	
3－10	142	5尺			
10－7	169	5尺			
3－7			308	10尺	
4－11	175	6尺			
11－8	138	5尺			
4－11			313	10尺	

桁　　行

柱穴間	距離cm	距離尺	距離cm	距離尺	備考
4－3	110	4尺			
3－2	175	6尺			
2－1	138	5尺			
4－1			420	14尺	
11－10	165	5尺半			
10－9	288	10尺			
11－9			450	15尺	
8－7	152	5尺			
7－6	156	5尺			
6－5	120	4尺			
8－5			426	14尺	



第59図　土器集中遺構



第60図　古代土器分布図

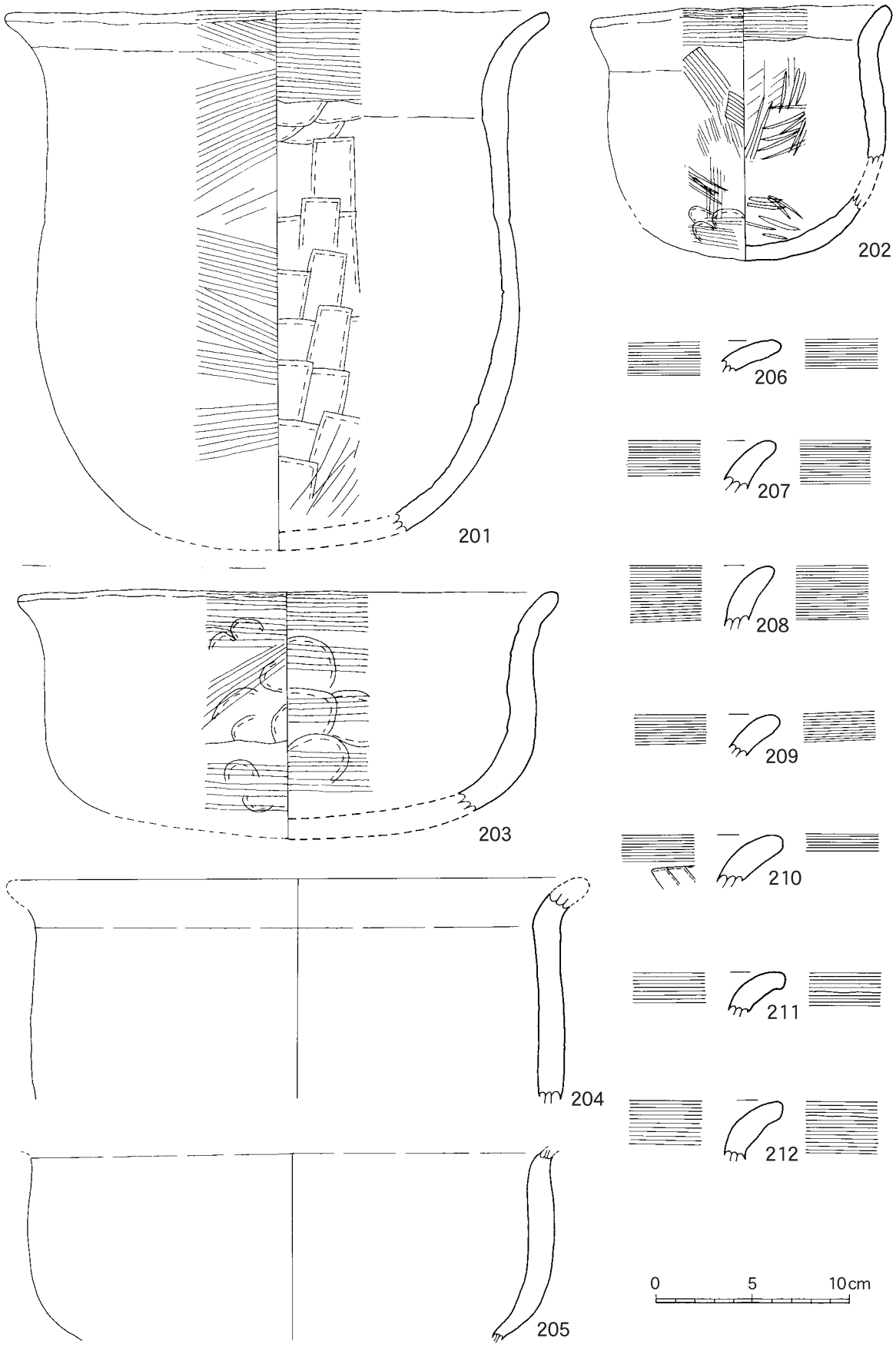
が，内面の稜が割合に明瞭である。204は頸部から胴部，底部にかけてであるが，器形は鉢と考えられる。内面の稜は明確ではない。206～249は甕または鉢の口縁部である。全般的に端部が肥厚するものが多い。内面に明確な稜の付くものと不明瞭なもの，明瞭な稜を持たないものなどさまざまである。また，口縁部自体の幅（長さ）も長いものから短いものまで各様見られる。明確な稜なり，不明瞭ではあっても口縁部の幅が長いものは，ある程度の大きさを持つ甕と考えて良いように思われる。ただ，口縁部が短く，端部が鋭角気味なものも，小型の甕である可能性があり，口縁部との関係だけからは一概には言えないと考えられる。口縁部は，外面・内面共にナデ調整が行なわれているものの，内面に明確な稜を持つものを中心として，頸部付近から下位はヘラケズリによる調整が多く見られる。口縁部の凹凸の著しいものは，指頭により調整したものと考えられる。

250～255は頸部から胴部にかけてである。254と255は胴部が長いことから甕と推定できるものの，それ以外は甕であるか，鉢であるか，いずれとも決しがたい。252と253は底部である。これについても全容がわからないため，甕か鉢かは不明である。256は鉢である。復元口縁径は24.3㎝，残存高さは5.3㎝で，外面ナデ，内面ヘラケズリの調整である。両面共に灰褐色を呈しており，胎土には石英と雲母，砂粒を含み，焼成は良好である。257は口縁部が短く，内面にヘラケズリの調整による明瞭な稜を有するもので，202に類似する小型の甕と考えられる。258は甕の口縁部とみられる。

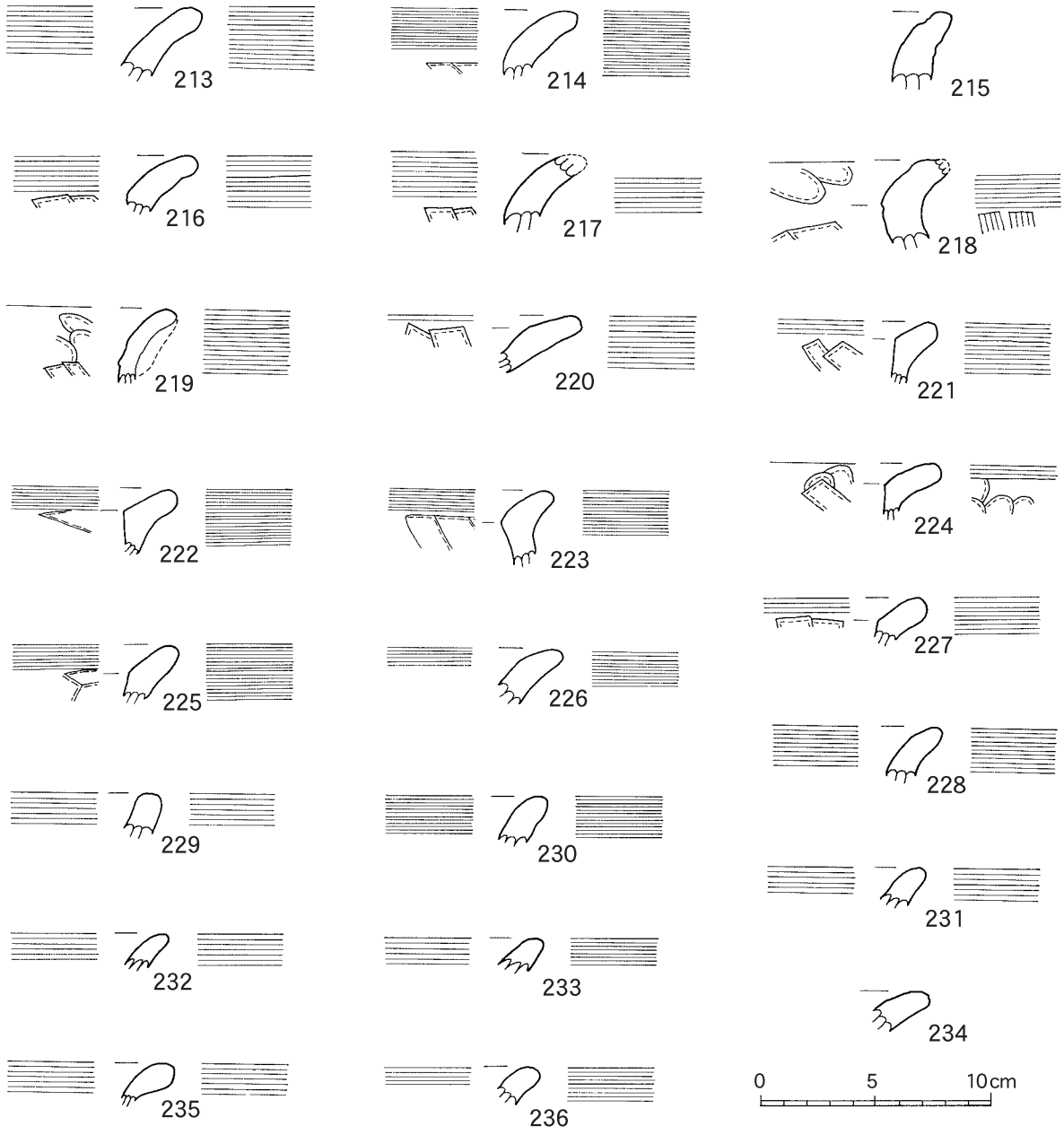
259～276は土師器の坏である。259は復元口縁径が14.0㎝，残存高さは2.9㎝で，口縁部が外側に開くタイプである。260～266は口縁部である。259と同様，外に開くタイプのほか，内傾するものも見られる。267と268は体部で，ほぼ直線的に開いている。269～274は底部である。270や274のように安定した平面を持つ平底のほか，271や272のように若干不安定となる平底も見られる。

坏の中に，墨書土器が２点見られた。275は体部に逆向きに「八万」と書かれていると考えられる。若干，文字間が狭いように感じられはするが，明瞭な「八」という文字の下に間隔を設けて上方に反った横一があり，ほぼ中央付近から斜めの線が出ていることから，本県で出土している墨書土器の文字との比較から，「万」という文字に最も近いと思われる。「万」は日置郡市来町の市ノ原遺跡（第１地点）や同郡金峰町の筆付遺跡，曽於郡輝北町の鳥居ケ段遺跡などから出土しており，文字の形はよく似ていると感じられる。また，276も体部に逆向きに「作」と読めるような文字が書かれている。「作」という文字は，これまでに川内市の西ノ平遺跡で数多くの出土が知られているが，そこのものは体部に正位置で書かれ，しかも文字の７画目が５画目の縦線を乗せる形で書かれていることが大きな相違点である。本遺跡の文字は，2画目の縦線と５画目の縦線が並んでおり，５画目の縦線からは６画目の横短線がやや上方に延び，7画目の横短線がやや下方に延びている。本県ではこの書風の「作」は出土例を知らないが，文字の形から考えると，この文字を考えた方が理屈に合うと考えられる。

277～314は赤色土器である。器形は鉢と埦と思われる。277は鉢と考えられる。278～280は埦であろう。281および282は埦と推定しているものの，坏の可能性もある。283～288は口縁部，289～308は体部，309～314は底部である。器壁の薄いものは埦（または坏），厚いものは鉢の可能性が考えられるものの，その多くが極めて小片であることから，明確に決することはできない。本遺跡から出土した赤色土器の埦は，外底の赤色の塗彩の方法に著しい特徴があると考えられる。310から313までがそれにあたるが，外底の全面に赤色を塗るのではなく，中央部付近を中心として割合に明瞭に



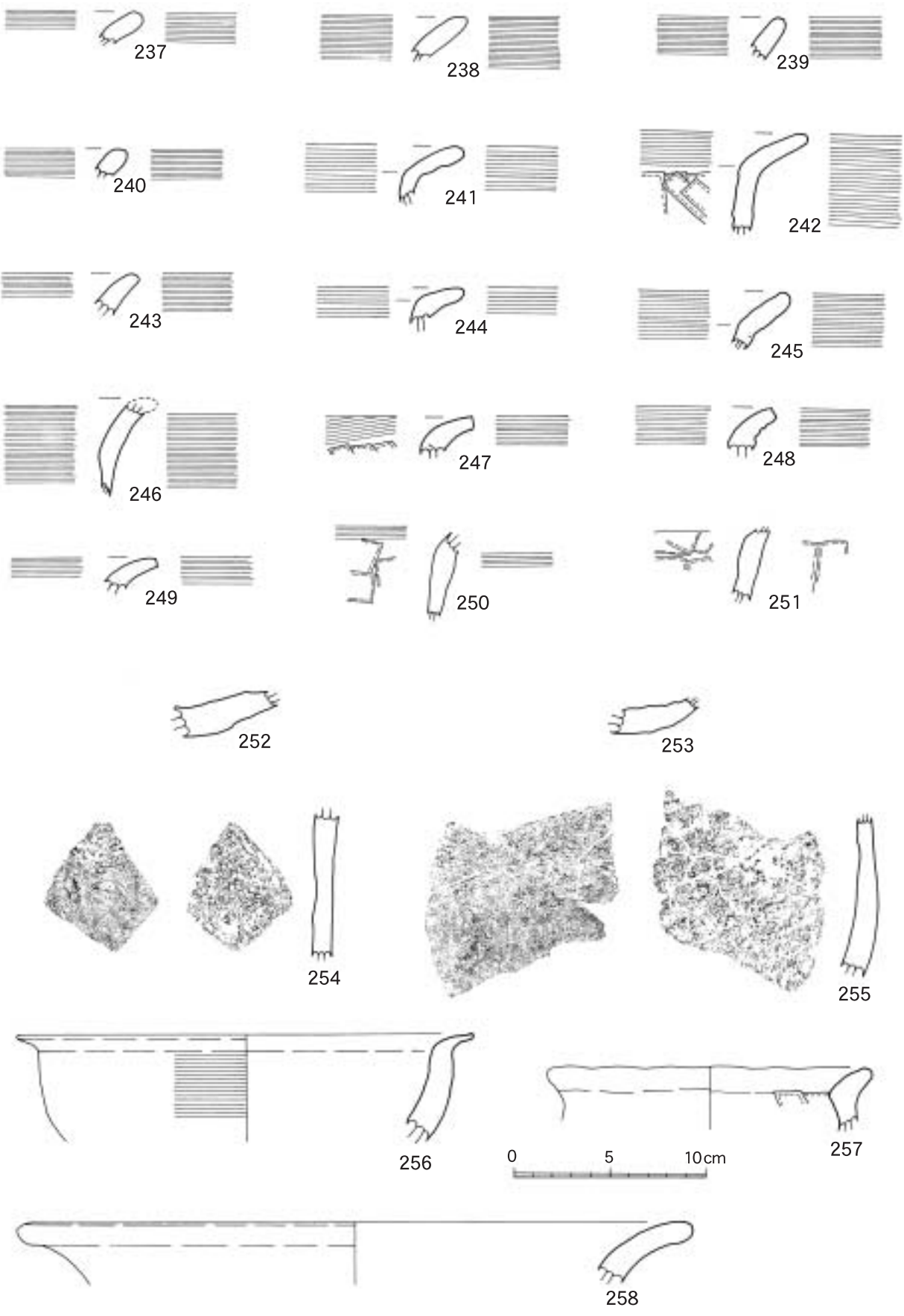
第61図　土　師　器　(1)



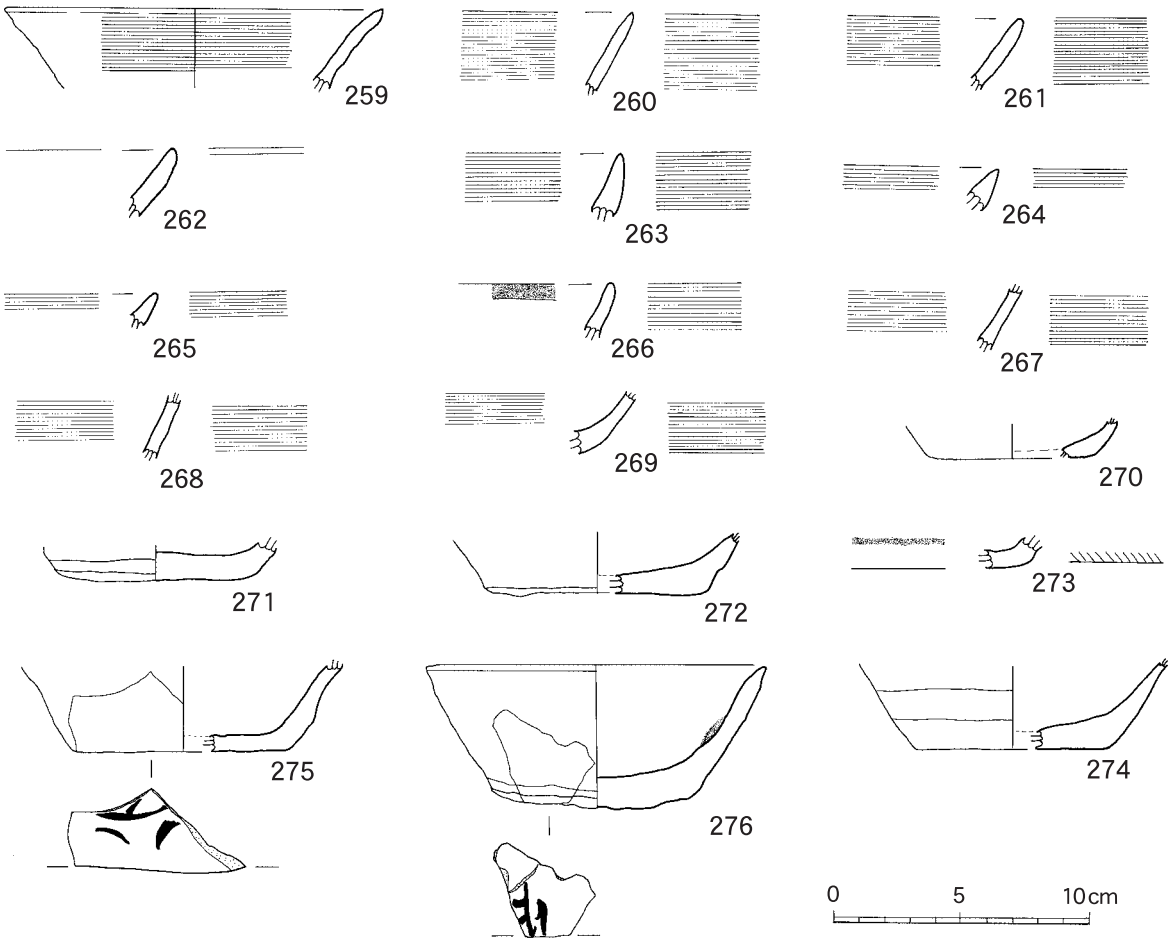
第62図　土　師　器　(2)

塗彩し，その周囲は313のように一部を狭く塗る以外はほとんど彩色せず，地の色を残したままにしてある。

315～317は須恵器である。315と316は甕の胴部と考えられる。前者は外面が暗緑色で格子の叩き目が見られ，内面は灰色で同心円と平行の叩き目が見られる。後者は外面が暗灰色で格子の叩き目，内面が暗灰色で平行の叩き目が見られる。外面には緑がかった灰色の自然釉が掛かる。317は小型の壷と思われる。肩部が張り，外面には平行の叩き目が見られ，内面にはナデ調整の跡が残る。色調はいずれも灰色である。

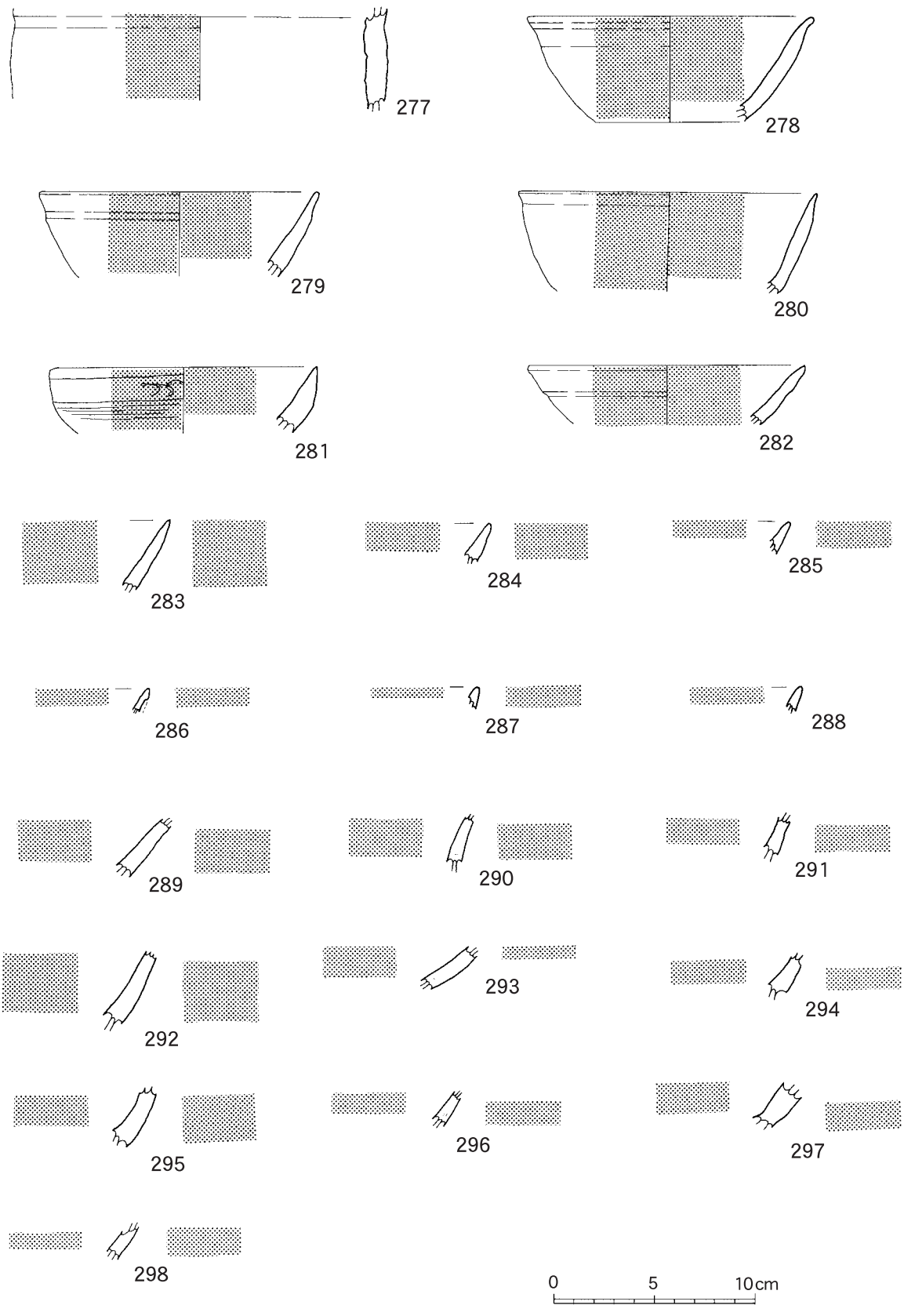

237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
0
5
10cm
258

第63図　土　師　器　(3)

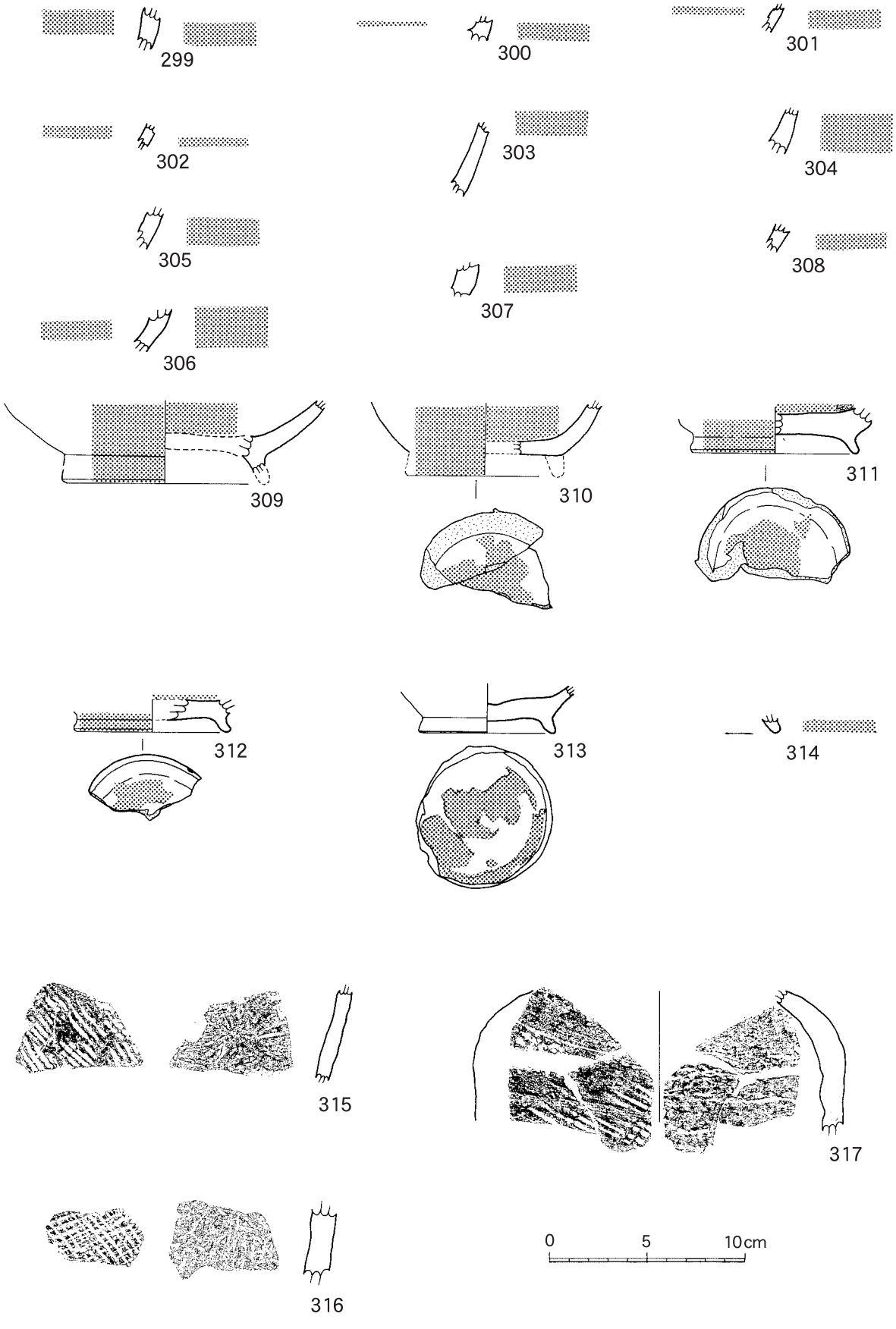


第64図　土　師　器　(4)

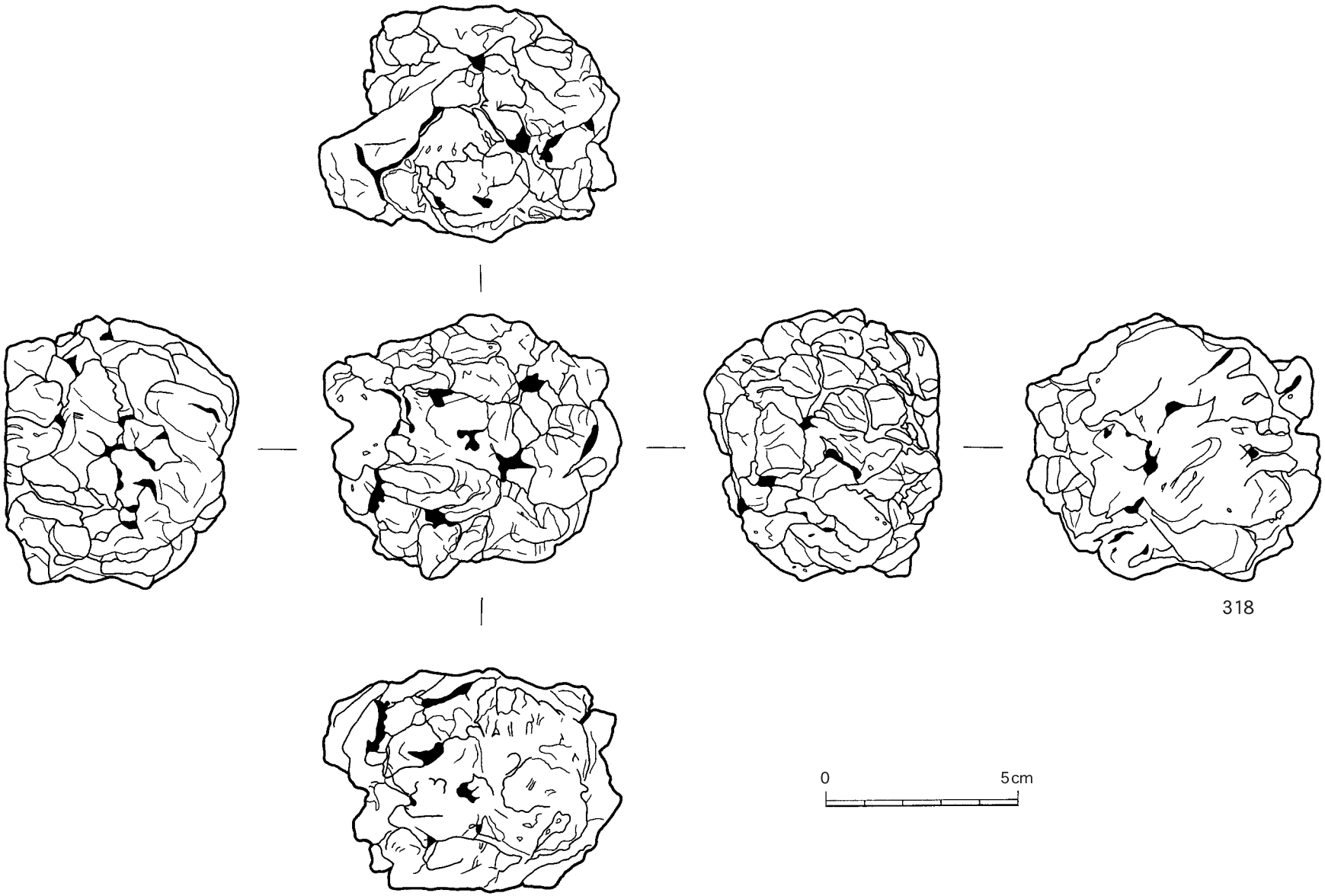
318は本遺跡出土の遺物の中で，最も異色なものである。胎土に長石，石英，輝石や砂粒を含み，色調も淡褐色から灰褐色を呈することや，幅が５～10㎜程度で長さが２～４㎝程の小さな紐状のものがまとめられて固められたものであることから，土師器の製作途中で生じた粘土の残りをまとめて固めたものが，意識的かそうでないかは判然としないものの，火中に投じられ，または強い火力の側に置かれたために火熱を受けたものと考えられる。大きさは，粘土紐の形が凸凹しているため正確に計測することは困難ではあるが，最大部で計測した結果，縦7.5㎝，横7.9㎝，高さは6.4㎝となる。色調が灰色を基調としていることから焼成温度がそれほど高かったとは思われず，容器として焼く目的で焼かれたのではないものと考えられる。しかし,たまたま火の側にこれがあったため，偶然の産物として生み出されたものとも考えられない。つまり，何らかの形の土師器を製作中に出た粘土の紐の固まりを火中に投じて，その出来栄えを興味を持って待ったものと思量されるのである。焼成後は遺棄されたとは思われるものの，全く破損していないことから，ある期間，大事に保存されたのちに捨てられたのではないかとも考えられる。とにかく，当時の土師器の製作者の心根が感じられる一品である。


277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
0
5
10cm

第65図　土　師　器　(5)



第66図　土師器（6）・須恵器



第67図　焼　土　塊

第14表　古代土器等観察表 (1)

挿図	遺物番号	出土区	層位	標高(m)	種類	器種	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	長石	石英	輝石	角閃石	その他	口径 cm	器高 cm	底径 cm	注記番号	備考
第61図	201	G11	Ⅱ	195.91	土師器	甕	完形	良好	赤褐色	赤褐色	ヘラケズリナデ	ナデ		○	○	○	砂粒	26.3	(25.5)	—	2723	
	202	G11	Ⅱ	195.91	土師器	小型甕	完形	良好	褐色	淡褐色	ヘラケズリナデ	ヘラケズリナデ		○	○		砂粒	14.2	(12.2)	—	2727	
	203	F11	Ⅱ	195.20	土師器	鉢	完形	良好	褐色	褐色	ヘラケズリナデ	ヘラケズリナデ		○	○		砂粒	26.3	(10.8)	—	2542	
	204	F11	Ⅱ	195.43	土師器	甕	頸部	良好	褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○			○	砂粒	(27.5)	(10.2)	—	2498	
	205	F11	Ⅱ	195.42	土師器	鉢	頸部	良好	灰色	灰色	ナデ	ナデ		○	○	○	砂粒	—	(9.2)	—	2550	
	206	E11	Ⅱ	195.62	土師器	甕	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○		○		砂粒	—	(1.4)	—	679	
	207	F11	Ⅱ	195.53	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(2.3)	—	2330	
	208	F11	Ⅱ	195.40	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		○		○	砂粒	—	(2.9)	—	2539	
	209	G11	Ⅱ	195.81	土師器	甕	口縁部	良好	黒褐色	暗褐色	ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(2.0)	—	1310	
	210	F11	Ⅱ	195.63	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ヘラケズリナデ	○				砂粒 雲母	—	(2.3)	—	589	
	211	F11	Ⅱ	195.23	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		砂粒	—	(1.9)	—	2543	
	212	F11	Ⅱ	195.58	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(2.9)	—	575	
第62図	213	G11	Ⅱ	195.81	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—		—	1309	
	214	G11	Ⅱ	195.40	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ヘラケズリ	○	○			砂粒	—	(2.7)	—	2381	
	215	E11	Ⅱ	195.53	土師器	甕	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(2.9)	—	657	
	216	E11	Ⅱ	195.50	土師器	甕	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	ナデ	ヘラケズリ		○			砂粒	—	(2.3)	—	659	
	217	F11	Ⅱ	195.26	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	黄褐色	ナデ	ヘラケズリ	○	○		○	砂粒	—	(3.0)	—	2541	
	218	F11	Ⅱ	195.57	土師器	甕	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ	ヘラケズリ	○				砂粒	—	(3.4)	—	627	
	219	F11	Ⅱ	195.49	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ヘラケズリ		○			砂粒	—	(3.3)	—	2448	
	220	F11	Ⅱ	195.43	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ヘラケズリ	○	○			砂粒	—	(2.4)	—	2412	
	221	F11	Ⅰ	195.53	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	明褐色	ナデ	ヘラケズリ	○			○	砂粒	—	(2.5)	—	1346	
	222	G11	Ⅱ	195.91	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	明褐色	ナデ	ヘラケズリ	○	○			砂粒	—	(2.7)	—	2727	
	223	F11	Ⅱ	195.55	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色		ナデ	ヘラケズリ	○	○			砂粒	—		—	637	
	224	F11	Ⅱ	195.47	土師器	甕	口縁部	良好	赤褐色	淡褐色	ヘラケズリ	ヘラケズリ	○				砂粒	—	(2.1)	—	2454	
	225	F11	Ⅱ	195.52	土師器	甕	口縁部	良好	赤褐色	黄褐色	ナデ	ヘラケズリ		○		○	砂粒	—	(2.2)	—	2437	
	226	F10	Ⅱ	195.40	土師器	甕	口縁部	良好	褐色		ナデ	ナデ		○			砂粒	—		—	1289	
	227	F11	Ⅱ	195.63	土師器	甕	口縁部	良好	明褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	砂粒	—	(1.8)	—	1025	
	228	F11	Ⅱ	195.75	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	明褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		砂粒	—	(2.1)	—	2359	
	229	F6	Ⅳ	196.30	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(1.6)	—	2268	
	230	E11	Ⅱ	195.19	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(2.0)	—	2384	
	231	F11	Ⅱ	195.46	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	明褐色	ナデ	ナデ		○		○	砂粒	—	(1.5)	—	2475	
	232	E11	Ⅱ	195.55	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色	灰色	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(2.1)	—	1034	
	233	F11	Ⅱ	195.50	土師器	甕	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ					砂粒	—	(1.4)	—	2344	
	234	F11	Ⅱ	195.35	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色	灰色	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(1.6)	—	2560	
	235	F11	Ⅱ	195.40	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	淡褐色	ナデ	ナデ		○		○	砂粒	—	(1.7)	—	1345	
	236	F11	Ⅱ	195.57	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(1.5)	—	2331	
第63図	237	F11	Ⅱ	195.49	土師器	甕	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ		○		○	砂粒	—	(1.6)	—	2442	
	238	F11	Ⅱ	195.48	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ			○		砂粒	—	(2.1)	—	2435	
	239	F11	Ⅱ	195.37	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(2.1)	—	2582	
	240	F11	Ⅱ	195.50	土師器	甕	口縁部	良好	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(1.3)	—	2429	
	241	F11	Ⅱ	195.44	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(2.8)	—	2422	
	242	F11	Ⅱ	195.69	土師器	甕	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ヘラケズリナデ		○			砂粒	—	(4.9)	—	2295	
	243	F11	Ⅱ	195.63	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(1.5)	—	600	
	244	D11	Ⅲa	195.57	土師器	甕	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○				砂粒 雲母	—	(1.9)	—	872	
	245	F10	Ⅲ	195.40	土師器	甕	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(2.3)	—	1289	
	246	F10	Ⅰ	195.78	土師器	甕	頸部	良好	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(4.7)	—	1504	
	247	F11	Ⅱ	195.40	土師器	甕	口縁部	良好	淡褐色	灰褐色	ナデ	ヘラケズリナデ	○	○			砂粒	—	(2.1)	—	2556	
	248	F11	Ⅱ	195.57	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(2.1)	—	2426	
	249	F11	Ⅱ	195.55	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(1.6)	—	637	

第15表　古代土器等観察表 (2)

挿図	遺物番号	出土区	層位	標高(m)	種類	器種	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	長石	石英	輝石	角閃石	その他	口径 cm	器高 cm	底径 cm	注記番号	備考
第63図	250	F11	Ⅱ	195.61	土師器	甕	胴部	良好	褐色	褐色	ナデ	ヘラケズリ ナデ	○		○		砂粒	—	(4.4)	—	585	
	251	F11	Ⅱ	195.69	土師器	甕	胴部	良好	褐色	褐色	ヘラケズリ	ヘラケズリ		○		○	砂粒	—	(3.8)	—	596	
	252	G11	Ⅱ	195.11	土師器	甕	胴部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ		○		○	砂粒	—	(4.8)	—	2594	
	253	E11	Ⅱ	195.59	土師器	甕	胴部	良好	赤褐色	褐色	ナデ	ナデ	○			○	砂粒	—	(1.8)	—	667	
	254	E11	Ⅱ	195.53	土師器	甕	底部	良好	褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		○		○	砂粒	—	(7.2)	—	664	
	255	F11	Ⅱ	195.69	土師器	甕	底部	良好	褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(7.8)	—	561	
	256	E11	Ⅱ	195.41	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ヘラケズリ		○			砂粒 雲母	—	(5.3)	—	2388	
	257	F11	Ⅱ	195.62	土師器	甕	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(3.1)	—	2320	
	258	F10	Ⅱ	195.72	土師器	鉢	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		砂粒	—	(3.0)	—	1522	
第64図	259	F11	Ⅱ	195.69	土師器	坏	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目					砂粒	14.0	(2.9)	—	559	
	260	F11	Ⅱ	195.72	土師器	坏	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(2.8)	—	2371	
	261	F11	Ⅱ	195.62	土師器	坏	口縁部	良好	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ			○		砂粒 雲母	—	(3.3)	—	1024	
	262	G11	Ⅱ	195.50	土師器	坏	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ			○	○	砂粒	—	(2.4)	—	1299	
	263	F11	Ⅱ	195.48	土師器	坏	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(2.3)	—	2313	
	264	F11	Ⅱ	195.51	土師器	坏	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ					砂粒	—	(1.5)	—	2312	
	265	G11	Ⅱ	195.57	土師器	坏	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(1.1)	—	2377	
	266	F11	Ⅱ	195.49	土師器	坏	口縁部	良好	褐色	暗褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(2.0)	—	2436	内スス
	267	F11	Ⅱ	195.57	土師器	坏	体部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目		○			砂粒	—	(2.3)	—	2343	
	268	G11	Ⅳ	196.39	土師器	坏	体部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目			○		砂粒	—	(2.2)	—	2728	
	269				土師器	坏	底部	良好	黄褐色	黄褐色	ヘラ	ヘラ				○	砂粒	—	(2.3)	—		
	270	E11	Ⅱ	195.26	土師器	坏	底部	良好	褐色	黄褐色	ナデ	ナデ			○		砂粒 雲母	—	(1.7)	6.8	2574	
	271			193.63	土師器	坏	底部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ヘラ ハケ目		○		○	砂粒	—	(1.4)	6.0	65	
	272	F11	Ⅱ	195.55	土師器	坏	底部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目			○	○	砂粒	—	(2.2)	7.9	571	
	273	E8	土坑内	195.69	土師器	坏	底部	良好	赤褐色	暗褐色	ハケ目	ナデ	○		○		砂粒	—	(1.2)	—	1546	内スス
	274	F11	Ⅱ	195.69	土師器	坏	底部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目			○		砂粒	—	(3.2)	7.3	560	
	275	F11	Ⅱ	195.51	墨書土器	坏	底部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目		○			砂粒	—	(3.2)	8.0	2301	八万 か
	276	F11	Ⅱ	195.27	墨書土器	坏	底部	良好	褐色	褐色	ハケ目	ハケ目		○		○	砂粒	12.5	(5.3)	7.5	2540	作 か
第65図	277	E11	Ⅱ	195.38	赤色土器	鉢	頸部	良好	茶褐色	灰色	ヘラケズリ	ヘラケズリ	○	○	○		砂粒	—	(4.7)	—	2386	
	278	G11	Ⅱ	195.13	赤色土器	坏	口縁部	良好	茶褐色	茶褐色	ハケ目	ハケ目			○	○	砂粒	13.6	(5.0)	—	2589	
	279	E11	Ⅱ	195.45	赤色土器	坏	口縁部	良好	茶褐色	茶褐色	ハケ目	ハケ目			○		砂粒	13.1	(4.0)	—	2406	
	280	G11	Ⅱ	195.91	赤色土器	坏	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	ハケ目	ハケ目			○	○	砂粒	14.8	(5.0)	—	2724	
	281	G		194.91	赤色土器	坏	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ヘラケズリ	ナデ		○			砂粒	12.5	(3.0)	—	12	
	282	F10	Ⅱ	195.42	赤色土器	坏	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目			○		砂粒	13.0	(2.6)	—	1293	
	283	F10	Ⅲ	195.61	赤色土器	坏	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目	○	○			砂粒	—	(3.2)	—	1280	
	284	E11	Ⅱ	195.47	赤色土器	坏	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ					砂粒	—	(1.7)	—	2389	
	285	F10	Ⅱ	195.59	赤色土器	坏	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ			○		砂粒 雲母	—	(1.5)	—	1283	
	286	E11	Ⅲ	195.51	赤色土器	坏	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ					砂粒 雲母	—	(1.0)	—	662	
	287	F11	Ⅱ	195.58	赤色土器	坏	口縁部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ					砂粒	—	(1.0)	—	2306	
	288	F11	Ⅱ	195.52	赤色土器	坏	口縁部	良好	褐色	黄褐色	ナデ	ナデ					砂粒 雲母	—	(1.1)	—	2316	
	289	F11	Ⅱ	195.62	赤色土器	坏	胴部	良好	赤褐色	明褐色	ナデ	ナデ		○	○		砂粒	—	(2.7)	—	647	
	290	F11	Ⅱ	195.52	赤色土器	坏	胴部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(2.0)	—	2290	
	291	F11	Ⅲ	195.47	赤色土器	坏	胴部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(1.7)	—	1352	
	292	E11	Ⅱ	195.39	赤色土器	坏	胴部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○			砂粒	—	(3.3)	—	2399	
	293	F11	Ⅱ	195.44	赤色土器	坏	胴部	良好	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ			○	○	砂粒	—	(1.9)	—	2444	
	294	F11	Ⅱ	195.71	赤色土器	坏	胴部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ			○		砂粒	—	(1.6)	—	562	
	295	E11	Ⅱ	195.56	赤色土器	坏	胴部	良好	茶褐色	明褐色	ヘラ	ヘラ			○		砂粒	—	(2.5)	—	650	
	296	F11	Ⅱ	195.43	赤色土器	坏	胴部	良好	褐色	明褐色	ナデ	ナデ				○	砂粒	—	(1.6)	—	2569	
	297	E11	Ⅱ	195.39	赤色土器	坏	胴部	良好	茶褐色	茶褐色	ヘラ	ヘラ		○			砂粒	—	(2.2)	—	2391	
	298	G11	Ⅱ	195.91	赤色土器	坏	胴部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ			○		砂粒	—	(2.0)	—	2725	

第16表　古代土器等観察表 (3)

挿図	遺物番号	出土区	層位	標高(m)	種類	器種	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	長石	石英	輝石	角閃石	その他	口径cm	器高cm	底径cm	注記番号	備考
第66図	299	E11	Ⅲ	195.62	赤色土器	埦	体部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ			○		砂粒	—	(2.0)	—	670	
	300	F11	Ⅱ	195.45	赤色土器	埦	体部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒	—	(1.0)	—	2337	
	301	F10	Ⅱ	195.59	赤色土器	埦	体部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ		○			砂粒 雲母	—	(1.1)	—	1268	
	302	F11	Ⅱ	195.45	赤色土器	埦	体部	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ					砂粒	—	(1.0)	—	2471	
	303	F11	Ⅱ	195.54	赤色土器	埦	体部	良好	褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○				砂粒	—	(3.6)	—	2305	
	304	F11	Ⅱ	195.57	赤色土器	埦	体部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○		○		砂粒	—	(2.1)	—	581	
	305	F11	Ⅱ	195.19	赤色土器	埦	体部	良好	赤褐色	灰色	ナデ	ヘラケズリ		○			砂粒	—	(1.7)	—	2400	
	306	E11	Ⅱ	195.51	赤色土器	埦	体部	良好	茶褐色	明褐色	ヘラ	ヘラ		○	○		砂粒	—	(2.0)	—	660	
	307	F11	Ⅱ	195.55	赤色土器	埦	体部	良好	茶褐色	灰色	ナデ	ヘラケズリ		○			砂粒	—	(1.4)	—	643	
	308	F11	Ⅱ	195.56	赤色土器	埦	体部	良好	赤褐色	灰色	ナデ	ナデ			○		砂粒	—	(1.2)	—	645	
	309	E11	Ⅱ	195.55	赤色土器	埦	底部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目				○	砂粒	—	(3.4)	(10.4)	655	高台高(1.6cm)
	310	F11	Ⅱ	195.57	赤色土器	埦	底部	良好	赤褐色	赤褐色	ハケ目	ハケ目		○	○		砂粒	—	(2.5)	(7.8)	615	高台高(1.0cm)
	311	E11	Ⅱ	195.48	赤色土器	埦	底部	良好	赤褐色	赤褐色	ハケ目	ハケ目		○		○	砂粒	—	(1.2)	8.1	2285	高台高0.9cm 内黒
	312	G11	Ⅱ	195.91	赤色土器	埦	底部	良好	茶褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目		○	○		砂粒	—	(1.0)	7.7	2726	高台高0.5cm
	313	F11	Ⅱ	195.55	赤色土器	埦	底部	良好	茶褐色	赤褐色	ヘラ	ヘラ		○		○	砂粒	—	(1.6)	—	556	高台高0.6cm
	314	E11	Ⅱ	195.52	赤色土器	埦	脚部	良好	褐色	黄褐色	ナデ	ナデ					砂粒 雲母	—	—	—	652	高台高(0.7cm)
	315	G9	Ⅱ	196.11	須恵器	甕	胴部	良好	暗緑色	灰色	格子叩き	平行・同心円叩き	○		○		砂粒	—	(4.2)	—	2518	
	316	F8	Ⅲa	196.34	須恵器	甕	胴部	良好	暗灰色	暗灰色	格子叩き	平行叩き	○	○			砂粒	—	(3.1)	—	772	外面自然釉
	317	F11	Ⅱ	195.49	須恵器	壺	肩部	良好	灰色	灰色	平行叩き	ナデ	○	○	○		砂粒	—	(6.8)	—	2327	輪積痕
第67図	318	F11	Ⅱ	195.45	焼土塊	焼土塊	完形	良好	淡褐色	灰褐色	—	—	○	○	○		砂粒	—	—	—	2334	被火熱

第17表　道跡計測表

番　号	検出区	層　位	幅cm	厚さ・深さcm	長さm	高　位	低　位	傾斜方向	備　考
1	D10・11	Ⅱ～Ⅲa	60～161	—	12.4	西	東	東へ下がる	道跡
2	C・D10	Ⅱ～Ⅲa	63～100	—	10.0	南	北	北へ下がる	道跡
3	E11	Ⅳb	110～300	—	8.2	西	東	東へ下がる	道跡
4	C・D8	Ⅱ～Ⅲa	40～180	30	11.3	南	北	北へ下がる	道跡
5	C8	Ⅳb	50～68	6	4.0	—	—	ほぼ平坦	道跡
6	C8	Ⅳb	43～64	20	3.42	北	南	南へ下がる	道跡
7	D8	Ⅳb	30～54	10	2.6	北	南	南へ下がる	道跡
8	D8	Ⅳb	22～50	6	2.2	北	南	南へ下がる	道跡
9	E10	Ⅳb	30～84	—	3.0	—	—	ほぼ平坦	道跡
10	E11	Ⅱ～Ⅲa	70～92	—	7.8	—	—	ほぼ平坦	道跡
11	E11	Ⅱ～Ⅲa	70～108	—	9.5	—	—	ほぼ平坦	道跡
12	F10	Ⅱ～Ⅲa	50～58	—	3.0	—	—	ほぼ平坦	道跡
13	E10	Ⅱ～Ⅲa	58～76	—	2.2	—	—	ほぼ平坦	道跡
14	E10	Ⅱ～Ⅲa	60～62	—	0.9	—	—	ほぼ平坦	道跡
15	E10	Ⅱ～Ⅲa	46～74	—	2.9	—	—	ほぼ平坦	道跡
16	G・H3～5	Ⅱ～Ⅲa	160～320	—	23.2	東	西	西へ下がる	道跡
17	C～E10	Ⅱ～Ⅲa	126～462	—	20.5	南	北	北へ下がる	道跡
18	F8	Ⅳb	50～190	24	14.5	南	北	北へ下がる	道跡
19	F8	Ⅳb	64～100	18	3.0	南	北	北へ下がる	道跡
20	G8	Ⅳb	34～40	4	2.4	北	南	南へ下がる	道跡

第18表　溝跡計測表

番　号	検出区	層　位	幅cm	厚さ・深さcm	長さm	高　位	低　位	傾斜方向	備　考
1	F・G8	Ⅲ～Ⅳb	130～238	20	9.6	南	北	北へ下がる	溝跡
2	G・H11	Ⅱ～Ⅲa	40～120	35	11.5	北	南	南へ下がる	溝跡
3	G11	Ⅱ～Ⅲa	84～90	25	2.8	西	東	東へ下がる	溝跡

第９節　Ⅱ層の調査　（２）　中世以降

Ⅱ層を埋土とし，またはⅡ層に掘り込まれた遺構を中世以降のものとして取り上げる。一部に，中世と考えられる青磁も出土したものの，図化に耐えるものではなかったため掲載できなかった。

○　遺　構

（１）　畑畝跡

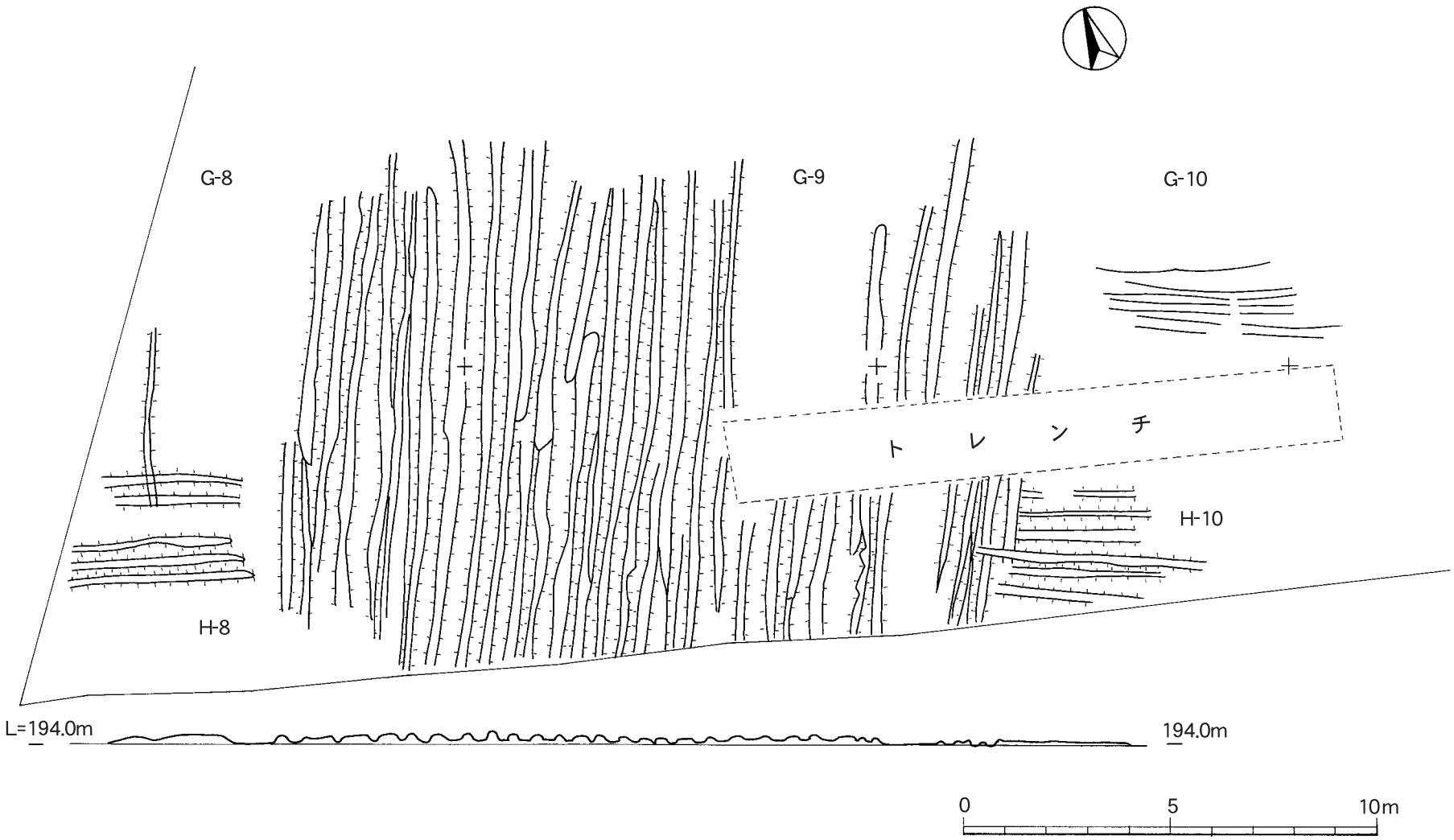
Ｇ・Ｈ－８～11区で，表土を剥いだ段階で列状となった遺構を検出したため掘り下げを行なった結果検出したものである。南北方向を主としており，一部に東および西側にも東西方向に畝跡が並ぶ状況が確認された。畝の高さは約10～15㎝程度であり，畝間は40～70㎝程度であるが，平均すると55～60㎝程となる。東西方向と南北方向とで畝の規模にそれほどの相違はなく，ほとんど同規模であると言える。南北方向のものが東西方向のものよりも残りがいいのは，埋没する以前には東西方向に細長く耕作していたものの，埋没する段階でこのような状況となったということが考えられる。東西方向の最大長は5.7m，南北方向の最大長は12.8mである。時期は，畑の畝跡として残された部分がⅢ層のアカホヤ層を主体とする黄色土であり，畝間の埋土がⅡ層の黒色土を主体とするものであったことから，中世でも早い時期，すなわち鎌倉時代ごろの遺構と考えられる。残された畝の規模の観察からは，栽培されていたものが何であったかはわからない。ただ，水が得にくく，高燥の地であり，また，畝の間隔，さらに中世前期という時代などから判断して，何らかの野菜類が栽培されていた可能性が高いと考えられる。

（２）　道　跡

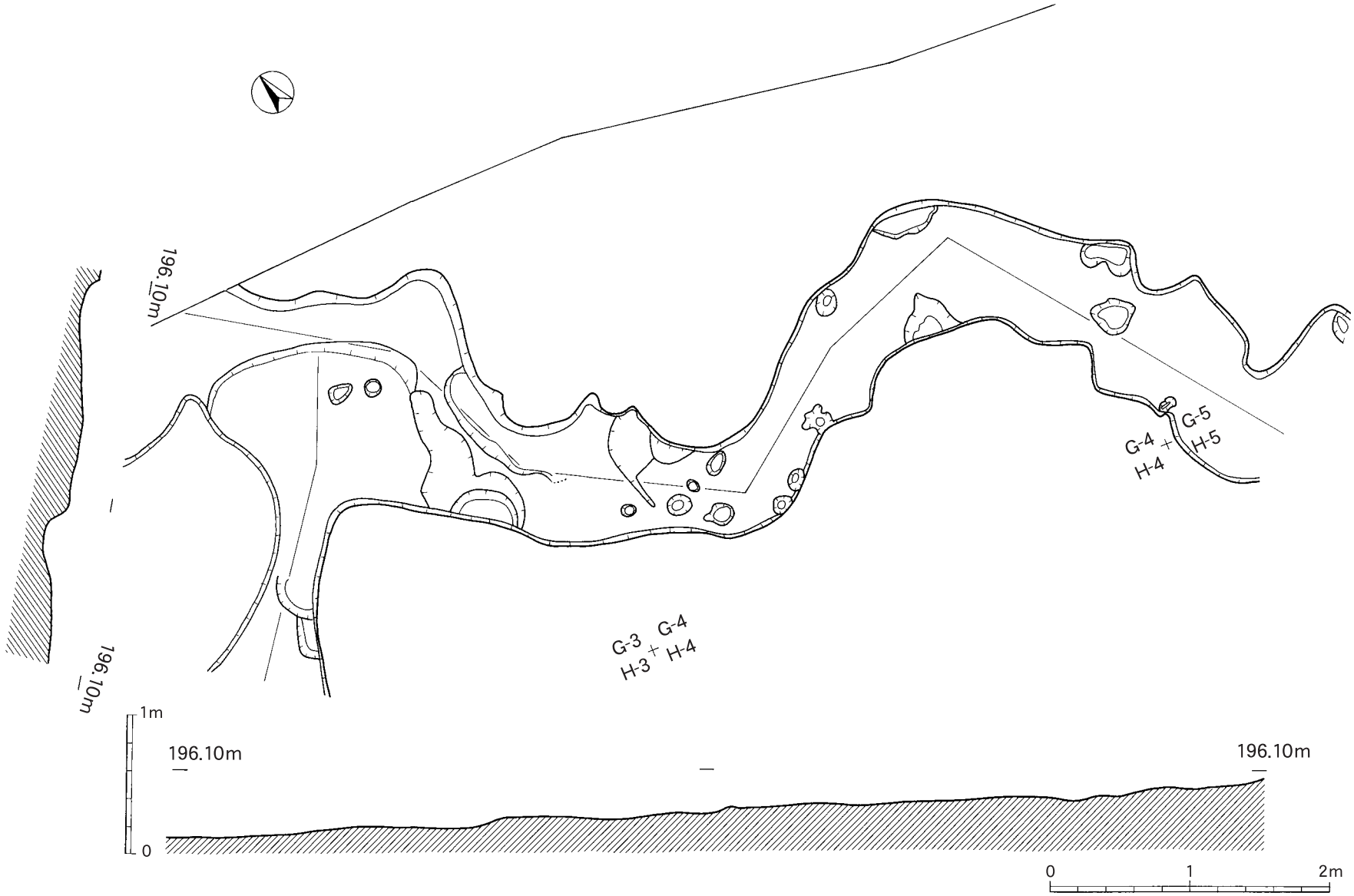
本遺跡の調査区域のいろいろな箇所から道跡が検出された。一般的に台地部分の縁辺部と北側，それに掘立柱建物跡の周辺に比較的多く集中する傾向が見られる。これらの中で，最も規模の大きいものはＧ・Ｈ－３・４区の迫状の道跡であろう。この道跡は，おおよそ西側に向かって枝分かれしながら割合に急傾斜で下りているものである。途中には大小さまざまな形の穴があいている。これは，傾斜が急なため，降雨の際に台地部分の雨が集まって来て流れたことでカーブの部分が削られたり，雨水の流れの中に石などが取り残されていたためにポットホール状に削られたものと考えられる。下部にかけては流失しやすいシラス層のため硬化面は台地部にしか残存してはいなかったたものの，下の水田と上の台地とをつなぐ道と考えて支障はないと思われる。同様な例は，台地の東の端の道跡にも言える。Ｆ－12区のものも同様な性格を持つものと考えられる。Ｃ・Ｄ－８区に検出されたものは，台地の一段下の，裾を巡る道であろう。Ｃ－10区とＥ－11区のものは，台地上での割合に安定した，規模の大きな道と考えられる。Ｅ・Ｆ－10区を中心に散在している小規模の道跡は，この周辺に目立った遺構がないことから性格は不明とせざるをえないが，遺構のないことでかえって単なる通過地点として位置付けられる可能性もある。また，道としての使用年代については伴出遺物などが捉えられないため不明とせざるをえない。ただ，道跡の上の埋土は流水作用を受けるなどして表土やシラスなどが堆積している状況が見られることから，近世から近代頃を中心とした割合に新しい時期の遺構であると考えられる。

（３）　溝　跡

Ｇ・Ｈ－11区で東側の南北にそれぞれ１本ずつ延びているのをはじめ，Ｇ・Ｈ－７区からも南北方向に延びる。時期は畑畝跡とほぼ同時期かそれよりやや新しい近世頃と考えている。



第68図　畑　畝　跡



第69図　道　跡　(1)

第70図　道　跡 (2)

第５章　まとめ（成果と課題）

第１節　調査の成果

宮尾遺跡は日置郡松元町石谷にあり，平成５年度に確認調査と一部本調査を行ない，同８年度に残存部の本調査を行なった。調査により，旧石器時代（ナイフ期），縄文時代（早期・後期・晩期）古墳時代，古代，中世，近世から近・現代にかけての遺構・遺物が確認された。

１　旧石器時代

遺跡の南側ほぼ中央部のＦ・Ｇ－８区で検出された。黒曜石の剥片を主体とし，43個からなる。長径8.6m，短径3.5mの範囲に広がり，垂直方向の高低差は約40㎝程度である。細かく見ると，小さなまとまり４か所からなるとも考えられ，北西から小・大・小・大と並んで南東部に至っている。Ⅵｂ層で検出されたことから，ナイフ形石器文化のものと考えられる。

２　縄文時代

早期には，遺構としては集石と石器製作跡が検出された。集石は４基確認された。１号および３号は楕円形を主とする掘り込みを持ち，2号および４号には見られない。構成礫の数は，最大が４号の64個，最小は１号の16個から成り，総体的には規模の小さい集石と言えるだろう。４号については被火熱の状態を細かく観察したが，その結果はすべてが赤化やヒビ，ワレなど火熱を受けていることが判明し，タールやススが付着していた様子も見られた。部分的に接合するものもあり，使用により破砕されてもなお使われている様子が確認された。石器製作跡は，遺跡の東側地区の中央部西端で確認された。おおよそ2.5m四方の範囲に集中するが，若干は北東部に散らばる。集中する部分の下部には，円形または楕円形の掘り込みが幾分東側にずれて確認されているが，石器製作に伴うものとの可能性は考えられるものの，位置的なズレを考慮すると確実性という点では課題が残ると思われる。石材はハリ質安山岩であり，チップ類がほとんどであった。

早期の土器では，**Ⅰ類**は円筒形の器形を呈し，外面には貝殻条痕が横および斜め方向に施されており，円筒系貝殻条痕文土器である。**Ⅱ類**は，器壁がごつごつした感じを持たせるような円筒形を呈し，外面には口縁部下５㎝程度のところまで横または傾斜の小さい斜め方向の貝殻腹縁の押圧が見られ，それ以下は指頭によると思われるナデが施されている。胴部から底部にかけては若干膨らみを持ち，そのまま内側に収束する器形と考えられることから，政所式あるいは五十市式土器と推定される。**Ⅲ類**は，器形的には外反する口縁部を三角形に肥厚させ，頸部はそれほど締まらずすぐに胴部へと広がり，そして胴部は小さな膨らみを持ちつつ安定した平底となる底部へとつながっている。口唇端部には斜め方向の沈線や列点が施され，口縁部下頸部までは，撚糸文あるいは沈線が斜め方向を主体に施されている。頸部には横方向の沈線が巡るもの，列点の刻まれた突帯が一周するもの，口縁部下からそのまま胴部に施文が続くものなど，バリエーションが豊かである。胴部の施文も沈線・列点を主とするものと，撚糸文が全面に施されるものなどに分かれる。類するものに小さく外反した口縁部を三角形に肥厚させ，端部には斜め方向の沈線を短く連続的に刻んでいる。頸部がややすぼまるものの，そのまま胴部へと下がり，下部からは底部にかけて急激にすぼまって

行くと考えられる。同様な沈線は胴部にも巡り，短線も沈線の間に付されている。早期後半に位置付けられる平栴式土器に比定できる。**Ⅳ類**は，口縁部付近は出土していないものの，胴部の“く”字状に沈線で区画された中を，多くの細く短い撚糸文の押圧で埋めている。底部は幾分上がった平底であることから，塞ノ神式土器（Ａｂ式）と考えられる。**Ⅴ類**の底部はいくらかのタイプがある。

後期から晩期には，落とし穴と推定される44基以上もの土坑を含む101基の土坑が台地全体で検出された。円形で小さいものや楕円形でも浅いものは一般の土坑と考えられるが，楕円形の深いもの，底の片方に深い小ピットが見られるものは落とし穴と判断される。落とし穴としては数に上げていないが，円形でも大きく深いものは落とし穴と考えることが可能かもしれない。その意味で，落し穴の数を“44基以上”と記載してある。地形との関係では，尾根の部分には見られず，尾根の東および西側の等高線に直交する方向に設けられる傾向のあることが伺える。

後期の土器では，**Ⅵ類**が口縁部を台形状に作り，横および斜めの沈線を施すものもある。これらは，後期の沈線文の系統と考えられるが，型式名は不明である。晩期に属するものとしては，**Ⅶ類**が器壁の凹凸が激しく，極めて粗いナデまたは条痕で調整された胴部と考えられるものがあるが，型式名は不明である。器壁が極端に薄く，内外面を丁寧にヘラミガキされた**Ⅶ類**は浅鉢と思われ，入佐式土器の範疇に入るのではないかと考えられる。そのほか，型式不明なものの底部を一括して**Ⅷ類**とした。平底が多いが，色調や焼成などで差異が見られることから，本来は幾型式かに分かれるものと考えられる。

石器は，時期を特定できないものが多かったため，一括した。石匙は横型のものである。形状はそれぞれ異なっている。石鏃も五角形のもの，凹基でも浅いもの，深いものなどバリエーション豊かである。石斧は出土が少なく，図化できたのは磨製のもの１点のみである。石皿および台石は大型のものが多く，磨・敲石もあるほか，礫石器や剥片石器もあり，砥石も見られる。小型石器の石材は，黒曜石や頁岩，ハリ質安山岩などがあり，黒曜石は本遺跡から割合に近いと言える樋脇町の上牛鼻のほか，腰岳や針尾を原産地とする県外のものも多く見られる。

３　古墳時代

遺構は検出されなかったが，土器が出土している。図化に耐えうるものは甕形土器がほとんどであった。口縁部は外反するもので小さく締まった頸部からすぐに胴部へと膨らみ，再び底部へは割合に急速にすぼまる。底には中空の脚台が付き，上げ底の底部となる。在地性の強い器形の土器であり，成川式土器と呼ばれる。口縁部の外反の程度から，古墳時代の中期頃に位置付けられよう。

４　古　　代

遺構として，掘立柱建物跡と土器集中遺構，それに焼土域が検出された。掘立柱建物跡は２間×３間で，中央は北側で柱を欠く。柱間は梁間が５尺および６尺間，桁行が４尺および５～６尺間となっている。南側に中央の柱があり，北側にはそれが見られないことから，総柱となる倉庫とは考えられず，浅い柱穴として残っていることから，幾分削平を受けている可能性がある。柱筋が揃っていないことから上屋の構造は考えにくいが，平地式の可能性が大きいと考えられる。土器集中遺構の中からは，土師器の甕と鉢が大小合わせて３個体ほど出土したが，何れも完形品に復元はでき

るものの完全品ではなく，まとめて遺棄あるいは埋納してあることから，何らかの祭祀にかかわるものとも考えられる。焼土域は７か所検出されたが，規模は異なるものの，すべてから木炭が検出されている。また，地域的に掘立柱建物跡の南西近くと，北西の離れた箇所にまとまっている。

遺物は，土師器の甕，鉢，坏，埦それに須恵器，焼土塊が出土した。甕は小型のものもあるが一般的な大きさのものが大部分である。鉢は，甕に似ているもので深さの浅いものと，外面赤色となるものの大きく２種類に分かれる。坏は少数の出土であるが，「八万」「作」と推定される墨書土器も見られるほか，底部が欠失しているために正確には判別できないものの，内赤および赤色土器もある。埦は内赤，赤色土器がほとんどであり，底部の内外面には部分的な赤色塗彩の箇所も見られ，塗彩の方法が理解できる資料と言える。全体的に，8～９世紀のものであるとの教示を得ている。須恵器には小型の壷も見られる。焼土塊は製造過程で出た粘土の不要部分を丸く固めたものが，火熱を受けたものと思われる。これらの出土遺物では，赤色に塗彩された一群の土師器が極めて多いことが特筆される。これは，本遺跡の古代の中心的建物と考えられる掘立柱建物跡の性格として，ある可能性を考える契機となる。それは，神社である。建物の構造として南側に中央の柱を持ち，北側にそれが見られないことから，神社の社殿を考えることはあながち突飛な考えとは思われない。それに加えて，本遺跡の字名が“宮尾”であることがそれを支持しているようにも考えられるのである。つまり「宮＝神社」という考えである。可能性の一つとして提示しておきたい。

５　中世以降

遺構として，畑の畝跡が40条ほど検出されたが，遺物を含まないために確実なことは言えないが，層の堆積の状況などから，鎌倉時代ごろの可能性が高いと考えられる。道跡も長短含めて20本ほど検出されているが，いろいろな方角に向いており，硬化の程度もさまざまであることを考慮すると，これも新しく，おそらく近世以降のものがほとんどと考えるのが無難なようである。

第２節　課　　題

旧石器時代に関しては，隣接する仁田尾遺跡や前山遺跡などとの関係から，同一台地上での住み分けや時期的な使われ方を解明していくことが必要となろう。

縄文時代に関しては，早期の遺物が割合に多く出土するにもかかわらず住居跡が見つからないのはなぜか，という問題がある。宮尾遺跡の近辺にあることはほぼ確実であるが，どの程度の距離を置いて集落が形成されていたかが判明することで，概期の集落の諸要素が総合的に解明されると思われる。また，おそらく後期頃と判断したが，土坑の最終的な性格づけである。特に，落し穴としての規定と，その際の判断基準について，全国的・各時代的に調査していくことが必要であろう。

古代では，掘立柱建物跡の性格づけが最終的に課題であろう。神社跡と推定したが，もしそうであるなら，どのような神が祭られていたか，どのような宗教的な行事が行なわれていたのか。また，神社でなければ個人の居宅として片付けて良いのかを，赤色土器の大量出土という事実をふまえて考えることが必要となってくる。また，焼土域にはどのような性格が付与されて然るべきなのか，土器集中遺構との関係もふまえながら考えて行かねばならない。

中世以降とした畑の栽培植物や，道跡などの性格といったものも大きな課題と言えよう。

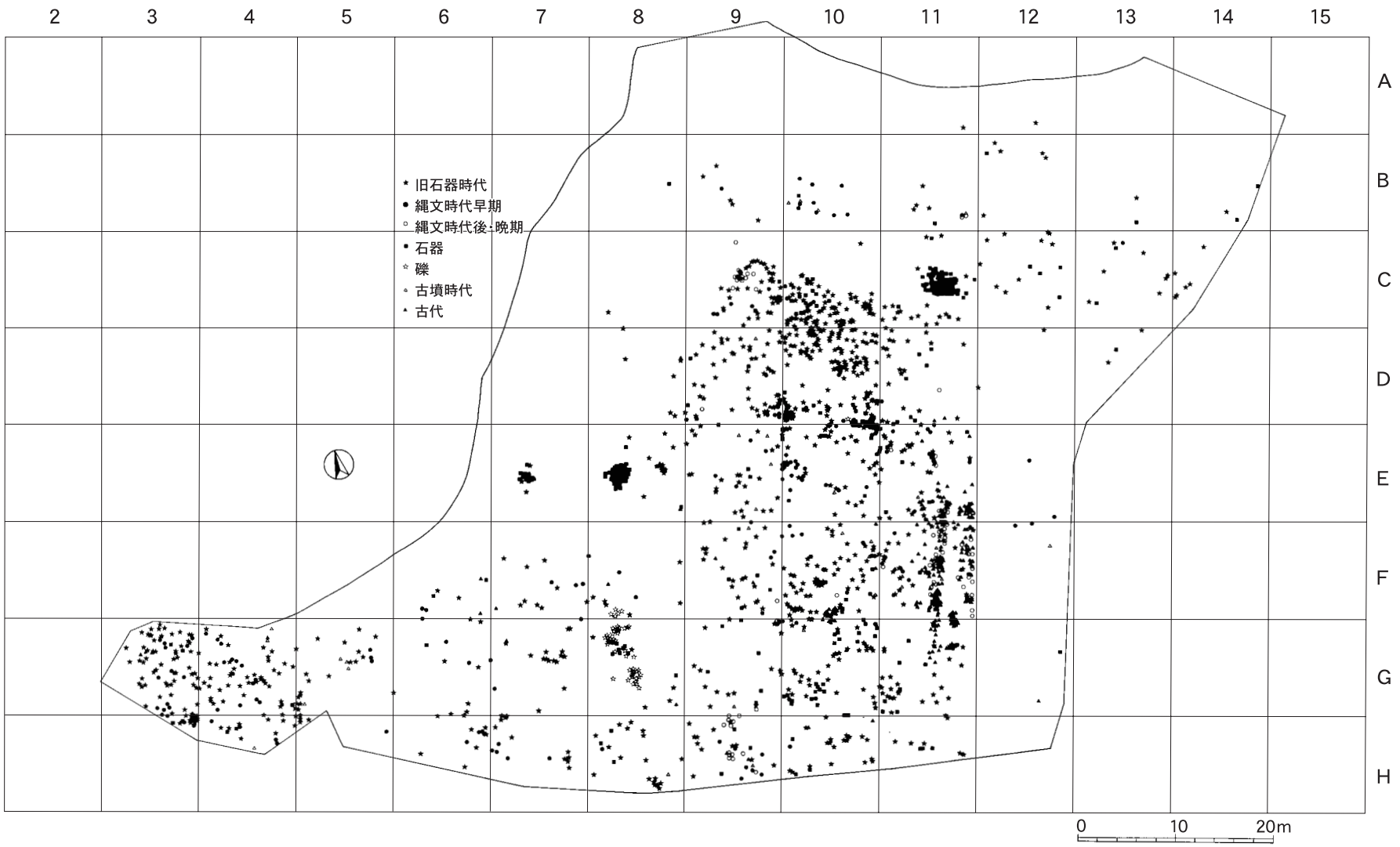
今後，ほかの遺跡で類例を調べるとともに，報告書刊行の後にも再三再四検討を加えていくことが大切と考えている。

註　1　石材の鑑定は，県立埋蔵文化財センターの牛ノ濵　修主任文化財主事兼第三調査係長による。
2　縄文土器の型式分類は，主に当センターの新東晃一調査課長，前迫亮一・八木澤一郎両文化財主事による。
3　註１に同じ。
4　土師器の器種分類および鑑定は，当センターの池畑耕一主任文化財主事兼第一調査係長，中村和美文化財主事による。
5　墨書土器の文字の解読は，ラ・サール学園の永山修一教諭による。

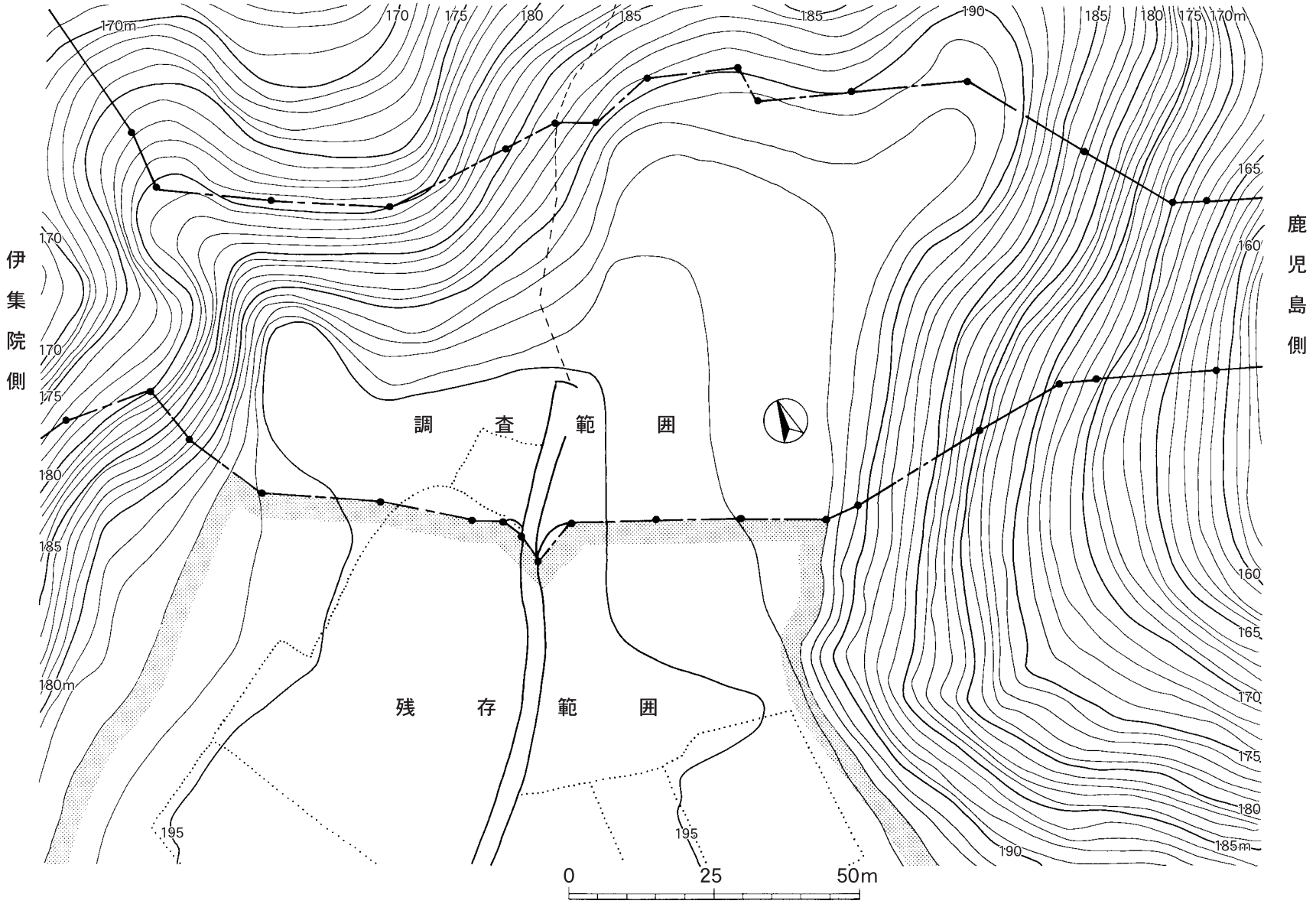
参考・引用文献

上野原遺跡（第10地点）	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（28）	2001年
市ノ原遺跡（第１地点）	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）	2003年
中尾田遺跡	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（15）	1981年
加栗山・神ノ木山遺跡	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（16）	1981年
成岡・西ノ平・上ノ原遺跡	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）	1983年
上ノ原遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（62）	2003年
犬ケ原遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（60）	2003年
山ノ脇・石坂・西原遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（58）	2003年
小中原遺跡	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（57）	1991年

松元町郷土誌	松元町誌編さん委員会	1986年
伊集院町郷土誌	伊集院町誌編さん委員会	2002年
市来町郷土誌	市来町郷土誌編集委員会	1982年



第71図　時代別遺物分布図



第72図　遺跡残存範囲図

図　　版



遺跡遠景（中央の台地）





発掘調査風景

図版2



土層断面



標準土層



集石4号

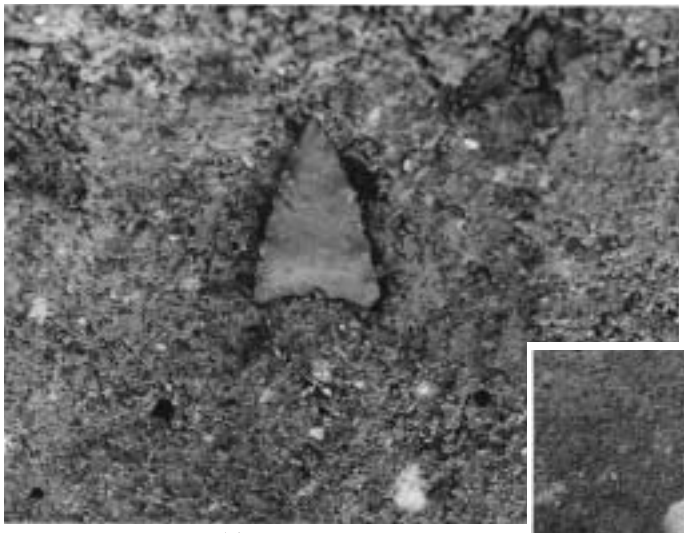
集石・石皿
検出状況





石皿出土状況

図版4



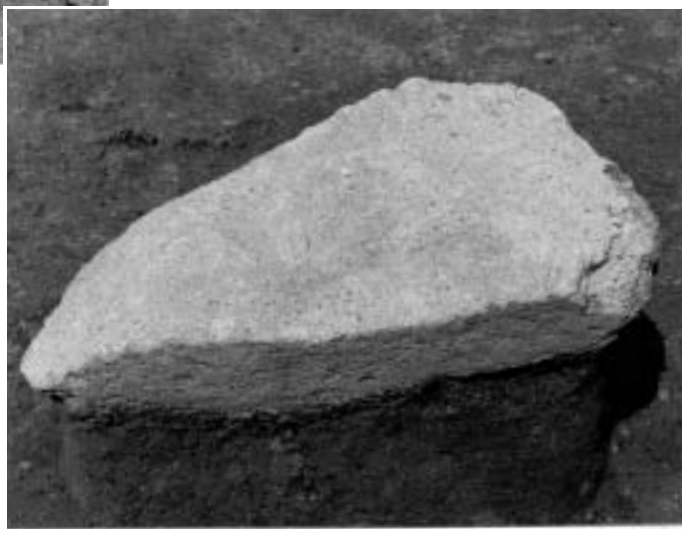
石鏃出土状況



石皿出土状況



台石出土状況





土坑検出状況（検出時）



土坑検出状況（完掘後）

図版6



楕円形土坑－1
（落とし穴）

50号



99号



33号

楕円形土坑ー2
（落とし穴）



36号



16号



14号

図版8

楕円形土坑ー3
（落とし穴）



21号



67号



65号

楕円形土坑ー4
（落とし穴）



1号



42号



30号

図版10

楕円形土坑ー5
（落とし穴）



75号



77号



35号



楕円形土坑ー6
（落とし穴）

66号



74号

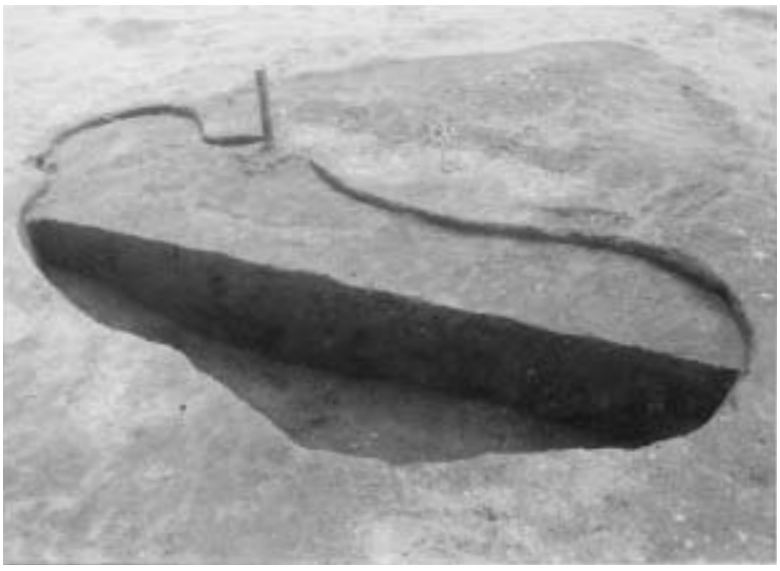


不整形土坑
（落とし穴）

91号

図版12

楕円形土坑ー1



10号

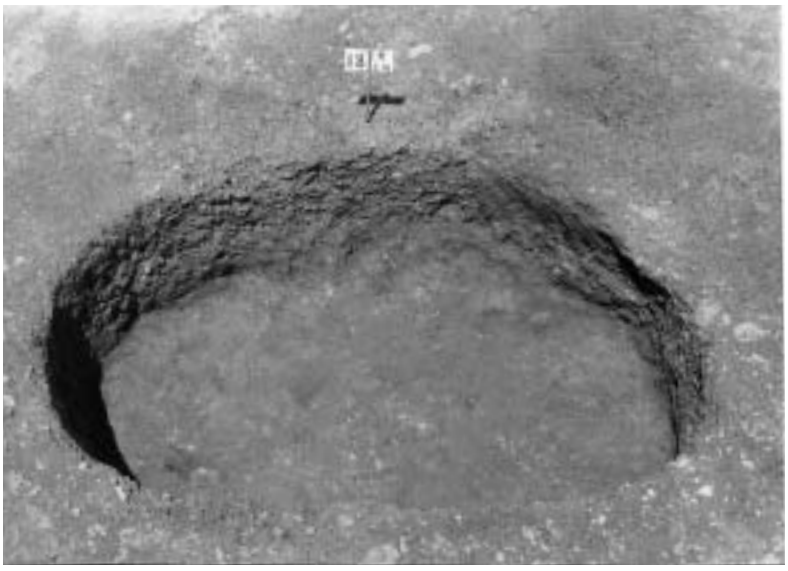


20号

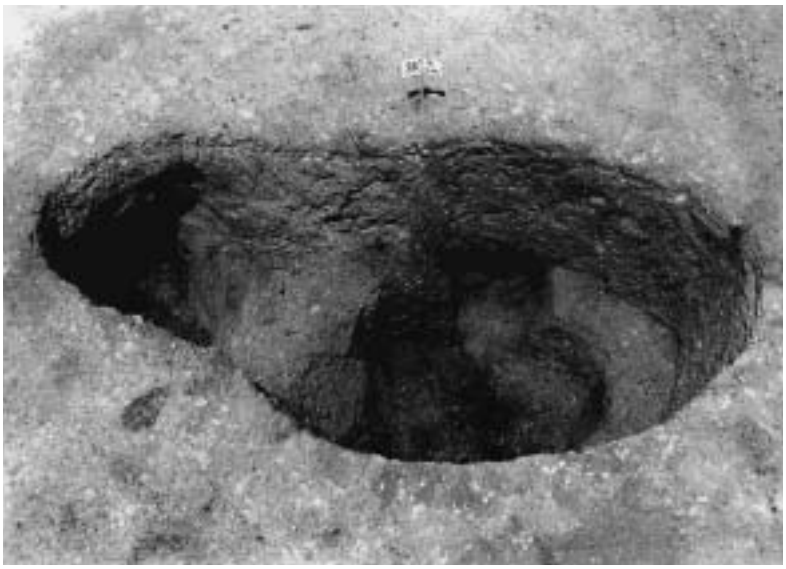


19号

楕円形土坑ー2



18号



38号



51号

図版14

円形土坑ー1



17号



76号



60号

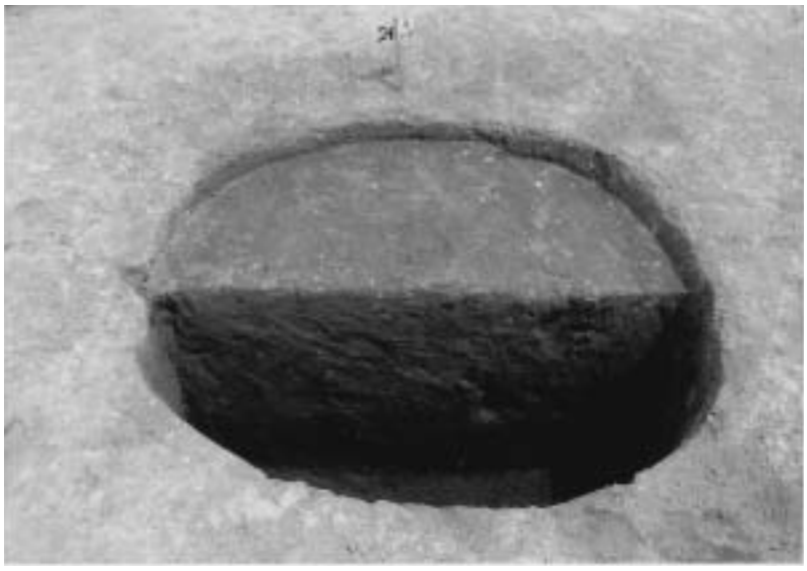
円形土坑ー2



5号



47号



24号

図版16

円形土坑ー3



69号



9号

不整形土坑



84号



掘立柱建物跡

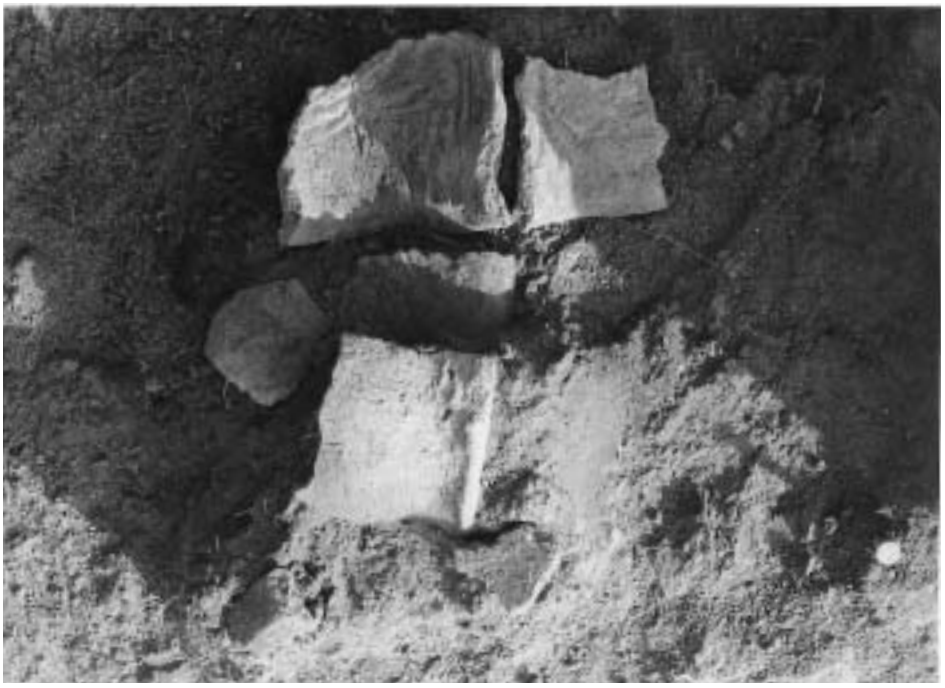


道　跡



畑畝跡

図版18



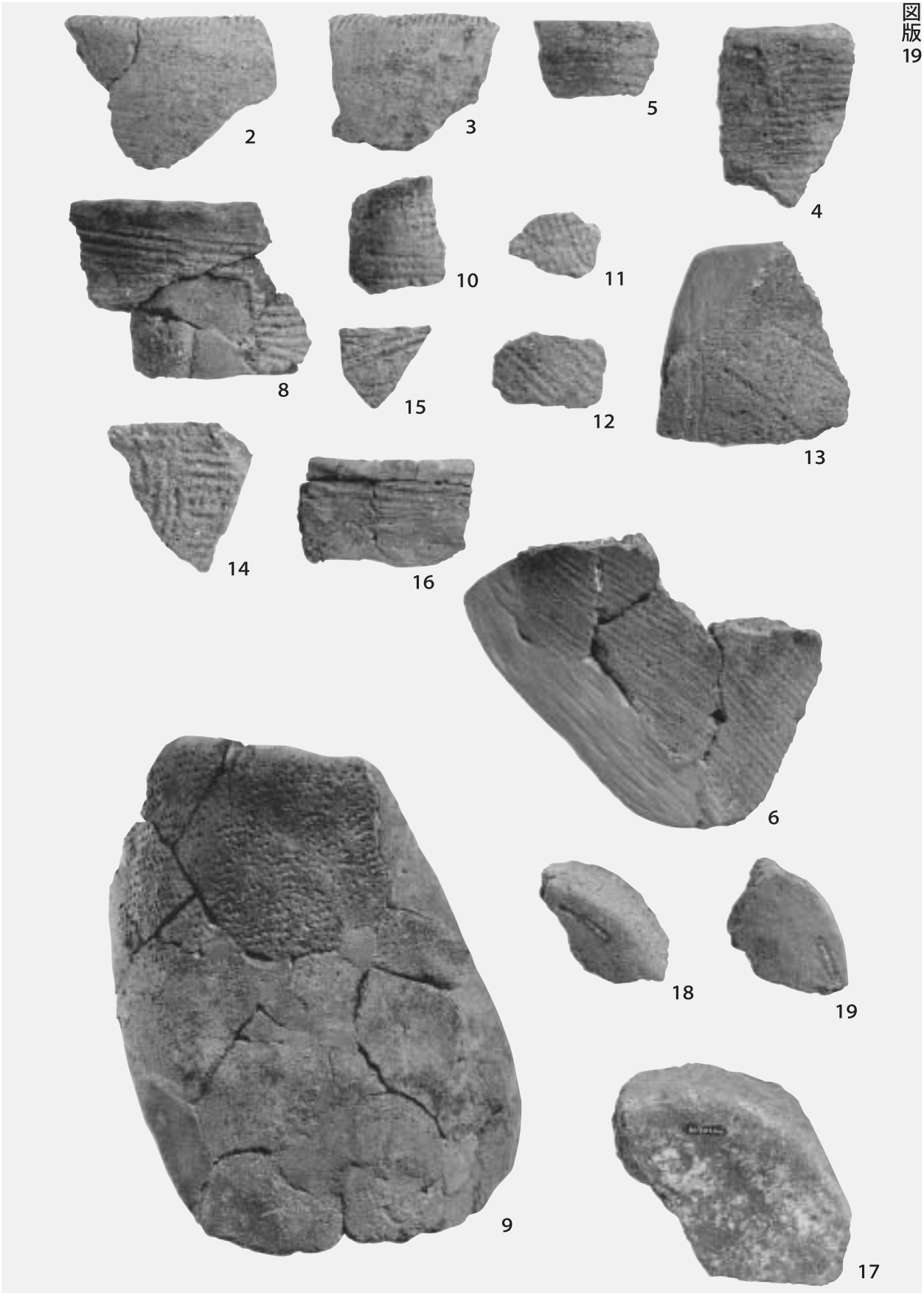
小型甕（203）
出土状況



土器集中遺構

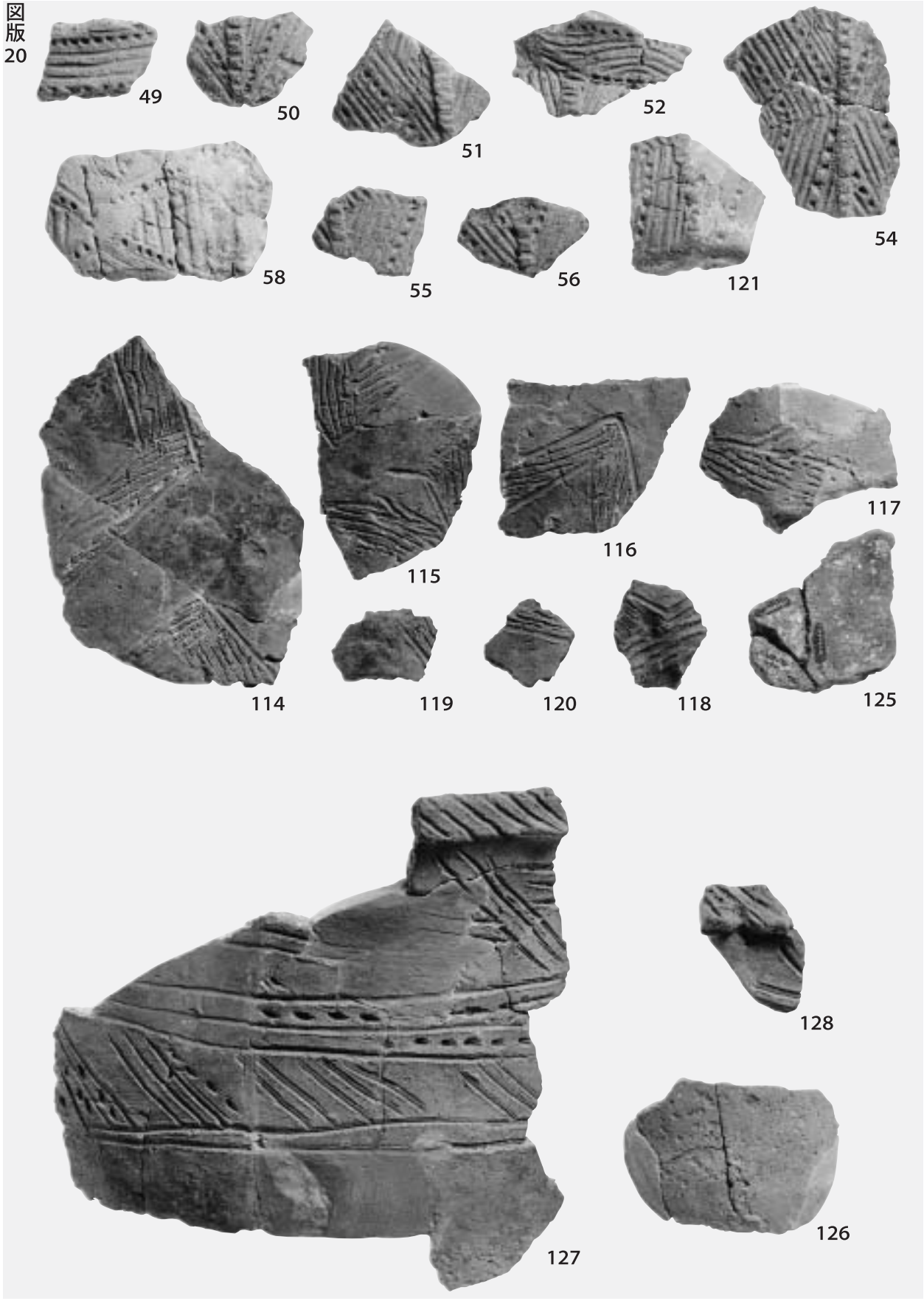


甕（202）
出土状況

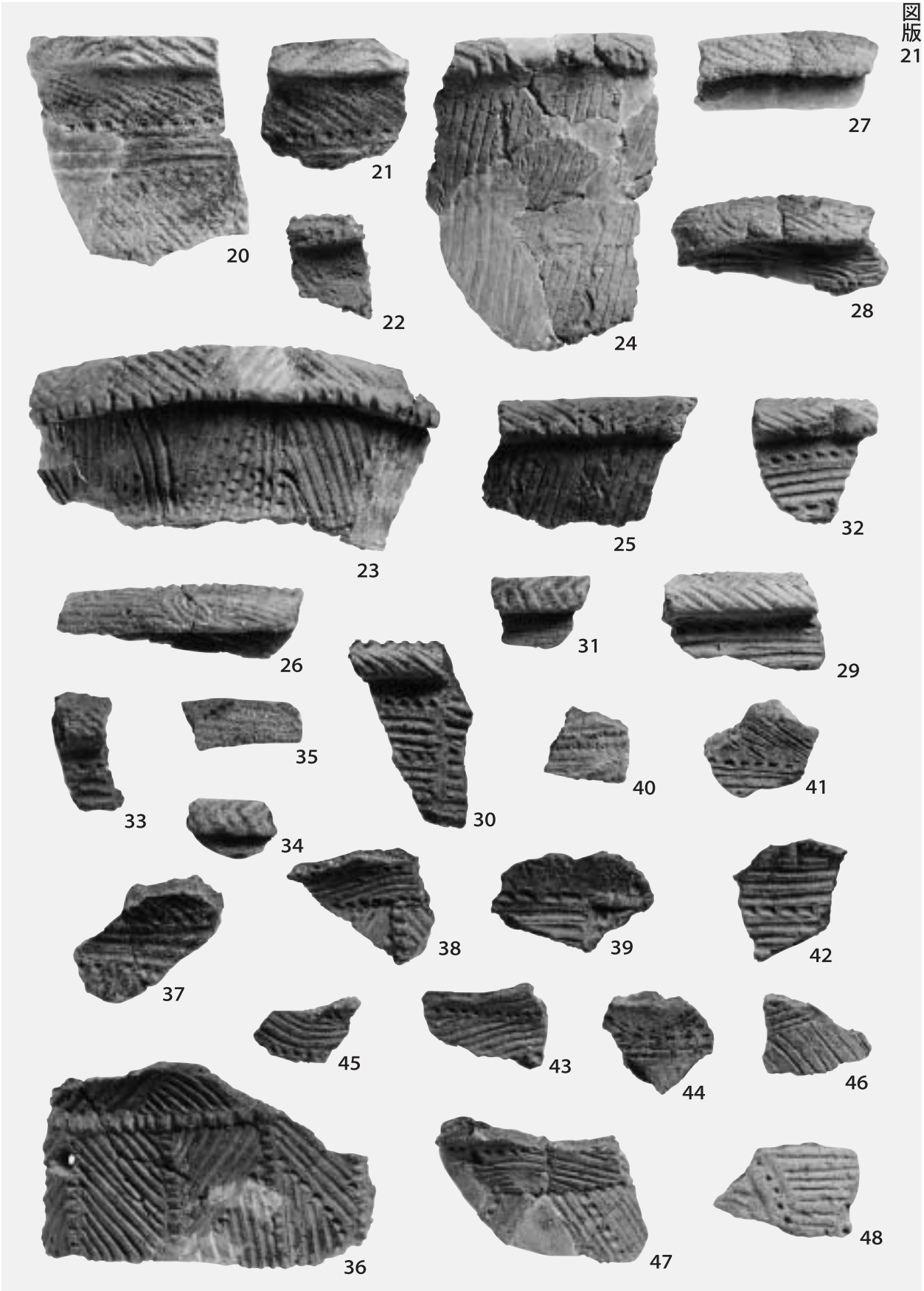


縄文土器ー1

図版20

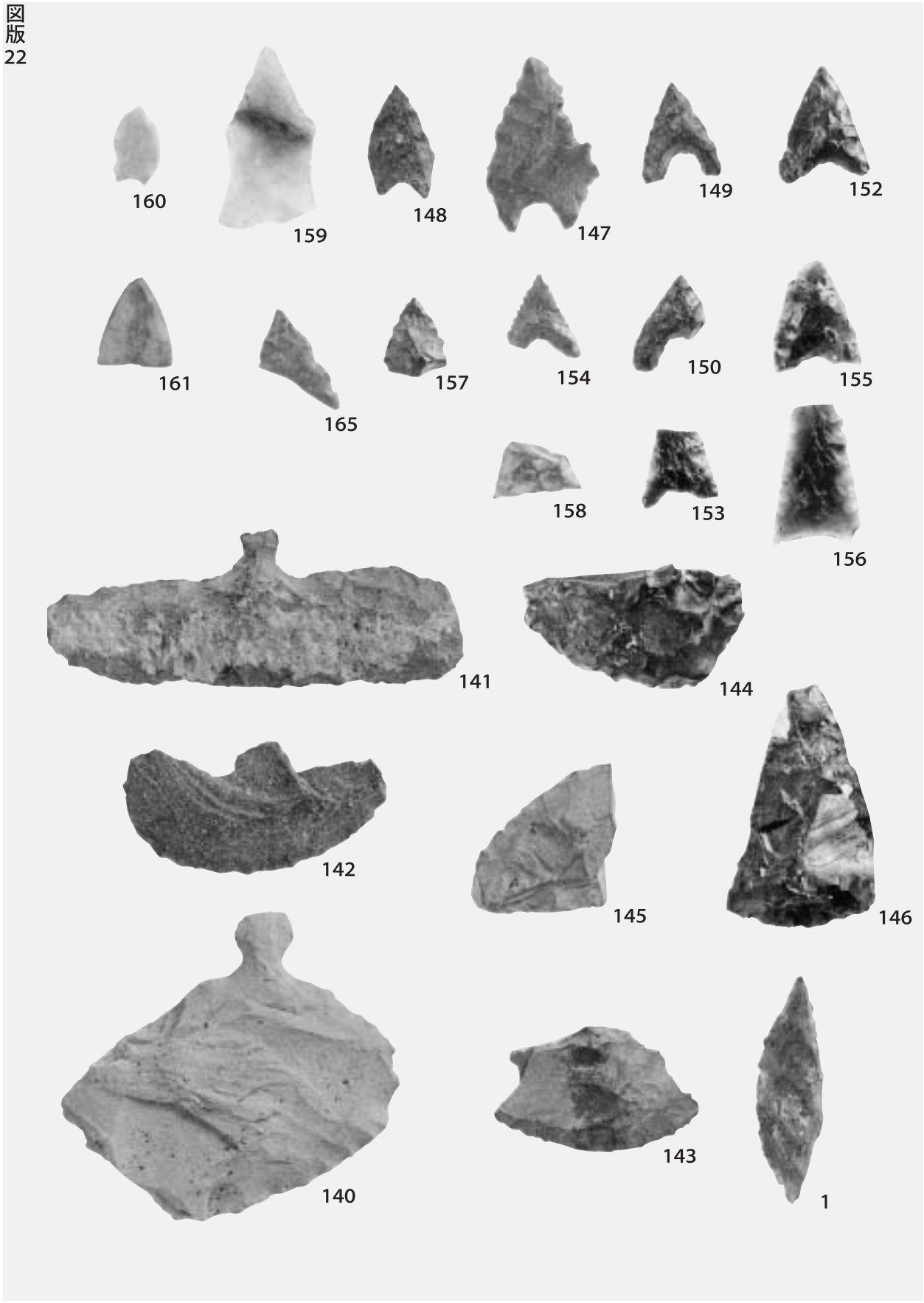

49
50
51
52
54
58
55
56
121
114
115
116
117
119
120
118
125
128
127
126

縄文土器ー2

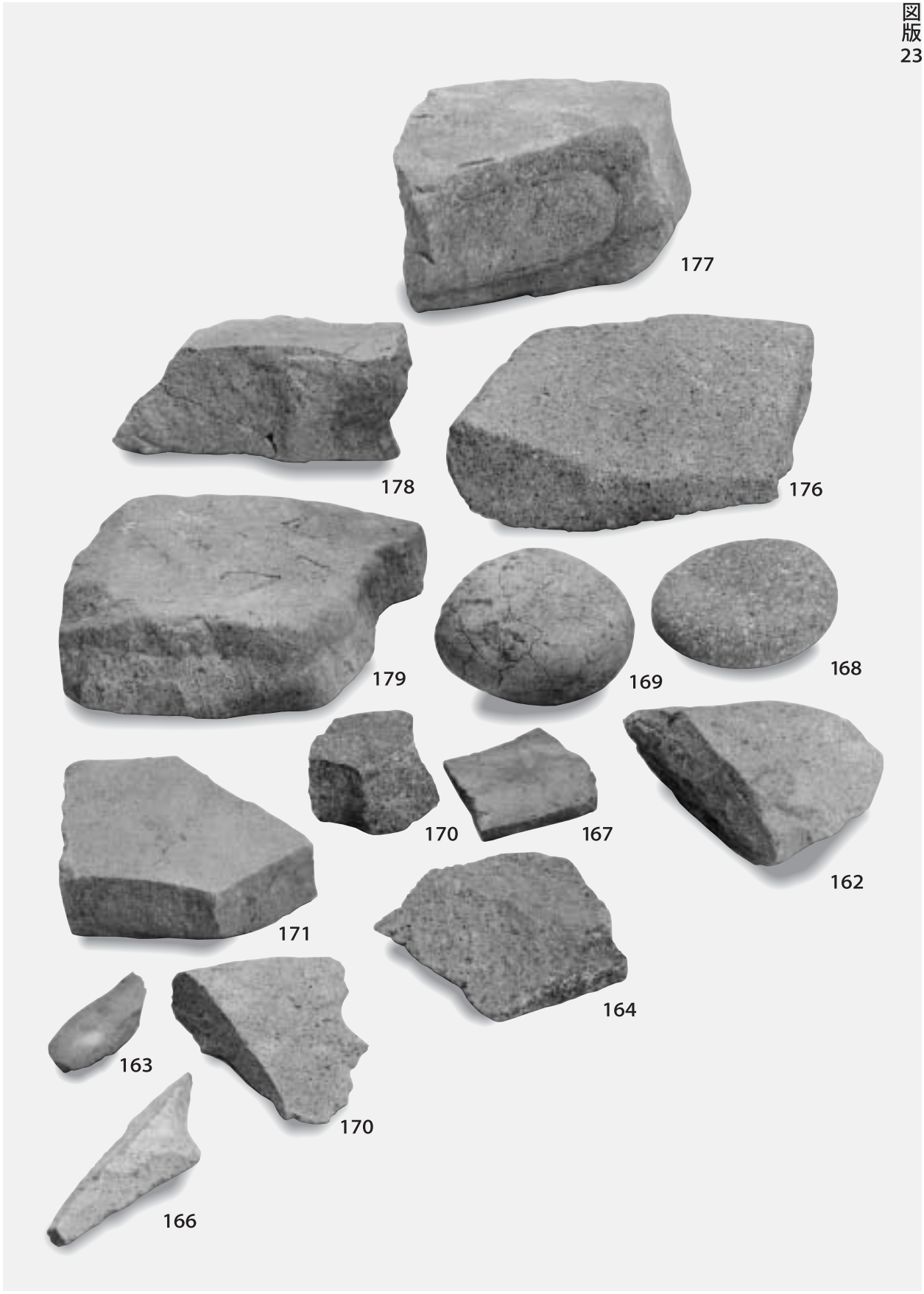

20
21
22
24
27
28
23
25
32
26
31
29
33
35
30
40
41
34
38
39
42
37
45
43
44
46
36
47
48

縄文土器ー3

図版22


160
159
148
147
149
152
161
165
157
154
150
155
158
153
156
141
144
142
145
146
140
143
1

石器ー1



石器ー2

図版24



172



173

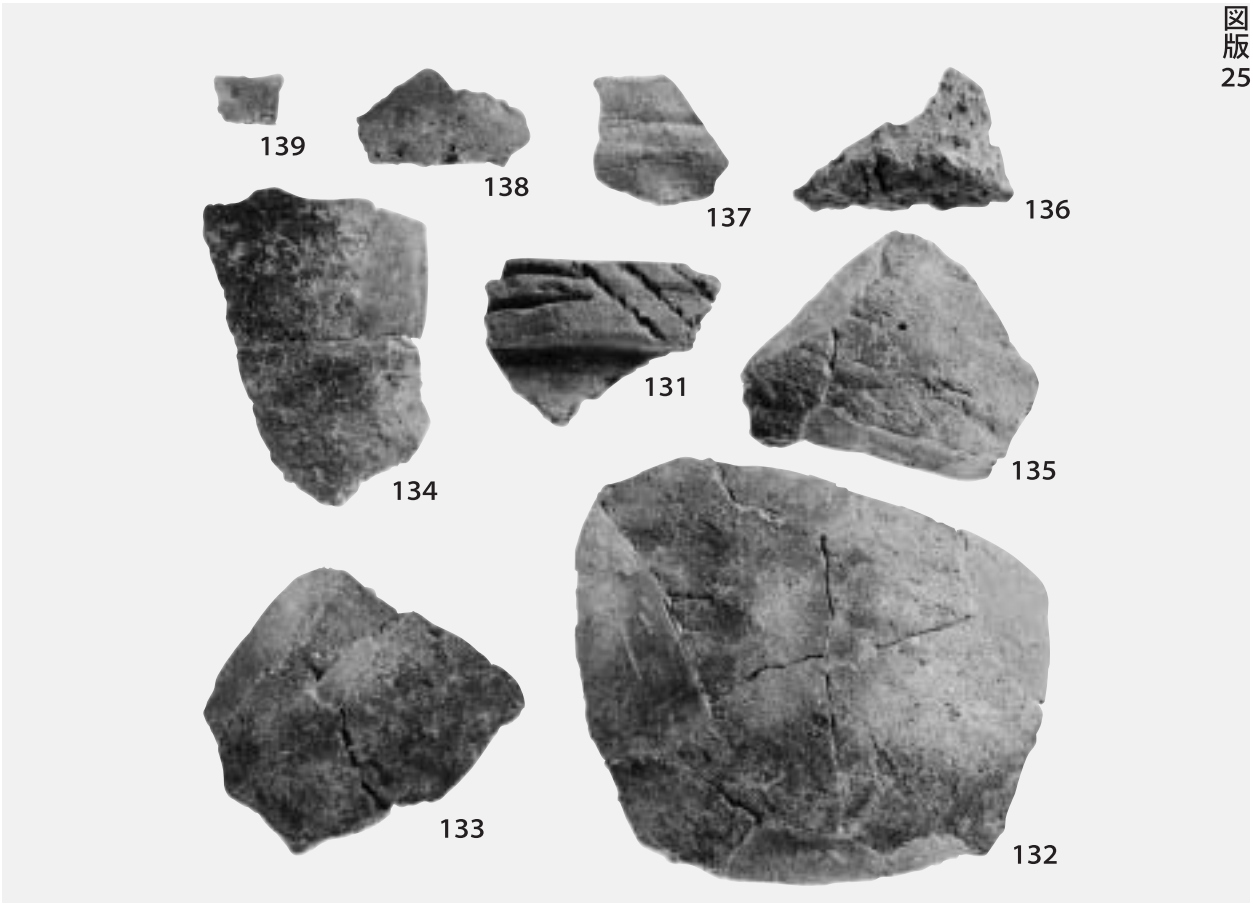


174



175

石器ー3

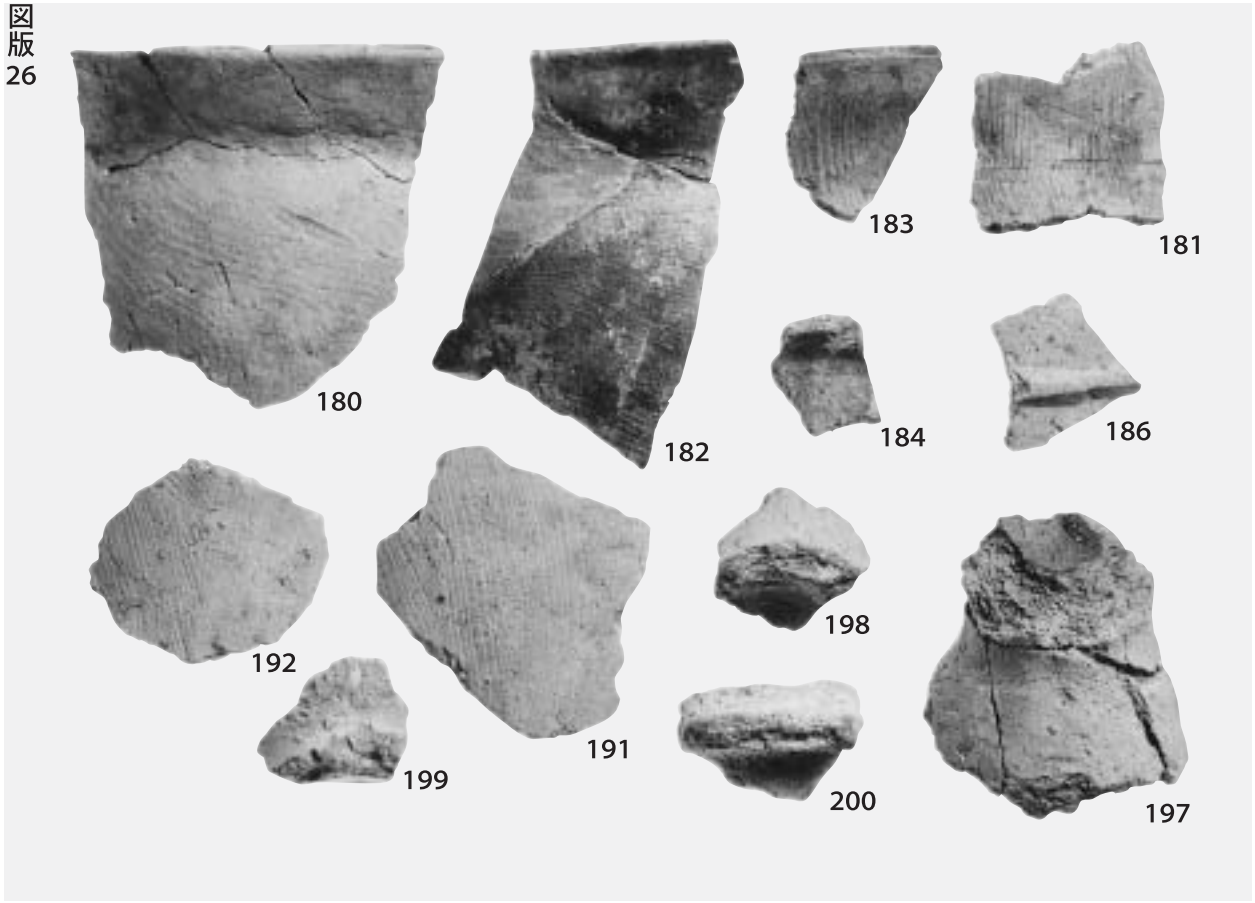


縄文土器ー4



石器ー4

図版26



古墳時代の土器



土師器ー1



201



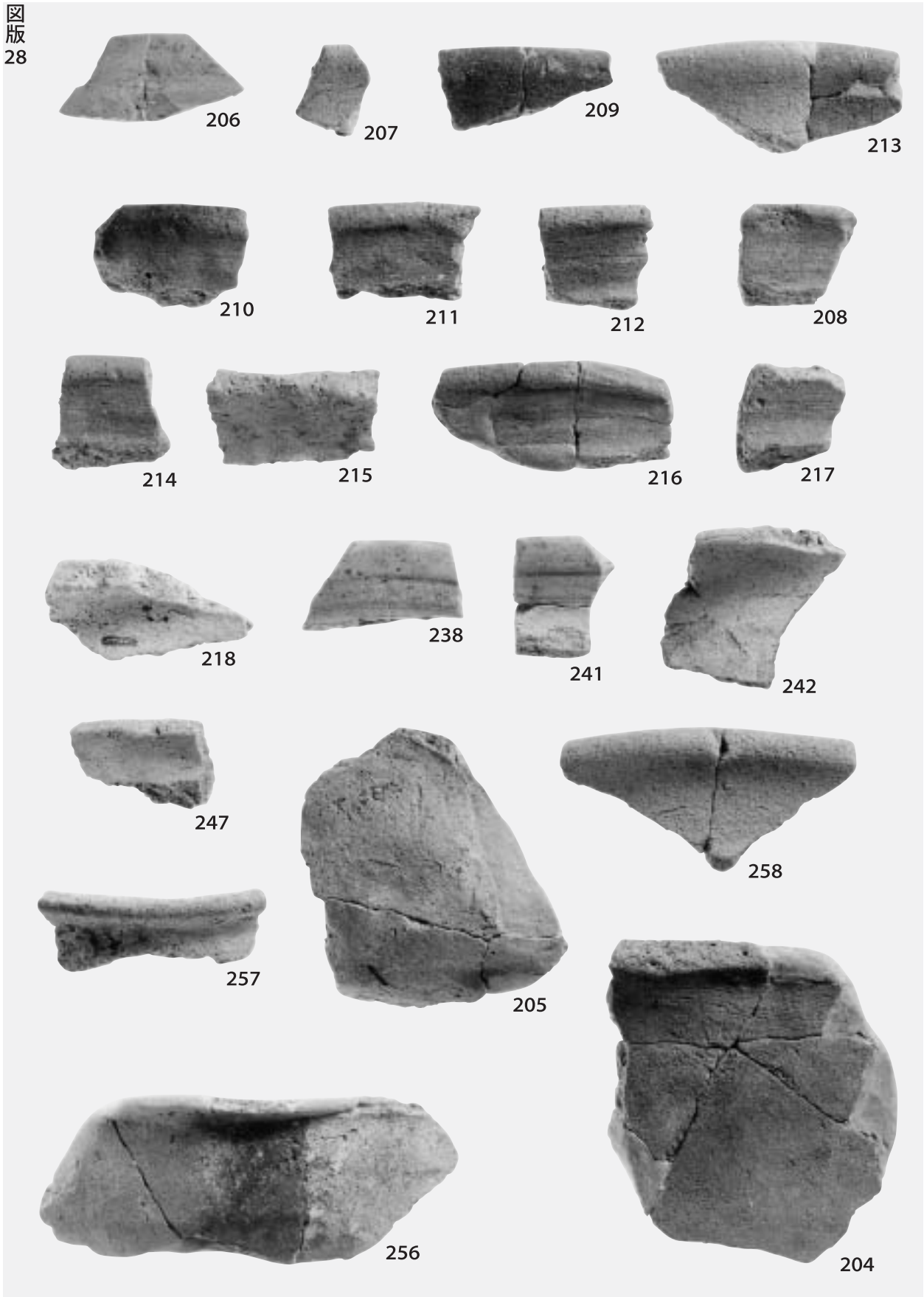
202



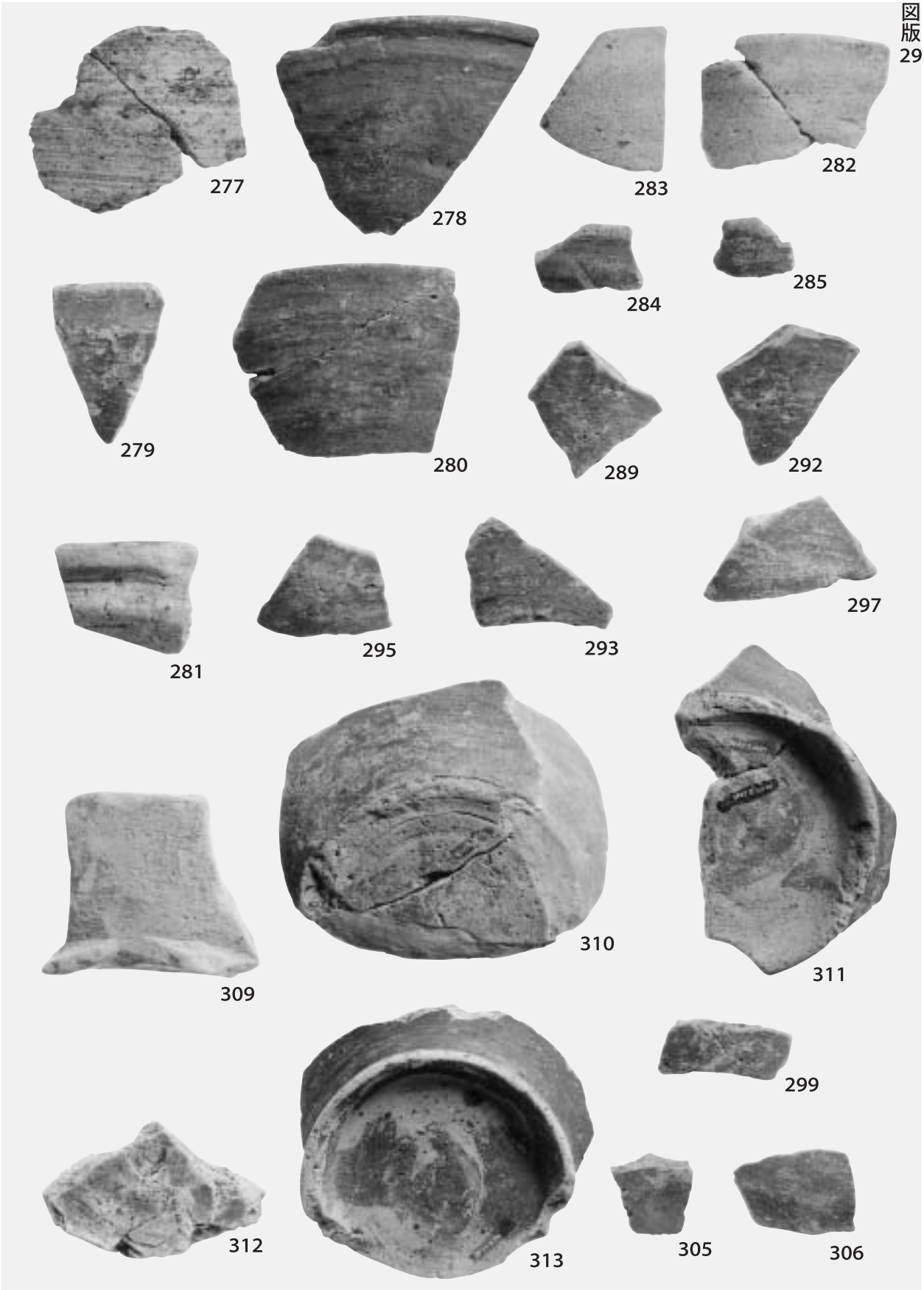
203

土師器ー2

図版28

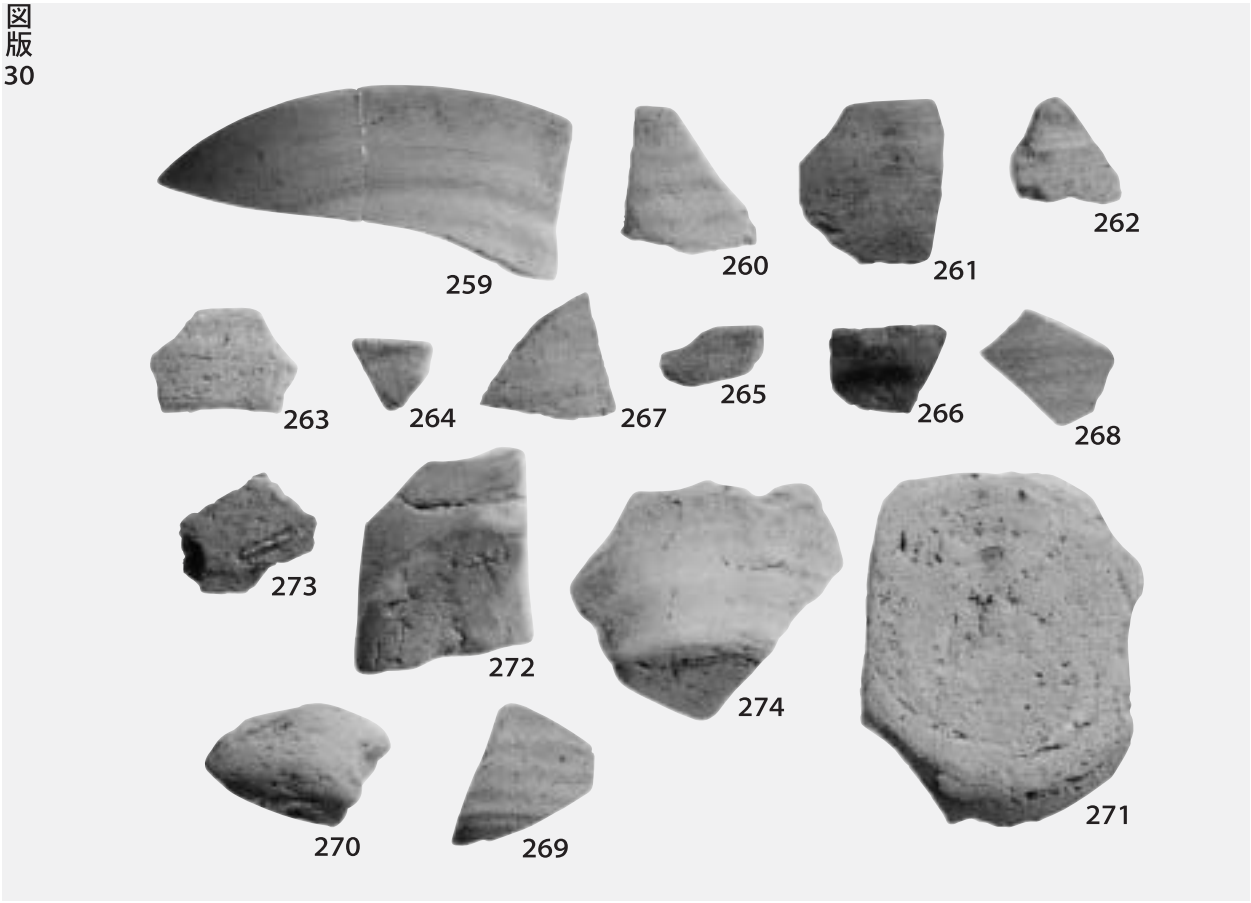

206
207
209
213
210
211
212
208
214
215
216
217
218
238
241
242
247
258
257
205
256
204

土師器ー3

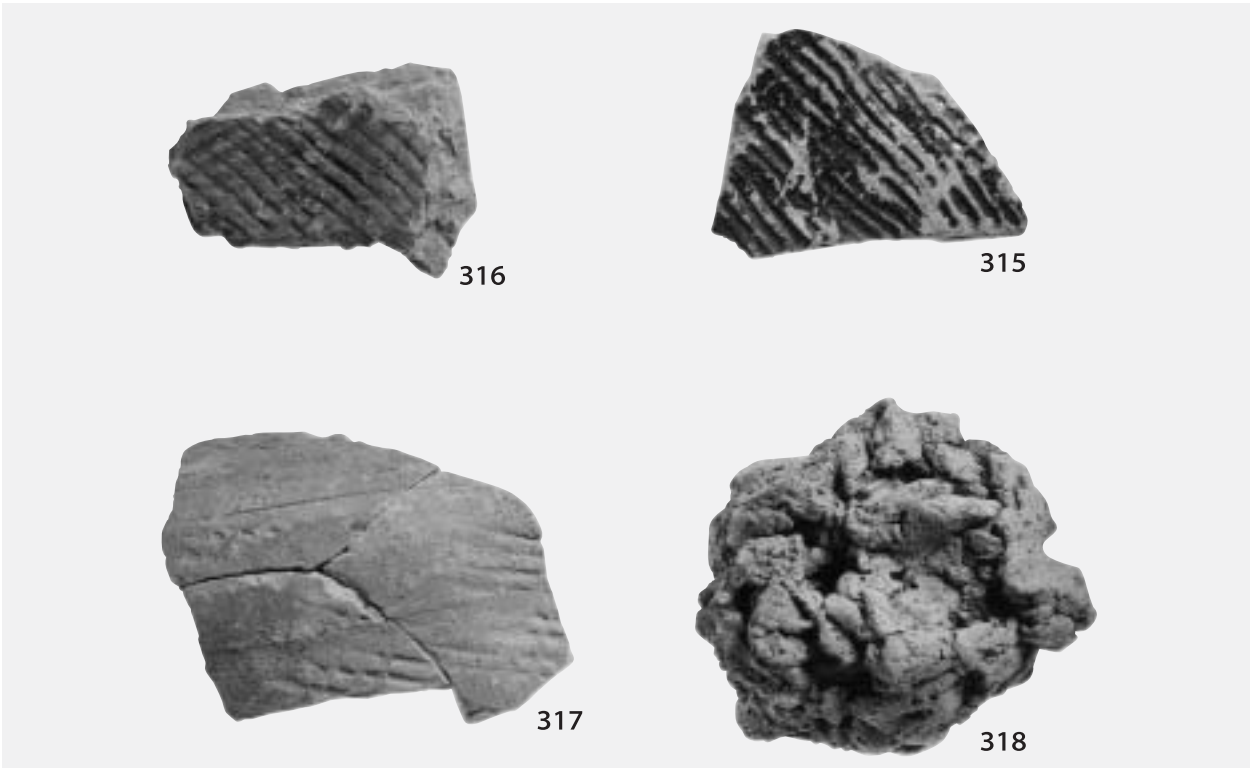

277
278
283
282
284
285
279
280
289
292
281
295
293
297
309
310
311
299
312
313
305
306

土師器ー4

図版30



土師器ー5



須恵器・焼土塊

あ と が き

南九州西回り自動車道鹿児島道路が鹿児島ＩＣから伊集院ＩＣまで延びてはや６，７年が経過した。その間も，西回り自動車道は西へ，北へと間断なく延びている。平成13年度には，伊集院ＩＣと市来ＩＣの間も開通し，利便性は格段に良くなって来ている。そして，現在も休む間なく，川内道路という呼称となって，さらに継続的に工事が行なわれている。利便性への飽くなき追求は，今後も継続されることだろう。

しかし，振り返って考えてみると，今回報告書刊行にこぎつけた宮尾遺跡の発掘調査は，平成５年度と８年度に実施された。調査終了は，今から７年も前である。そして，報告書刊行に向けての整理作業は，昨年度にようやく開始された。足かけ２年にわたっての整理作業は，決して短いものではなかったけれど，交通体系のより良い方向を目指した道路の開通のために行われた調査に対する整理の期間としては長かったとは言えないと確信している。これだけの遺跡だからこそ，これだけの期間が必要だった。

本報告書の作成については，平成８年度に調査を担当した者が中心となり，これに本年度の異動で転入して来た者と共に整理作業を進めていった。調査を担当した者だからこそ理解しており，また，表現できる事柄も多くある。これとは逆に，タッチしていなかったからこそ沸き上がる発想も少なからず存在する。今回は，それこそいろいろなことを考えながら，また，語り合いながら報告書と正面から向き合ってきた。

調査面積8,400㎡，旧石器時代から中世・近世，近代までの１万年にもおよぶ人々の生活の痕跡を，あますところなく的確に，真摯な態度で記載できたか不安は跡を断たない。ただ，与えられた期間，精一杯の努力を傾注したことだけを，自己満足ではあるかも知れないが，心のよりどころとして筆をおくこととしたい。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（73）

宮　尾　遺　跡

発行日　２００４年２月２７日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
印　刷　かわち印刷有限会社